

平成25年度
神戸市埋蔵文化財年報

2016

神戸市教育委員会

序

神戸市では例年多くの遺跡を調査し、その都度新しい知見を蓄積することができています。本書には平成25年度に市内で実施した21遺跡、26件の発掘調査成果を収録しています。

発掘調査によって得られた成果は、地域の歴史を理解するための貴重な国民共有の財産として、保存・活用していく必要があります。本書が埋蔵文化財ひいては歴史への理解の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

2016年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成25年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。
事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工　樂　善　通	大阪府立狭山池博物館館長
和　田　晴　吾	立命館大学文学部教授（平成25年7月14日まで）
菱　田　哲　郎	京都府立大学文学部教授（平成25年7月15日から）

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助
社会教育部長	東野展也
文化財担当部長（文化財課長事務取扱）	安達宏二
埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）	千種　浩
文化財専門役	丸山　潔
文化財課係長	丹治康明　前田佳久
埋蔵文化財センター担当係長	斎木　巖
事務担当学芸員	井尻　格　中谷　正　西岡誠司
調査担当学芸員	西岡巧次　口野博史　黒田恭正　谷　正俊　富山直人
	池田　毅　内藤俊哉　阿部敬生　浅谷誠吾　川上厚志
	関野　豊　井上麻子　山田侑生　纈纈文佳
埋蔵文化財センター担当学芸員	山口英正　藤井太郎　阿部　功
保存科学担当学芸員	中村大介
震災復興派遣職員（岩手県大船渡市）	安田滋　佐伯二郎

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。
3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成25年度事業の要のうち、1～5については前田佳久が、6については黒田恭正が執筆した。
また、平成25年神戸市埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図と調査地点位置図（1）～（5）(fig. 3～8)については丸山　潔が作成した。
III. 平成25年度の保存科学調査・作業の概要は中村大介が執筆した。
付論。「吉田南遺跡出土の動物遺存体－ウマ遺存体の分析を中心に－」は東海大学海洋学部丸山真史および北里大学医学部覚張隆史の両氏より玉稿を賜った。本書の編集は黒田が行った。
4. 調査現場の写真撮影、遺構図のトレースなどについては、各調査担当者が行った。
5. 卷頭カラー fig. 1・2 は（株）G E O ソリューションズが、表紙写真・裏表紙写真は丸山が撮影を行った。
6. 表紙・裏表紙写真は雪御所遺跡第4次調査出土の絵画土器である。

目 次

序

例言

I.	平成25年度 事業の概要	1
II.	平成25年度の発掘調査	
1.	郡家遺跡 第91次調査	15
2.	小路大町遺跡 第5次調査	19
3.	深江北町遺跡 第16次調査	25
4.	住吉宮町遺跡 第51次調査	27
5.	魚崎郷古酒蔵群 第4次調査	31
6.	西郷古酒蔵群 第7次調査	34
7.	篠原遺跡 第32次調査	43
8.	日暮遺跡 第38次調査	47
9.	祇園遺跡 第18次調査	51
10.	祇園遺跡 第19次調査	59
11.	祇園遺跡 第20次調査	63
12.	雪御所遺跡 第4次調査	69
13.	楠・荒田町遺跡 第56次調査	75
14.	兵庫津遺跡 第59次調査	79
15.	兵庫津遺跡 第60次調査	83
16.	兵庫津遺跡 第61次調査	91
17.	大開遺跡 第14次調査	95
18.	唐崎城跡・尼崎学園古墳群 第2次調査	101
19.	大橋町遺跡 第5次調査	107
20.	玉津・田中遺跡 第40次調査	113
21.	栃木遺跡 第20次調査	121
22.	吉田南遺跡 第20次調査	125
23.	今津遺跡 第24次調査	129
24.	今津遺跡 第25次調査	133
25.	新方遺跡 第52次調査	135
26.	馬掛原遺跡 第3次調査	139
III.	平成25年度の保存科学調査・作業の概要	141
	付論. 吉田南遺跡出土の動物遺存体－ウマ遺存体の分析を中心に	147

挿図目次

fig. 1	祇園遺跡第18次調査 全景写真（北から） [巻頭カラー]	
fig. 2	祇園遺跡第18次調査 全景写真（南から） [巻頭カラー]	
fig. 3	平成25年度埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図	11
fig. 4	調査地点位置図（1）	12
fig. 5	調査地点位置図（2）	12
fig. 6	調査地点位置図（3）	13
fig. 7	調査地点位置図（4）	13
fig. 8	調査地点位置図（5）	13
fig. 9	調査地位置図 1:2,500	15
fig.10	調査区位置図	16
fig.11	第1遺構面平面図	16
fig.12	第2遺構面平面図	16
fig.13	C-2区遺構平面図	17
fig.14	第3遺構面平面図	17
fig.15	A区SB3101平面図	18
fig.16	A区南壁土層断面図	18
fig.17	調査地位置図 1:2,500	19
fig.18	調査区位置図	20
fig.19	II区平面・西壁土層断面図	21
fig.20	IV区平面・南壁土層断面図	22
fig.21	出土遺物実測図（1）	23
fig.22	出土遺物実測図（2）	24
fig.23	調査地位置図 1:2,500	25
fig.24	出土遺物実測図	26
fig.25	調査区平面・土層断面図	26
fig.26	調査地位置図 1:2,500	27
fig.27	第1遺構面平面図	28
fig.28	第2遺構面平面図	29
fig.29	周辺調査地検出古墳分布図	30
fig.30	調査地位置図 1:2,500	31
fig.31	調査区位置図	32
fig.32	1・2区平面・断面図	33
fig.33	3区平面・断面図	34
fig.34	調査地位置図 1:2,500	35
fig.35	調査区位置図	36
fig.36	1区平面・土層断面図	36
fig.37	2区遺構平面図	37

fig.38	釜場 1 平面・立面図	39
fig.39	釜場 1・2 出土煉瓦実測図	42
fig.40	調査地位置図 1:2,500	43
fig.41	遺構平面図	44
fig.42	SH01平面・断面図、SH01床面柱穴・ピット断面図	45
fig.43	調査地位置図 1:2,500	47
fig.44	第1 遺構面平面図	48
fig.45	第2 遺構面平面図	49
fig.46	SB01平面・土層断面図	50
fig.47	調査地位置図 1:2,500	51
fig.48	第16~18・20次調査地位置図	52
fig.49	調査区位置図	53
fig.50	5~7 区遺構平面図	54
fig.51	4 区 SE201平面・断面図	56
fig.52	4 区 SE202平面・断面図	57
fig.53	調査地位置図 1:2,500	59
fig.54	調査区位置図	60
fig.55	A 区平面・東壁土層断面図	61
fig.56	C・D 区平面図	62
fig.57	調査地位置図 1:2,500	63
fig.58	調査区位置図	64
fig.59	1 区平面・土層断面図	65
fig.60	2・3・拡張区平面図	66
fig.61	2・3・拡張区土層断面図	67
fig.62	調査地位置図 1:2,500	69
fig.63	第3・4 次遺構平面図	70
fig.64	出土遺物実測図(1)	73
fig.65	出土遺物実測図(2)	74
fig.66	調査地位置図 1:2,500	75
fig.67	第1・2 遺構面平面図	76
fig.68	SD01・SD02土層断面図	77
fig.69	調査地位置図 1:2,500	79
fig.70	遺構平面図	80
fig.71	SX01(古) 出土遺物実測図(1)	81
fig.72	SX01(古) 出土遺物実測図(2)	82
fig.73	調査地位置図 1:2,500	83
fig.74	調査区位置図	84
fig.75	第1 遺構面平面図	85
fig.76	第2 遺構面平面図	87

fig.77	第3遺構面平面図	88
fig.78	第4遺構面平面図	89
fig.79	土層断面図	90
fig.80	調査地位置図 1:2,500	91
fig.81	調査区位置図	92
fig.82	第1遺構面平面図	92
fig.83	第2遺構面平面図	93
fig.84	調査地位置図 1:2,500	95
fig.85	調査区位置図	96
fig.86	第1遺構面平面図	97
fig.87	第2遺構面平面図	98
fig.88	SD201上層遺物出土状態図	99
fig.89	SD201土層断面図	100
fig.90	調査地位置図 1:2,500	101
fig.91	調査区位置図	102
fig.92	トレンチ配置図	103
fig.93	調査区平面図	104
fig.94	調査区断面図	105
fig.95	調査地位置図 1:2,500	107
fig.96	第1～6次調査区位置図	108
fig.97	調査区位置図	108
fig.98	第1遺構面平面図	109
fig.99	第2遺構面平面図	110
fig.100	SK102(井戸)出土瓦器類実測図	111
fig.101	調査地位置図 1:2,500	113
fig.102	調査区位置図	114
fig.103	1区平面・土層断面図	115
fig.104	2区平面・土層断面図	116
fig.105	3-1・2区第1遺構面平面・土層断面図	117
fig.106	3-1・2区第2遺構面平面・土層断面図	118
fig.107	調査地位置図 1:2,500	121
fig.108	遺構平面・土層断面図	122
fig.109	出土遺物実測図	123
fig.110	調査地位置図 1:2,500	125
fig.111	遺構平面図	126
fig.112	遺構平面・土層断面図	128
fig.113	調査地位置図 1:2,500	129
fig.114	調査区位置図	130
fig.115	遺構平面図	131

fig.116	主要調査区平面・土層断面図	132
fig.117	調査地位置図 1:2,500	133
fig.118	調査区平面・土層断面図	134
fig.119	調査地位置図 1:2,500	135
fig.120	第1遺構面平面図	136
fig.121	第2遺構面平面図	138
fig.122	調査地位置図 1:2,500	139
fig.123	遺構平面図	140
fig.124	木製品取り上げ作業	141
fig.125	開梱・洗浄作業	141
fig.126	西求女塚1号鏡（左）・表採鏡（右）	142
fig.127	同左X線ラジオグラフィ	142
fig.128	3Dイメージ作業	143
fig.129	イメージング画像	143
fig.130	完成状況（上）レプリカ（下）実物	143
fig.131	草花双鳥文鏡	144
fig.132	同左X線ラジオグラフィ	144
fig.133	和鏡鏡背平絹残存状況（1.2倍）	145
fig.134	和鏡鏡背平絹残存状況（4倍）	145
fig.135	平絹緯糸横断面（透過光：50倍）	145
fig.136	平絹経糸横断面（透過光：50倍）	145
fig.137	鉄刀子把木質木口断面（透過光：50倍）	146
fig.138	鉄刀子把木質板目断面（透過光：100倍）	146

付論挿図目次

図1	吉田南遺跡位置図	147
図2	吉田南遺跡古墳時代遺構配置概略図	148
図3	歯エナメル質の炭素・酸素同位体比	153
図4	骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比	153
図5	歯エナメル質の炭素・Sr同位体比	153
図6	各個体のSr同位体比 比較図・153	
写真1	出土したバカガイ・サザエ・マガキなど	151
写真2	出土したサメとカメ	151
写真3	出土したウマ・ウシ	151
写真4	出土したシカ頭蓋骨（刃物の痕跡が顕著）	151

表 目 次

表 1	文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	2
表 2	発掘調査面積	2
表 3	発掘調査面積別件数	2
表 4	考古資料の館外貸出	3
表 5	資料調査成果の公表	3
表 6	特別利用	4
表 7	画像データなどの貸出	4
表 8	平成25年度企画展	7
表 9	平成25年度歴史講演会	7
表10	平成25年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	9
表11	西求女塚1号鏡・表採鏡蛍光X線分析結果	143
表12	和鏡蛍光X線分析結果	144
表13	平成25年度自然科学分析	146

付論表目次

表 1	出土動物遺存体	150
表 2	吉田南遺跡出土動物遺存体の ¹⁴ C年代・歴年代測定結果	152
表 3	馬骨の安定同位体比測定値	154
表 4	馬歯の安定同位体比測定値	154

I. 平成25年度 事業の概要

1. 事業体制

神戸市教育委員会文化財課は、平成23年度から埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に係わる届出などの窓口業務、試掘調査や本調査の受託契約等の事務や補助金事務は市役所文化財課で行い、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復及びその後の管理と活用に関しては、神戸市埋蔵文化財センターで行っている。出土品や発掘調査で得られた写真や図面などは、記録保存のために空調管理した収蔵施設で保管し、さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座などを埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による収蔵資料に対する資料調査や貸出にも対応している。

なお、平成25年度は、東日本大震災の復興調査を支援するため、岩手県大船渡市教育委員会に平成25年4月から平成26年3月まで2名を派遣している。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。平成25年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、711件（前年度711件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が659件（前年度643件）であった。また、開発行為事前審査143件（前年度137件）、試掘調査依頼は186件（前年度208件）であった。以上のように届出の件数は前年度に比べてほぼ横ばい状態で、周知の遺跡の範囲内での開発事業は減ずることなく行われている。試掘調査については、近隣データを活用したことなどにより若干減少している。窓口やファックス等による包蔵地の確認、問い合わせは年間で約6000件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報をGISデータに集積し、それを基に可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

3. 埋蔵文化財調査事業

平成25年度に実施した埋蔵文化財調査事業は29件で、それに要した経費（出土品整理・保存処理を含む）の総額は、285,903千円であった。

i. 国庫補助事業

発掘調査事業のうち、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は、国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。平成25年度の緊急発掘調査事業費は48,000千円であった。この事業の一つとして、脆弱遺物の恒久的な保存を目的として端谷城跡第5次調査出土の鉄製胴丸などの保存処置を継続した。また、復興調査整理として、平成8・9年度に調査を実施した震災復興事業に伴う上沢遺跡の出土遺物の整理を継続して行った。

ii. 市内発掘調査

昨年度と同様に、発掘調査件数は、基礎構造の設計変更により発掘調査が回避された結果、昨年度よりも少なくなっている。発掘調査面積は $29,124\text{m}^2$ （延べ $38,416\text{m}^2$ ）で、このうち民間関連事業によるものが $22,100\text{m}^2$ （延べ $27,811\text{m}^2$ ）と約76%を占めている。24年度は公共関連が約半数程度あったが、25年度は近年の傾向である2～3割程度の範囲に留まった。

面積別でみると、 300m^2 以下の件数比率が約76%と昨年よりも更に増加している。このうち 100m^2 以下が約38%で、調査面積の小規模化が顕著である。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても基礎が深くなり、遺構などに抵触することが多くなつたことによるものと考えられる。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容			件数
1	発見・発掘届			711件
	i	民間の事業に伴う発掘届（保護法第93条）	659件	
	ii	公共の事業に伴う発掘通知（保護法第94条）	52件	
2	発掘調査の報告（保護法第92条）			0件
3	開発行為事前審査等各種申請			143件
4	試掘調査（依頼件数）			186件
	i	公共関連	10件	
	ii	民間関連	176件	
5	発掘調査（大規模確認調査も含む）			29件
	i	公共事業に伴う発掘調査	9件	
	ii	民間の事業に伴う発掘調査	20件	
	iii	圃場整備事業に伴う発掘調査	0件	
6	工事立会			52件
7	整理作業（復興調査整理作業を含む）			9件

表2 発掘調査面積（単位: m^2 ）

	公共関連事業	民間関連事業	合 計
調査面積	7,024	22,100	29,124
延調査面積	10,605	27,811	38,416

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
$\sim 100\text{m}^2$	11	37.9	$1,001\sim 2,000\text{m}^2$	0	0
$101\sim 300\text{m}^2$	7	17.2	$2,001\sim 5,000\text{m}^2$	1	3.5
$301\sim 500\text{m}^2$	4	13.8	$5,000\text{m}^2$ 以上	1	3.5
$501\sim 1,000\text{m}^2$	5	24.1	合計	29	100

iii. 現地説明会

発掘調査の現場において、実際に遺跡を体感する機会として現地説明会を行った。

平成25年10月19日、祇園遺跡第18次調査（神戸祇園小学校建設に伴う発掘調査）で現地説明会を開催し、130名の参加があった。平安時代末頃の平家に関連する遺構ではないか

と、近隣の方々を中心に熱心に見学していただいた。

4. 刊行物一覧

平成25年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『唐崎城跡・尼崎学園古墳群第1次発掘調査報告書』頒価1000円、『古川町遺跡第2次発掘調査報告書』頒価800円、『下山手遺跡第6次発掘調査報告書』頒価1100円、『楠・荒田町遺跡第53次発掘調査報告書』頒価800円、『楠・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書』頒価900円、『兵庫津遺跡第57次発掘調査報告書』頒価1900円、『北青木遺跡第7次発掘調査報告書』頒価2700円、『深江北町遺跡第12・14次発掘調査報告書』頒価1900円、『住吉宮町遺跡第50次発掘調査報告書』頒価700円、『平成23年度神戸市埋蔵文化財年報』頒価800円、『神戸市埋蔵文化財分布図（平成26年度版）』頒価450円、『神戸の遺跡シリーズV 神戸の指定文化財』頒価200円。

5. 遺跡資料リポジトリ

平成22年度から引き続き兵庫県下の窓口である神戸大学を通じて、報告書等の電子化を行った。平成25年度は平成24年度に刊行した5冊の図書のデジタル化と書誌データの作成を神戸大学附属図書館において実施していただいた。

表4 考古資料の館外貸出

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	樺原考古学研究所付属博物館	平成26年度春季特別展『弥生時代の墓』での展示、展示図録への写真掲載・広報への使用	新方遺跡（野手・西方地区）出土資料 23点 遺物資料7点 写真資料16点	23
2	兵庫県立考古博物館	平成26年度春季特別展『古代官道 山陽道と駅家－律令国家を支えた道と駅』で展示するため	吉田南遺跡 出土資料8点 同写真・図3点、大田町遺跡 出土資料16点 深江北町遺跡 出土資料9点 同写真3点	39
3	神戸市立博物館	移動博物館車等に活用する教材用模型作成のため	西求女塚古墳出土 青銅鏡レプリカ2点（5号鏡・11号鏡）	2
4	高岡市美術館・碧南市藤井達吉 現代美術館	『メタルズ！－変容する金属の美－』展で使用	上沢遺跡出土 銅鏡1点	1
5	明石市教育委員会	明石市立文化博物館企画展『発掘された明石の歴史－明石の古代』で展示するため	吉田南遺跡、新方遺跡、大田町遺跡出土遺物	53
6	長浜市長浜城歴史博物館	『秀吉に備えよ！－羽柴秀吉の中国攻め－』展での展示及び写真資料の展示パネル・リーフレットへの掲載するため	花隈城出土瓦2点 端谷城址甲1点 端谷城址甲出土状況写真データ2点	5
7	田原市博物館	市制10周年記念特別展『渥美窯 国宝を生んだその美と技』展で展示するため	祇園遺跡第3次出土 渥美窯甕1点	1
8	西宮市教育委員会	西宮市郷土資料館『西宮の前方後円墳－津門稻荷山古墳をさぐる－』展での展示及び写真資料パネル展示、リーフレットへの掲載	住吉宮町遺跡出土資料82点 遺物資料71点 写真資料11点	82
9	兵庫県立考古博物館	『はかせからの挑戦状 こうこはく動物園』展で使用するため	兵庫津遺跡出土 土製品13点 染付皿1点 アケボノゾウ復元骨格写真データ1点	15
10	兵庫県立考古博物館	川西市文化財資料館で行う「邪馬台国時代の摂津と播磨」で展示するため	西求女塚古墳 5・11号墳出土青銅鏡（レプリカ）2点 5号鏡画像データ1点 11号鏡画像データ1点 空中写真データ2点	8

表5 資料調査成果の公表

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	古代学協会2013年度拡大例会「古墳時代に飼育されたウマ」の発表に使用	小路大町遺跡出土馬歯（馬歯のストロンチウム安定同位体分析データ）	
2	個人	『日本・朝鮮半島の青銅製武器研究』への掲載のため	雲井遺跡出土 武器形青銅器鋤型	

表6 特別利用

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	株サンテレビジョン	サンテレビ 報道番組「ニュースポート」の取材（熟観・撮影）	アケボノゾウ 骨格化石	1
2	個人	中世須恵器の研究（熟観）	住吉宮町遺跡 第11次出土須恵器、神出遺跡 万堡池窯・釜ノ口5号窯・堂ノ前窯出土須恵器	一括
3	個人	明石市立文化博物館『明石の古代』図録に掲載するため（拓本）	白水遺跡第4次調査出土瓦 16点、寒風遺跡第1次調査出土瓦 1点	17
4	個人	炭素14年代測定とDNA分析（写真撮影・破片採取）	吉田南遺跡 動物遺存体 サンプル採取	一括
5	個人	修士論文作成のため（熟観・実測・撮影）	狩口台きつね塚古墳出土馬具 花形鏡板付轡1点、花形杏葉3点、雲珠1点、辻金具5点、飾金具9点、辻金具1点、素環頭鏡板付轡1点	21
6	個人	弥生時代における玉作関連資料の調査研究のため	雲井遺跡第28・33次調査出土玉作関連遺物 64点	64
7	個人	明石市立文化博物館『明石の古代』図録に掲載するため（熟観・実測・撮影・拓本）	吉田南遺跡 出土瓦	一括
8	個人	縄文時代から弥生時代の骨角器の研究（熟観・実測・撮影）	新方遺跡第5次調査 S T401出土鹿角製指輪6点、S D405・S X401出土骨鏡2点、13号人骨共伴イノシシ牙1点	9
8	個人	縄文時代晩期土器における種子状压痕の抽出及びサンプリング（熟観・撮影・レプリカ採取）	大開遺跡第1次調査出土土器 第3・4遺構面出土土器（第4面：報告書番号1~189、第3面：報告書番号1~724）種子状压痕付き土器3点	一括
8	個人	奈良国立博物館2014『五條猫塚古墳の研究』論文執筆のため（熟観・実測・撮影）	中村5号墳出土帶金具8点 『中村古墳群発掘調査報告書』1969 P25図25掲載分	8

表7 画像データなどの貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	株扶桑社	『古墳の歩き方』に掲載するため	五色塚古墳 全景 画像データ1点	1
2	高岡市美術館	展覧会『メタルズ！－変容する金属の美－』展示図録に掲載	上沢遺跡 銅鏡 画像データ1点	1
3	株ナイスク	株山と渥谷社刊『まりこふんの古墳ブック』に掲載	五色塚古墳 朝顔形埴輪 画像データ1点 狩口台きつね塚古墳 金銅製馬具 画像データ1点	2
4	株アサンテ	日本経済新聞 大阪本社 夕刊に掲載するため（26年3月28日）	五色塚古墳 墳丘 画像データ2点	2
5	株フクト	社会科教材『夏の生活3年社会』に掲載するため	五色塚古墳 空中写真 画像データ1点（ただし転載）	1
6	有三猿舎	『ビジュアル版逆説の日本史「5」』に掲載するため	湯の山御殿 画像データ4点（調査地全景1点 出土遺物1点 岩風呂遺構1点 蒸し風呂遺構1点）	4
7	株雄山閣	『季刊考古学』127号に掲載するため	西求女塚古墳 11号鏡『3次元デジタルアーカイブ 古鏡総覧（II）P45掲載から転載	1
8	株岩波書店	岩波新書『唐物の文化史－舶来品からみた日本－』に掲載するため	祇園遺跡 玳琥天目碗 画像データ1点	1
9	有三猿舎	株洋泉社刊『あなたの知らない兵庫県の歴史』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版2-1	1
10	絵葉書資料館	同館発行の『絵葉書』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ4点 『報告書』図版1-1、1-2、15、1-36	4
11	株オフィス三銃士	株宝島社刊『古墳でみる古代史』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点 『報告書』図版2-1、4-1	2
12	株帝国書院	『社会科 中学生の歴史－日本の歩みと世界の動き－』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 既刊書籍からの転載	1
13	株KADOKAWA中経出版 ブランドカンパニー	新人物文庫『神戸謎解き散歩』に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ2点 『報告書』巻頭図版2-7	2
14	株浜学園	浜学園の学力テストに掲載するため	住吉東古墳 墳輪 画像データ1点 『神戸の埴輪大集合』P10	1
15	鎌ヶ谷市郷土資料館	『鎌ヶ谷市史』上巻（改訂版）「第4編古墳時代」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点	1
16	株吉川弘文館	『古墳時代の葬制と他界觀』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版3下	1
17	小学館	平成26年2月1日刊『Domani』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版2-1	1
18	百舌鳥・古市古墳群世界 文化遺産登録推進本部会議	『世界文化遺産を大阪に 百舌鳥・古市古墳群』ホームページに掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版3-1	1
19	グループ・コロンブス(有)	学研刊『絵でわかる社会科事典⑥ 衣食住の歴史』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版2-1	1
20	株イディー	山陽電車『E'scot』2月掲載するため	五色塚古墳 画像データ3点 『報告書』図版2-1、3-1、4-1	3
21	株文溪堂	『平成26年度 社会科資料集』の「特集ベラ」に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ2点 1号鏡、古墳全景写真	2
22	個人	第35回 木簡学会で発表するため	深江北町遺跡写真・出土遺物写真 画像データ56点	56
23	NHK大阪放送局 番組製作部	平成26年1月4日（土）放送の「歴史秘話ヒストリア～黒田官兵衛スペシャル」の使用するため	『湯の山御殿』 画像データ5点 44蒸し風呂遺構2種 48蒸し風呂 SX23 49SX23床下の蒸気をひく配管跡 57岩風呂 SX34と SX31 64湯山御殿の庭園	5

表7 画像データなどの貸出

No.	申 請 者	利 用 目 的・内 容	資 料 名	資料 点 数
24	株はる制作室	宝島社刊『図解日本古代史の謎』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点 『報告書』図版2-1、4-1	2
25	株ジャンプ コーポレーション	テレビ朝日「奇跡の地球物語」で放送するため	湯山遺跡 画像データ2点 『報告書』 表紙 P3 2・図版57	2
26	森林総合研究所 木材特性 研究領域	第28回日本植生史学会における口頭発表及び『植生史研究』へ掲載するため	垂水日向遺跡第1・3・7～10次調査出土木材、及び大型植物化石、年代測定値、層序概要	
27	甲南女子大学 図書館	貴重図書「万葉集と神戸」でパネル展示するため	『史跡処女塚古墳』P1・3、「整備後の処女塚古墳」「東求女塚古墳」「西求女塚古墳」計3点	3
28	公益財団法人 神戸都市問題研究所	平成25年度 阪神・淡路大震災関連文書企画展でパネル展示するため	住吉宮町遺跡 井戸・イラスト画像データ2点、旧神戸外国人居留地遺 断面画像データ2点、同遺跡 土層断面画像データ1点	5
29	株平凡社	『太陽の地図帳』「古墳を旅する」に掲載するため	五色塚古墳空撮写真 画像データ1点	1
30	株神戸新聞 総合出版センター	『播磨の古墳』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版2-1、白水瓢塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版33-2	3
31	加西市	『加西市播磨国風土記ガイドブック』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版3-2	1
32	株CTV M I D E N J I N	『河合サテライト講座』日本史授業に使用するため	舞子浜遺跡出土埴輪 画像データ1点	1
33	神戸市立博物館	常設展示室に掲示するため	画像データ13点、図版4点 新方遺跡1号人骨出土状況（頭蓋骨）、同（全身）、大歳山遺跡・公園内復元竪穴住居・住吉東古墳・出土馬形埴輪・住吉宮町遺跡・出土殉馬出土状況、高塚山2号墳・馬の線刻壁画、二ツ屋遺跡・出土遺物（集合）、吉田南遺跡・掘立柱建物検出状況、五色塚古墳と明石海峡大橋（航空写真）、五色塚古墳・後円部復元状況、神出古窯址群・釜ノ口3号窯検出状況（全景）、西求女塚古墳・出土鉄器（集合）、頭高山遺跡・竪穴建物検出状況、五色塚古墳復元CG（空から見た五色塚古墳と小壺古墳）、同（海からみた五色塚古墳）、西求女塚古墳・3号鏡実測図、同6号鏡実測図	17
34	株イディー	山陽電車広報紙「エスコート」に掲載するため	「おおとし山まつり」画像データ3点	3
35	神戸市立中央図書館	読書週間展示「こころにしみる 文字の一滴」でパネル展示するため	宅原遺跡宮ノ元地区 画像データ6点 『平成4年度 神戸市埋蔵文化財年報』P90fig94・95、P92fig99、P95fig102、調査地遠景、樋02	6
36	神戸市産業振興局	兵庫津歴史館 岡方俱楽部で展示するため	兵庫城跡の石垣と堀 画像データ1点	1
37	神戸市産業振興局	兵庫津歴史館 岡方俱楽部で展示するため	「KOBE de 清盛 2014」歴史館展示パネル 画像データ21点 宋銭、桶・荒田町遺跡調査地点位置図、第46次調査調査地点位置図、同・二重壕平面図、同調査区、同SD01出土遺物、同SD01・SD02土層断面図、祇園遺跡位置図、同第2・5次調査地点位置図、同平面図、同武波天目小碗、同京都産軒瓦、同土師器小皿と渥美窯甕、同II期の池・土師器出土状況、同園地造構、祇園遺跡第14次・調査区平面図、同調査地点位置図、同調査区南端の区画溝、発掘地点の全景	21
38	豊かな森川海を育てる会	『住吉川アルバム』に掲載するため	住吉東古墳 画像データ2点 『神戸の古墳』P10住吉東古墳全景・P11馬形埴輪と円筒埴輪	2
39	個人	『たるみナビ』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版2-1	1
40	株ユニフォトプレス インターナショナル	株帝國書院刊『最新日本史図説』に掲載するため	「繩文時代のやじり」「弥生時代のやじり」画像データ2点	2
41	朝日新聞出版 分冊百科編集部	『日本の歴史』18号「平安後期」の項に掲載するため	祇園遺跡 画像データ2点 第2次調査地（全景）かわらけ（発掘作業風景）	2
42	山陽電車株式会社 鉄道営業部	『近鉄・阪神・山陽 沿線散歩2013』冊子・ポスターに掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点 『報告書』図版1-1、2-1	2
43	株有馬ビューホテル	「太閤の湯 改装かわら版」チラシに掲載するため	湯山遺跡 画像データ2点 『報告書』P29図版48、同P32図版57	2
44	新潟日報社 読者ふれあいセンター	新潟日報こども新聞「週刊ふむふむ」に掲載するため	湯山遺跡 画像データ1点 『報告書』 P35図版62	1
45	京阪神エルマガジン社	エルマガMOOK『関西の歴史を遊ぶ本』に掲載するため	神戸市埋蔵文化財センター外観 画像データ1点、同展示風景 画像データ1点	2
46	野寄財産区管理会	『野寄村史』に掲載するため	『平成5～8年度 神戸市遺跡現地説明会資料』画像データ1点、『西岡本遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』画像データ2点、同図版転載2点、同紙焼12点、『西岡本遺跡第8次発掘調査報告書』紙焼き4点	21
47	株ユニフォトプレス インターナショナル	株帝國書院刊『最新日本史図説』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点	1
48	株新泉社	シリーズ『遺跡を学ぶ』91巻「観音寺山遺跡」に掲載するため	新方遺跡 画像データ2点	2
49	神戸市立博物館	博物館と神戸いきいき勤労財團との連携事業講演会で画像を使用するため	若松町遺跡等 画像データ56件	56
50	(公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部	『ひょうごの遺跡』第86号に掲載するため	端谷城の博列建物 画像データ1点、兵庫城の石垣 画像データ1点、兵庫城の石垣で使用されていた転用石 画像データ1点	3
51	大手前大学 史学研究所	『兵庫県関係古代木簡集成』に掲載するため	吉田南遺跡木簡 画像データ4点、深江北町遺跡木簡 画像データ1点	5

表7 画像データなどの貸出

No.	申 請 者	利用目的・内容	資 料 名	資料 点数
52	神戸市立博物館	常設展示室に掲示するため	遺物写真 画像データ11点、遺構写真・CD 画像データ16点、図面・表 画像データ7点 都賀遺跡出土縄文土器（早期）、原野沢遺跡出土縄文土器（後期）、大開遺跡出土弥生土器（集合2点）、住吉宮町遺跡出土須恵器（集合）、楠・荒田遺跡出土弥生土器（集合）、西求女塚古墳出土青銅鏡（集合）、同山陰系小型器台（集合）、狩口台きつね塚古墳出土馬具（集合）、同須恵器（集合）、頭高山遺跡弥生時代集落復元CD（遠景）、同近景、西求女塚古墳航空写真、同石室石材検出状況、塩田北山東古墳第1・2主体部検出状況、同第1主体部出土遺物、同青銅鏡出土状況、五色塚古墳と小壺古墳（明石海峡を望む）、同埴輪（集合）、白水瓢塚古墳第1主体部検出状況、同第1出体部出土遺物、同埴輪棺（集合）、同玉類出土状況、高塚山7号墳石室、天王山4号墳丘、空から見た吉田王塚古墳、神戸市域との周辺の前方後円墳、神戸市域の前方後円墳一覧表、神戸市域の前方後円墳編年表、西求女塚古墳墳丘復元図、五色塚古墳墳丘復元図、白水瓢塚古墳墳丘復元図、吉田王塚古墳墳丘復元図	34
53	櫻山川出版社	『ビジュアル版日本史図録』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『詳説日本史図録』より転載	1
54	兵庫区まちづくり課	神戸まつり「はっぴいひろば」での区政80周年記念ブースで展示するため	『平氏と神戸の遺跡』P10・12・17・18・33 画像データ5点	5
55	兵庫県行政書士会 明石支部	「支部だより 行政明石」69号に掲載するため	神戸市埋蔵文化財センター外観 画像データ1点、同展示風景 画像データ1点	2
56	徳文舎	片山一道『骨考古学と身体史観』に掲載するため	新方遺跡出土人骨写真 画像データ2点 第1・3号人骨出土状況、第12号人骨（裏面）	2
57	個人	神戸商工会議所刊『神戸商工だより』5月号に掲載するため	五色塚古墳 画像データ3点 『報告書』図版1-1、1-7、『たるみの遺跡』P25「CDで復元した五色塚古墳」	3
58	個人	大阪歴史学会現地見学会「歴史のなかの兵庫津と兵庫城」での発表および配布資料へ掲載するため	兵庫津遺跡第57次 兵庫城跡 画像データ9点 「兵庫津遺跡現地説明会資料」より	9
58	(株)新泉社	シリーズ『遺跡を学ぶ』別冊04『古墳時代ガイドブック』に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点 『報告書』図版2-1、鉄製農耕具 画像データ1点 『神戸考古百選』写真24	2

6. 普及啓発事業

i. 企画展示の開催

企画展示・体験講座・学校連携・地域連携等を中心に、各種事業を展開した。平成25年度の埋蔵文化財センターへの入館者数は36,032名であった。

平成25年度も別表（表8）のとおり、4回の企画展示を開催した。

例年、春季の企画展示では日本の歴史を学習する小学校6年生が、埋蔵文化財を通じて、歴史に興味を持てるような展示を目指している。当年度の春季企画展では、市内で最近調査した遺跡の中で出土した、初公開のものを含む縄文時代から近代にいたるまでの様々な考古資料を展示し、歴史を感じてもらえるよう心がけた。

夏季は出土人骨やその他の哺乳類・魚介類の出土遺体を展示し、考古学が土器・石器を対象とするのみではなく、他の研究分野とも連携して成り立っていることを、市民に広く知っていただけるよう計画した。資料の借用などに当たっては、兵庫県立人と自然の博物館、神戸市立須磨海浜水族園の協力を得た。また、これに関連して独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の丸山真史氏に「骨を考古学する」のタイトルで講演を依頼し多くの来場者があった。この展示は新聞でも取り上げられ5,000人近くの来場者をみた。

秋季は平成24年度に国の重要文化財に五色塚古墳の埴輪が指定されたのを受けて、神戸市域から出土した前期～後期に至る埴輪を集めた展示を開催した。また弥生時代末の特殊器台からの埴輪成立過程を理解してもらえるよう、資料を関係機関から借用した。さらに関連イベントとして会期中、特別講演会として独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の廣瀬覚氏に、五色塚古墳の埴輪を中心に公演をいただき、さらに歴史講演会の1回として展示した埴輪全般に対して当センター学芸員が講演を行った。この展示も新聞に掲載され好評を得ている。

冬季は毎年小学校3年生が学習する「昭和のくらし」をテーマに展覧会を開催し、当年度で8回目を数える。小学生のみならず、社会教育のイベントの一つとして一般の観覧者

にも好評を得ている。企画展示室に昭和30～40年代ころの室内を可能な限り再現し、テレビ、ラジオ、ちゃぶ台などを配置し、子どもたちにも当時の生活の様子を想像できるようにした。そのほか戦前・戦後の教科書、給食用食器、ランドセルなどで学校生活を、ホーロー看板や自転車で家のまわりの風景を、市電パノラマ、切符などで交通との関わりを、玩具で子供文化を表現し立体的な展示を心がけた。また近世遺跡から出土した遺物なども展示し、生活の継続性を再認識してもらうことも考慮した。さらに会期中、展示内容に沿った講演会を開催し、1月26日には昭和30～40年代の車の展示も行った。この展示も新聞に掲載され多くの来場者をみた。

表8 平成25年度 企画展

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
神戸発掘最前線	4月13日（土）～6月2日（日）	46	9,862
発掘された骨たち	7月20日（土）～9月1日（日）	38	4,749
埴輪大集合	10月5日（土）～11月24日（日）	43	4,479
昭和のくらし・昔のくらし8	1月18日（土）～3月9日（日）	43	8,672

表9 平成25年度 歴史講演会

月 日	講演名	参加者数
5月18日（土）	神戸を発掘－最新の成果	45
7月27日（土）	骨を考古学する	56
10月20日（日）	五色塚古墳出土埴輪の歴史的意義	76
10月26日（土）	歴史を楽しむための解説会	31
11月30日（土）	考古学者直良信夫氏と明石郡の遺跡	45
1月25日（土）	神戸の昭和を旅する	54
3月1日（土）	平成25年度発掘調査報告会	39

ii. 体験考古学講座

埋蔵文化財センターにて銅鐸づくり・勾玉づくり・土器づくり・鏡づくり・ガラス玉づくり・火おこし器づくり・竪穴住居づくり等、古代の技術を学びながら、親子参加型の8講座12回開催の体験講座を行った。体験講座の参加者数は各回40～90名の場合が多く、のべ629名で先年度より增加了。

また定期的に実施する考古学講座以外に、申込によって不定期に行う体験考古学講座も例年実施している。今年度は6団体で参加人数は計378名であった。

iii. 出張体験考古学講座

センターで行う考古学講座以外に市内の学校・公民館などに出向いて実施する講座を行っている。今年度は26団体の申込があり、参加人数は計2,000名であった。

iv. 五色塚古墳の説明

国史跡の五色塚古墳には例年全国から多くの来場者があり、一般社会人や小学校生徒などに専門的説明をする依頼を受けている。今年度は計128団体、8,861名に対し説明を行った。

v. 歴史講演会の開催

各季の企画展示に因んだテーマや25年度の各遺跡の発掘調査成果速報等を学芸員がわかりやすく解説する講演会で、受講生は全講座で合わせて346名であった（表9）。

上記以外に、今年度は夏季・秋季企画展において独立行政法人国立文化財機構奈良文化

財研究所の丸山真史氏、廣瀬覚氏を招き、「骨を考古学する」「五色塚古墳出土埴輪の歴史的意義」と題して特別講演会を開催し、132名の参加があった。

vi. 学校連携事業

連携協定を結んでいる神戸学院大学と博物館学芸員課程の実習として資料貸出を実施した。また同大学図書館において「伊川谷の遺跡」「戦いと生活/三種神器」のテーマで館外展示を行った。

また博物館実習を例年行っており、今年度は8月6日（火）～10日（土）の5日間の日程で6名の実習生を受け入れた。カリキュラムは考古資料の取り扱い、写真資料の取り扱い、展示実習、ポスター作成、保存科学実習などである。

5月27日（月）～6月14日（金）及び11月11日（月）～15日（金）には市内中学から「トライやるウィーク」で計6名の学生を受け入れ、土器洗浄など埋蔵文化財に係る仕事の一端を理解してもらえるよう作業を行った。

vii. 神小研社会科部との連携

神戸市小学校教育研究会社会科部との連携については、毎年、コミスタこうべ（中央区）にて開催される『神戸市小学校社会科作品展』（9月13日）において埋蔵文化財に関する優秀作品30点を選定し、「埋蔵文化財センター賞」を授与、表彰した。

viii. 地域連携事業

①地域行事への参加

長田区NPO法人KOBE鉄人PROJECTと都市計画総局の依頼により、KOBE三国志ガーデン企画展「三国時代の日本卑弥呼と弥生時代展」として、平成25年の3月23日から6月30日まで館外展示を行った。

②おおとし山まつりの開催

文化財保護月間でもある11月に垂水区役所と連携し、地元の協力を得て、11月3日に大歳山遺跡公園において開催した。恒例の竪穴住居の公開や古代衣装の試着、古代米のおにぎり試食、勾玉づくり等、古代体験を行った。参加者647名であった。

③西もとめ塚まつり

史跡活用事業の一環として、灘区まちづくり課と連携し、地元自治会の協力のもと行った事業で、10月27日（日）に実施した。求女塚西公園で鏡づくり、火おこし体験、土器・埴輪づくり、勾玉づくり、古代服試着などのイベントを行った。参加人数は302名であった。

④西区地域学の開催

西区役所と連携して行う事業で、当年度は「旧明石郡の遺跡をめぐる」をテーマとして実施した。11月30日（土）には神戸市埋蔵文化財センターでセンター学芸員が「考古学者直良信夫氏と明石郡の遺跡」と題して講演会を開催し、翌12月1日（日）には、バスツアーで直良信夫氏と関係の深い史跡を中心に、大歳山遺跡、元住吉山遺跡、吉田遺跡、天王山古墳、王塚古墳などを見学した。参加者は39名であった。例年申込者数は100名前後に上るが、安全面など諸般の事情を考慮し抽選にて参加人数を限定している。

また市立西図書館とは例年どおり、各季の企画展でのイベントやスタンプラリー、また西区地域学に際してもさまざまなかたちで連携を図り、両施設の活用促進を行なっている。

なお、埋蔵文化財センターではボランティアの方々にも各種考古学講座、出張講座、地域連携事業に積極的にご参加、ご協力を頂いている。

表10 平成25年度埋蔵文化財発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	郡家遺跡 第91次調査	東灘区御影中町2丁目20	神戸市教育委員会	富山直人	160m ² 400m ²	25.04.15～ 25.06.21	古墳時代前期と古墳時代後期の堅穴建物3棟及び平安時代・鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。縄文時代晩期の土器も出土している。	児童館建設
2	小路大町遺跡 第5次調査	東灘区本山南町1丁目3	神戸市教育委員会	黒田恭正	125m ² 125m ²	26.02.03～ 26.03.20	弥生時代前期の浜堤に伴う堤間湿地から、前期の木製品（鍬・容器状木製品など）が出土した。鍬は「狭鍬」で現存長0.7mの柄が装着されたまま出土している。	市営本山第三住宅の耐震改修工事
3	深江北町 第16次調査	東灘区深江北町1丁目24	神戸市教育委員会	口野博史	20m ² 20m ²	25.05.21～ 25.05.22	調査地から洪沢砂が検出され、須恵器・土師器・瓦片の他、円筒埴輪片が出土した。	個人住宅建設（国庫補助事業）
4	住吉宮町遺跡 第51次調査	東灘区住吉本町1丁目566-4・7	神戸市教育委員会	内藤俊哉	60m ² 120m ²	25.05.15～ 25.06.11	縄文時代晩期～中世にかけての遺構・遺物を確認した。また慶長伏見地震に関係すると思われる痕跡も検出した。	共同住宅建設
5	魚崎郷古酒蔵群 第4次調査	東灘区魚崎南町5丁目356-3・7	神戸市教育委員会	池田 純・ 山田侑生	166m ² 206m ²	25.11.07～ 25.11.28	「金露酒造」に関係すると考えられる石垣や建物礎石等を検出した。また近世末期の遺物も出土しており、当該時期の酒造遺構が今後確認される可能性もある。	個人住宅建設
6	西郷古酒蔵群 第7次調査	灘区新在家南町5丁目48	神戸市教育委員会	口野博史・ 西岡巧次	880m ² 2,600m ²	25.09.11～ 26.03.14	3面の遺構面を確認した。これらは近世及び近現代の酒造遺構と考えられる。遺構としては釜場・洗い場・槽場・火炉の他、酒蔵の基礎である石列等を検出した。	高齢者ケア付き集合住宅建設
7	篠原遺跡 第32次調査	灘区篠原本町3丁目2-3	神戸市教育委員会	谷 正俊・ 内藤俊哉	350m ² 350m ²	26.01.17～ 26.02.17	弥生時代後期の堅穴建物・土坑などを検出した。堅穴建物は一辺約8mの隅円方形で、深さ0.8mを測る残存状態良好のものである。また床面のピットから手形陶土器が出土した。	グループホーム・個人住宅建設（国庫補助事業）
8	日暮遺跡 第38次調査	中央区東雲通1丁目340・341・346・347	神戸市教育委員会	黒田恭正	138.4m ² 276.8m ²	25.04.12～ 25.05.31	弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴建物2棟、室町時代の溝2条及び石組井戸を検出した。井戸からは丹波焼・備前焼播鉢や中国製青花皿が出土し、石組には五輪塔・石臼・茶臼片が転用されていた。	共同住宅建設（国庫補助事業）
9	祇園遺跡 第18次調査	兵庫区下三条町13・14・19	神戸市教育委員会	谷 正俊 内藤俊哉 池田 純 川上厚志 綿繩文佳 山田侑生	5,700m ² 8,500m ²	25.04.01～ 25.12.16	12世紀後半から末頃の掘立柱建物、石敷溝・石組溝・井戸、土坑や道路状遺構等を検出した。また下層からは平安時代以前の水田遺構を検出している。	統合小学校建設・周辺整備事業
10	祇園遺跡 第19次調査	兵庫区五宮町116・124	神戸市教育委員会	山口英正	120m ² 120m ²	25.04.18～ 25.05.30	調査地は祇園遺跡でも北端の山裾に位置している。古墳時代初頭・平安時代後期と近世の遺構・遺物を検出した。	宅地開発事業
11	祇園遺跡 第20次調査	兵庫区下三条町10	神戸市教育委員会	井上麻子	76m ² 76m ²	26.02.24～ 26.03.14	12世紀代の土師器・瓦器塊・須恵器・白磁を多量に含む土器溜り状の遺構、SX101を検出した。東接する第16次調査区で検出した同様の遺構と、同一のものと考えられる。	公園整備（国庫補助事業）
12	雪御所遺跡 第4次調査	兵庫区湊山町22-3	神戸市教育委員会	富山直人 山田侑生	700m ² 700m ²	25.09.12～ 25.11.08	堅穴建物を計7棟検出し、内5棟が古墳時代初頭～前期、2棟が同時期である。出土した小型鉢には外面に線刻絵画を持つものがある。時期は庄内期に考えられる。13世紀前半の土師器皿を多量に含む土坑もある。	店舗付共同住宅（国庫補助事業）
13	楠・荒田町遺跡 第56次調査	中央区楠町6丁目1-18	神戸市教育委員会	富山直人	140m ² 280m ²	25.11.18～ 25.12.12	15世紀以降の幅3.3m、深さ2.5mの大溝1条と、弥生時代中期後半の方形周溝墓2基を検出した。大溝は近接する第10・11次で確認した大溝と同一のものと考えられ、推定復元幅は約12mと思われる。	共同住宅建設（国庫補助事業）
14	兵庫津遺跡 第59次調査	兵庫区中之島町2丁目	神戸市教育委員会	内藤俊哉	50m ² 50m ²	25.07.12～ 25.08.07	中世後期の遺物を含む落ち込みや、近世と見られる落ち込み・井戸などを検出した。	下水管移設工事
15	兵庫津遺跡 第60次調査	兵庫区七宮町2丁目1-6・1-7	神戸市教育委員会	口野博史	80m ² 280m ²	25.10.02～ 25.11.12	近世の遺構面を4面確認した。遺構には石列・土坑・溝・落ち込み等で狭小面積にも関わらず多量の遺物が出土した。	共同住宅建設（国庫補助事業）
16	兵庫津遺跡 第61次調査	兵庫区兵庫町1丁目4-6	神戸市教育委員会	池田 純 阿部敦生 綿繩文佳	530m ² 2,650m ²	25.12.16～ 26.03.26	計5面の遺構面を検出した。第1～4面が近世で、第5遺構面が13～15世紀代に属する。遺構は土坑・落ち込み・ピットなどで、遺物は近世の陶器を主に、古墳時代の須恵器や弥生時代の遺物も見られる。	サービス付き高齢者向け住宅建設
17	兵庫津遺跡 第62次調査	兵庫区中之島町2丁目	神戸市教育委員会	富山直人 内藤俊哉 谷 正俊	17,000m ²	26.02.20～ 26.03.31	江戸時代を中心とする町屋遺構。H26年度継続事業	商業施設建設
18	大開遺跡 第14次調査	兵庫区大開通3丁目1-26～28	神戸市教育委員会	池田 純 山田侑生	350m ² 700m ²	25.07.02～ 25.08.30	中世および弥生時代前中期～中期初頭の遺構を検出した。弥生時代前期の環濠を1条検出したが、北接する第5次調査の環濠と同一直線と考えられる。環濠内から土器・石器と共に獸骨・人骨や木製品が出土した。	共同住宅建設
19	唐崎城跡・ 尼崎学園古墳群 第1・1次調査	北区道場町塩田3083	神戸市教育委員会	口野博史	28m ² 28m ²	26.05.01～ 26.05.08	前年度に実施した新施設建設に伴うもので、設計見直し部分の発掘調査を実施した。遺構面上から土師器・須恵器が出土した。	尼崎学園新施設建設（国庫補助事業）
20	唐崎城跡・ 尼崎学園古墳群 第2次調査	北区道場町塩田3083	神戸市教育委員会	口野博史 山田侑生	44.5m ² 44.5m ²	26.03.06～ 26.03.24	損壊を受けた5号墳の状況確認と修復を主眼とし、併せて近接する6号墳の範囲確認作業を実施した。	尼崎学園新施設建設（国庫補助事業）
20	五番町遺跡 第13次調査	長田区六番町5丁目2-1	神戸市教育委員会	川上厚志 綿繩文佳	870m ² 1740m ²	26.02.12～ 26.03.31	古墳時代後半の溝状遺構。奈良～平安時代の溝状遺構。平成26年度継続事業。	寄宿舎建設
22	大橋町東遺跡 第5次調査	長田区大橋町3丁目1	神戸市教育委員会	黒田恭正	511m ² 1,022m ²	25.09.09～ 25.12.20	弥生時代後期後半の土坑、平安時代の犁溝と井戸等、柱穴などを検出した。	新長田駅南地区再開発事業
23	玉津田中遺跡 第40次調査	西区平野町中津字西浦275-1他	神戸市教育委員会	口野博史 山田侑生	329m ² 359m ²	25.12.11～ 26.03.04	弥生時代前期、中世～近世の遺構を検出した。また微量ではあるが縄文土器片も出土している。	平野5号線道路改良工事
24	柄木遺跡 第20次調査	西区櫛谷町菅野字石谷1073	神戸市教育委員会	西岡巧次	150m ² 150m ²	25.08.19～ 25.09.13	古墳時代後期（6世紀前半頃）のピット・溝及び落ち込み遺構を検出した。	店舗建設
25	吉田南遺跡 第20次調査	西区玉津町吉田字足田491	神戸市教育委員会	西岡巧次	80m ² 80m ²	25.07.22～ 25.07.26	古墳時代～奈良時代と推定される水田遺構を検出した。	下水管敷設工事（国庫補助事業）
26	今津遺跡 第24次調査	西区玉津町今津字淵ヶ上167-1	神戸市教育委員会	西岡巧次	55m ² 55m ²	25.05.21～ 25.05.29	弥生時代中期の遺物と溝・ピットなどの遺構を検出した。	工場建設（国庫補助事業）
27	今津遺跡 第25次調査	西区玉津町今津字松ヶ本620、622-1	神戸市教育委員会	西岡巧次 池田 純	27m ² 27m ²	25.06.25～ 25.07.01	弥生時代中期中葉の落ち込み遺構等を検出した。	宅地開発事業（国庫補助事業）
28	新方遺跡 第52次調査	西区玉津町新方342-1	神戸市教育委員会	西岡巧次	73m ² 146m ²	25.10.07～ 25.11.05	奈良～平安時代前期の遺物包含層及び柱掘形と考えられる大型ピット・溝等を検出した。	個人住宅建設（国庫補助事業）
29	馬掛原遺跡 第3次調査	西区玉津町高津橋字馬掛原819-3・824他	神戸市教育委員会	西岡巧次	311m ² 311m ²	25.04.08～ 25.04.23	古墳時代前期の堅穴建物1棟、ピット等を検出した。堅穴建物は8.3m×5.0mの隅円長方形である。床面から外に向かって排水施設と考えられる溝が延びる。	土地区画整理事業

調査面積合計 29,123.9m²延調査面積合計 38,416.3m²

表11 平成25年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
A	北青木遺跡 第7次調査		神戸市教育委員会	阿部功・井上麻子・川上厚志 内藤俊哉・中村大介	0 m ²	25,04,01～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
B	深江北町遺跡 第12・14次調査		神戸市教育委員会	谷正俊・阿部功・井上麻子 藤井太郎・中村大介	0 m ²	25,04,01～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
C	住吉宮町遺跡 第50次調査		神戸市教育委員会	藤井太郎・中村大介・口野博史	0 m ²	25,05,01～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
D	下山手遺跡 第6次調査		神戸市教育委員会	阿部敬生	0 m ²	25,06,03～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
E	楠・荒田町遺跡 第53次調査		神戸市教育委員会	藤井太郎・関野豊	0 m ²	25,05,01～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
F	楠・荒田町遺跡 第54次調査		神戸市教育委員会	黒田恭正・井尻格	0 m ²	25,05,01～ 26,03,14	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,14		
G	兵庫津遺跡 第57次調査		神戸市教育委員会	井上麻子・川上厚志・富山直人 中村大介	0 m ²	25,04,01～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
H	上沢遺跡 第9・54次調査		神戸市教育委員会	富山直人・藤井太郎・関野豊	0 m ²	25,05,15～ 26,03,31	出土遺物整理	復興整理 〔国庫補助事業〕
					0 m ²	26,03,31		
I	唐崎城・尼崎学園古墳群 第1次調査		神戸市教育委員会	口野博史	0 m ²	25,04,01～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
J	吉川町遺跡 第2次調査		神戸市教育委員会	山口英正・阿部功・中村大介	0 m ²	25,04,15～ 26,03,31	出土遺物整理・報告書刊行	
					0 m ²	26,03,31		
K	端谷城跡 第5次調査		神戸市教育委員会	中村大介	0 m ²	25,04,01～ 26,03,31	端谷城跡第5次調査出土の 鉄製甲（胴丸）保存処理	〔国庫補助事業〕
					0 m ²	26,03,31		

fig.3 平成25年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図
(各遺跡の番号は、掲載遺跡番号と一致)

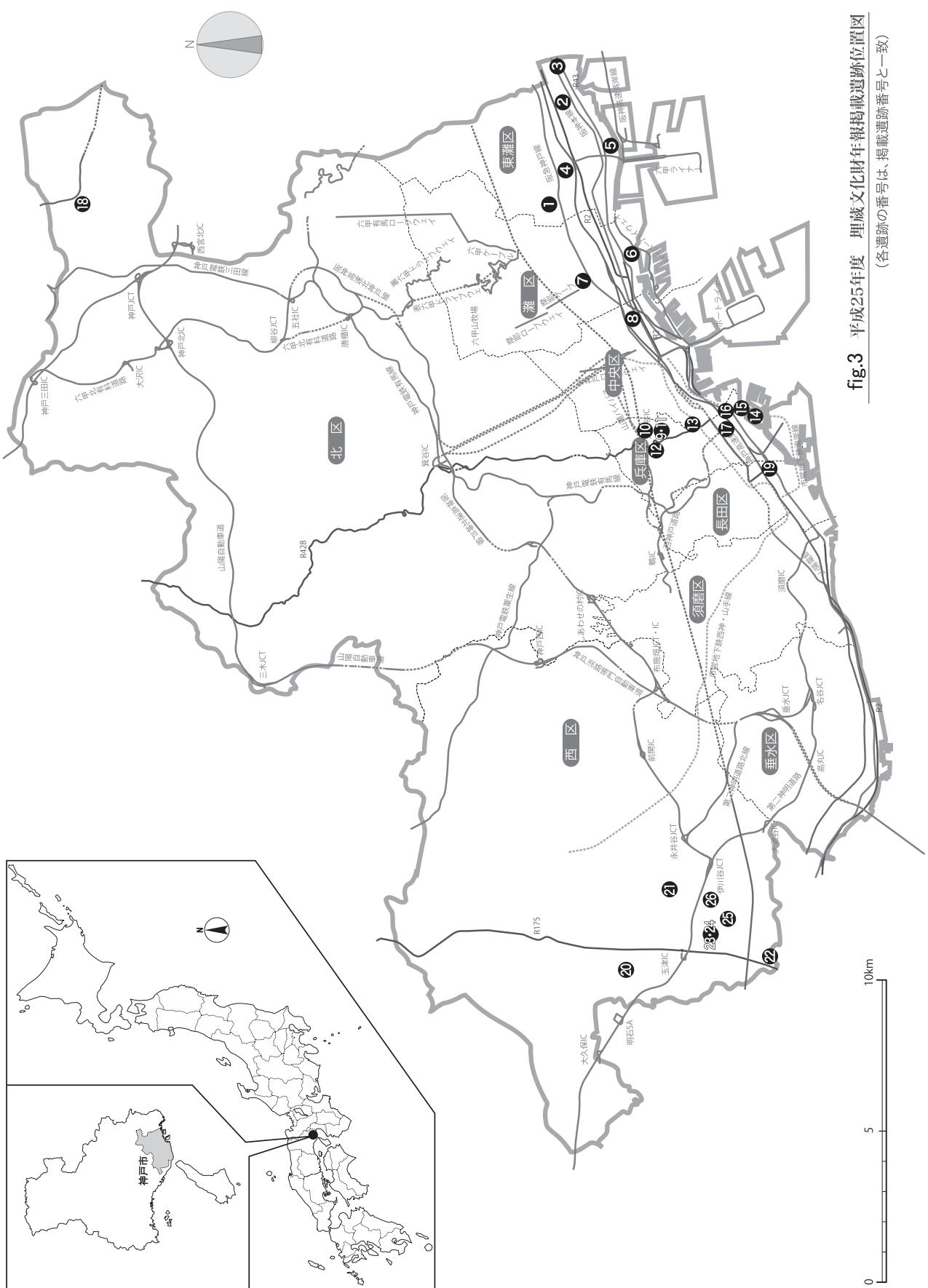




fig.4 調査地点位置図(1) 1/50,000



fig.5 調査地点位置図(2) 1/50,000



fig.6 調査地点位置図(3) 1/50,000



fig.7 調査地点位置図(4) 1/50,000



fig.8 調査地点位置図(5) 1/50,000

II. 平成25年度の発掘調査

1. 郡家遺跡 第91次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影町、御影中町に所在する弥生時代～平安時代の集落遺跡である。当遺跡は、石屋川と住吉川によって形成された扇状地上に立地し、現標高13～40mを測る。これまでに実施した90次に及ぶ調査によって、弥生時代中期段階には墓域であったものが、弥生時代後期から末にかけて集落域へと移り、古墳時代中期にはかなり大規模な集落へと発展して行ったと考えられる。なお、韓式系軟質土器が古墳時代中期には一定量出土しており、郡家遺跡が対外交流においても重要な地域であったことがうかがわれる。古墳時代後期においても集落規模にさほどの変化はないが、中期から集落域が移動したかについては、もう少し調査の進展が必要である。

奈良時代以降にも一定量の遺構・遺物は確認されているが、古墳時代の量に比べて少なく、郡家遺跡の盛行時期は、古墳時代であるとの評価が妥当であろう。



2. 調査の概要

今回の調査は、児童館建設に伴うもので、工事によって埋蔵文化財が影響を受ける部分について実施した。盛土および旧耕作土については重機によって掘削を行い、遺構については人力により検出等を行った。残土の仮置き場など調査地の都合上、3分割して調査を実施した。調査の結果、奈良時代から平安時代の遺構面並びに古墳時代の遺構面を2面確認した。

一部に搅乱を受けているものの遺構面は比較的良好に遺存しており、GL-0.6m前後の淡暗灰色シルト混細砂、GL-0.7m前後の淡褐色細砂の下面が、暗灰色小礫混細～中砂の第1遺構面である。第1遺構面を形成する層の下層に暗灰褐色礫細～中砂層があり、その上面が第2遺構面で、下面が第3遺構面である。

第1遺構面

A区からF区までの各地区でピットを検出している。

この遺構面では、SP1602のように鎌倉時代(13世紀代)の遺構も同時に検出している。

また、平安時代と考えられる1辺1mほどの方形の掘形を持つSP1102なども確認しているが、建物としてまとまるものは確認できなかった。

この遺構面では、一部に奈良時代の遺構を含みながら中世までの各時期の遺構を同時に検出している。

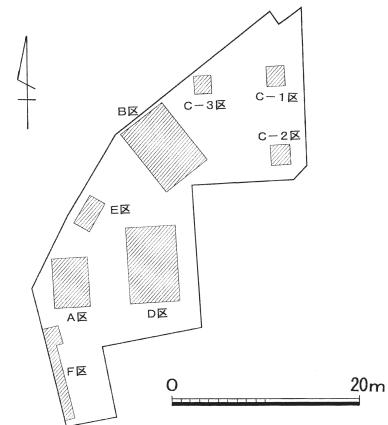


fig.10 調査区位置図

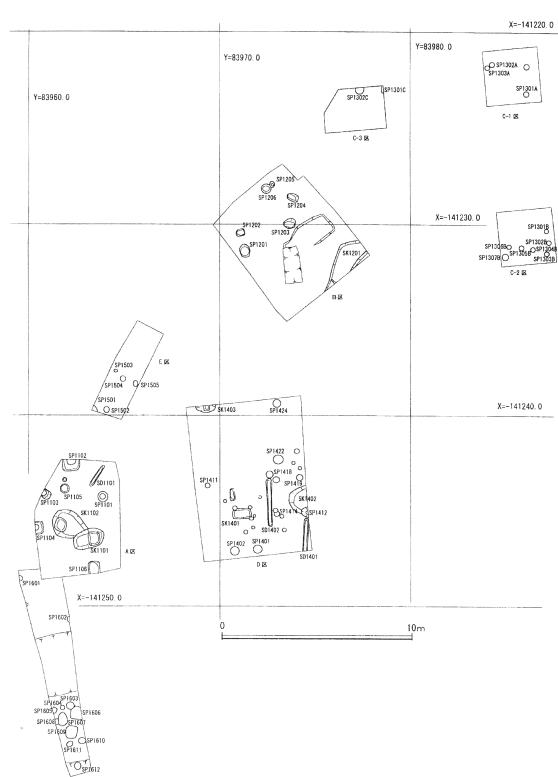


fig.11 第1遺構面平面図

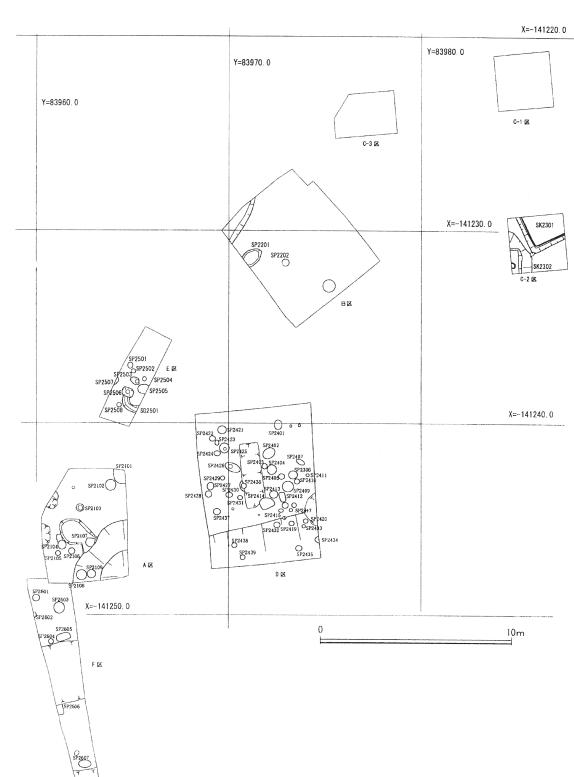


fig.12 第2遺構面平面図

第2遺構面

C-2区では、SK2301とSK2302を検出した。これらは調査地区外へ拡がるため性格・規模などに関し確定できないが、竪穴建物の可能性が高いと考えられる。

SK2301

SK2301は1辺2m以上、深さ40cmを測る方形の竪穴建物と考えられる。壁の内側に浅い周壁溝が巡る。時期は出土遺物から見て、須恵器出現以前と考えられる。層位的にみてもSK2302よりも1層下からの検出である。

SK2302

SK2302は、1辺2m以上、深さ0.5mを測る方形の竪穴建物と考えられる。壁の内側に浅い周壁溝がめぐる。この遺構からは須恵器が出土しており、5世紀代と考えられる。

その他の地区でもピット等を検出しているが、建物等は確認できていない。第2遺構面は古墳時代中期（5世紀代）の遺構面と考えられる。

第3遺構面

第3遺構面では、調査範囲のうち南西側のA・D・F区でのみ遺構を確認している。

SB3101

A区で検出したSB3101は、1辺2m以上、深さ0.5mを測る竪穴建物である。壁の内側に浅い周壁溝がめぐる。竪穴建物の床面の中央付近には浅い段落ちが確認されており、ベッド状遺構を伴う竪穴建物と考えられる。竪穴建物の床面からは小型丸底壺が3点出土しており、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

その他の地区でもピット等を検出しているが、建物等は確認できなかった。

なお、A区の第3遺構面において、浅い落ち込み状の堆積を確認しており、堆積土の中にはわずかながら縄文時代晩期の土器が含まれていた。

3.まとめ

今回の調査では、竪穴建物3棟の他

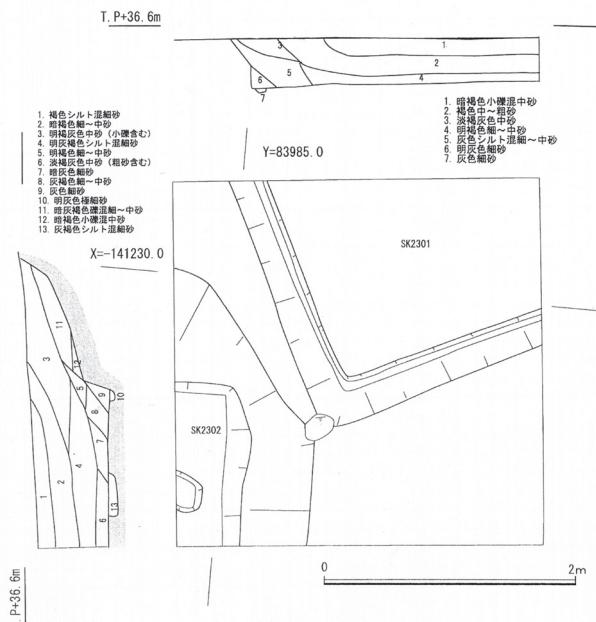


fig.13 C-2区遺構平面図

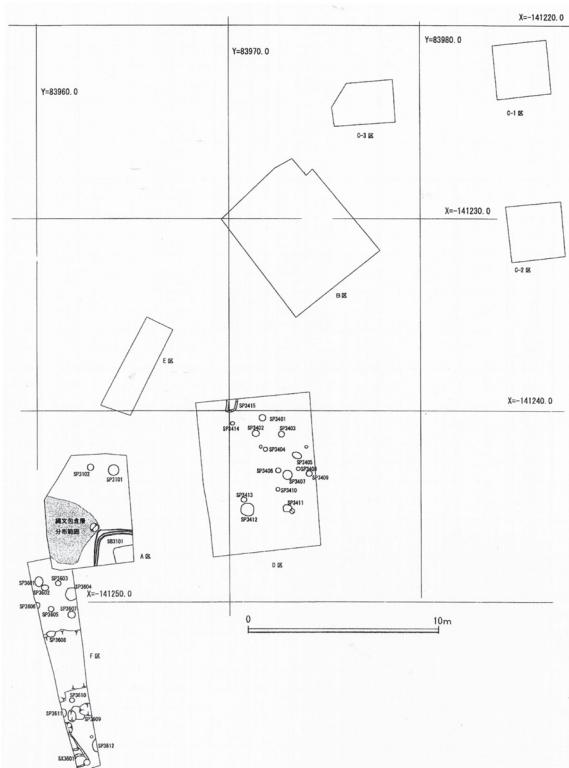


fig.14 第3遺構面平面図

多数のピット等を確認した。

調査地は段丘裾に当たることから、調査区のA・B・D区において南側に緩やかに南に下がる傾斜を確認しており、この傾斜が古墳時代前期から中期にかけての本来の緩やかな傾斜であったと考えられる。それが、古墳時代後期以降徐々に開墾・削平をうけ、中世段階にはほぼ現状に近い平坦な土地として、居住域ないしは耕作地として利用されるようになったと考えられる。

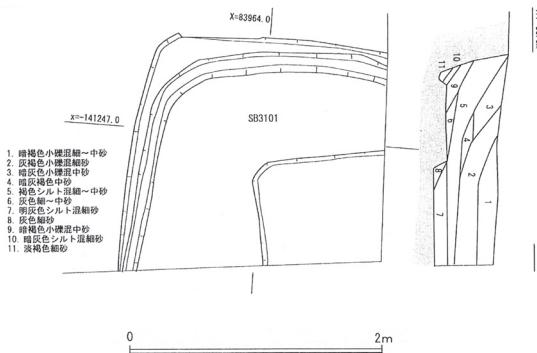


fig.15 A区 SB3101平面図

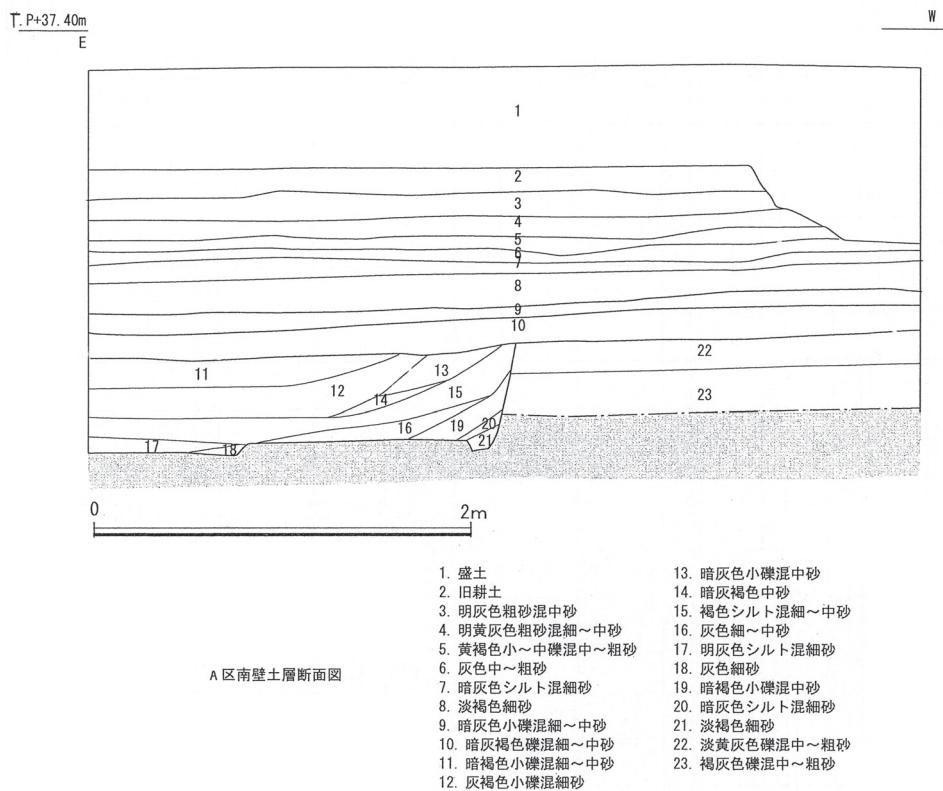


fig.16 A区南壁土層断面図

2. 小路大町遺跡 第5次調査

1. はじめに

当遺跡は昭和60年度の県営住宅建設に伴い確認された遺跡である。第1次調査では浜堤上から古墳時代後期から近世の水田遺構が検出された。第3次調査では縄文時代後期のピットと古墳時代後期以降の水田址を検出している。第4次調査では古墳時代後期の遺物を含む堤間湿地や、奈良時代の瓢箪が埋納された祭祀遺構、馬鍬等が出土した。

2. 調査の概要

今回の第5次調査では、中世～近世の耕土層と弥生時代の流路、堤間湿地などを検出した。調査地は市営の本山第三住宅耐震改修工事に伴うもので、1号館A・B棟、2号館A・B棟それぞれに添って計4か所の調査区を設定した (fig.18、I区～IV区)。

出土遺物に関しては未だ詳細な整理作業が行われておらず、各遺構及び木製品類の所属時期について、断定できないが、現地での所見に基づき以下記述を進める。

I区 (fig.18)

I区では中世～近世の耕土層と、時期不明のピット及び弥生時代の流路を検出した。弥生時代の自然流路からは前期の土器類が主に出土したが、中期、後期の土器類も少量含んでいる。

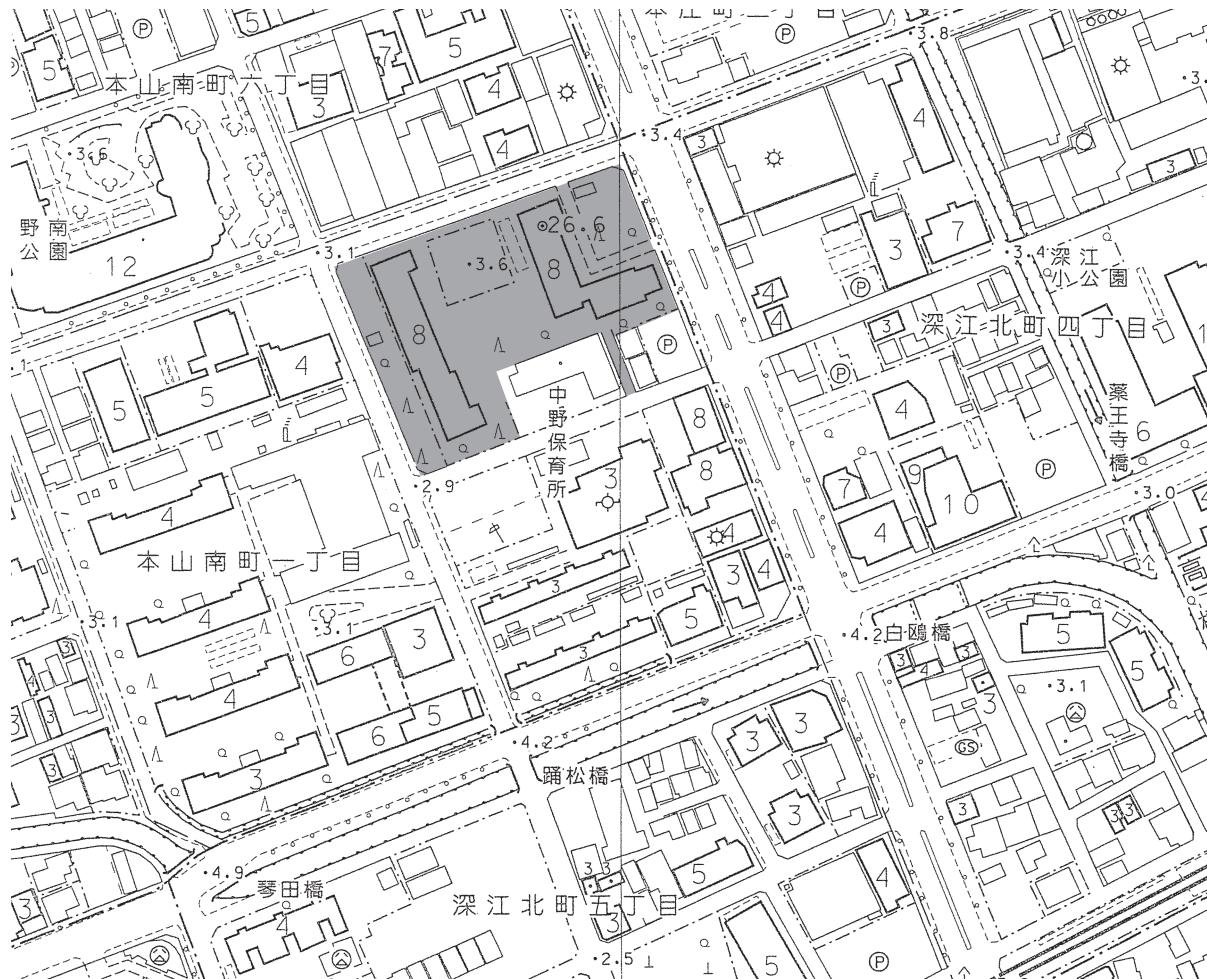


fig.17 調査地位置図 1:2,500

II区 (fig.19)

SD08

II区では中世～近世の耕土層と弥生時代前期の土坑状の落ち込みを、特に調査区西半では弥生時代前期の浜堤に伴う堤間湿地（SD08）を検出した。堤間湿地からは植物遺体とともに木製品が出土した。木製品は板材も含まれるが、柄が着装された状態の鍬が出土したことが特記される。

鍬は鍬身長約29cm、幅約7cmの「狭鍬」で、柄は現存長約0.7mを測る。身と柄の角度は約70°で「打ち鍬」に属す。隆起（舟形突起）は鍬身との境界が明確で、かつ上下対称形（平面形は紡錘形）の所謂「A1型」で、耕作者からみて裏側になるよう柄が装着されている。柄の断面形は橢円形で幅約4cm、厚さ1.5～2cmである。

SK02

土坑状の落ち込み（SK02）は層位的にはこの堤間湿地より古く、土器類はヘラ沈線1～3条の弥生時代前期古段階と共に新段階の多条沈線のものも認められる。落ち込み内の埋土はラミナ状となっており、自然流路の一部が検出されたものと考えられる。

鍬が出土した堤間湿地出土の土器類も整理作業が完了していない段階なので断定はできないが、この落ち込みの様相とほぼ一致するものと考えられる。

なお鍬を含む木製品類は発泡ウレタンで補強し取り上げている。

III区 (fig.18)

III区では弥生時代の遺構面直上まで現在の搅乱があり、中世～近世の耕土層は削平されていた。調査区南半で弥生時代前期の自然流路を検出し、土器類と共に少量の石器類が出土した。

IV区 (fig.20)

IV区では中世～近世の耕土層と弥生時代前期の自然流路、調査区南半で弥生時代前期の砂堆に伴う堤間湿地を検出した。堤間湿地は時期及び堆積状況などII区のそれと似るが、II区との距離が約50m離れており同一のものか断定はできない。堤間湿地からは植物遺体と共に鍬を含む木製品類や板材、棒状品等が出土した。土器類はII区のそれと同様、前期古段階～新段階のものが混在するようである。

鍬は残存長24cm、同幅12cmでII区出土鍬と同形態の隆起（舟形突起）が見られる。ただし隆起部は鍬身に対し垂直方向ではなく、傾いて作り出

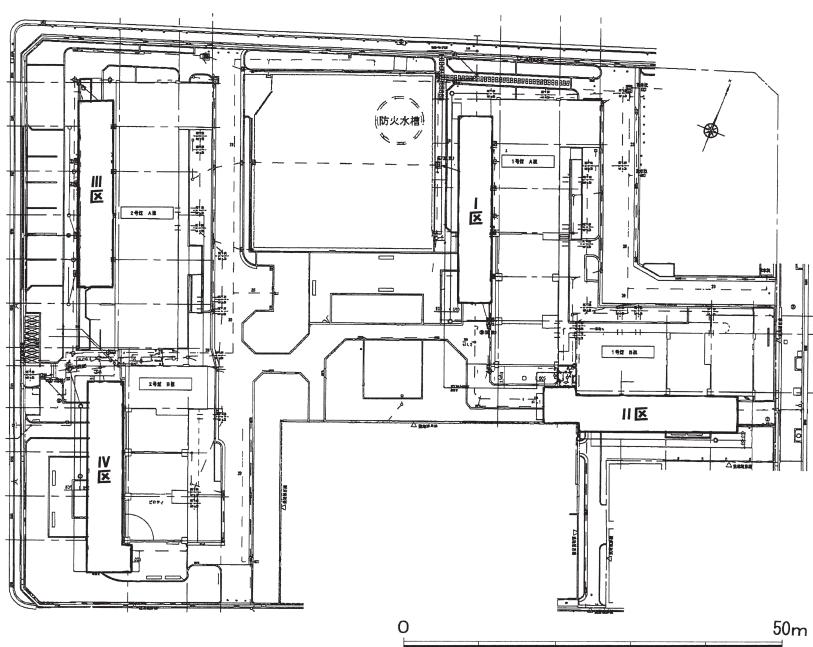


fig.18 調査区位置図

されており、通常の鍬の使用方法とは異なることも考えられる。

その他の木製品の内、大型のものには裏面に長方形の低い脚を持つ容器状のものがある。残存長約38cm、同幅約13cmを測る。中央部で割れており、復元幅は約26cmとなる。平面形は橢円形で中央部がわずかに窪む。裏面中央部には削り込みがみられる。

3. まとめ

今回の調査では、II区出土の弥生時代前期の木製鍬が特に注目される。当遺跡の西北に

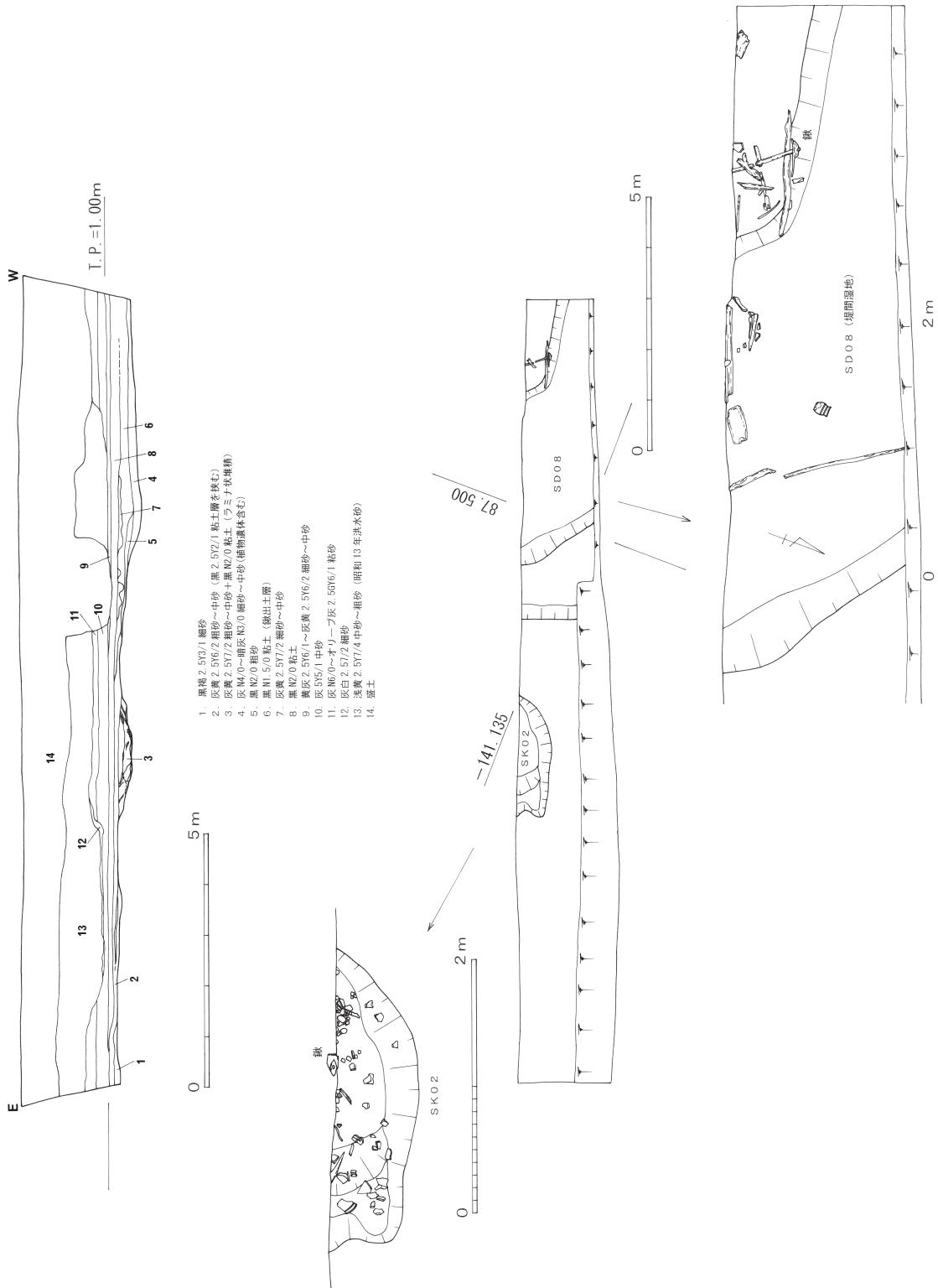


fig.19 II区平面・西壁土層断面図

所在する本山遺跡では平成7年度に弥生時代前期古段階の流路から斧柄、臼などと共に鋤、鍬、泥除け等の木製農耕具が出土しているが、柄が着装した状態のものは未検出であり、小路大町遺跡出土の鍬は市域でも稀有な例である。

既述のとおり共伴遺物に関しては現時点で整理作業が完了しておらず、不確定ではあるが、弥生時代前期中頃～後半にかけての時期に属すことは確実である。

また、IV区でも堤間湿地から弥生時代前期土器とともに、鍬を含む木製品や獸齒、昆虫の羽根等が出土した。

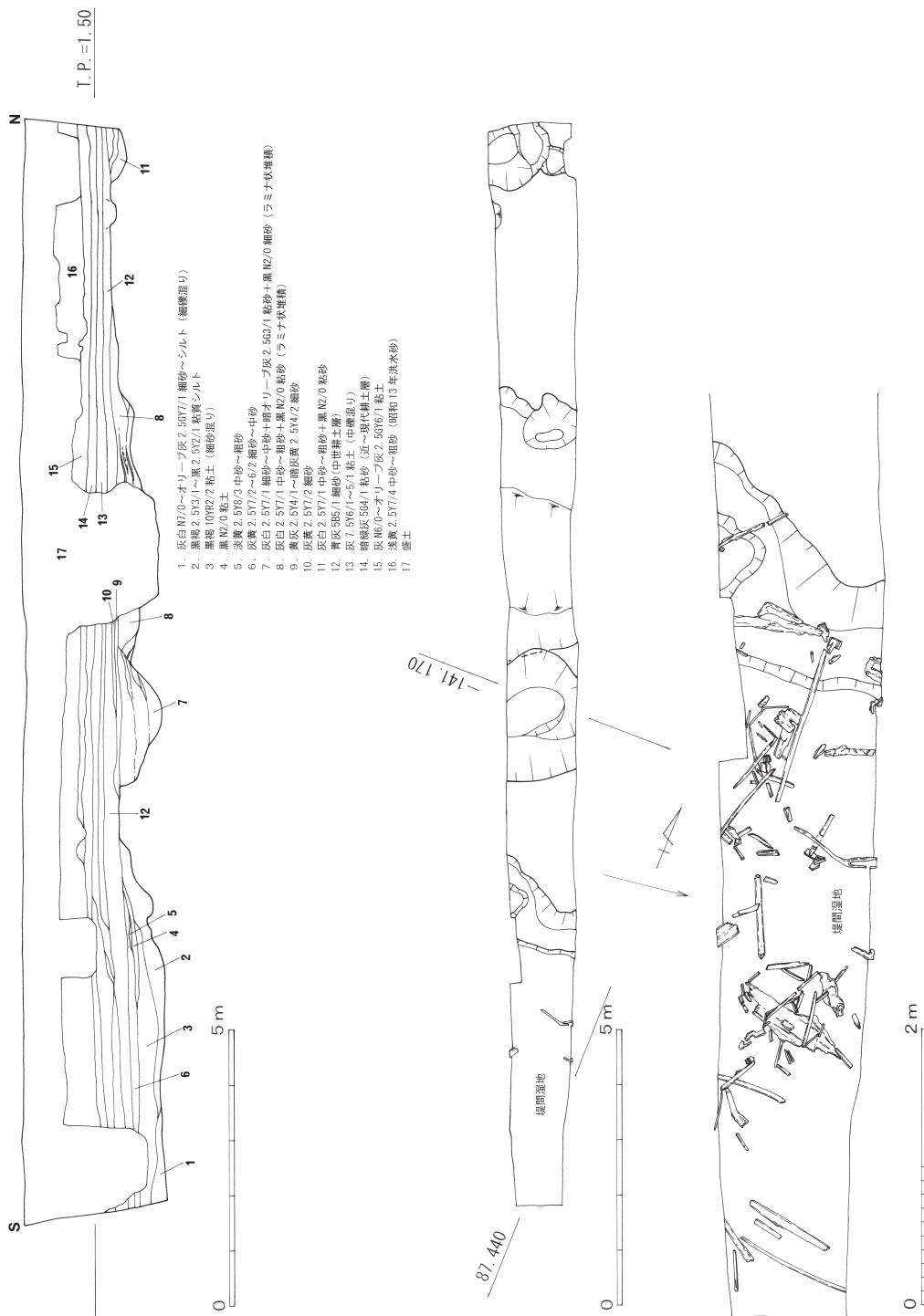
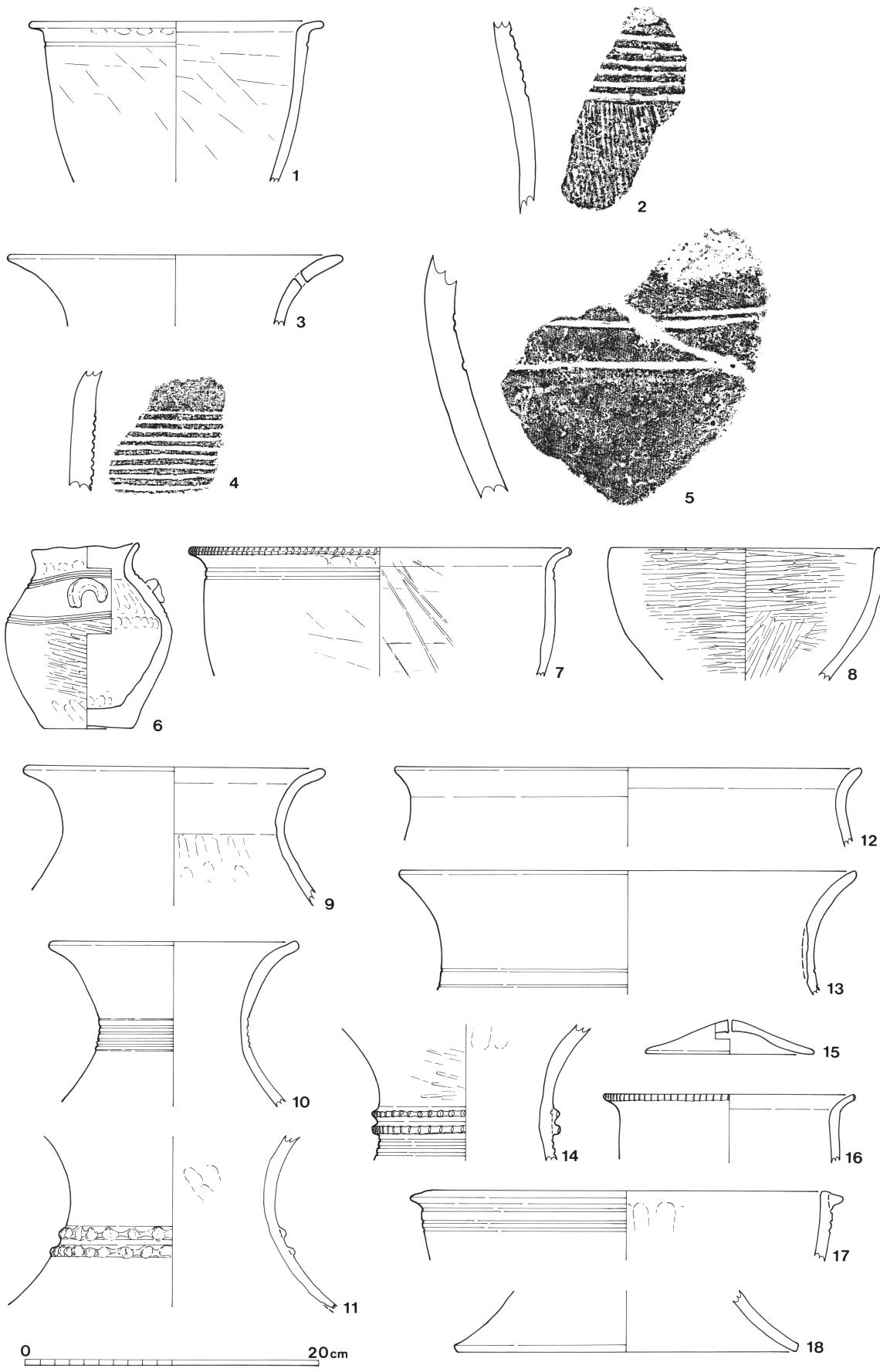
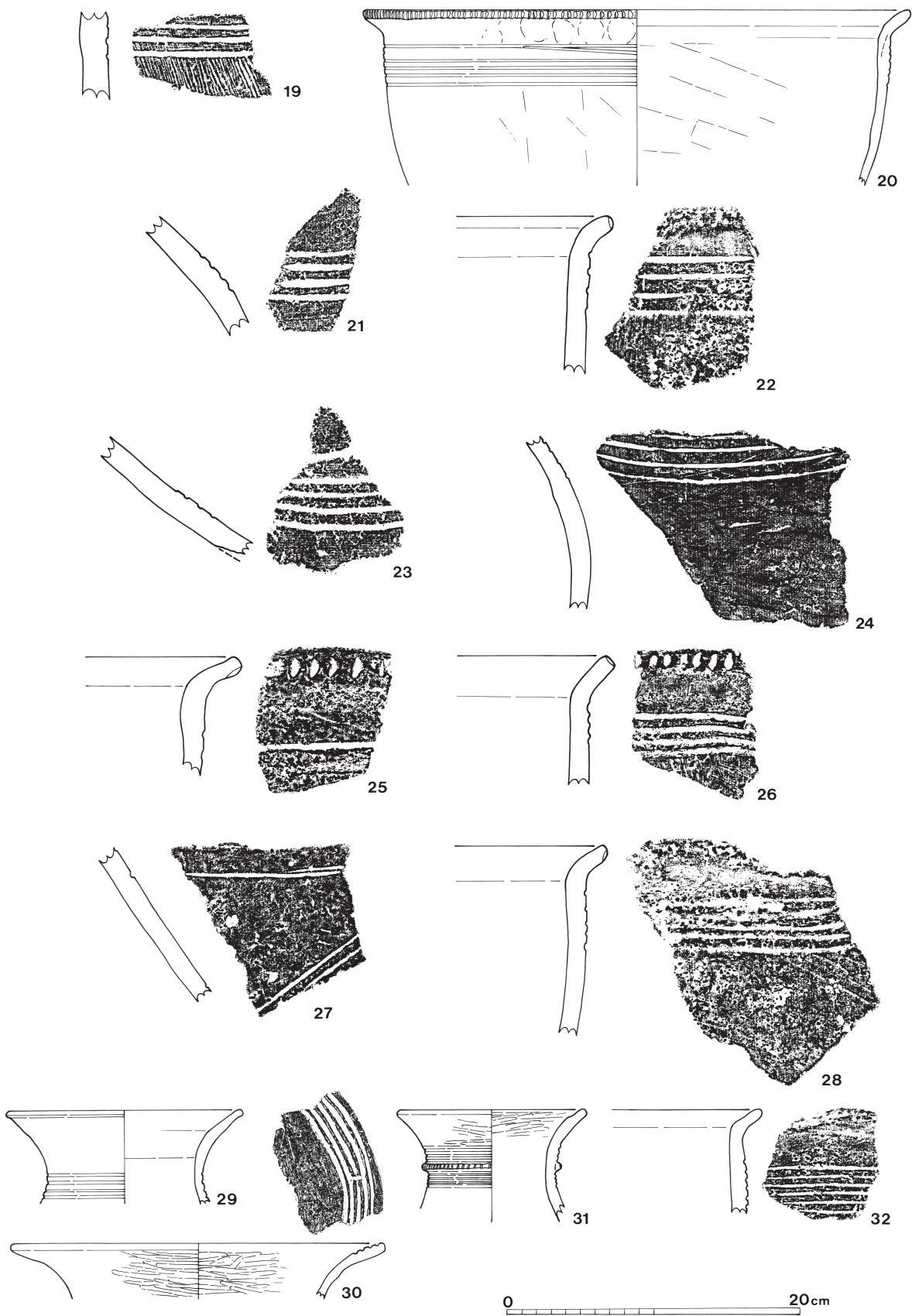


fig.20 IV区平面・南壁土層断面図



1・2: II区SK02、3~5: II区2層、6~8: II区6層(木製品出土層)、9~18: II区8層

fig.21 出土遺物実測図(1)



19 : IV区1層、20~22 : IV区3層（木製品出土層）、23~26 : IV区3~4層、27・28 : IV区4層、29~32 : IV区11層

fig.22 出土遺物実測図（2）

3. 深江北町遺跡 第16次調査

1. はじめに

深江北町遺跡は六甲山南麓の沿岸部、浜堤上に位置する。神戸市域でもその東端に位置し、芦屋市の津知遺跡と同一の遺跡と考えられる。これまでの調査で古墳時代初頭の円形周溝墓や飛鳥時代～平安時代の建物址などが調査されている。遺物としては承和の年号がある米の支給伝票木簡、また「(表面) 呪願師□朝臣□成 亀 知識 (裏面) 天平□年八月一日」、「(表面) □□ (屋力) 駅長等□□□ (裏面) 即走上□ (奉力)」、「賀美里戸主葦屋賀津羅□」、「遠方來 不亦樂乎人不知 而不懼 不亦君子 乎」などの木簡のほか、「驛」「大垣」「大垣官」「北」「三宅」「飯」「新夫」などの墨書土器さらに斎串、馬形・船形木製品、木錘、木皿、杓文字、曲物、櫛、下駄、墨壺や建築部材、土馬、袴帶金具などを検出している。これ以外にも古墳時代後期の祭祀場から多数の手捏ね土器、土製勾玉、同小玉、鏡形土製品、動物形土製品が出土している。

2. 調査の概要

個人住宅建設に伴う発掘調査で、住宅基礎により埋蔵文化財に影響がおよぶ範囲について調査を実施した（B区画-1tre・C区画-2tre）。

調査は、表土等を重機で掘削し、それ以下を人力によって発掘調査を行った。調査終了後重機により転圧を行なながら、埋め戻し旧状に復した。

基本層序は、現代盛土、旧耕土、旧床土等（1～8層）が地表面より1m弱あり、この下層1m弱が礫や砂で構成される洪水層となる（9～14・16層）。この洪水層下は、黒灰色砂泥（15層）となる（標高約3.1m）。1tre東端の一部を下層の状況を知るために断割り調査を行った。地表面より約2mは、黒灰色砂泥で遺物等は検出されなかった。

4～8層からは、少量の土師器、須恵器が出土した。9層からは、少量の土師器、須恵器とともに平瓦片1片が出土した。13層からは、少量の土師器、須恵器とともに埴輪片1片が出土した。遺物出土量は、14ℓコンテナに1箱である。

1 tre では洪水層下に、東に徐々に下がる遺構面を検出した。2 tre でも同様に洪水層下に、西北に高く東南に下がる遺構面を検出した。

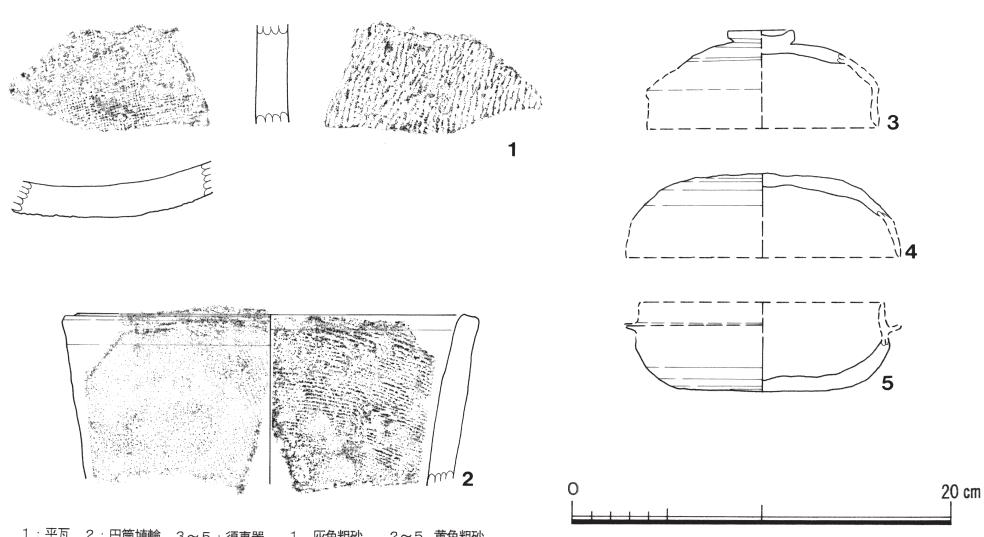


fig.23 調査地位置図 1:2,500

9層からの平瓦片1は、凹面は布目、凸面は縄目タタキが施される。全体に摩滅しており、端部は残っていない。13層からの2は円筒埴輪口縁部片である。3～5は、須恵器坏片である。3は高坏蓋である。4・5はそれぞれ坏蓋、坏身として図化した。

3.まとめ

今回の調査地は、第13次調査地の道路を挟んで南側の箇所である。第13次調査の内容から今回検出された遺構面は、第13次調査の古墳時代第3・4遺構面での西側から東側に下がる肩の継続する部分が、検出されたのではないかと考えられる。層位と出土遺物からも妥当であろうと判断される。



僅かであるが平瓦の出土は、周辺に存在する芦屋廃寺遺跡や葦屋驛家との関連性が考えられる。また埴輪の出土は、周辺に古墳の存在を窺わせる資料になるものと思われる。

fig.24 出土遺物実測図

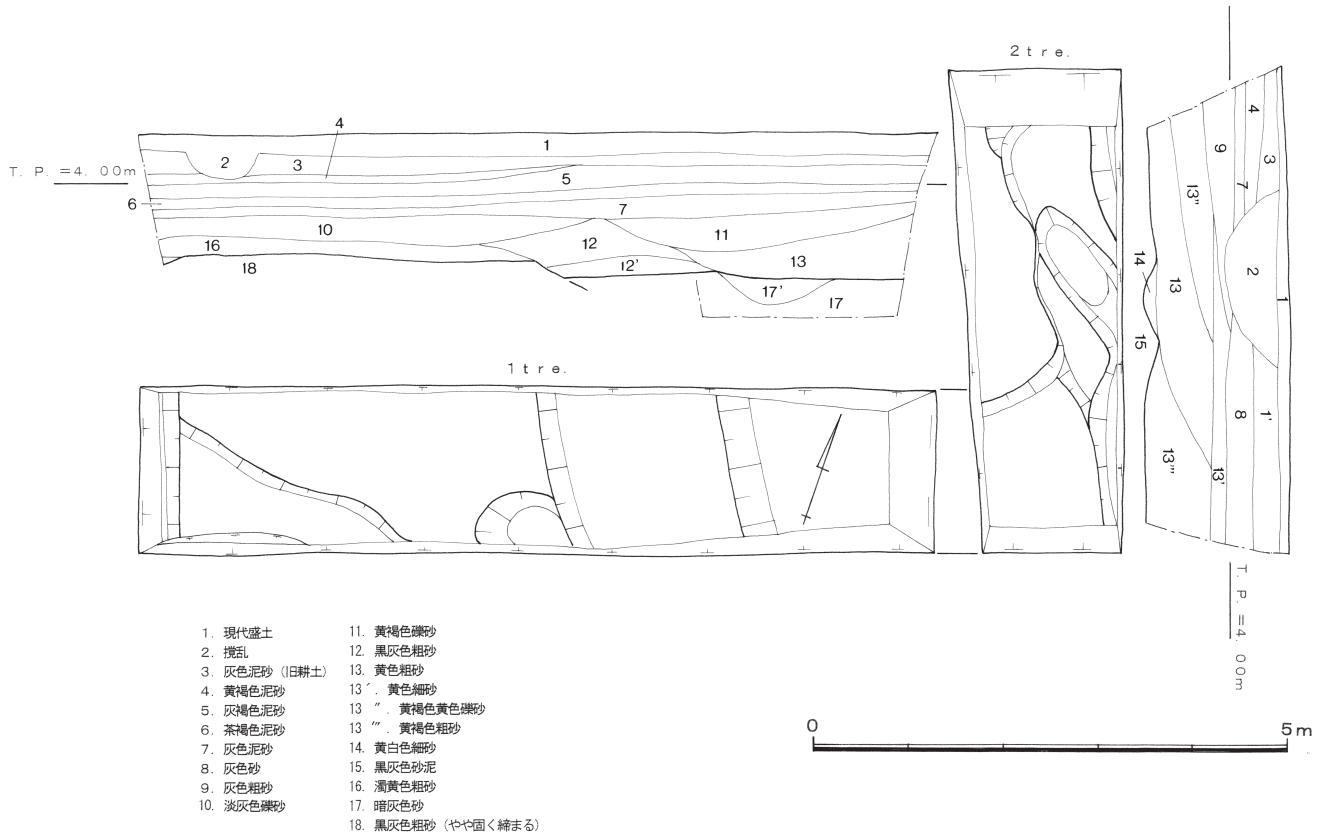


fig.25 調査区平面・土層断面図

4. 住吉宮町遺跡 第51次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川右岸に位置する東西800m、南北600mの範囲をもつ弥生時代から中世に亘る遺跡である。

現在まで50次におよぶ発掘調査が実施され、古墳時代後期に大小さまざまの古墳が多く築造され、これらがたび重なる洪水の土砂によって埋没したため良好な状態で遺存していることが知られている。

さらに弥生時代の集落や周溝墓、さらに奈良時代の掘立柱建物や井戸なども確認されている。

周辺には、南方約800mに現在はその姿を留めていないものの全長約80mの前方後円墳である東求女塚古墳が存在していた。

また西に隣接して、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である郡家遺跡が存在する。現在まで90次を超える調査が実施され、弥生時代の周溝墓や横穴式石室をもつ古墳、奈良時代の掘立柱建物群などが確認されており、北の段丘上にも岡本北遺跡、西岡本遺跡などが存在する。

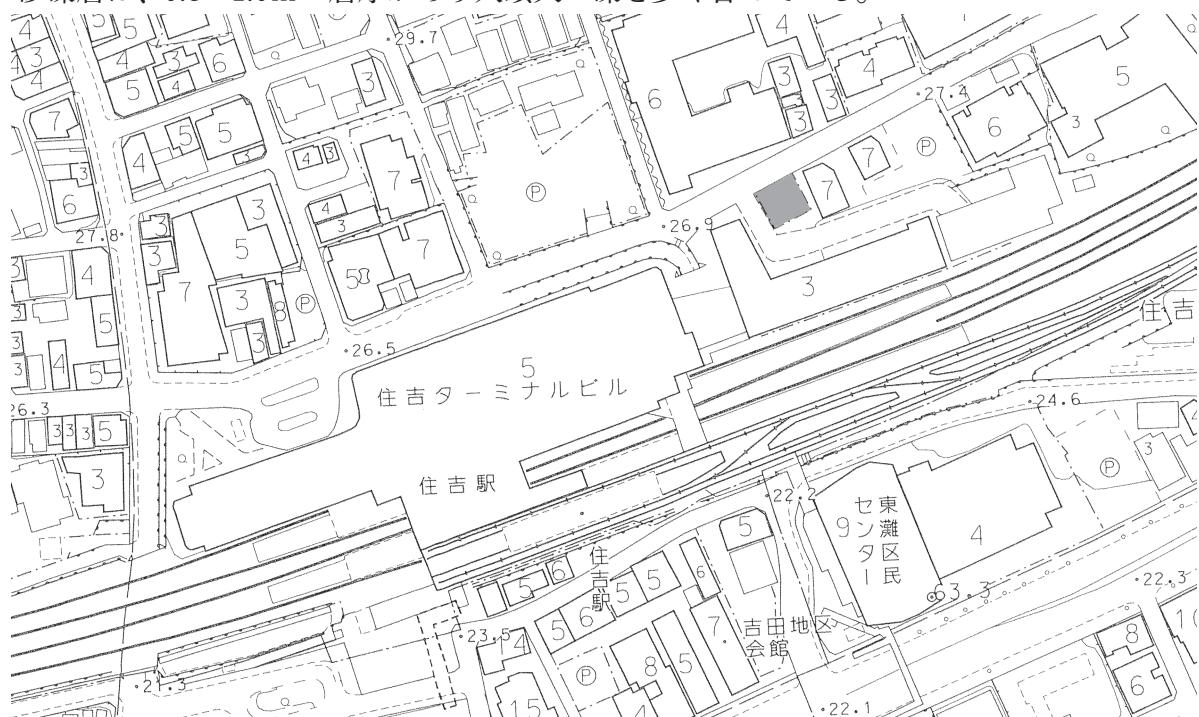
今回の調査地に関しても、隣接する第30次および第44次調査で古墳の存在を確認している。また、すぐ北西には古墳群の盟主墳で前方後円墳と考えられる坊ヶ塚古墳も存在していた。

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、工事によって埋蔵文化財に影響を及ぼすと考えられる敷地内の約60m²を対象として実施した。

基本層序

基本層序は、調査区全体に近現代の整地の盛土がみられ、その直下には昭和13（1938）年の阪神大水害に起因する淡褐黄色極細砂および黄灰色砂礫がみられる。このうち黄灰色砂礫層は、0.8~1.0mの層厚があり人頭大の礫を多く含んでいる。



第1遺構面

この洪水砂の下 T.P.24.5~24.0mには、旧表土と考えられる灰色砂質土があり、以下中世の遺物を含む旧耕土状の淡灰褐色砂質土、淡褐灰色砂質土が堆積し、比較的安定した明褐灰色砂質土となる。この明褐灰色砂質土を基盤として溝等の遺構を検出した。

第2遺構面

さらに下層には平安時代～古墳時代の遺物を比較的多く含む暗灰色シルトが堆積し淡褐灰色シルト、淡灰褐色シルトを挟んで古墳時代の基盤層である暗灰色粘質シルト～シルト砂へ達する。

この下層は淡褐色砂、褐黄色砂、褐黄色細砂などが約0.8m堆積し、縄文時代晩期の遺物を含む淡褐黄色砂質土となる。これより下層については、灰褐色砂礫、明褐黄色粗砂が堆積するが遺構・遺物は確認されなかった。

調査対象部分は、敷地内4ヶ所に分かれるため、調査順にそれぞれ1区～4区とした。

1区

3.0×3.0mの調査区である。表土・盛土、洪水砂、旧表土、旧耕土（包含層）以下T.P.24.0mで中世の遺構面である明褐灰色砂質土を、T.P.23.7mで古墳時代の基盤層である暗灰色粘質シルトを確認したが、明確な遺構等は確認されなかった。

2区

幅3.0m、南北の長さ9mの調査区である。T.P.24.0~23.8mで中世の遺構面である明褐灰色砂質土を確認し、T.P.23.6~23.4mで古墳時代の基盤層である暗灰色粘質シルトを確認した。遺構等は確認されなかった。

地震痕跡

調査区の北端と中央部付近において地震による地すべり（土層のズレ）が確認された。

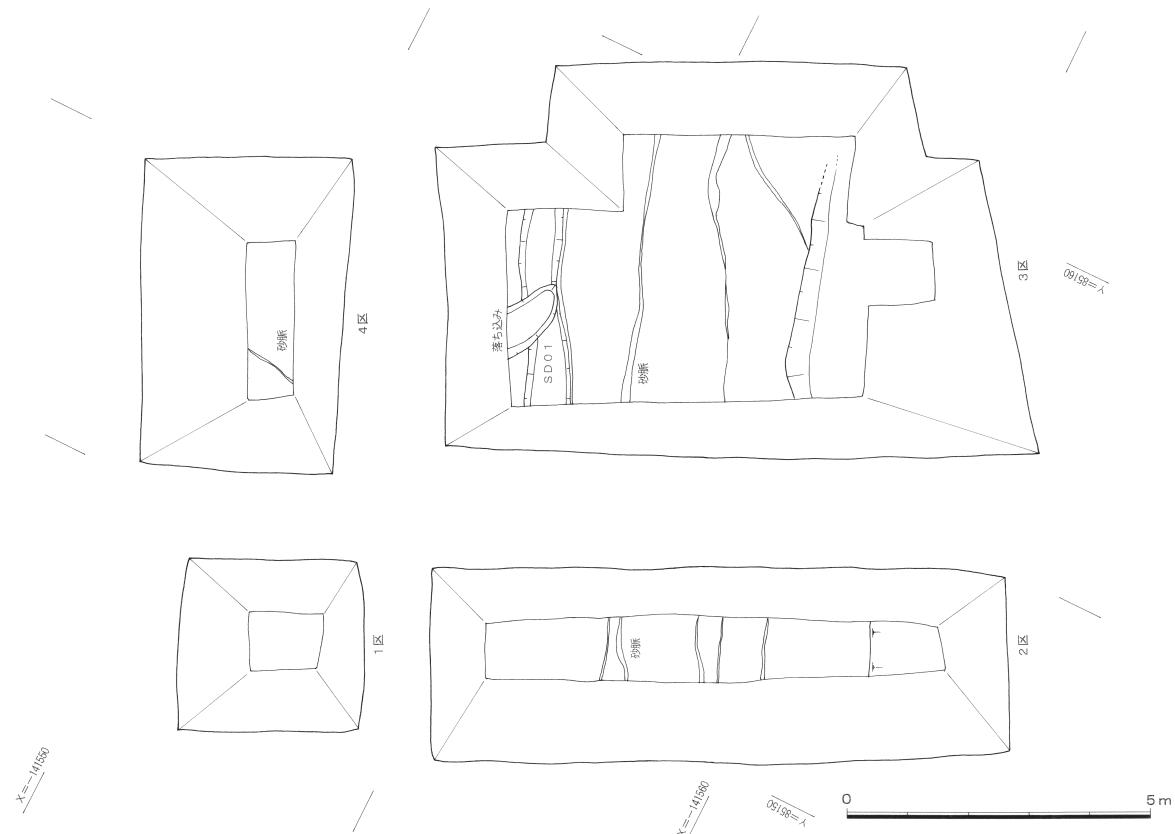


fig.27 第1遺構面平面図

この他にも噴砂とともに砂脈など地震の痕跡が多くみられた。

3区

第1遺構面

T.P.24.0～23.8mで中世の遺構面である明褐灰色砂質土を確認し、溝および不整形の落込みを検出した。

SD01

トレーナーの北端で検出された東西方向の溝で、幅40cm、深さ20cmを測る。中世～古墳時代の須恵器・土師器が出土した。

落ち込み1

SD01を切る幅0.7m、深さ10cmを測る不整形の遺構で、調査区外の北方に拡がる。

第2遺構面

T.P.23.6～23.1mで古墳時代の基盤層である暗灰色粘質シルトを確認したが、遺構は確認されなかった。また暗灰色粘質シルトは南にいくに従って砂質に変わり、希薄となる。

下層堆積

暗灰色粘質シルトの下には、遺物を含まない淡褐色砂、褐黄色砂、褐黄色細砂などを挟んで淡褐色砂質土の堆積が認められる。調査区中央部のこの層より縄文時代晩期と考えられる遺物がまとまって出土した。

地震痕跡

2区と同様、調査区の北端と中央部付近において地震による地すべり（土層のズレ）を確認した。この他にも、噴砂などに伴う地震の痕跡が多くみられた。

4区

調査地の北東端に設定した南北3.0m、東西5.0mの調査区でT.P.24.1mで中世の遺構面

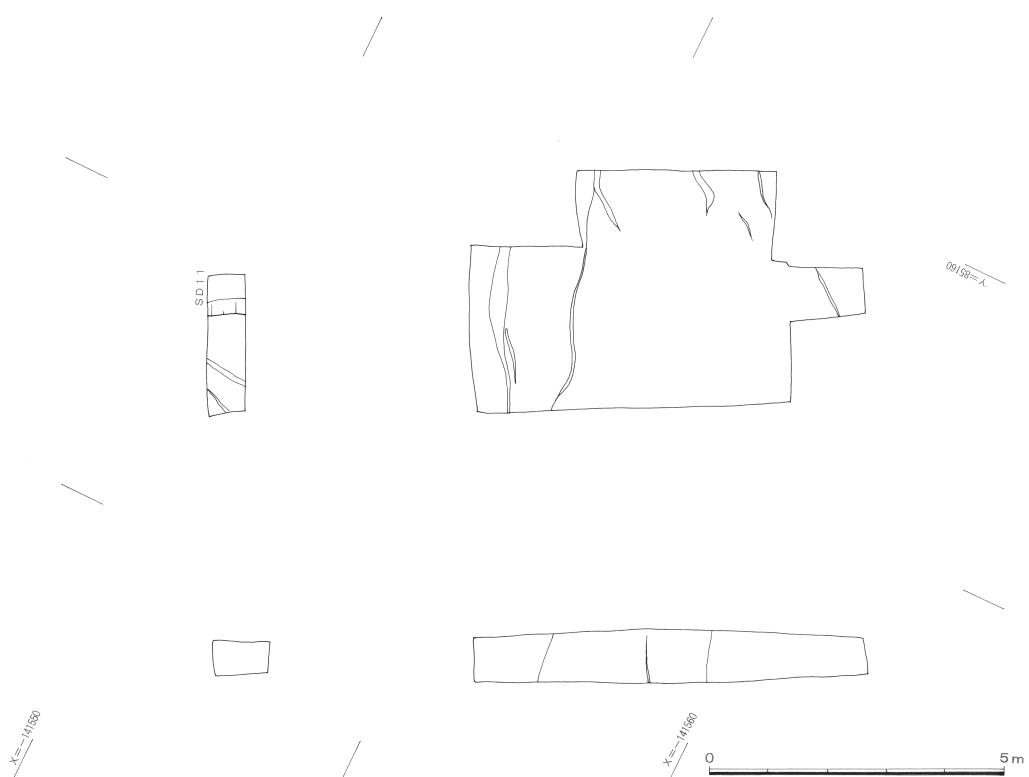


fig.28 第2遺構面平面図

である明褐灰色砂質土を確認した。

第2遺構面

T.P.23.6～23.8mで古墳時代の基盤層である暗灰色粘質シルトを確認し、溝状の遺構を検出した。

SD11

調査区の東端で西側の肩部のみが検出された南北方向の溝と考えられる。幅0.7m以上、深さ20～25cmを測る。

地震痕跡

調査区の西寄りの部分において、地震の痕跡を確認した。

3.まとめ

今回の調査は限られた部分の調査であったものの、縄文時代晚期～中世にかけての遺物や遺構を確認することができた。特に古墳時代の基盤層のさらに下層より縄文時代晚期と考えられる遺物を含む層が確認できたことは重要である。今回は狭い面積であったために、この時期の遺構面が存在するのか、流路状の堆積の一部であるか判断できなかったものの、近隣にこの時期の集落等が存在する可能性が高いと思われる。また調査区の各所において観察された地震の痕跡については、周辺の調査の成果などから慶長伏見地震（1596年）によるものと考えられる。本調査区においても中世の遺物包含層が地震痕跡による影響を受けるなど、時期的には齟齬をきたさない。

なお、古墳群については、調査区の南から南東に隣接する第30次調査地、東に隣接する第44次調査地において検出された古墳が、本調査区の方向に続く可能性があったが、今回の調査においては、古墳時代の基盤層となっている暗灰色粘質シルトの遺構面は認められたが、古墳は確認されなかった。

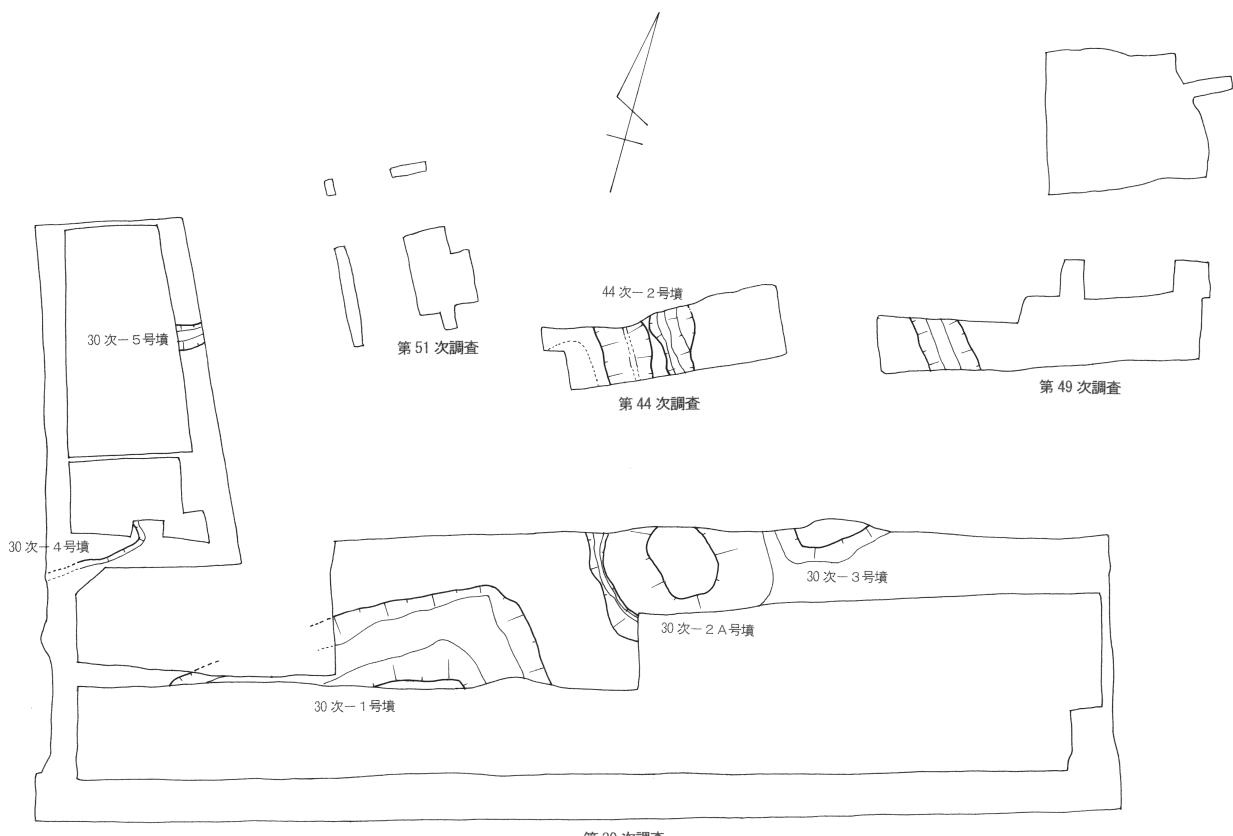


fig.29 周辺調査地検出古墳分布図

0 20m

5. 魚崎郷古酒蔵群 第4次調査

1. はじめに

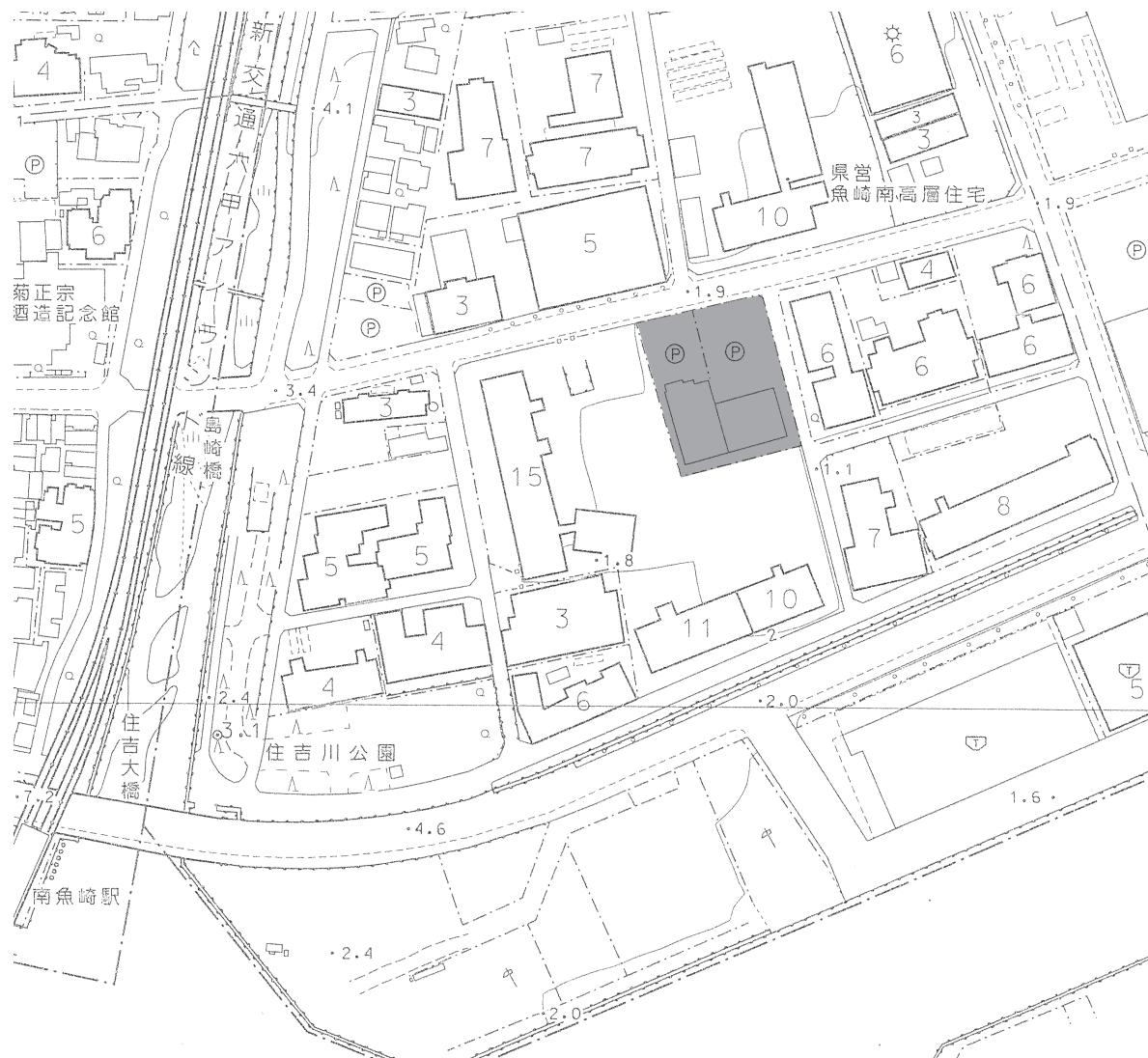
現在の西宮市から神戸市灘区にかけては、古くから酒造りの盛んな地域で、『灘五郷』と呼ばれ、全国的によく知られるところである。そのような『灘五郷』のひとつである「魚崎郷」は、住吉川河口付近に位置し、江戸時代後期より酒造りが行われていたことは、文献資料や過去の発掘調査などにより、周知されている。

2. 調査の概要

今回の調査地は、住吉川河口部東岸にあたり、旧汀線に近い海岸砂堆上に立地する。当地は「金露酒造」の所在地であったが、平成9年以降は跡地利用され、酒蔵の面影は残されていない。

調査は平成18年度に実施した試掘調査の結果に基づき、遺構が遺存する範囲内で、建設工事によって埋蔵文化財が影響を受ける箇所について実施した。その結果、酒造施設（酒蔵）の一部と考えられる石垣や建物内三和土などを確認した。

調査箇所は3ヶ所に分かれることから、1～3区と呼称して調査を実施した。



基本層序

先述のとおり跡地利用されていたこともあって、現地表面（アスファルト面）以下は、盛土が施されており、その下層の一部に酒造建物のコンクリート土間が存在し、コンクリート土間の直下の一部に三和土が遺存する。

各調査区の状況については後述するが、建物の基盤層やその他の遺構ベース層については、浜堤を形成する砂層とほぼ同質の砂層である。

1区

建物の北側面にあたる石垣を確認し、建物内の最上層はコンクリート土間である。このコンクリート土間の下層は、浜堤とほぼ同質の砂層である。

建物の北側面の外側は、三和土状の整地層が存在し、その下層は砂層である。

建物内の砂層や建物外側の整地層などから、瓦や陶磁器などが出土したが、江戸時代末期～大正時代のものが混在している。

元々の石垣を利用して、床面にコンクリート土間が施されたものと考えられるが、建物内の砂層や建物外側の整地層等の出土遺物から石垣築造（建物築造）の時期を特定することはできなかった。

2区

1区と同様にコンクリート土間を確認し、その下層は砂層となっていた。建物内で礎石を2ヶ所確認した。また、西端部では、コンクリート土間の直下に三和土が遺存していた。

調査区の中央北寄りで確認した礎石は、根石を含めて3段構造で、隙間を三和土や小石で補填している。最上段の柱の台座にあたる石は、丁寧に台形状に加工されている。

また、南側壁面内にて、石垣の一部を確認したが、裏込めの面が露見しているものと考えられる。この石垣は、建物の南側面か建物内の段差にあたるのかは不明である。

3区

搅乱箇所が多く、詳細を把握し難いが、石垣を4ヶ所（石垣1～4）確認し、切り合ひ等から時期差が認識できた。このうち石垣1は1区の石垣と同一建物の東側面の可能性が考えられる。

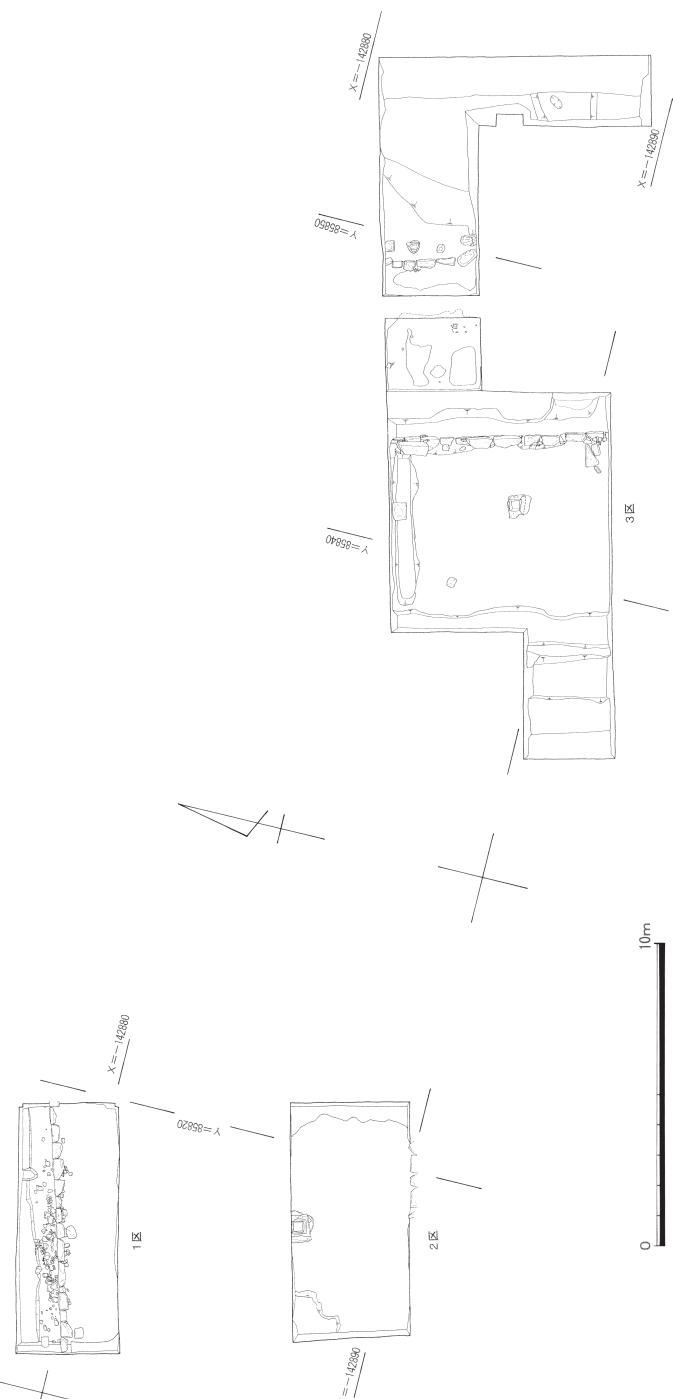


fig.31 調査区位置図

断片的ではあるが、1区や2区と同様にコンクリート土間が施されており、その直下の一部において、三和土を確認した。

調査区西側の建物内は、三和土状の整地土によって基盤が整備されており、そのほぼ中央部で礎石（2段構造・三和土で補填）を確認した。礎石の下段の石には墨書があり、「七十七」と判読できた。第3次調査においても、石垣に用いられている石に数字を記した事例がみられ、構築時に記された可能性が高い。

建物内の三和土や三和土状の整地層の下層（第2遺構面）で、小規模なピットが数ヶ所確認できた。石垣もしくは建物基盤築成時のものと推察される。出土遺物は三和土や基盤層、ピット等から検出したが、建物、石垣等の時期の特定には至らなかった。

3.まとめ

今回の調査においては、酒蔵の一部と考えられる石垣や建物礎石等を確認した。一方で、酒蔵に関する建物等やその図面等が全く現存しないことから、確認できた建物等の機能などの詳細は不明である。ただ付帯施設等が確認されなかったことや、敷地内の北側に位置することなどから、蔵（大蔵）の一部の可能性が高い。

当地に所在した「金露酒造」は、記録上では明治30年代より現地にて操業していたようである。

しかし魚崎郷においては江戸時代後期以降、盛んに酒造りが行われていた点や、調査において、江戸時代

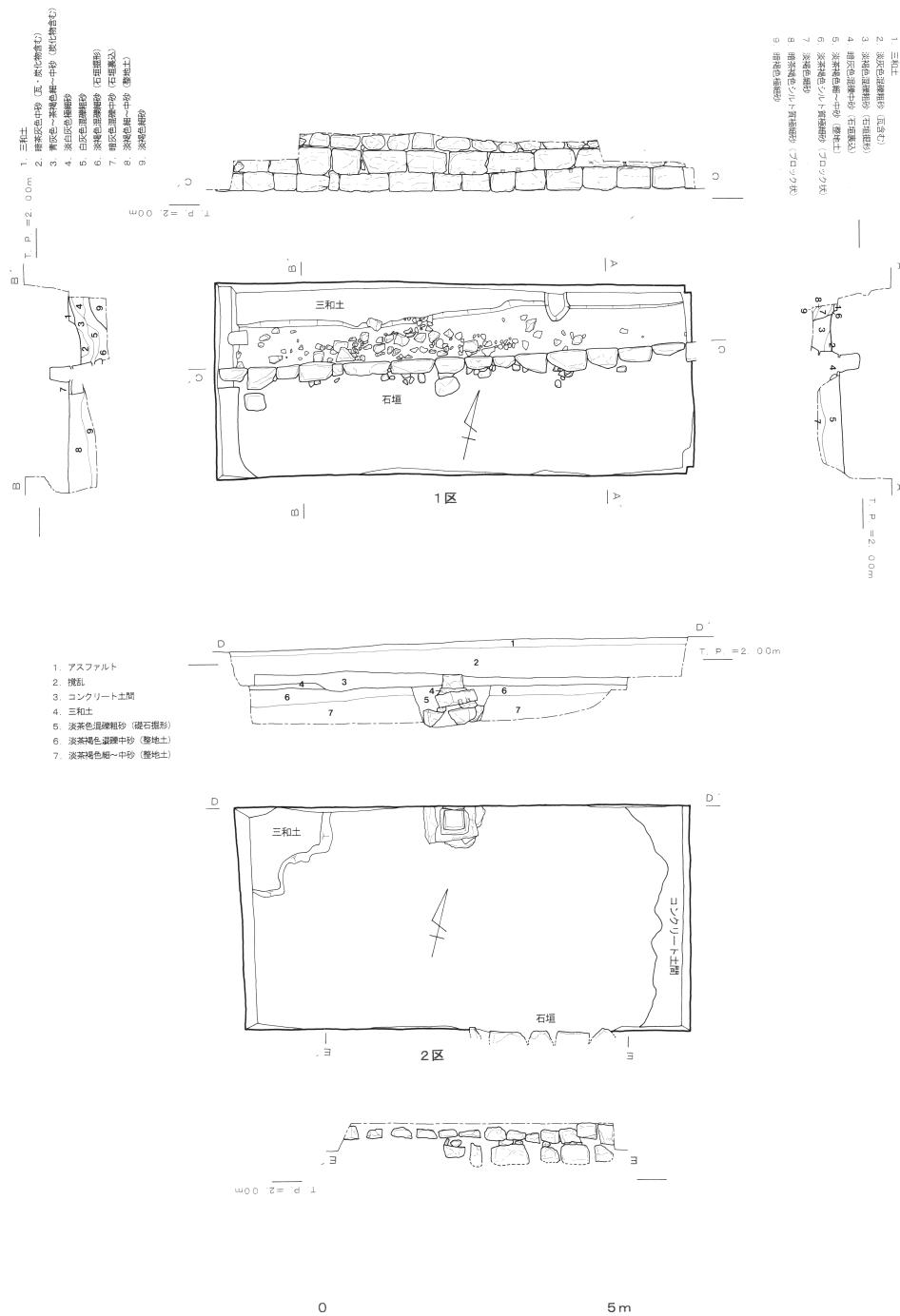


fig.32 1・2区平面・断面図

末期に属する遺物も確認できたことから、「金露酒造」以前の酒蔵の存在も否定できないが、今回の調査では明確にできなかった。

今回検出した石垣等から建物の変遷は確認できたが、それぞれの所属時期の確定には至らなかった。「金露酒造」は大正年間に2度にわたって生産量が増大しており、施設の拡充、拡張等が行われた可能性も考慮し、今後その時期的変遷を明らかにしていく必要がある。

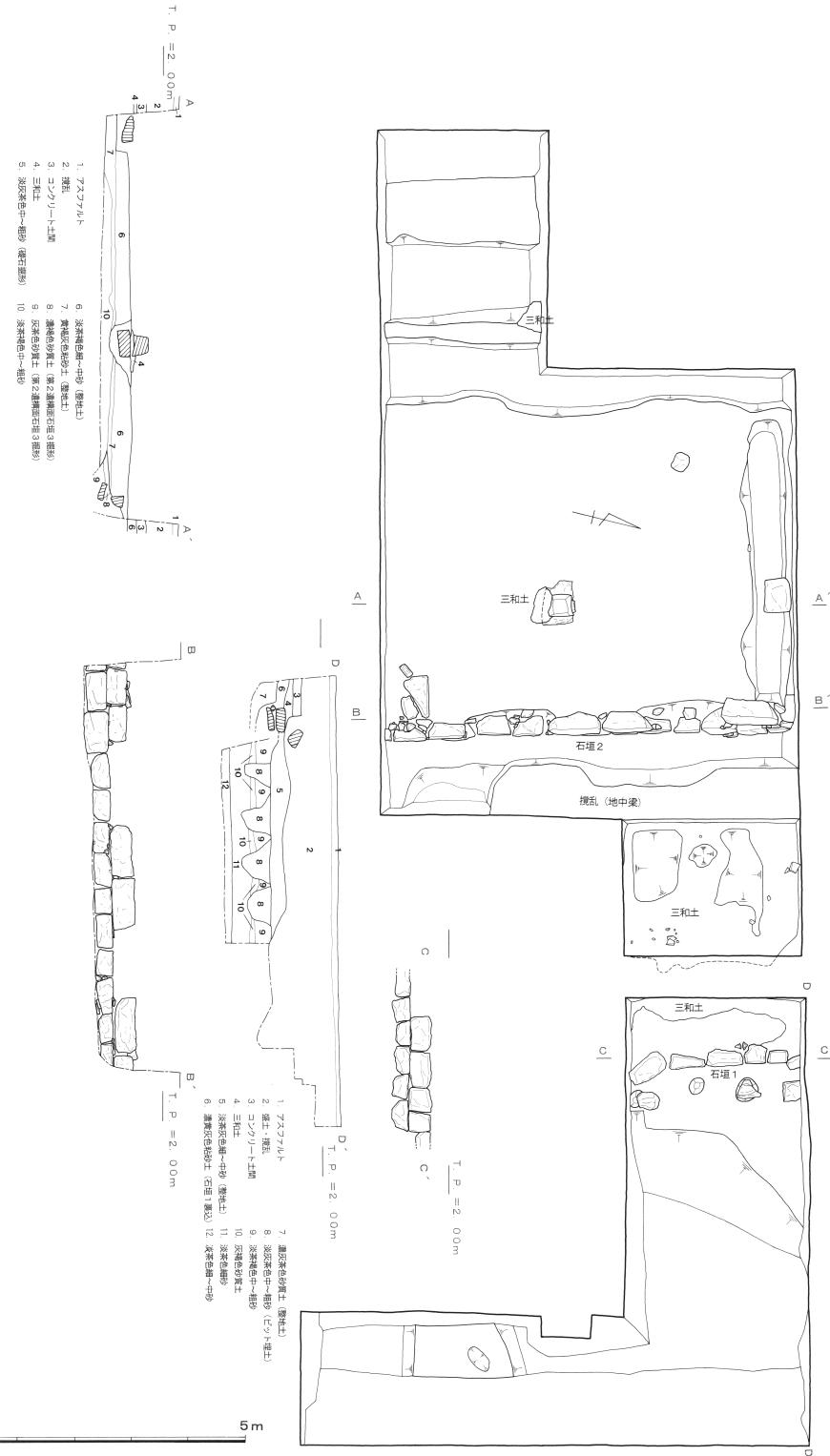


fig.33 3区平面・断面図

6. 西郷古酒蔵群 第7次調査

1. はじめに

灘の酒蔵地区は「兵庫」と並んで江戸時代から栄えた場所である。現代でも「灘五郷」と称され、西宮市今津・西宮、東灘区魚崎・御影および灘区西郷は酒造業者が多く集まる地域である。この灘が酒造の中心地となった江戸時代中期頃は、今津・上灘・下灘を「灘三郷」と称し、その後江戸時代末期に上灘郷が分裂し、東組（青木・魚崎・住吉）、中組（御影・石屋・東明・八幡）、西組（新在家・大石）に分かれた。これが今に言う「東の郷」、「中の郷」、「西の郷」に当たる。のち下郷（脇浜・走水・神戸・二つ茶屋）の酒造業は神戸の市街地化とともに消滅したが、上郷の三郷は伏見、伊丹、今津、西宮と共に日本の代表的な酒造地として周知されている。

2. 調査の概要

今回の調査地は「西の郷」に当たり、灘区新在家南町5丁目48番地に所在する。昭和30年頃の航空写真によれば当該地の南約150mには海浜が拡がり、海拔3m前後の砂堆上に東西棟の酒蔵2棟が敷地中央から北よりに並列して建てられ、南東側には煉瓦造りの煙突があった。これらの建物は阪神・淡路大震災により倒壊し、現状では当該地に建物はなく、沢の鶴株式会社の資材置き場として利用されてきた。

今回当該地に高齢者ケア付き集合住宅の建設設計画がおこり、これに伴う試掘・確認調査で、煉瓦積み釜場、石組溝、土間等を検出した。これに基づき開発地の東面道路拡張部の調査（1区）、集合住宅建設予定地の調査（2区）を実施して産業近代化遺産である酒造施設の記録保存を実施した。

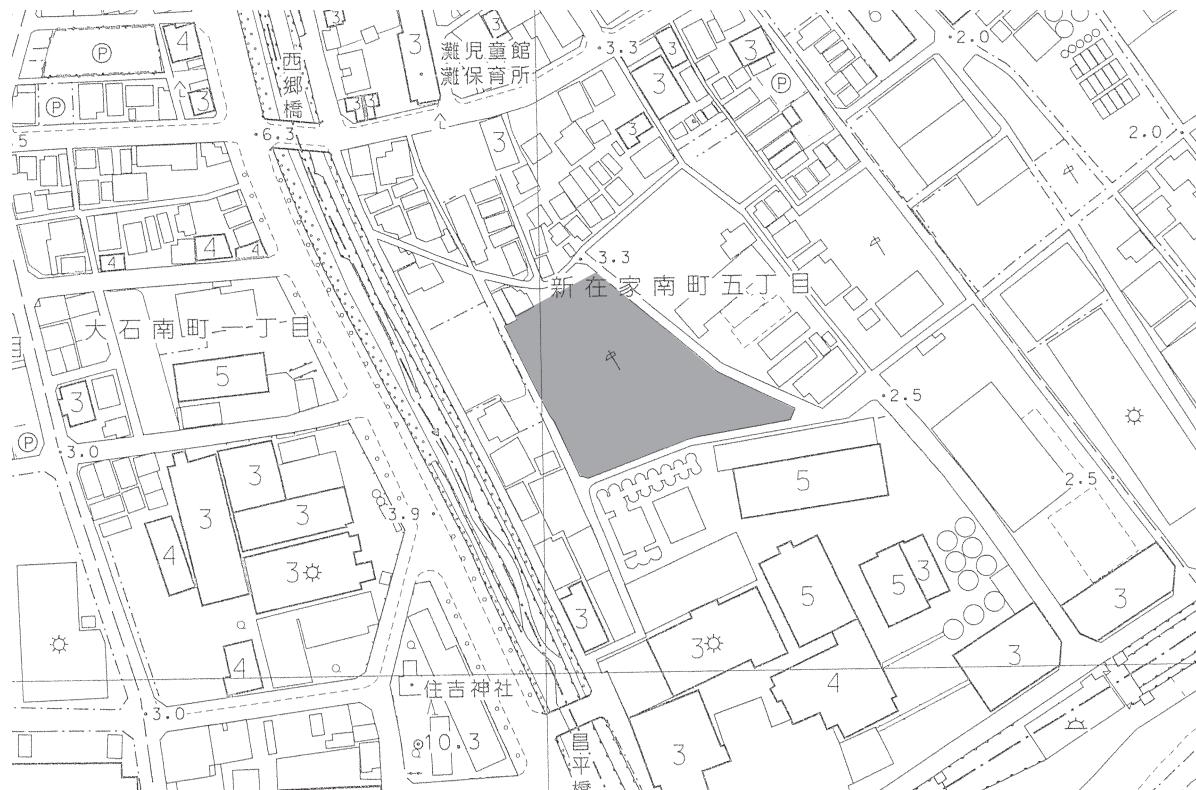


fig.34 調査地位置図 1:2,500

1区

調査地は開発予定地の北東隅部で、開発後は市道として共用される部分である。

基本層序は、アスファルト、コンクリート土間、碎石層（戦後～現代）、褐灰色混礫泥砂（戦災前後整地層）、黒灰色泥砂、灰色泥砂（戦災以前整地層）、黄褐色混礫泥砂（砂堆堆積層）である。

SD01

調査区北端部では、東西方向に流れる溝状遺構（SD01）を検出した。遺構東側は、道路側溝の掘形によって切られている。幅1m・深さ40cmで溝底に平瓦を敷き、立ち上がりの一部を石組している。ただし石組瓦敷は一部が残っていたものと思われる。瓦片、染付磁器などが出土した。遺構の時期は江戸時代末から明治にかけての頃と考えられる。

中央部分では、花崗岩の2列の東西方向の石列を検出した。北側は1石と石抜取痕跡2ヶ所と南側は大きさの異なる4石である。溝状遺構とすれば幅1m・深さ20cm程の規模となるが、石の並び方や断面から積極的に判断しがたい。遺構内の出土遺物はなかった。

南端部では、今述べた遺構面で特に遺構遺物は検出されなかった。調査区南端は試掘5tre.で特に遺構遺物は検出されなかった。このため南半部の2ヶ所について、部分的に下層の調査を行った。

北側での下層調査では浜堤堆積層で遺構遺物は検出されなかった。南側での下層調査では長径0.4～0.7m程の6個の石列が検出された。

石の上面は比較的揃っているが、検出状況から四方に連続する可能性は低い。出土遺物はなく遺構の性格・時期等は不明である。

2区

現地表面のアスファルトが敷かれた範囲は、阪神・淡路大震災による液状化によって隆起したモルタル面を再生碎石・アスファルトなどによって埋めて平坦な資材置き場としている。このアスファルトを除去し、調査区中央から北側でモルタル敷きを検出した。この上面で花崗岩製の柱座21ヶ所と、東西に敷地を画する花崗岩製延石・間地石列を北側で1条、南側で1条検出した。

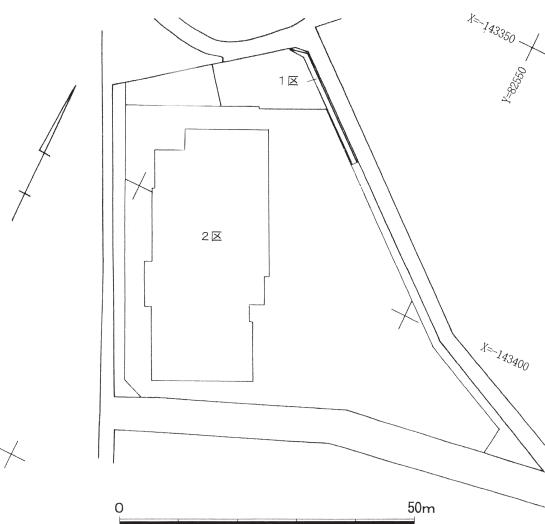


fig.35 調査区位置図

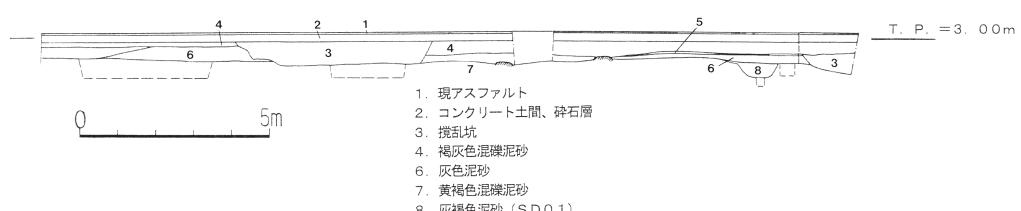
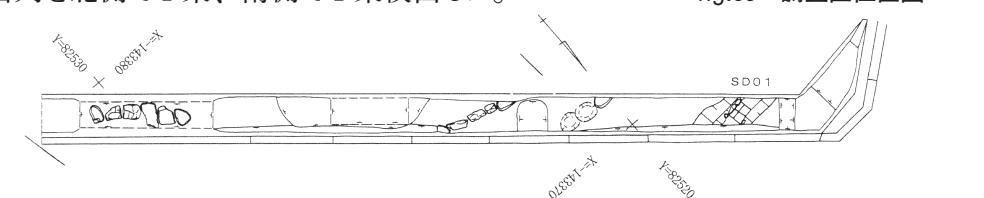


fig.36 1区平面・土層断面図

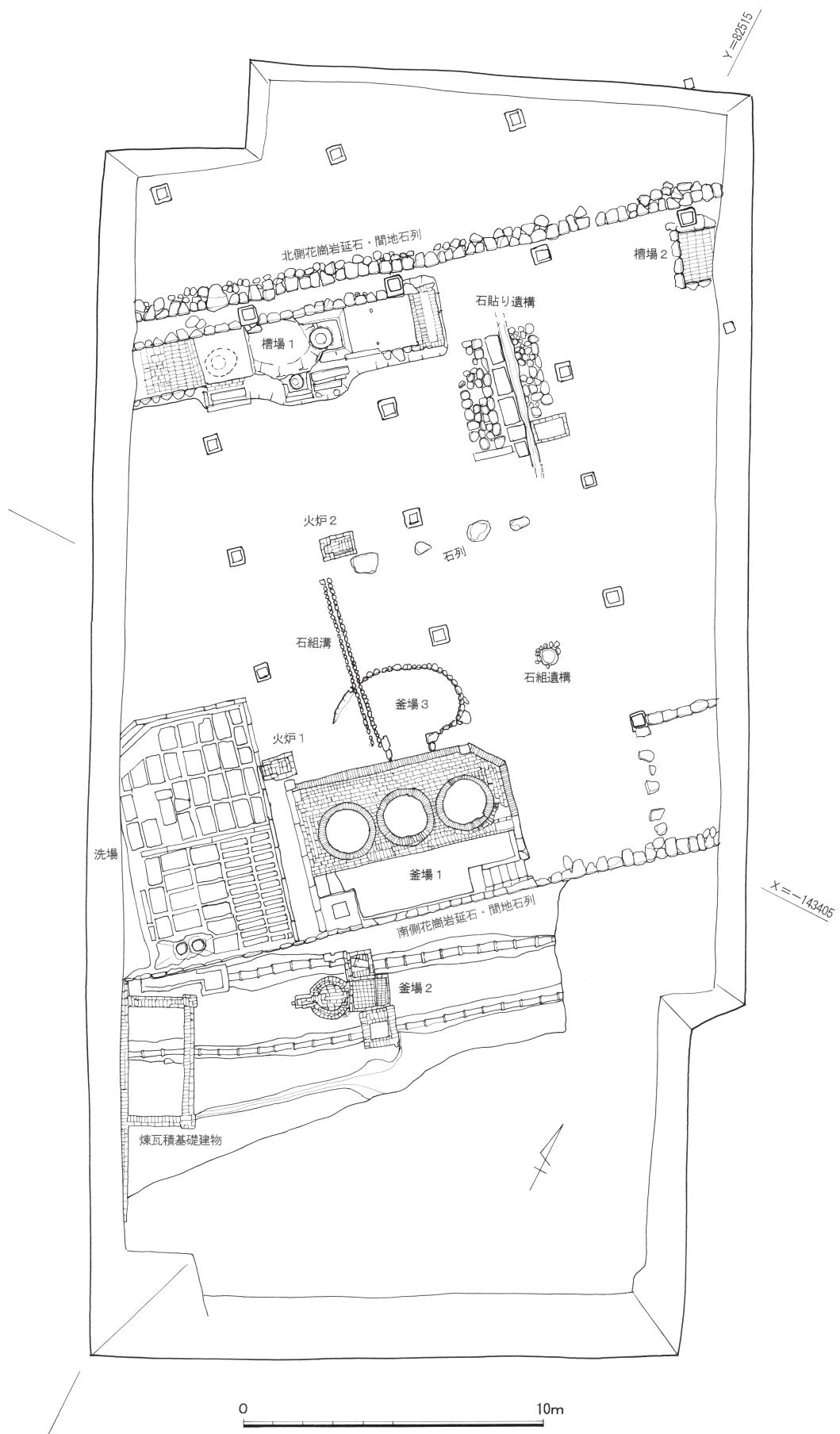


fig.37 2区遺構平面図

花崗岩延石の北に接して西側で洗い場1ヶ所と、その東側中央で釜場1を検出した。花崗岩製延石・間地石列の南側で氷冷庫跡を、コンクリート敷きの下で槽場1、その東側で槽場2を検出した。

また釜場と槽場の間のモルタルを除去し三和土面を検出した。北側花崗岩製延石・間地石列の南側の三和土面で石貼り遺構や火炉と考えられる3連の煉瓦積み構造物および石組溝を1条検出した（第1遺構面）。南側花崗岩製延石・間地石列の南側ではモルタル面は存在せず、黄茶褐色の三和土上面で釜場2と調査区西辺沿い煉瓦積み基礎の建物1棟を検出した（第2遺構面）。

さらに三和土を除去し、下の淡黄白色細砂の上面で釜場3および火炉、方形石組遺構の痕跡を検出した（第3遺構面）。

第1遺構面

釜場1

酒造遺構の南辺を画すると考えられる南側花崗岩製延石・間地石列の北側で、煉瓦造りの釜場を検出した。釜場の北半には東西に並列した3基の竈がある。釜場は東西7.3m、南北5.2mで、北東隅部を隅切りし、その北側と北西隅に一辺36cm角で長さ1.58mの石柱を立てて柱座としている。北東側の石柱南面には縦書きで「□□五尺」の朱書き文字が見られた。

竈は煉瓦で構築され、竈天井部の南東部の一部を除きほぼ完存する。煙道は東側竈の焚口から見て10時の方向、中央竈の11時の方向、西竈の1時の方向に設けられる。中央竈と西側竈の1.5m北側で煙道を合流させ、そこから釜場の北西～西辺沿いに幅0.6m、高さ0.5mの煙道を設け、釜場南西隅の煙突に接続している。釜場南半部は半地下式の石積みの「焼き場」で、東西7.3m、南北2.0m、深さ約1.6mの規模を有する。竈前面の壁はイギリス積で構築される。

焚口は幅0.7m、奥行き20cm、高さ0.95mで、壁面から奥まって作られている。上下2ヶ所の焚口を設け、上は燃料供給口、下は空気取り入れ口と灰の掻き出し口である。燃料供給口には3基とも鉄扉の受け金具板が残存し、特に西側竈の燃料供給口には鉄扉が残存していた。「焼き場」の床面は厚さ約5cmのモルタルが貼られていたが、断ち割り調査の結果、当初の床面は煉瓦敷きであることを確認した。「焼き場」の南東部小口側には7段の階段が設けられ、表面にはモルタルが貼られていた。

槽場1

調査区北西部、酒造遺構の北辺を画すると考えられる北側花崗岩製延石・間地石列に接して構築された地下式石積みの槽場で、内法の推定10.5m、南北1.6m、垂壺口までの深さは0.9mである。槽場の西側は調査区外となる。西側の大部分は戦後の氷冷庫の基礎により上部を損壊している可能性がある。槽場南辺の中央部寄りに花崗岩延石の階段2段を設ける。槽場中央には口径0.7m、器高1.1mの大型の備前焼甕を据え、口縁部の周囲はモルタルを貼りつけている。甕の西側の南壁沿いには口径40cm、器高0.6mのやや小型の備前焼甕を同様に据えている。2基の垂壺の両側は幅約0.5m、長さ2.5mの鉄筋コンクリート製の基礎台があり、圧搾機が据え付けられていたものと推定される。

また、西側鉄筋コンクリート製基礎台の下層から、胴径1m、器高推定1.3mの大型備前焼甕が出土し、圧搾機設営以前にも同所に槽場が存在したものと考えられる。

槽場2

北側花崗岩製延石・間地石列に南接して構築されている槽場で、内法で南北1.7m、東側は調査区外となるが東西の検出長1.2mを測る。2段の花崗岩製間地石を内側に面を揃えて構築し、底面は煉瓦敷きとなっている。

洗い場

釜場1の西側で検出した南北8.3m、東西4.8mの石敷きの洗い場である。花崗岩乃至凝灰質砂岩の延石によって2区画に分けている。厚さ約20cmで長辺1m、短辺約0.5mの板石と、長辺0.75m、短辺25cmのものを組み合わせている。石材間をモルタルで埋め、排水のため東側中央から北西隅と南西隅方向に傾斜して敷かれている。南西隅には直径45cm前後の花崗岩製

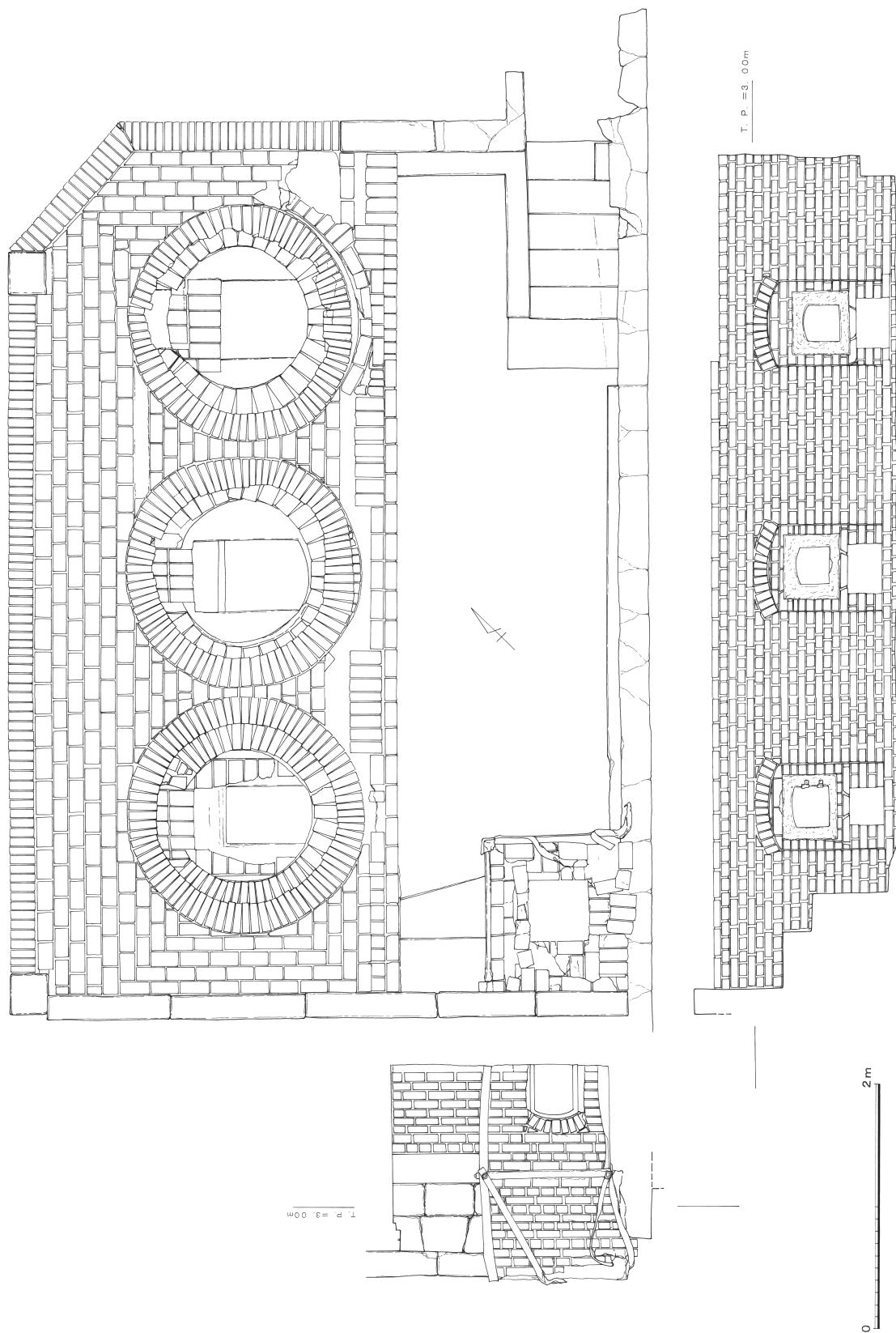


fig.38 釜場1平面・立面図

石臼 2 個が東西に並列して埋め込まれていた。石臼の周囲はモルタルによってロート状に整えられ、南側に洗い水や、割れ米などを落としたものと考えられる。南側花崗岩延石・間地石列に沿って土管による排水が行われたと考えられる。

火炉

火炉と考えられる煉瓦積み遺構は、明確なもので 3ヶ所検出した。東西 1.1m、南北 0.8m の矩形もしくは凸形をしていて、釜場 1 の北西に接する火炉 1 は深さ 0.7m、火炉 2・3 は 15cm で浅い。内部は炭・灰が埋まっている。煉瓦はモルタルを用いて積まれている。

石貼り遺構

槽場 1 の南東隅に接して検出した石貼り遺構である。モルタル土間の直下で検出した。中央部は南北に現代の下水道管の掘形によって損壊している。三和土面から 5cm 前後、東西 3m、南北 4m の方形に掘窪め、中央部に長辺 0.9m、短辺 0.5m 前後の花崗岩板石を並べ、その両側を扁平な川原石を敷き、石材間は漆喰を用いて固定している。

柱礎石

調査区北半部で計 20ヶ所の柱礎石を検出した。礎石は、三和土上面から約 30cm 堀り込み、コンクリートの上に扁平な川原石を据え、この川原石の上に厚さ 20cm 前後のコンクリート基礎とし、これに一辺約 39cm 花崗岩加工材を乗せてモルタルで接着させ、柱座としている。基本的には柱礎石は同工の施工であるが、建物の水平の保持のためコンクリートの厚みなどで調整する。三和土土間を使用した時期からモルタル土間までの期間、何度か柱の据替え、基礎替えが実施されたものと考えられる。

第 2 遺構面

釜場 2

釜場 1 の南側で検出した煉瓦造りの釜場である。釜場は煙出しの方向を西側に向けた竈と総煉瓦造りの炊き場によって構成される。竈の上部は削平されているが、釜の鍔を支える「もち」の部分は煉瓦 3 段を残し、釜尻を支える部分は径 0.8m で完存している。燃焼部は底部で煉瓦を階段状に積んで斜路を作り、燃焼部底面から約 80° 前後で長さ 40cm と短い煙道に取りつく。焚口は竈の東前面に 35cm 角でやや南寄りに 1ヶ所のみ設ける。

炊き場は内法で南北 0.9m、東西 1.1m、深さ 0.9m で、東側に高さ 25cm、幅 35cm の煉瓦貼りの台状部を造り付ける。炊き場の北側・南側は排水溝の煉瓦造り会所によって損壊している。

なお、釜場 2 の煉瓦積みは築造当時漆喰を用いて行っていたとみられるが、焚口上部の補修にあたってモルタルを用い、焚口部の支えにロストルに用いた金属板が使用されている。

煉瓦積み基礎建物

釜場 2 の西側で検出した煉瓦積み建物の基礎部である。三和土面から堀り込んで煉瓦の基礎を構築している。煉瓦はイギリス式に基礎部を含め隅部で 4 段以上を漆喰で積んでいる。東西 2.4m、南北 4.3m の建物基礎である。上部構造は不明であるが、内部は三和土土間であり、冰室等の施設であった可能性がある。なお、三和土土間に建物構築以後の排水管路が敷設されており、何度かの三和土土間の修築が繰り返され、長期に亘り建物が使用されたものと考えられる。

第 3 遺構面

釜場 3

三和土土間除去後の釜場 1 の北側、灰黄色細砂面で検出した。検出当初、川原石が弧を描くように並び、その南側は暗赤褐色粘性土及び灰白色砂で埋められていた。この覆土を

除去すると、ほぼ直立する楕円形の川原石積みの壁が、西側を欠失しているものの南北2.3m、東西推定3.8m、深さ1.2mの規模で検出された。

楕円形石積み部及び床面の砂は熱により赤変している。川原石積みの壁は東側では緩やかに傾斜している。南側の壁面は中央部東寄りで屈曲させ、釜場1の中央竈の下部に当たる部分で、川原石2段を積んだ方形部を作って南側に突出させている。方形部は内法で東西2.7m、南北2.1mを測る。方形部の床面には、中央部で炭灰を覆土とした船形楕円形の落ち込みが見られ、特に北側は船底形に深く掘り込まれ多量の炭・灰が残存していた。方形部の床は南側で浅く、北側の楕円石組部に向かって下がり、南側では石組が1段となる。

楕円形石組部の石材と床面が赤く被熱することや、方形部中央に灰炭の溜り坑を検出していることから、楕円形石組部は炉床で、南側方形部を灰の掻き出し部を備えた炊き場とする「釜場」と考えられる。

石組遺構

釜場3の東側で検出した灰黄細砂面から掘り込まれた一辺約0.6m、深さ30cmの掘形に川原石材によって構築する石組遺構1を検出した。石組遺構1の底面は白灰色砂となり、小規模な井戸もしくは排水坑と考えられる。

釜場3の西側、釜場1の構築基盤面底で検出した東西1.2m、南北1.7mの方形坑の内側に面を向け、石材1段を残す石組遺構2を検出した。上部は削平され深さ20cmを残すだけであり、明確ではないが、底面は白色砂であり、石組遺構1と同様小規模な井戸もしくは排水坑と考えられる。

3. まとめ

今回の西郷古酒蔵群における酒造遺構の調査では、釜場3ヶ所、槽場2ヶ所、火炉3ヶ所、石組遺構3ヶ所の遺構を検出した。出土した煉瓦、石材、瓦類および備前焼をはじめとする陶磁器については分類・検討等ができていない。このため検出した酒造り遺構の年代を明確にできていないが、釜場など検出遺構の層位・様態と当地に創業したと伝える株式会社「忠勇」の事績をたどりつつ予察を試み、今回検出した酒造遺構の歴史的位置を考えてみたい。

- ①第1遺構面では、モルタル敷き面上で検出した釜場1、槽場1・2、柱礎石がある。これらは本来モルタルを用いた煉瓦積み構造物や木造建物で、修理されつつ、昭和50年頃に沢の鶴株式会社の倉庫となるまで現存した遺構と考えられる。
 - ②同じく第1遺構面として三和土面で検出し、釜場1と構築方向が同位の北38°西を採る煉瓦積み火炉3基がある。酒造施設が更新される中で古い時期の①に付属した酒造施設と考えられる。
 - ③釜場1構築前に構築方向北30°西で、三和土土間に造営された釜場2と煉瓦基礎建物は当初漆喰を用いて煉瓦積みする構築法を取り、後に炊き場の上部煉瓦積みをモルタルで補修し、また、建物床下に②の時期に排水管を設けるなど、これらの酒造施設は②の時期まで存続したものと考えられる。
 - ④釜場1構築前に構築方位北42°西で造営された石組溝と石列は、三和土土間の施工時の施設である。石組溝は釜場3を埋設して施工されている。
 - ⑤②～④の三和土土間を除去した白灰色砂面で検出した石組によって釜場3、石組遺構1の酒造施設を構築している。この白灰色砂上面で18世紀前半の波佐見焼の破片が出土しており、こうした遺物がこれら酒造施設の時期の上限を示すと考えられる。
- 釜場1に関しては、煉瓦造日本酒醸造用炉としては残存状況が良好で、灘五郷地域における

る釜場型式の、竈からの煙道が反時計廻りに廻り、釜場左下隅に角形煙突を造り、焚口が竈前面から窪んで造られる煙道Ⅱ式、焚口Ⅱ式、角型煙突で西郷古酒蔵第4次調査釜場Ⅰと同様のものである。煉瓦の編年や当初の釜場関連の資料が不足しているものの、釜場1は明治時代末～大正時代初頭頃と推定される。釜場2は構造が型式的には類例が少ないが、構築当初は漆喰による煉瓦積みである事や、使用煉瓦の内補修以前の煉瓦がいわゆる「みかん色」をしていることなどから、明治時代20年代を中心とする時期を考えてもよいと見られる。

さて、昭和50年代初頭頃まで「忠勇乾西蔵」と呼称された当該地を所有した株式会社忠勇は、文献史料によれば享保5（1720）年の創業、明治29（1895）年には若林合名会社として設立する。明治44（1911）年には14,379石の酒造石高をあげ、大正12（1923）年には17,920石と増石、昭和初期になると主要銘柄「忠勇」が戦時体制の時勢、軍用酒とされ酒造石高も増加した。昭和19（1944）年には若林酒造株式会社を設立し、戦後は昭和23（1948）年若林酒類食品株式会社から昭和41（1966）年に忠勇株式会社となつたが、昭和51（1976）年に清酒の商標権および営業販売権を白鶴酒造株式会社に譲渡している。

以上酒造遺構の検出状況、釜場の型式の検討と株式会社忠勇の事績から見れば、「忠勇乾西蔵」であるかは定かではないが、釜場3の稼働から見て18世紀には酒造が始められ、若林合名会社設立期の明治時代中頃には三和土土間を造成し、煉瓦積の釜場2を備えた「忠勇乾西蔵」が形成されたと考えられる。「忠勇乾西蔵」の発展期は明治時代の終わりころから昭和時代前期であり、釜場1と槽場1・2を擁して所謂「寒造り」の酒、「秋晴れ」の酒を増産したと考えられる。

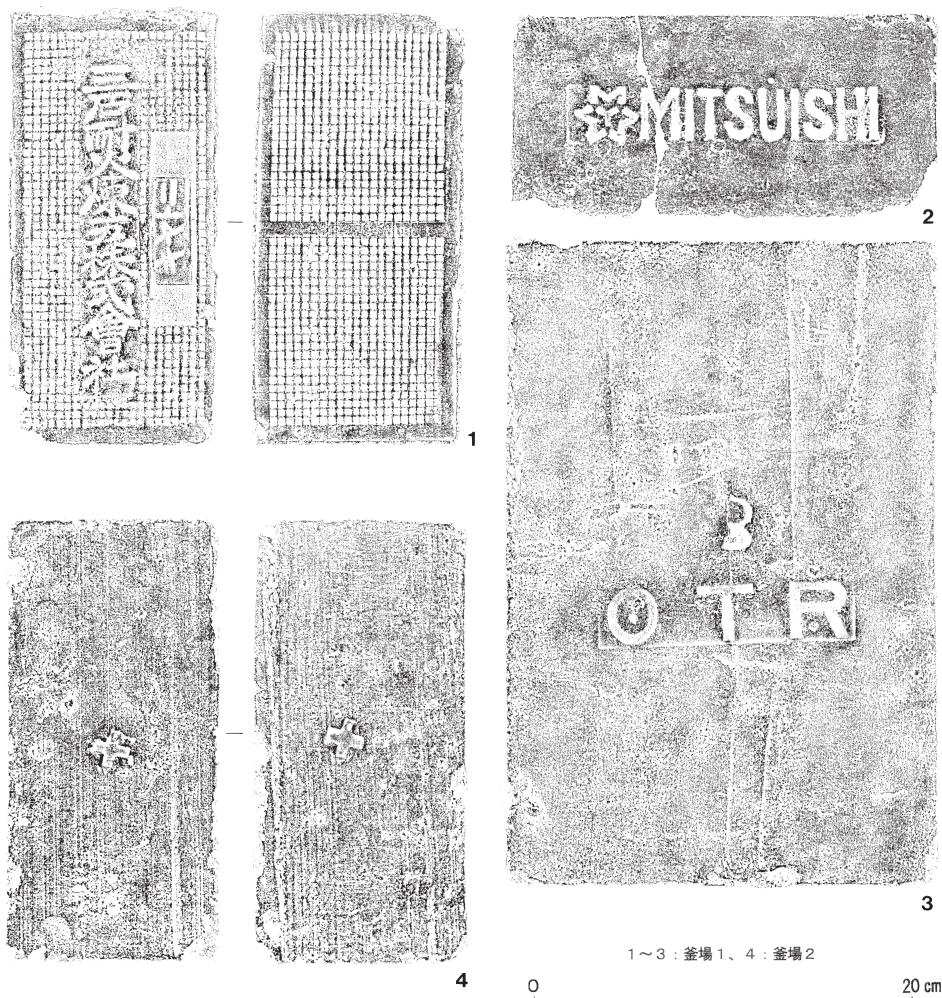


fig.39 釜場1・2出土煉瓦実測図

7. 篠原遺跡 第32次調査

1. はじめに

篠原遺跡が位置する六甲山系南麓は、小河川が形成した扇状地が発達する。当該調査地についても六甲川と榎谷川という小河川が合流する複合扇状地に立地している。これまでの調査で縄文時代晚期から中世に至る遺構・遺物が発見されている。特に縄文時代晚期の土器と共に、東北地方の大洞式土器や遮光器土偶の一部など近畿地方では、稀な遺物が出土しており注目されている。また、弥生時代後期の堅穴建物、中世の掘立柱建物なども発見されており、古い時代から連綿と人々が住み続けていた地域であることが判る。

2. 調査の概要

今回の調査は、グループホーム・個人住宅建設事業に伴う発掘調査であり、試掘調査によって埋蔵文化財が確認された北半分の調査を実施した。

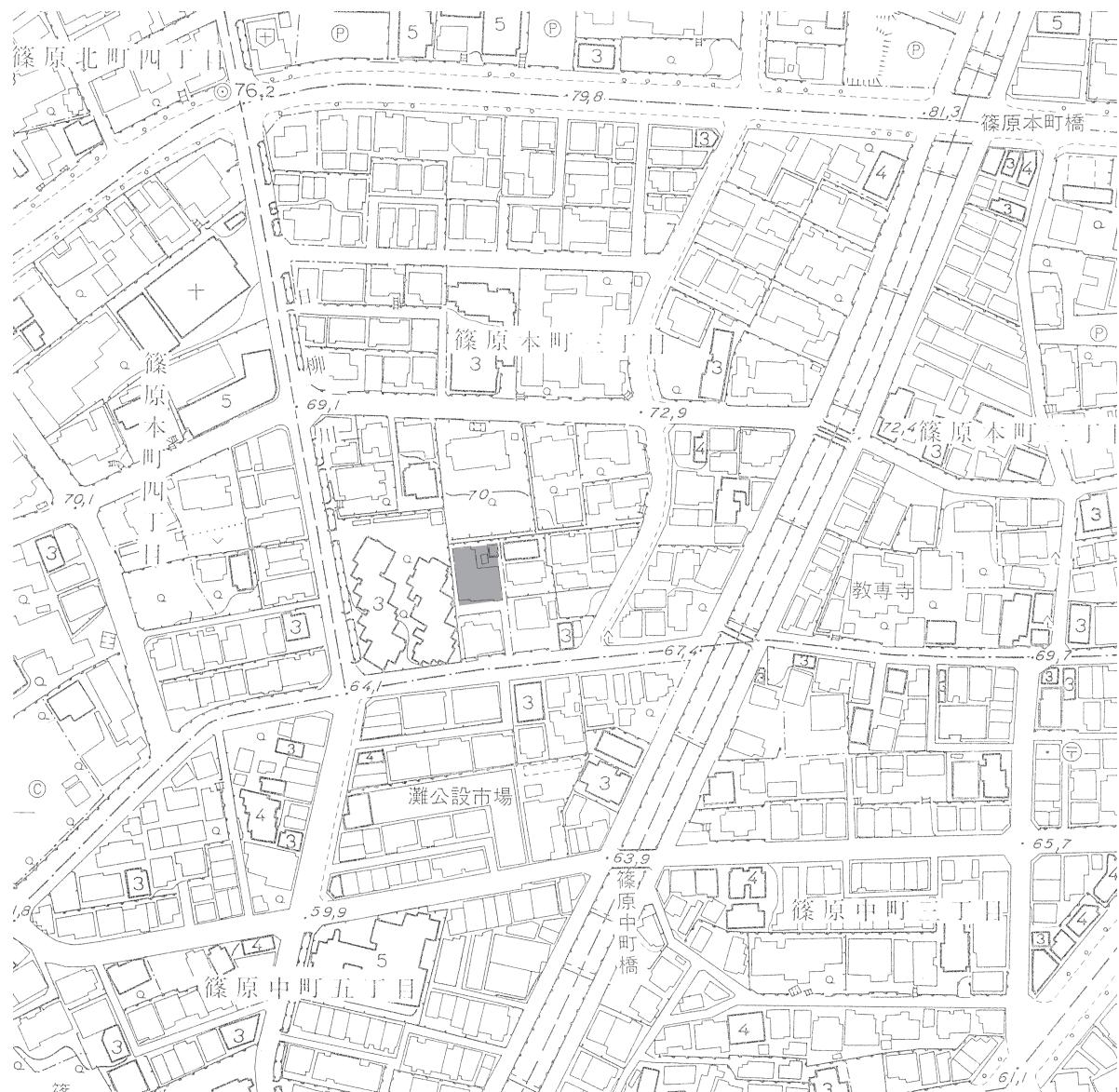


fig.40 調査地位置図 1:2,500

基本層序

当該地付近は六甲山南麓の小河川によって形成された扇状地に位置し、標高66m前後を測る。付近の地形は概ね北から南にかなりの傾斜で下がっている。近代以降の宅地造成によって、敷地の北側では本来の地形は残っておらず、遺構はほとんど確認できなかった。また、敷地の南側も近代の建物によって、遺構面は残っていなかった。よって遺構面は敷地の中央付近の僅かな部分に残存していた。特に竪穴建物が発見された部分では、調査区の西壁で近代の耕作土（黒灰色砂質土）、近世の耕作土（暗灰色砂質土）、中世の耕作土（黄灰褐色砂質土）が堆積しているのが確認された。その下層には褐色砂質土、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土が見られる。これらの層は、地山である黄（茶）灰褐色混礫中砂を掘り込んだ竪穴建物の中に堆積していた。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴建物1棟（SH01）、土坑1基（SK01）、弥生時代～中世のピット13基を確認した。

SH01

調査区の南西部で検出された竪穴建物で、南端部は建物基礎によって抉られ、西側の一部は調査範囲外に延びているため正確な平面形は不明であるが、検出状況から見て一辺7.8m程度の隅円方形と考えられる。竪穴の深さは0.8mを測り、神戸市内でこのように深い竪穴建物は極めて珍しい。

床面には縁回りが幅40～50cm、高さ約25cmの段を有するベッド状遺構を設けていた。この段上に弥生時代後期の小型の鉢が置かれたままの状態で出土した。また建物の東辺では、建物が造られる以前に流れた土石流の堆積層を掘り込んでいるため、ベッド状遺構が明瞭でない部分がある。

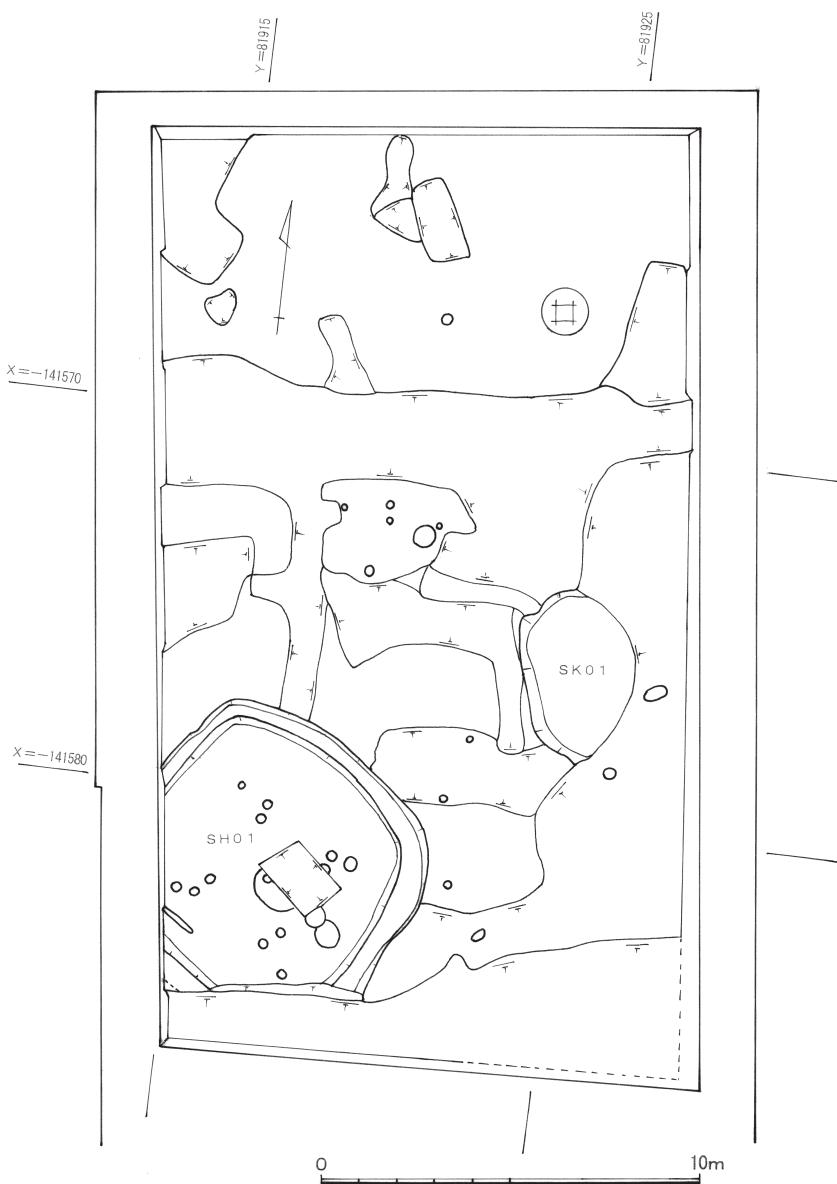


fig.41 遺構平面図

床面のほぼ中央には直径30cm、深さ0.5mの中央ピットがある。この周囲には長さ1.5m、残存幅0.5m程の浅く掘りくぼめて焚火をした形跡があり、焼土と炭を確認した。また床面では深いピットを2基確認し、その内の1基から手焙形土器が出土した。この種の土器の出土は神戸市内では類例が少なく、何らかの特殊な儀礼に用いたものと考えられている。この建物の主柱穴は4本で、柱間は3.3~3.4mを測る。また、それら主柱穴の内側に2本

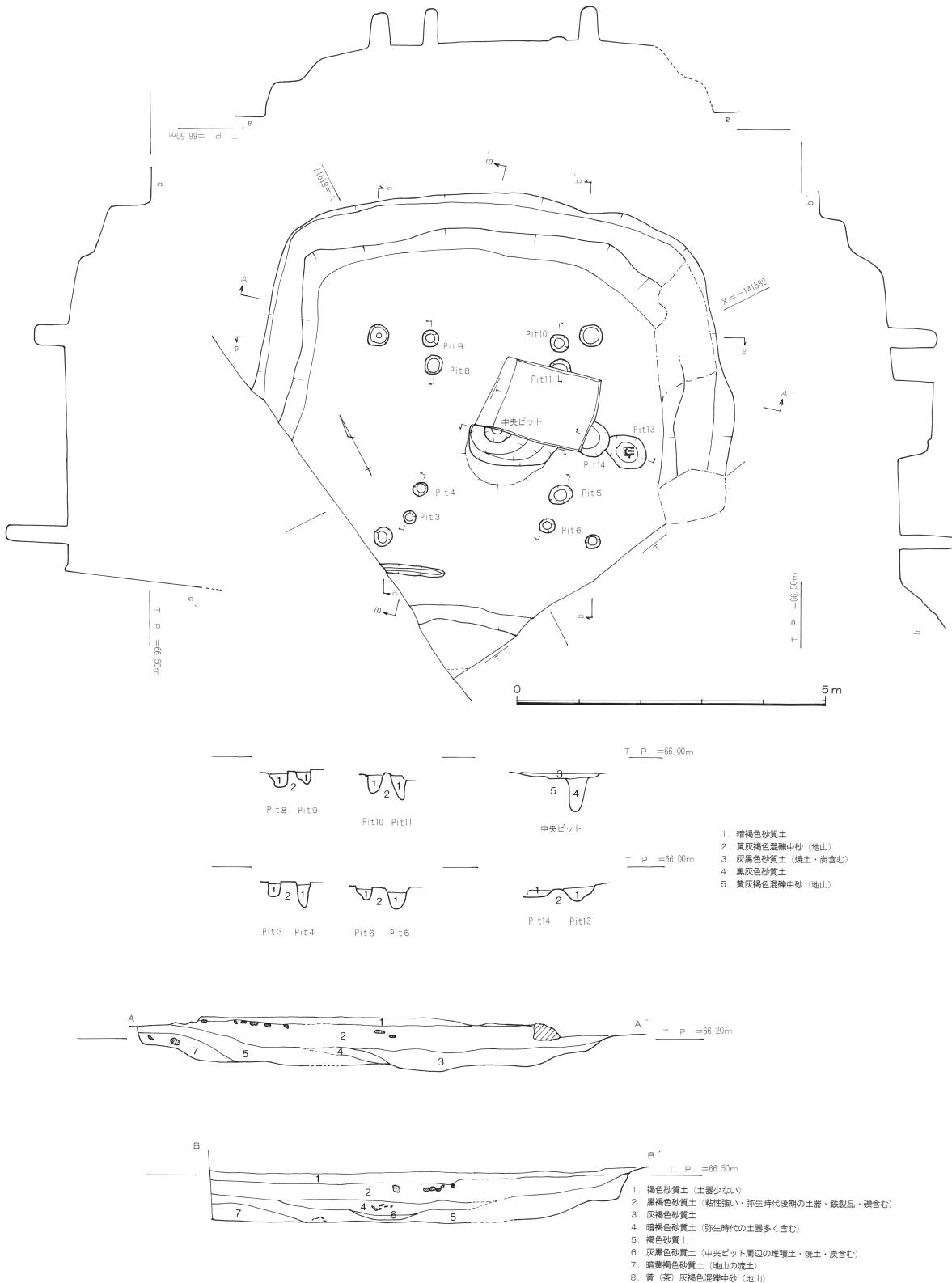


fig.42 SH01平面・断面図、SH01床面柱穴・ピット断面図

ずつの柱穴が存在し、梁または桁を支える添え柱と推測される。

竪穴建物の覆土は褐色砂質土、黒褐色砂質土、暗褐色砂質土の3層に大別できる。特に黒褐色砂質土、暗褐色砂質土からの土器の出土量は多く、28ℓ入りコンテナ7箱程度の弥生土器が出土した。また、褐色砂質土と黒褐色砂質土の境目付近で拳大の円礫（川原石）多数が投げ込まれた状態で出土した。黒褐色砂質土では鉄製品が1点発見された。これらの出土品は住居が廃絶してから、その凹みに廃棄、または付近から流れ込んだものである。

床面、ピット内から出土した土器から、弥生時代後期の住居跡と判断される。

SK01

調査区中央東よりで確認された土坑で、残存長4.5m×3m、深さ20~40cmを測るが、東半分を建物基礎によって掘り取られているため、正確な規模、形状は不明である。覆土からは弥生時代後期の土器片が少量出土した。

ピット

調査区内ではピットを13ヶ所確認した。それらの埋土は暗褐色砂質土と暗灰色砂質土の2種類があり、前者は弥生時代、後者は中近世のものと思われる。

3. まとめ

今回の調査では後世の建物基礎による搅乱によって、遺構面の残っている部分は少なかつたが、弥生時代後期の竪穴建物1棟、土坑1か所、弥生時代～中世のピット13ヶ所などを確認した。特に弥生時代の竪穴建物は深さが0.8mも残る神戸市内でも類例の少ない残存状態が良好な遺構である。

これらの調査成果によって、当該地の弥生時代～中世にかけての遺跡の状況が明らかになり、周辺の調査データと併せて、篠原遺跡の原始～中世のムラの様子の解明をさらに一步前進させるという貴重な成果を得ることができた。

8. 日暮遺跡 第38次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、六甲山南麓に広がる平野部に立地する古墳時代～平安時代の集落遺跡である。今回当該地に共同住宅建設工事の計画が起り、平成24年12月25日に試掘調査を実施した結果、遺構面や遺物包含層が確認されたため、発掘調査を行うこととなった。

2. 調査の概要

発掘調査は残土置場の確保などの都合により、東半区・西半区の2区に分け実施した。遺構面は2面あり第1遺構面は平安時代～室町時代、第2遺構面は弥生時代末～古墳時代初頭の庄内式期末～布留式期初頭のものである。

現在、遺物整理作業は成されておらず、各遺構の所属時期に関しては未確定である。

第1遺構面

第1遺構面では溝、井戸と柱穴などを検出した。

SD01

調査地東辺部で検出した南北方向に伸びる溝状遺構である。東側は調査対象範囲外にあり、全体を把握できない。大きな落ち込みとなる可能性もある。南北約8.9m、南部での深さ約0.9mである。埋土中の出土遺物には東播系須恵器捏鉢、備前焼擂鉢や土師器鍋などがある。14世紀代と考えられる。

SD02

調査地のほぼ中央部で検出した南北方向の溝状遺構で、南北6m以上、幅約3m、深さ約1.1mである。埋土中の出土遺物は平安時代と中世のものが出土している。遺構の所属時期としてはSD01とほぼ同時期と思われる。



fig.43 調査地位置図 1:2,500

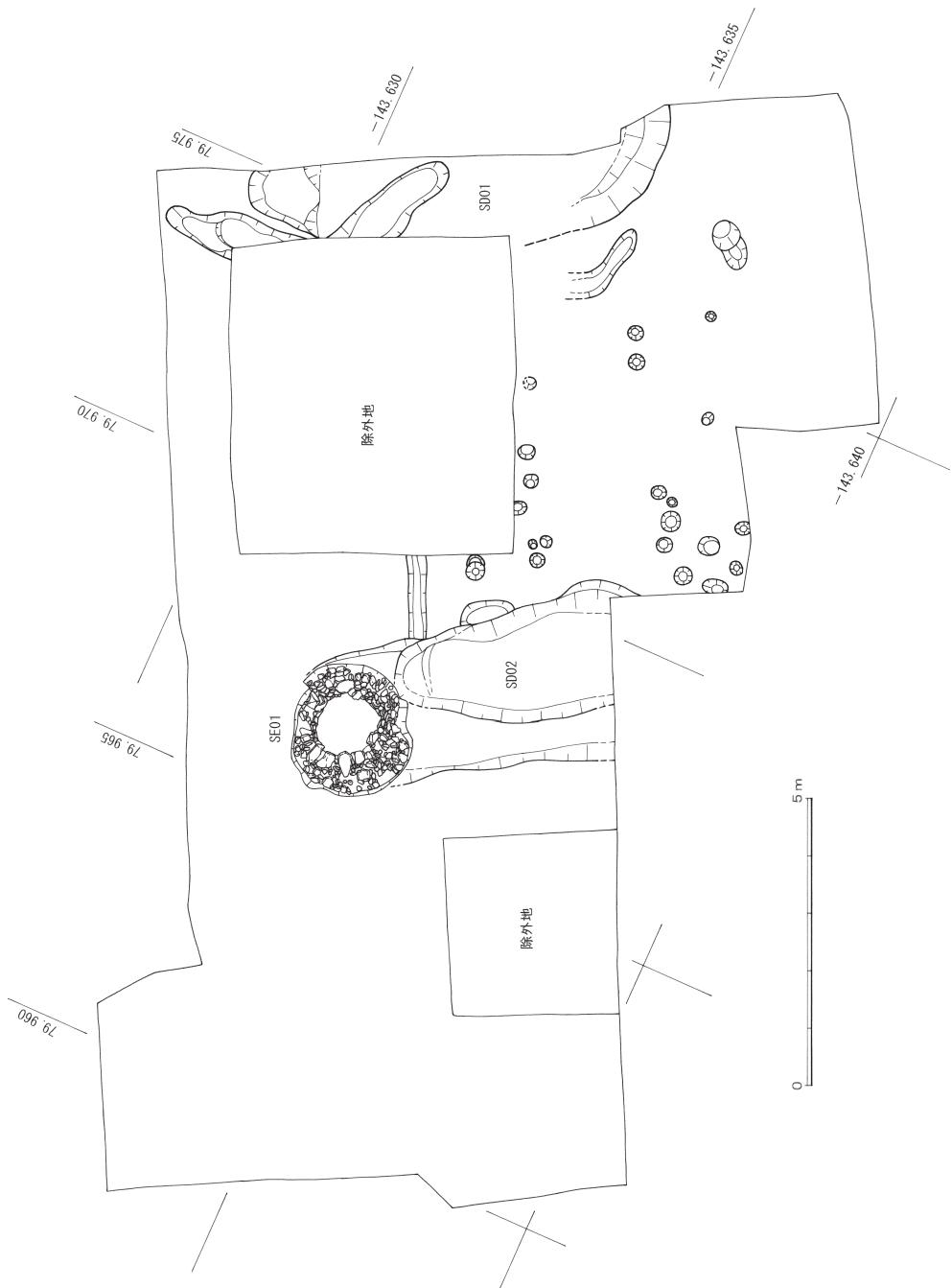


fig.44 第1遺構面平面図

SE01

調査地のほぼ中央部で検出した石組の井戸で、SD02の北端部を破壊して構築されている。掘形の径約2m、井戸の内法径約1mである。深さは検出面から2.1m、T.P.13.9mまで掘削したが崩落の危険があったためこれ以下については、掘り下げを断念したため不明である。

石組には中世の石造品が転用されており、五輪塔5個体、石臼（上臼）3個体、茶臼1個体と瓦質甕の破片が出土した。石組内部の埋土中からは、土師器小皿、丹波焼擂鉢、備前焼擂鉢や中国製青花皿が出土している。廃絶の年代は16世紀後半～末頃と思われる。

第2遺構面

第2遺構面では竪穴建物2棟、土坑とピットなどを検出した。

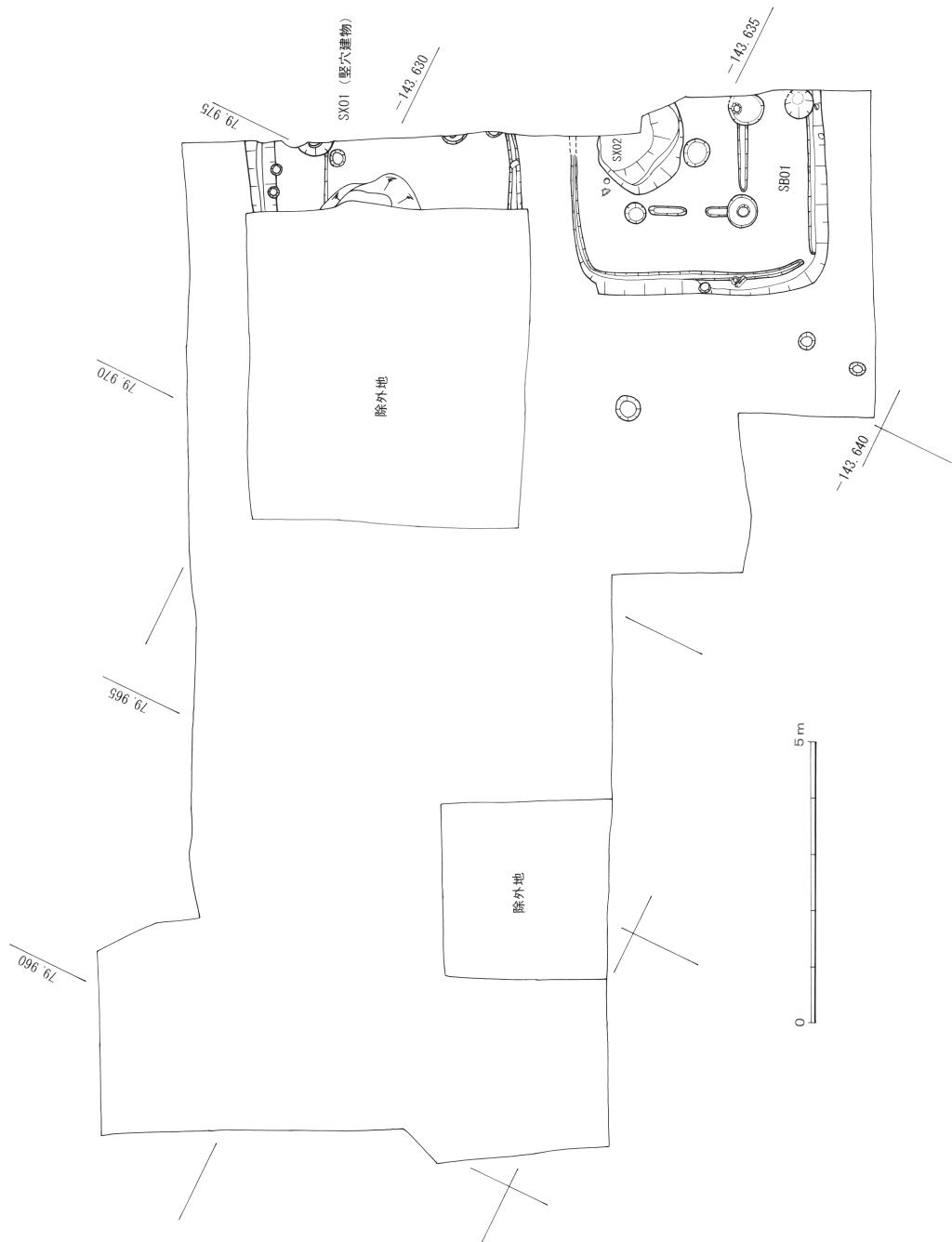


fig.45 第2遺構面平面図

SB01

調査地東南隅部で検出した方形の堅穴建物で、東約1/3は調査範囲外にある。南北約4.6m、東西3.6m以上、深さ約0.3mである。主柱穴は3基検出したが、北東隅の柱穴は土坑(SX02)で破壊されている。中央土坑と思われるものも1基みられるが、浅くかつ被熱の痕跡もない。床面直上及び埋土中より完形の小型鉢形土器などが出土している。遺構の時期は庄内式期末～布留式期初頭と考えられる。

SX01 (竪穴建物)

調査地東辺部で検出した方形の竪穴建物で、南北約5.9mである。東西方向の規模は調査範囲外にあり不明である。北壁下には南北幅約0.9mのベッド状遺構がある。主柱穴は検出されなかった。遺構の時期は SB01と同様、庄内式期末～布留式期初頭と考えられる。

SX02

SB01北東部で検出した南北約1.5m、東西1.6m以上、深さ約0.4mの土坑である。埋土中から弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、室町時代の2条の溝及び1基の石組み井戸と弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物を2棟検出した。

室町時代の溝に関してはその性格は現時点では明らかではないが、2条の溝の囲まれた内部からピット等を検出しており、建物などの生活空間の境界を示すもの可能性も考えられる。16世紀後半～末頃に廃絶した井戸は、石組みに五輪塔などが転用されており、当時の人々の石造品に対する観念の一端を窺い知ることができるものと思われる。

弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物はいずれも全形を知りえないが、残存状態は良好であった。日暮遺跡での竪穴建物は調査例も少なく、当集落の実態を知るうえで貴重な資料を得ることができた。

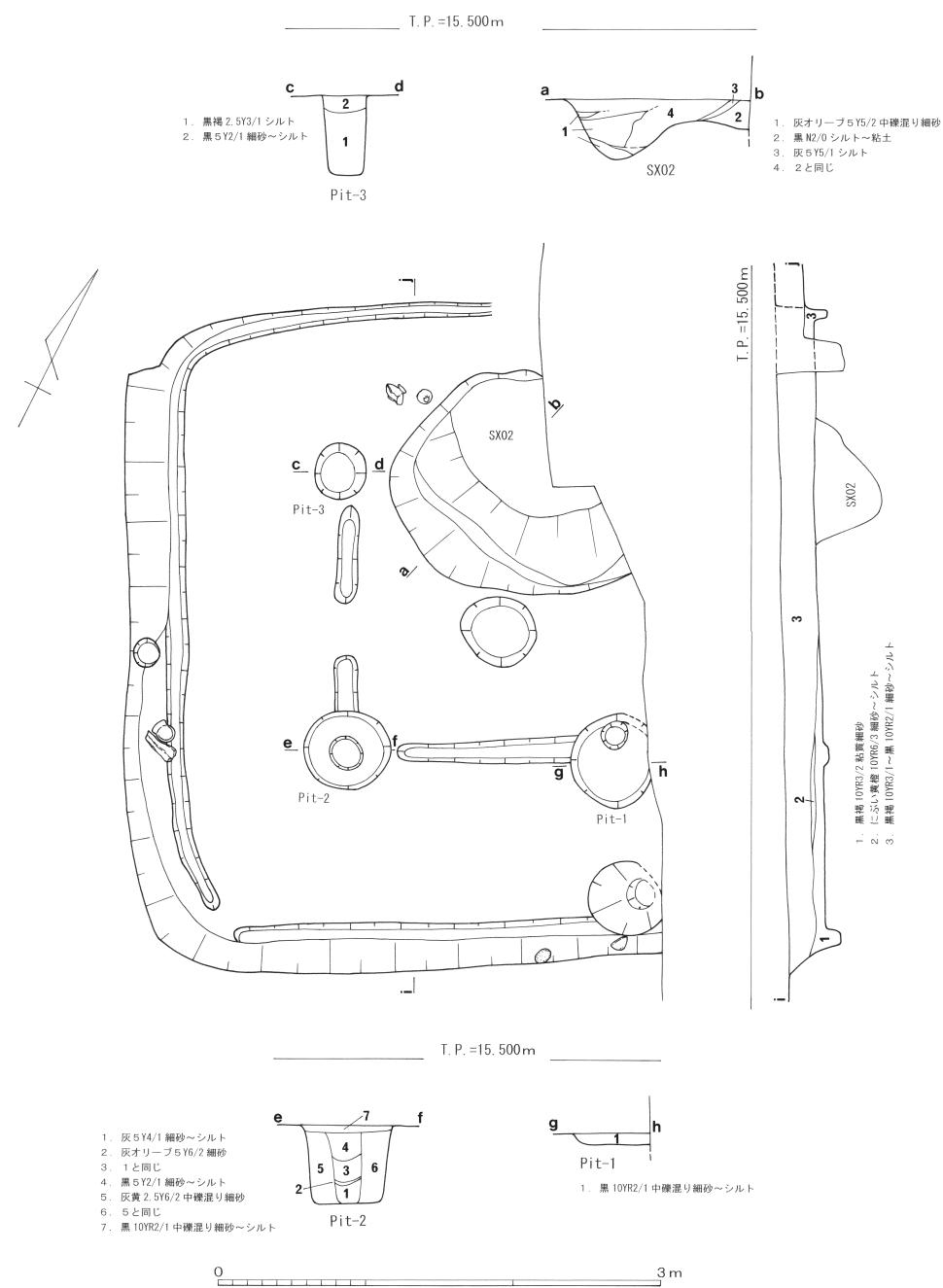


fig.46 SB01平面・土層断面図

9. 祇園遺跡 第18次調査

1. はじめに

祇園遺跡は神戸市兵庫区上三条町、上祇園町、下祇園町付近に所在する縄文時代～中世の遺跡である。東西に連なる六甲山系から平野部へと流れ出た天王谷川は、扇状地を形成している。祇園遺跡はこの扇状地の標高40mの扇頂部から標高20mの扇央部付近に立地する。

祇園遺跡の南東に位置した当時の湊川河口付近には大輪田泊と呼ばれた港が築かれ、瀬戸内海を航行する船が明石海峡を通過する際の潮待ちの船がかりとして、当時からよく知られていた。平安時代の末期、平家は摂津国八部郡の郡司職を得て、大輪田泊とその周辺の掌握に努めたといわれている。嘉応元年（1169）に太政大臣を辞した平清盛は、福原の別邸に居を移し、翌2年には宋の貿易船を大輪田泊に入港させ、日宋貿易の拠点とした。承安年間（1171～74）及び治承4年（1180）には2度にわたり、大輪田泊の大改修が行なわれている。

治承4年（1180）、清盛の和田（福原）京遷都構想により安徳天皇は京より福原へ移ったが、同年の以仁王の挙兵に端を発した源頼朝、木曾義仲の挙兵等により計画は中止された。

祇園遺跡付近は、安徳天皇内裏となった清盛別業の所在地である「平野」、湊山小学校付近の「雪御所」の地名等が残されており、平家一門の別業及び平清盛の造営による御所の存在が指摘されてきた。

2. 調査の概要

今回の調査は、兵庫区北部東・中央区統合小学校建設および周辺整備事業に伴うもので、昨年度（第17次調査）から継続して調査を行っている。

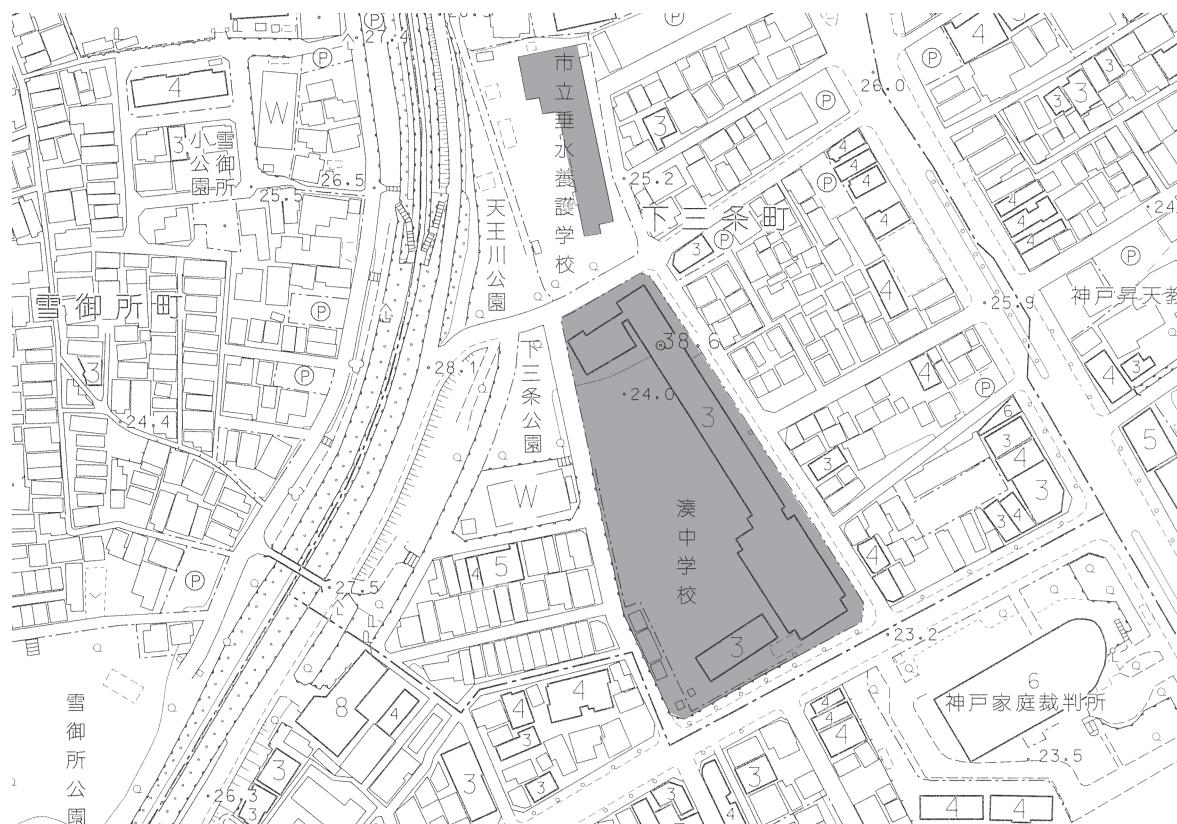


fig.47 調査地位置図 1:2,500

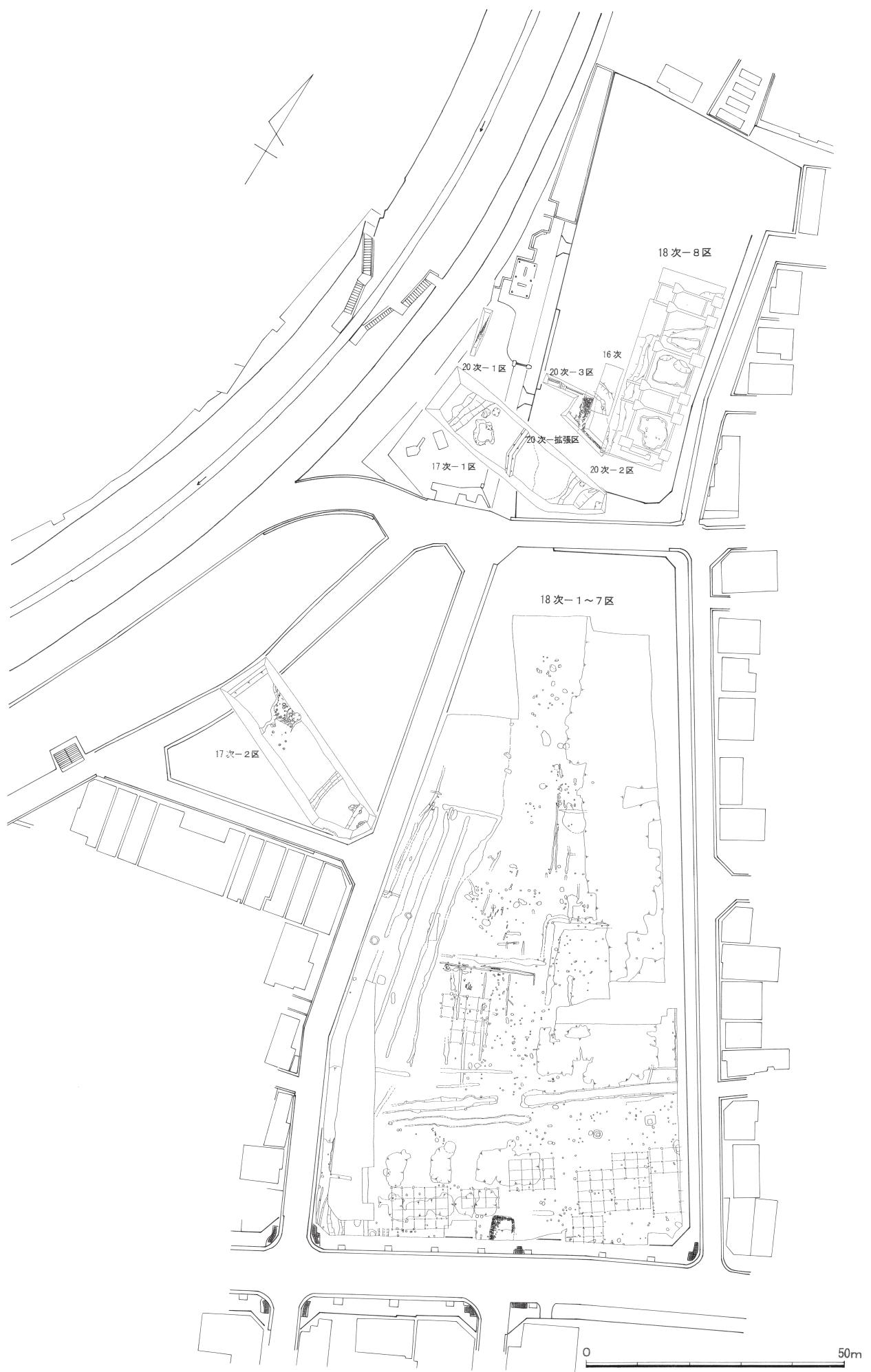


fig.48 第16～18・20次調査地位置図

当該調査地付近は天王谷川によって形成された扇状地に位置し、標高21～24m前後を測る。付近の地形は概ね北東から南西へ傾斜している。

作業の便宜上、調査範囲を1～8区に分けて実施した。

1区

調査区の西辺は旧湊川中学校の擁壁を設置する際に搅乱されており、西北辺には中学校建設以前と考えられる2m×3mの大きな搅乱が4つ連なって検出された。また、埋設管の痕跡などの搅乱が多く検出された。元グランド部分であるため、遺跡の状態としては良好な保存状態であると考えられていたが、搅乱が多い地点であった。

基本層序

グランド整地土の下は、中近世の耕作土（灰色～黄灰色砂質土）、黄灰色～黄灰褐色砂質土が遺構面（T.P.21.7m）となり、土坑・溝・小流路を検出した。

土坑（SK101・102）

調査区の南半で検出した。SK101は直径1.5mの円形で、深さ0.5mを測る。SK102は長径1.3m、短径1.0mの楕円形で、深さ20cmを測る。遺物は小片が少量出土するのみであったが、埋土の状況などから中世の耕作地に伴うものと考えられる。

流路（SR101・102）

調査区の北半で検出した。共に幅約0.5m、深さ20cmを測る。大雨により六甲山から流されてきた花崗岩を基本とする黄褐色の粗砂礫が埋土である。中世の溝が切ることから中世以前の自然の小流路と考えられる。

溝（SD103・106）

SD103は、調査区のほぼ中心で、南北方向に検出した溝である。幅1～1.4m、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色粘質土であり、他の遺構の埋土とは異なる。

SD106は、調査区の東端辺で検出した。この溝の北端部では平安時代末を中心とした遺物が集中して検出された。遺物は、須恵器や土師器、瓦器などであり、庭園遺構などでみられる土師器皿を中心とした出土状態ではなく、日常什器を中心としている。

2区

既存建物の基礎によって、現地表下2～2.5m程度まで掘削されており、建物基礎から外れた西端部分に平安時代の遺構面がわずかに残存していた。

基本層序

西側の平安時代の遺構面が残存している部分では、整地土の下は、中近世の耕作土、黄灰色～黄灰褐色砂質土が遺構面となり、土坑・ピットが確認されている。

土坑1

幅約1m、深さ約0.5mの土坑で、前後を後世の搅乱によって削られており、平面形状は不明である。

埋土からは平安時代末頃の土師器が出土している。

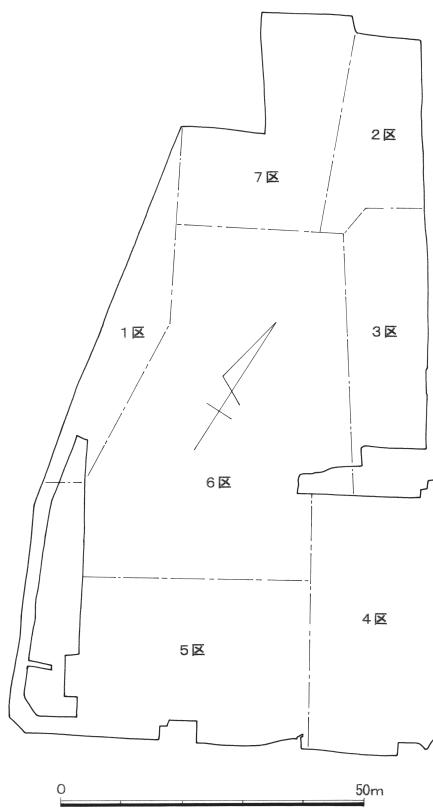


fig.49 調査区位置図

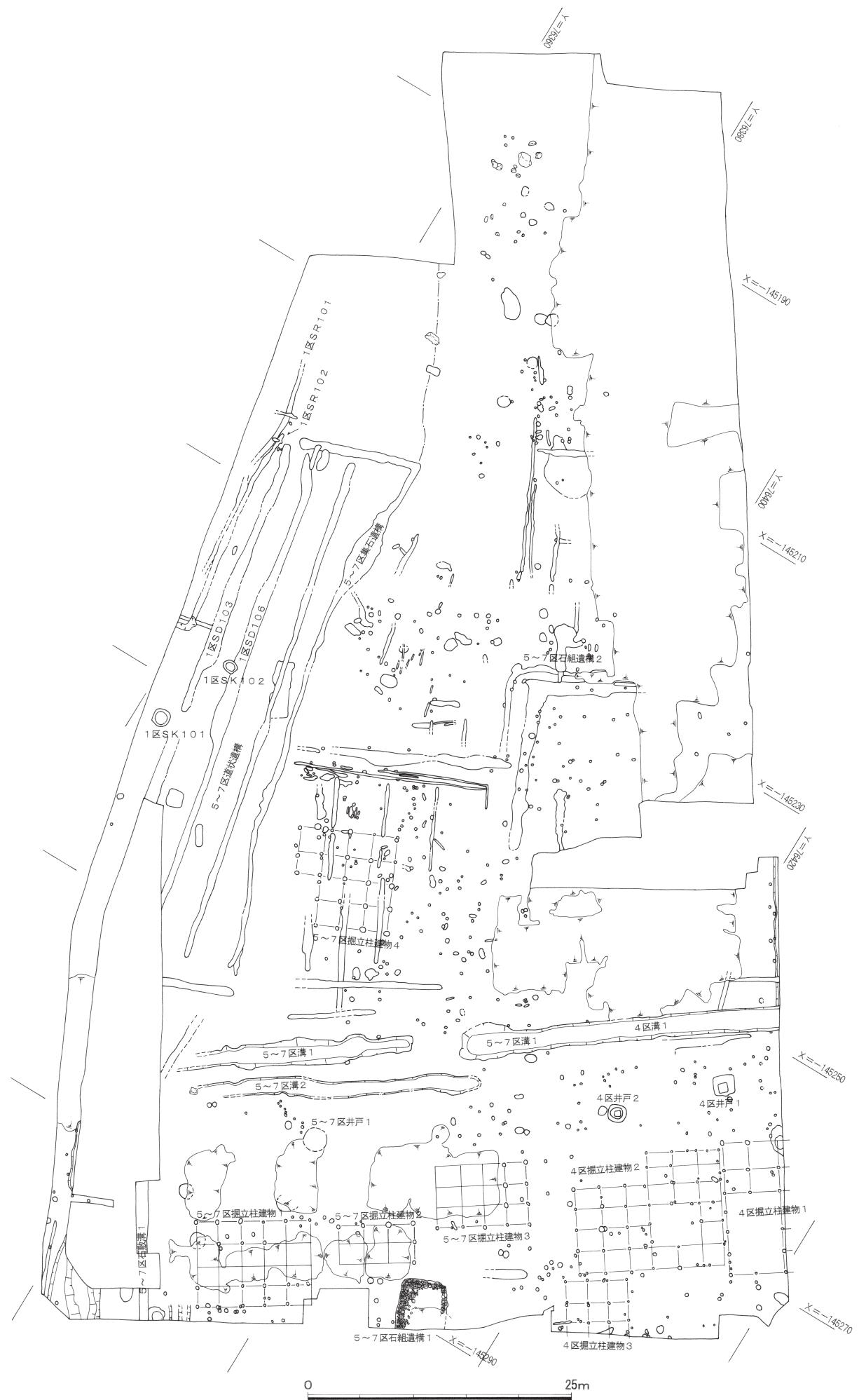


fig.50 5~7区遺構平面図

3 区

既存建物の基礎工事とその撤去作業によって、現地表下約1.5～2 mまで掘削されており、建物基礎から外れた西端部分と南端部分に平安時代～中世の遺構面がわずかに残存していた。

基本層序

西側の平安時代の遺構面が残存している部分では整地土の下は、中近世の耕作土でこの層から上層溝1を確認した。黄灰色～黄灰褐色砂質土が下層遺構面となりピットを検出した。以下は河川の影響による洪水堆積層が連続する。

上層溝1（第1面）

長さ10m、幅40cm、深さ約5cmの浅い溝でコの字状に曲がる。耕作にかかる遺構と考えられる。堆積土からは平安・鎌倉時代の土器が出土している。

下層ピット群・溝（第2面）

調査区南端でピットを12基、浅い溝を2条確認した。ピットから出土した土器は細片であるが、平安時代末頃の遺物を含んでいた。

4 区

調査区の北側1/3ほどは建物基礎撤去の際に遺構面まで掘られているが、それ以外の部分は良好に遺構面が残存していた。

基本層序

校舎造成時の盛土・基礎撤去時の搅乱層、戦災の後片づけの整地層の下は、中近世の耕作土である灰色～黄灰色系砂質土が重なって堆積する。それらを除去すると、灰褐色系砂質土が現れ、この層は平安時代末頃の遺物を多く含む。この下は洪水堆積層の黄（灰）褐色中砂～粗砂であり、この上面で平安時代末頃の柱穴・溝等の遺構を検出した。ただし、この洪水堆積層は4区の南半分しか堆積しておらず、層厚も10～20cmと薄い。

この堆積層を除くと下層の暗褐色粘性砂質土が平安時代以前の水田耕作土であることが判明し、水田畦畔も良好な状態で残存することを確認した。

上層の遺構

掘立柱建物1

梁行6間、桁行2間以上の総柱建物で、東側は調査範囲外に延びる。

掘立柱建物2

梁行4間、桁行6間の総柱建物で、北側に2間×3間の出庇を有する。

掘立柱建物3

梁行3間以上、桁行4間以上の総柱建物で、南側は調査範囲外に延びる。

溝1

掘立柱建物群の北側にあり、東西方向の溝である、検出面からの深さ約0.6m、幅2m前後を測る。この溝は5区に連続している。溝の堆積土は3層に分かれ、上層の淡灰褐色砂質土、暗褐色粘性砂質土には遺物は少なく、下層の(青)灰褐色粘性砂質土の特に溝底に近い部分から、平安時代末頃の土器類が完形に近い状態で多く出土した。土器は土師器小皿のほか、須恵器捏鉢、土師器の羽釜等も出土しており、南側にある建物群の性格を示唆している可能性がある。また土壤の水洗選別によって、炭化穀粒や魚の骨を検出した。

井戸1

検出面では2×2mの正方形を呈し、人頭大の礫で埋められていた。礫を深さ約0.8m

除去後、 0.8×0.9 mの方形の掘形を検出し、幅12cm程の堅板の痕跡が掘形に沿って並ぶのを確認した。さらにその下で、堅板を固定する縦と横の桟を確認した。井戸検出面から掘形底までは約1.7mである。井戸底に近い所から平安時代末頃の土師器皿が数枚出土した。

井戸 2

検出面では 1.8×1.7 mの隅円方形を呈する。堆積土の上層には遺物は出土せず、約30cm掘削した段階で厚さ1cm程の炭化物の層を確認した。それを除去すると暗灰褐色粘性砂質土が堆積していた。この層は空隙が多く、人為的に急いで埋められたような堆積状況が窺われた。この土層内から平安時代末頃の土器が完形に近い状態で出土した。

この層の下で、 0.6×0.7 mの方形の桟とその周りを囲む堅板の痕跡を確認した。その約20cm下に2段目の桟があり、その下には直径40cm程度の曲物桶が据えられた痕跡を確認した。曲物桶の外側には拳大の礫群が桶を囲む状態で置かれていた。この深さでは湧水が多く、排水作業を並行しながらの調査となった。井戸検出面から掘形底まではおよそ1.6mを測る。

中層の遺構

水田遺構

4区南半部では、平安時代末頃の遺構を検出した黄(灰)褐色中砂～粗砂を除くと下層の暗褐色粘性砂質土が現れる。この層は平安時代以前の水田耕作土であり、水田畦畔が良好な状態で確認された。水田の区画は規模が判明するものは 12×6.5 mの長方形である。

下層の遺構

ピット群

水田耕作土の下は明灰黄色細砂～砂質土で、この上面でピットを確認した。

5～7区

基本層序

平安時代の遺構面が残存している部分では、校舎造成時の盛土、戦災の後片づけの整地層の下は、中近世の耕作土である灰色～黄灰色系砂質土が重なって堆積する。それらを除去し、平安時代末頃の柱穴・溝等の遺構面を検出した。

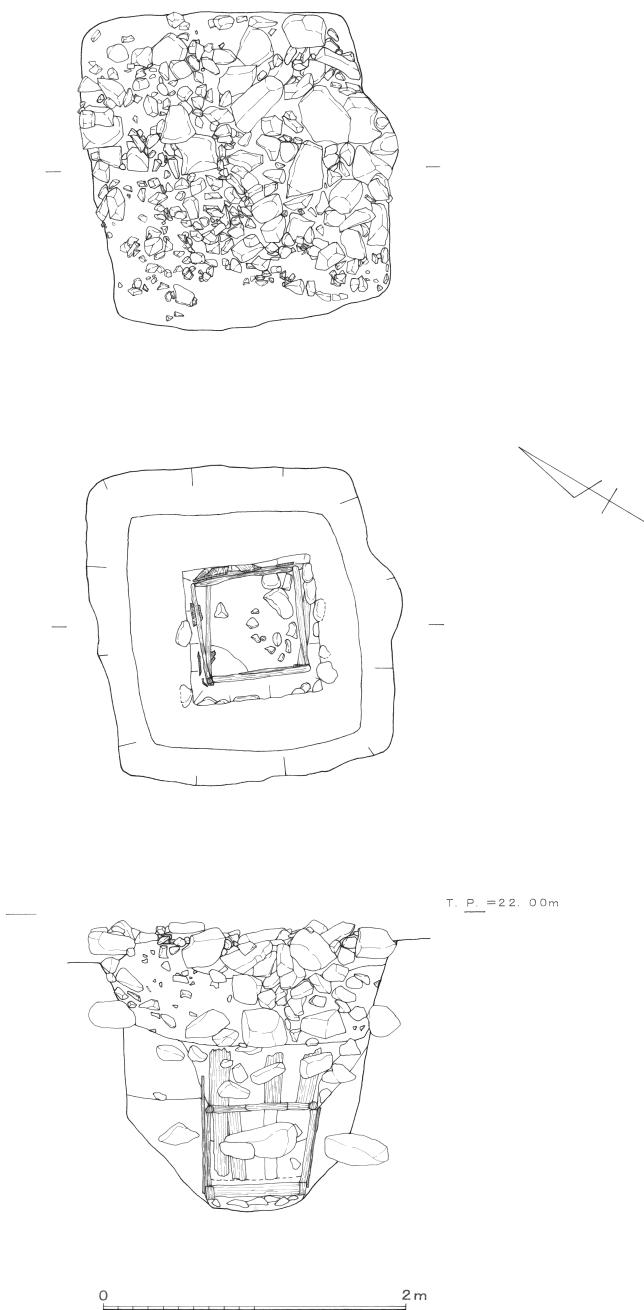


fig.51 4区 SE201平面・断面図

上層の遺構

掘立柱建物

掘立柱建物は、5区の溝1の南側に集中しているが、6区の南側にも1棟以上の建物の存在することを確認した。

掘立柱建物1

溝1の南側において検出した東西棟の建物で、梁行4間、桁行5間の総柱建物と考えられるが、中央の柱列は削平のため確認できなかった。また南の1間分は擁壁部分のトレーニングで確認した。柱間は東西2.0~2.1m、南北2.0mである。

掘立柱建物2

建物1の東に隣接して検出した、東西3間、南北2間以上の総柱建物で、柱間は東西2.4m、南北1.8~1.9mである。柱掘形は他の建物に比べ一回り大きい。

掘立柱建物3

建物2の北側で検出した東西棟の建物である。梁行3間、桁行4間の総柱建物と考えられるが、北西部は削平のため確認できなかった。柱間は東西2.1~2.4m、南北1.9~2.0mである。

掘立柱建物4

溝1の北側で検出した東西棟の建物である。梁行3間、桁行4間の総柱建物で、北側に1間×2間の出庇を有する。柱間は東西2.1~2.4m、南北2.0~2.3mである。

井戸1

検出面では径2mの円形を呈し、最終の埋土から平安時代末頃の土師器皿数枚と瓦器塊が出土した。中層以下において、桶状の枠の痕跡が認められた。最下層において堅板を固定する縦と横の棧を確認した。さらにその下には直径約30cmの曲物桶が据えられた痕跡を確認した。

溝1

4区より連続する東西方向の溝であるが調査区東寄りの部分において4mほど途切れる通路状の部分が存在した。形状や堆積状況については4区の溝1と概ね同様であるが、遺物量は多い。また通路状の部分のすぐ東側については、検出面から深さが1.2mと深く掘り込まれている。

溝2

溝1の南側に並行して流れる東西方向の溝である。4区より続き、検出面からの深さ約20cm、幅1.2~1.8m前後を測る。

石組遺構1

東西4.5m、南北4.0m以上、深さ0.8mを測り、自然石を2~3段積み上げて内側を四角く囲む構造をもつ。埋土の状況から水が溜まっていたような痕跡が認められる。

石組遺構2

6区の北東部で検出した石組み遺構で、東西

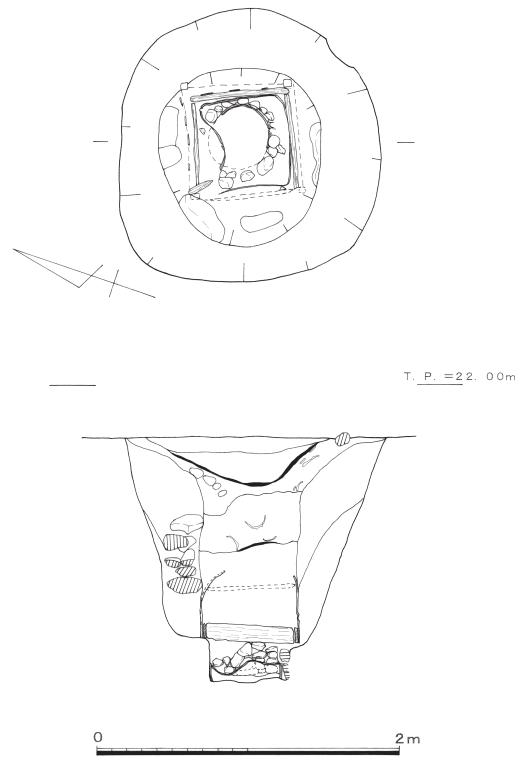


fig.52 4区SE202平面・断面図

1.3m、南北2.7m以上を測る。南側・北側を近世以降の整地によって大きく削られている。底部に板状の石を敷き平面をもつ石で側面を垂直に組み上げている。底面が、南にむかって僅かに傾斜していることから北から南への導水施設の一部の可能性がある。

石敷溝 1

5区の西端で検出した幅0.7m、深さ40cmの溝である。一部調査区外の部分を挟んで擁壁部のトレンチでも確認していることから延長は東西16m以上ある。また5区の中ほどで西方向に直角に曲がる。導水施設と考えられ、構造は断面逆台形の掘形の側面に平らな石を数段積み、底面には中央に隙間を設け大型の角礫を据え、板状の石で塞いで導水部分を確保し、上層には砂利、下層にはそれよりやや大振りの礫を充填している。

道状遺構

6区の西側で検出した並行する2本の溝によって区画される遺構である。溝はそれぞれ幅0.5~0.7m、深さ約10~30cmの断面U字形である。2本は3.0mの間隔をもち、ほぼ南北方向に長さ約50mを確認した。両端は削平されている可能性がある。道路遺構かは断定はできない。

溝埋土には、平安時代末の土師器皿などが多量に投棄されていた。後述の落ち込み状遺構の縁辺部にみられる溝状の掘り込みとも方向を共有する部分があることから一連の施設に伴う遺構とも考えられる。

下層の遺構

水田遺構

5区北部から6区中央部の東側では、洪水堆積層を除いた下層の暗褐色粘性土において平安時代以前の、水田畦畔を明瞭な状態で確認した。

8区

幼稚園舎の建物基礎を撤去に先立ち、埋蔵文化財の状況を試掘して確認したところ、基礎・地中梁の間については、遺構面が残存していることが判明した。この残存部分を保全する状態で基礎の撤去を行うことは困難と判断されたため、基礎を残した状態で発掘調査を実施した。

調査の結果、基礎・地中梁の間は、島状に遺構面（黄灰褐色小礫混じり細砂）が残り、ピット、土坑等が確認された。また、8区西端では川の方向に落ち込む堆積（暗褐色砂質土）が確認され、その中から平安時代末頃の土器や瓦などが出土した。

北端では、分厚い洪水砂層が広く分布し、遺跡面を形成する黄灰褐色小礫混じり細砂と交わる部分には0.5~0.7m大の円礫を3段積み上げた石垣を確認した。石垣の掘形内から出土した遺物からみて、近世のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査においては、1~3面の遺構面を確認し、多量の遺物が出土した。このうち多くの遺構が確認された上層の遺構面については、その殆どが12世紀後半から12世紀末という福原京遷都前後の時期にあたる。検出された建物や区画溝は方向を揃えるなど規格性をもっており、出土遺物も都（京都）で使用されていたものに近いことなどから、平氏政権の有力者の邸宅であった可能性が高いと考えられる。

10. 祇園遺跡 第19次調査

1. はじめに

祇園遺跡は六甲山系から流出する天王寺川によって形成された扇状地の扇頂部から扇央部付近にかけて立地する遺跡である。

平安時代後期には、兵庫区の福原から和田にかけての一帯は、福原荘・和田荘と呼称される平氏の領する荘園で、日宋貿易により大和田泊が繁栄する1160年代から、平家一門の別業（別邸）が建造されたと伝えられる。治承4（1180）年の京から摂津国福原への「福原遷都」に際して、安徳天皇内裏となった平清盛の別業があったとされる「平野」の地名と合致することや、現在の湊山小学校付近の「雪の御所」の地名などから、祇園遺跡の立地する一帯は、平家一門の別邸及び平清盛の造営による福原京の存在の関連が指摘されてきた。

祇園遺跡ではこれまでに18次に及ぶ発掘調査が実施され、縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が確認されている。第2・5次調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭頃（12世紀後半）の園地と考えられる遺構から、多量の土師器皿、山城系の瓦など多くの遺物が出土した。また、第3次調査では常滑焼、渥美焼などの陶器甕、青磁・白磁などと共に吉州窯系玳波天目小碗が出土し、第14次調査では掘立柱建物群が検出されたことから、平家一門別邸および福原京に関連するものとして注目されている。

2. 調査の概要

今回の調査は、宅地開発事業に伴う工事により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。今回の調査地は幕末期の旧神戸村庄屋、生島四朗太夫の別邸跡に位置し、神戸海軍操練所を設置した勝海舟が一時寓居としたとされる場所に当たる。

調査地は丘陵と平野部の接点に位置し、今回の開発以前は傾斜地を段状に造成して宅地として利用されており、平成24年度に実施した試掘調査で、丘陵に近い北端部分は地山が削平されていることが確認されており、文化財は存在しない。今回の調査は宅地造成に伴う擁壁部分及び、造成により影響を受ける南側部を中心に調査を実施した。

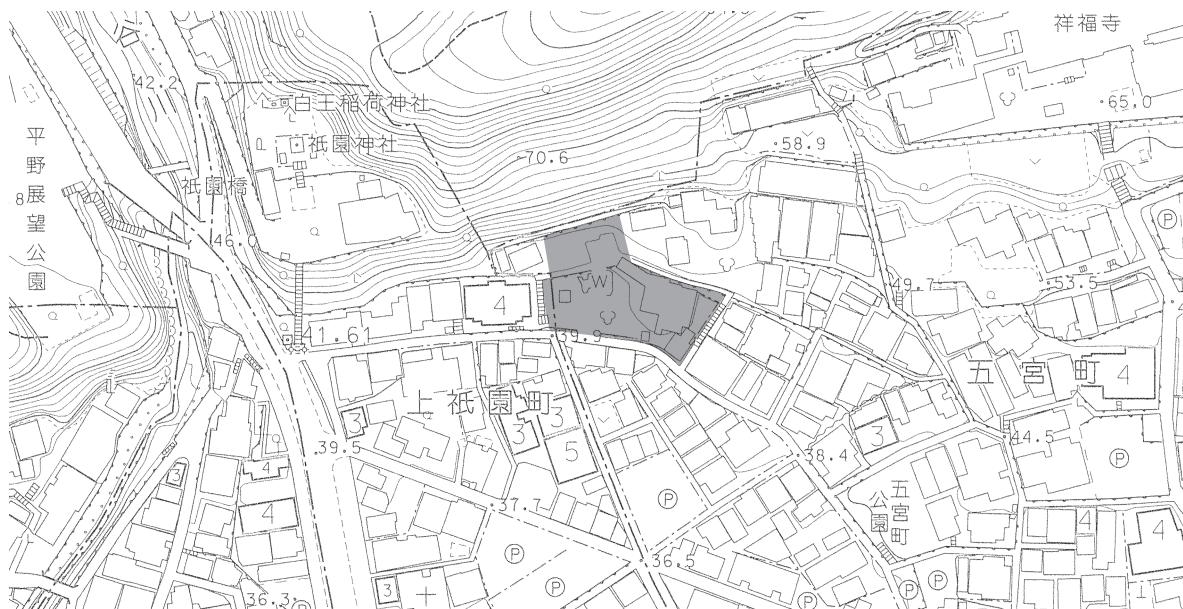


fig.53 調査地位置図 1:2,500

基本層序

基本層序は整地層、盛土層下に近世の耕土層、流土、古墳時代前期の包含層である暗灰色粘土、ベース土である青灰色粗砂層である。土壤が水平堆積しているのは、近世の耕土層より上層で、基本的に緩やかに南へ傾斜して堆積している。

A区

2ヶ所の擁壁設置部分（1・2トレンチ）と、整地に伴う掘削により埋蔵文化財が影響を受ける部分（3トレンチ）について調査を実施した。

1トレンチ

トレンチ中央部で、南に傾斜する落ち込みの上端ラインを検出した。遺構は検出されなかった。地山直上の淡黄灰色粘質シルト・暗灰色粘土層から、古墳時代初頭の遺物が出土した。

2トレンチ

1トレンチで検出した落ち込みの上端ラインのほかに、溝1条（SD01）を検出した。地山直上の淡青灰色粘質シルト層から古墳時代初頭の遺物が出土した。

SD01

幅約20cm、深さ5cmの溝である。埋土から古墳時代初頭の遺物が少量出土した。

3トレンチ

落ち込みの上端ライン及びSD01に続く遺構と、柱穴1基（SP01）を検出した。また、地山面直上から古墳時代初頭の遺物が少量出土した。

SP01

直径15～20cm、深さ約10cmの柱穴である。埋土から遺物は出土しなかった。

B区

遺構は検出されなかつたが、古墳時代初頭の遺物が少量出土した。

C区

擁壁設置個所（4・5トレンチと6トレンチ東半）と排水管設置個所（6トレンチ西半）について調査を実施した。

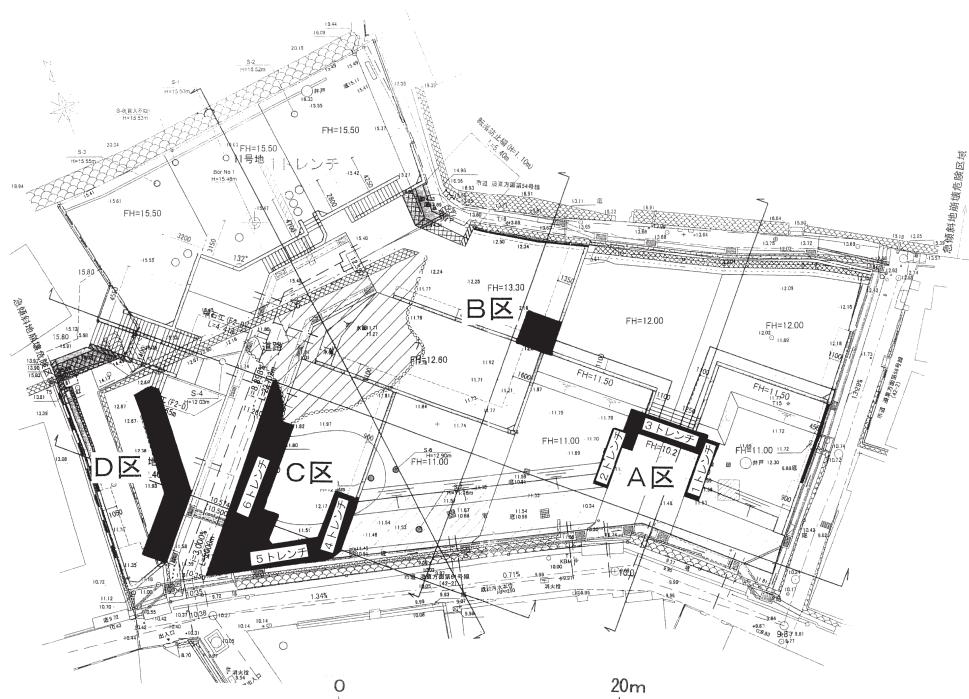


fig.54 調査区位置図

4 トレンチ

堆積土及び地山面は南へ緩やかに傾斜している。遺構面直上の暗灰色粘土層から、古墳時代前期・平安時代後期・近世の遺物が少量出土した。地山面で直径約20cmのピット2基を検出した。

5 トレンチ

遺構面上の暗灰色粘土層から、古墳時代前期・平安時代後期・近世の遺物が少量出土した。遺構は検出されなかった。

6 トレンチ

4 トレンチと同様、堆積土及び地山面は南へ緩やかに傾斜している。地山面直上の暗灰色粘土層から古墳時代前期・平安時代後期・近世の遺物が少量出土した。遺構は検出されなかった。

D区

擁壁設置個所について調査を実施した。調査区南半部は、地山面に及ぶ改変により埋蔵文化財は残されていなかった。調査区北半部は他の調査区と同様、堆積土及び地山面は南に緩やかに傾斜している。北端部では、地山直上の暗灰色粘土層から、古墳時代前期の遺物が出土した。遺構は土坑状の落ち込み1基（SK01）を検出したが、埋土から遺物は出土しなかった。

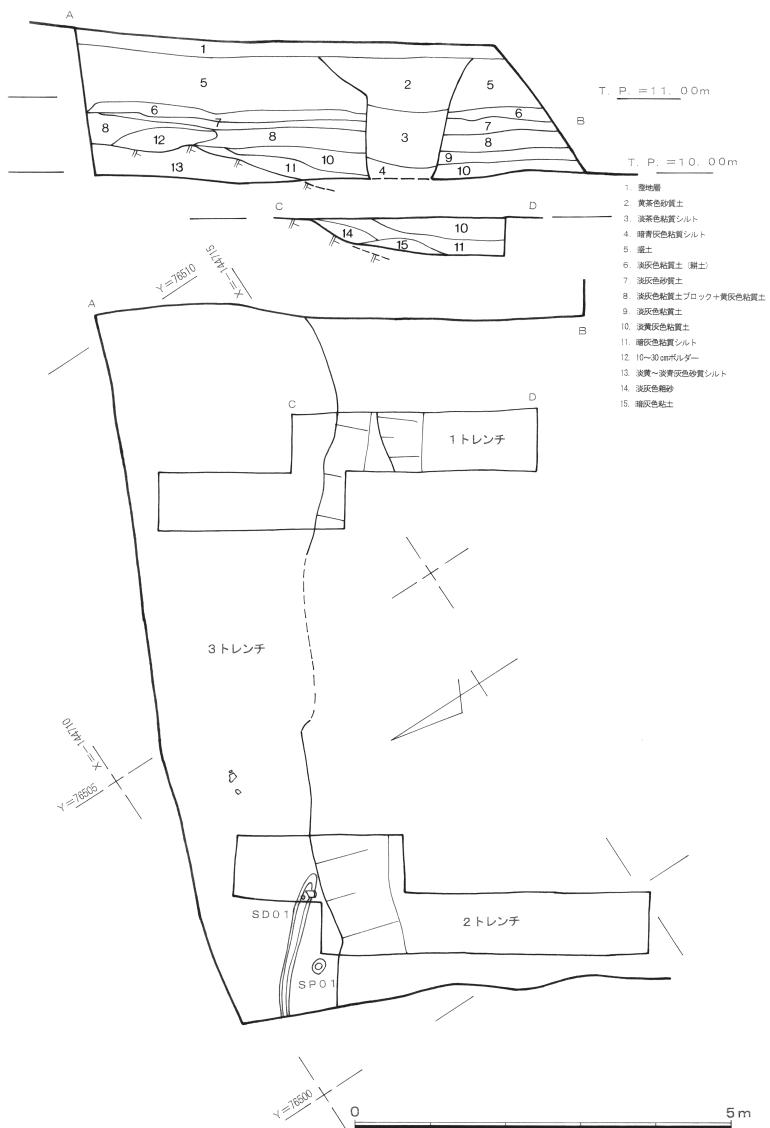


fig.55 A区平面・東壁土層断面図

3. まとめ

今回の調査で古墳時代初頭と平安時代後期の埋蔵文化財の存在を確認した。調査地の大半は傾斜地であるため、上方から流入した2次堆積土で構成されており、遺構面の保存状況は不良である。

しかし、地山面上で検出した古墳時代初頭の遺構や遺物の存在は、当時の生活面の広がりを想定させる資料であり、調査地北半部にも遺構が存在する可能性がある。これまでに実施された祇園遺跡の調査でも、弥生時代中期から古墳時代初頭の集落の存在が確認されており、当時の集落が丘陵裾部まで拡がっていたことが想定される。

また少量であるが、布目の圧痕を持つ瓦を含む平安時代後期の遺物が出土しており、平氏関連の建物が付近に存在したと想定される。

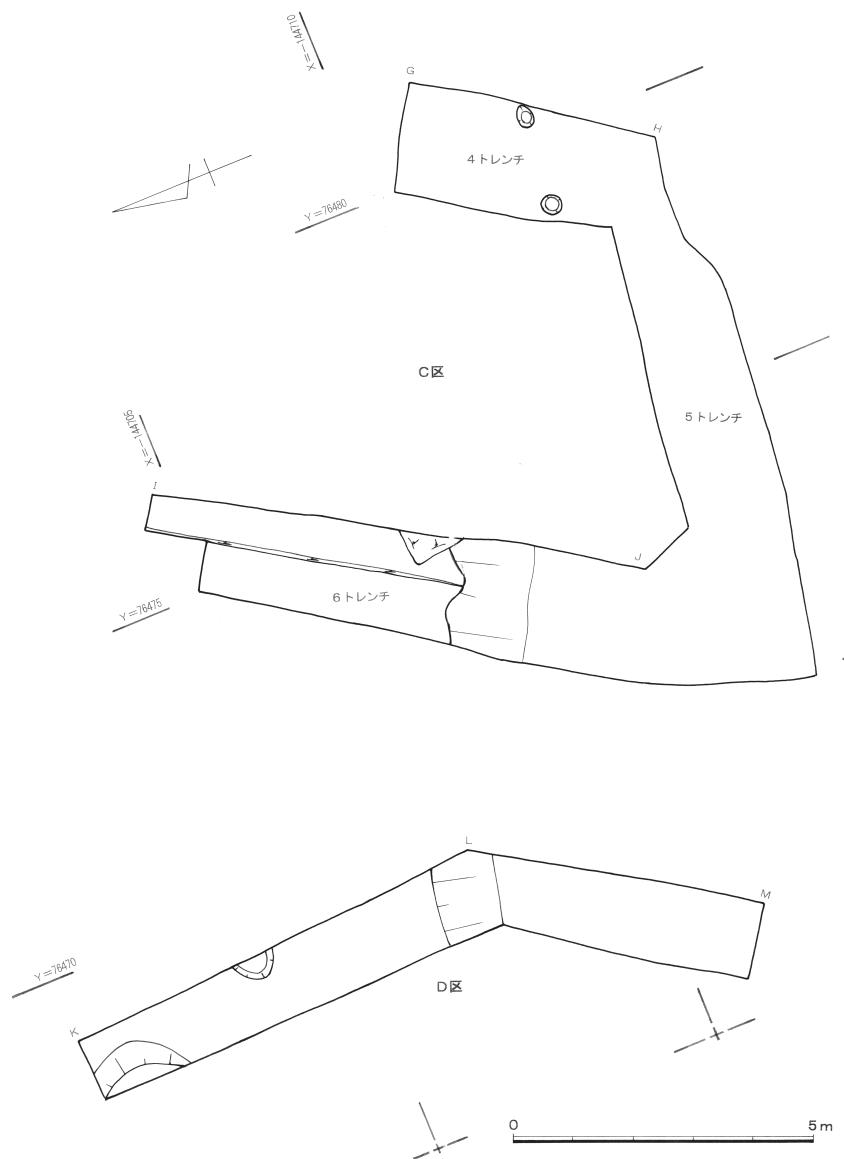


fig.56 C・D区平面図

11. 祇園遺跡 第20次調査

1. はじめに

祇園遺跡は、兵庫区上祇園町、下祇園町、上三条町、下三条町に広がる遺跡である。これまでの19次にわたる発掘調査で、縄文時代早期から中世に至る複合遺跡であることが確認されている。

特に、平安時代後半の遺構や遺物が顕著である。隣接する雪御所遺跡や楠・荒田町遺跡とともに、都から移り住んだ平家一門や貴族の屋敷地が営まれていたと考えられる場所で、福原京の一部にもあたると考えられる。第2・5・15次調査（平成6・7・23年度）では、導水路や堤、排水路などを伴う池状遺構を検出した。邸宅に伴う苑池と考えられ、池内は石敷きで、多量の土師器皿がまとまって出土した。第3次調査（平成6年度）では、青磁や白磁とともに、輸入陶磁器の吉州窯系玳波天目小碗が出土した。これは、博多、京、鎌倉に出土例があるのみで、当遺跡における権力者の存在が考えられる遺物である。第16・17次調査（平成24年度）では、それぞれ土師器皿がまとまって出土した遺構を確認している。第2・5・15次調査で検出した池状遺構のような平面形態は確認できていないが、類似した遺構である可能性もあり、注目される。

今回の調査は、公園整備工事および第16次調査検出遺構の範囲確認に伴うもので、第20次調査として実施した。



fig.57 調査地位置図 1:2,500

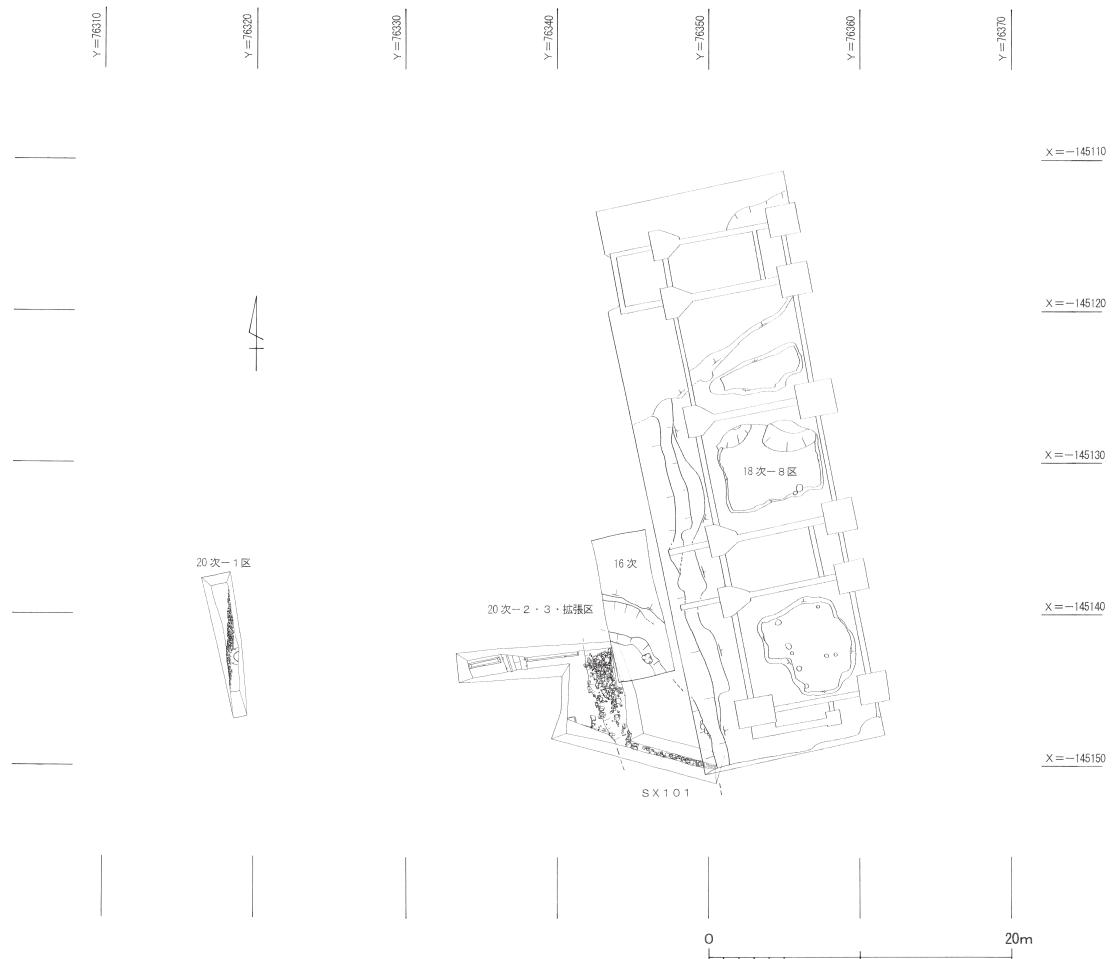


fig.58 調査区位置図

2. 調査の概要

調査対象地は、事業地面積約2,800m²の内、パーゴラが設置される地点（1区）、雨水管が埋設される地点（2区）、第16次調査区付近（3区）の3ヶ所である。1区は東西2m、南北9.5m、2・3区はそれぞれ東西11m、南北2mの調査区を設定した。2・3区は遺構の広がりを確認するために拡張し、2・3・拡張区あわせて57m²の調査区となった。調査面積は約76m²である。

調査に際して、造成土や搅乱土などはバックホーを使用して掘削し、遺構面検出、遺構掘削は人力で行った。残土は事業地内に仮置きし、調査終了後にランマーなどで転圧しながら埋戻しを行った。

基本層序

現地表面は、1区で約T.P.24.5m、2・3・拡張区で約T.P.24.8mである。現地表から約0.7～1.1mは造成土および搅乱土である。3区西側では、埋設管などによる2mほどの搅乱があり、遺構面は確認できなかった。1区では、造成土下層に黄白色粗砂が堆積しており、洪水砂ではないかと考えられる。その下層には耕作土層が堆積している。1区で2層、2・3・拡張区で4層を確認している。2・3・拡張区では鉄分の沈着が顕著にみられ、複数時期の耕作面が確認できる。また、2区では南北方向の耕作溝も検出した。耕作土層中からは土師器や須恵器の破片が出土している。時期決定できる遺物はないが、中近世から昭和にかけての耕作土層と考えられる。

1区では、耕作土下層に洪水砂とみられる自然堆積層を確認した。ラミナがみられ、遺物の出土はない。西側を北から南に流れる天王谷川の氾濫原であったと考えられる。

2・3・拡張区では、耕作土下層で遺構検出面となる。14~19層を基盤層としたが、14層は遺物を極少量含み、堆積の状況からも SX101に付随した埋土の一部である可能性がある。15層は黄灰色砂質土、16~19層は洪水砂とみられる自然堆積層である。

1区

耕作土直下の灰白色砂質土中で、石積みの暗渠を検出した。幅0.8m、深さ0.5mで拳大的円礫を用いており、耕作面の排水などに関わるものと考えられる。遺物は土師器の小片が1点出土しているだけであり、時期決定は難しい。

2・3・拡張区

遺構検出面の標高は約 T.P.23.5m、現地表面からの深さは約1.4mである。土坑1基、性格不明遺構1基を検出した。

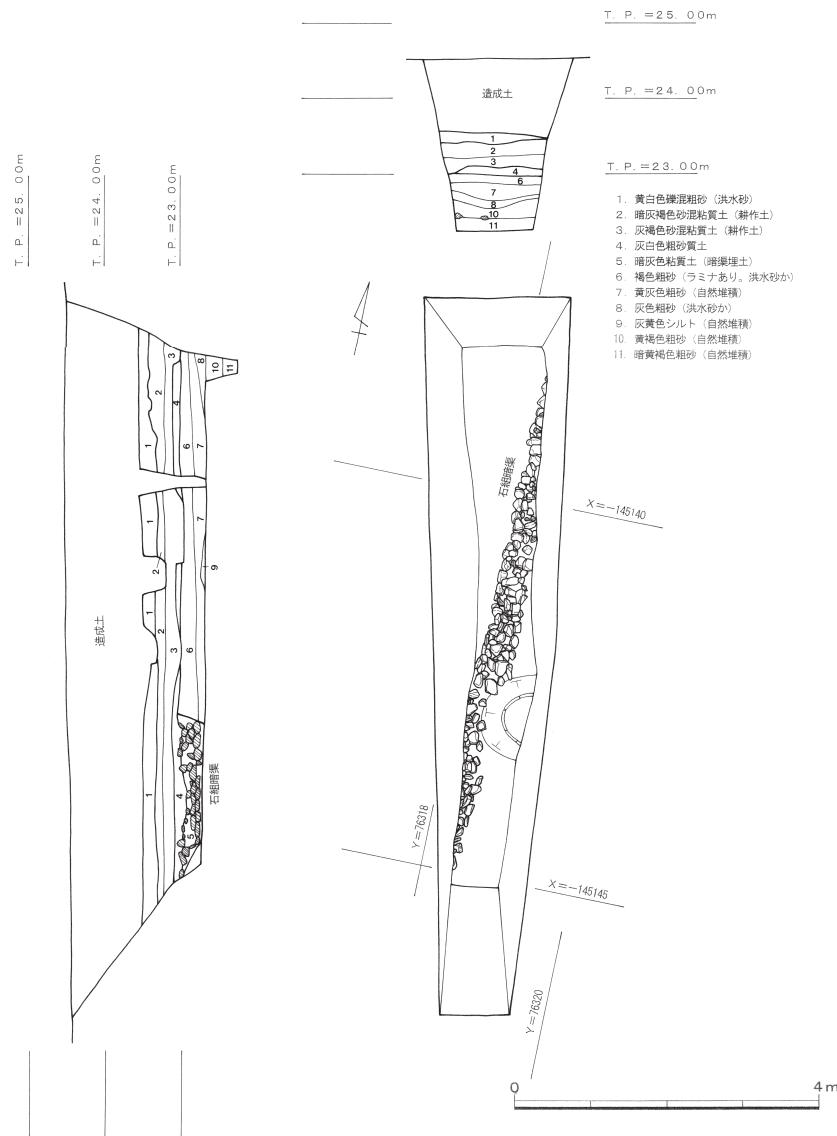


fig.59 1区平面・土層断面図

SK101

一辺20cm以上、検出面からの深さ18cmの土坑で、南側は攪乱により削平されている。埋土は暗灰黄色砂混粘質土、平面形態は隅円方形かと考えられる。土師器などの小片が出土しているのみで、時期を特定できるものではない。

SX101

調査区東で検出した。第16次調査で検出した土器溜りと同一のものと考えられる。西から東へ向けて傾斜し、最も深いところで検出面からの深さ0.5mとなる。埋土には、遺物とともに炭化物粒や10~50cm大の石が多く含まれている。遺構の肩付近では、特に大きな石が目立つ。

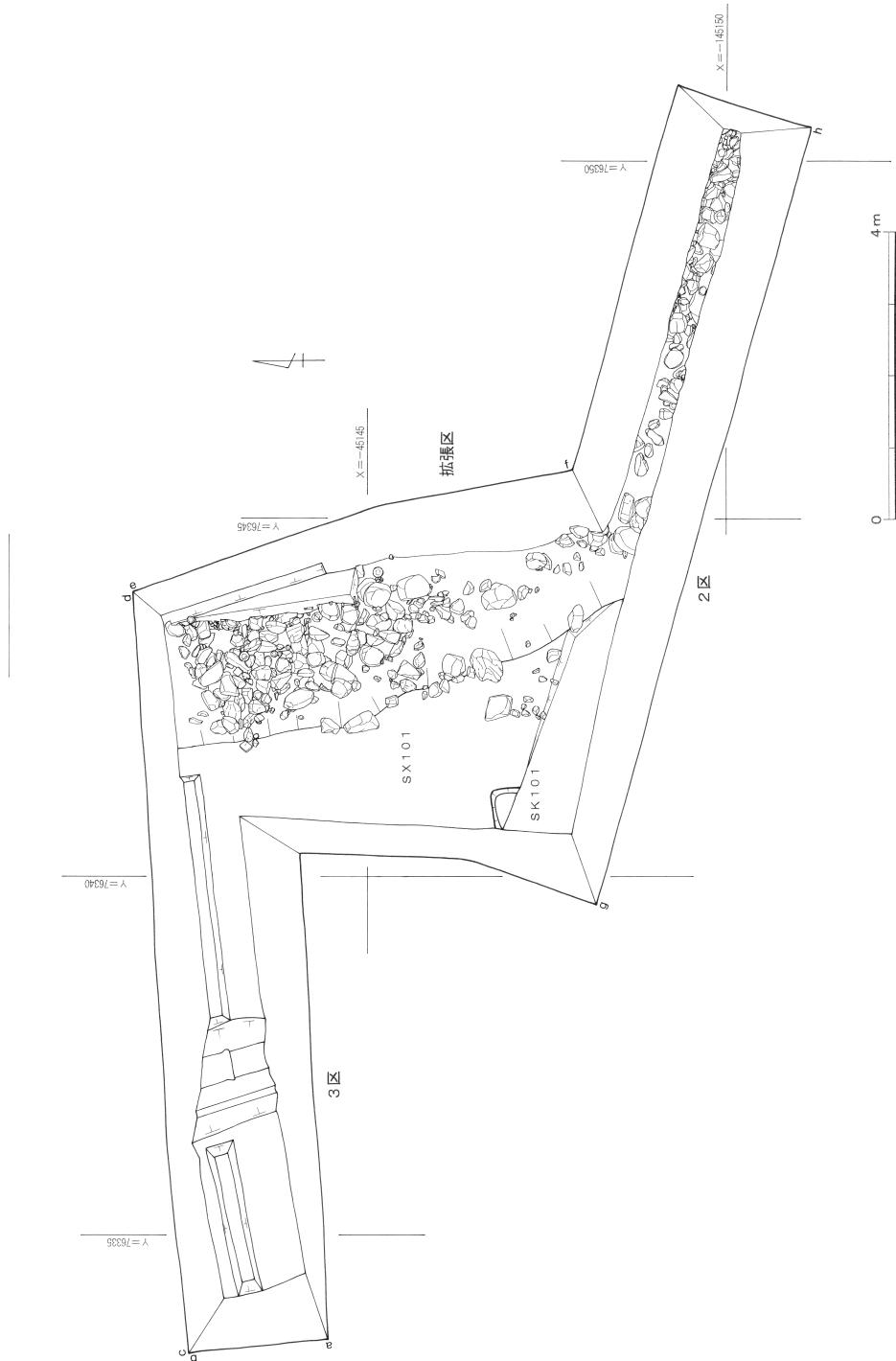


fig.60 2・3・拡張区平面図

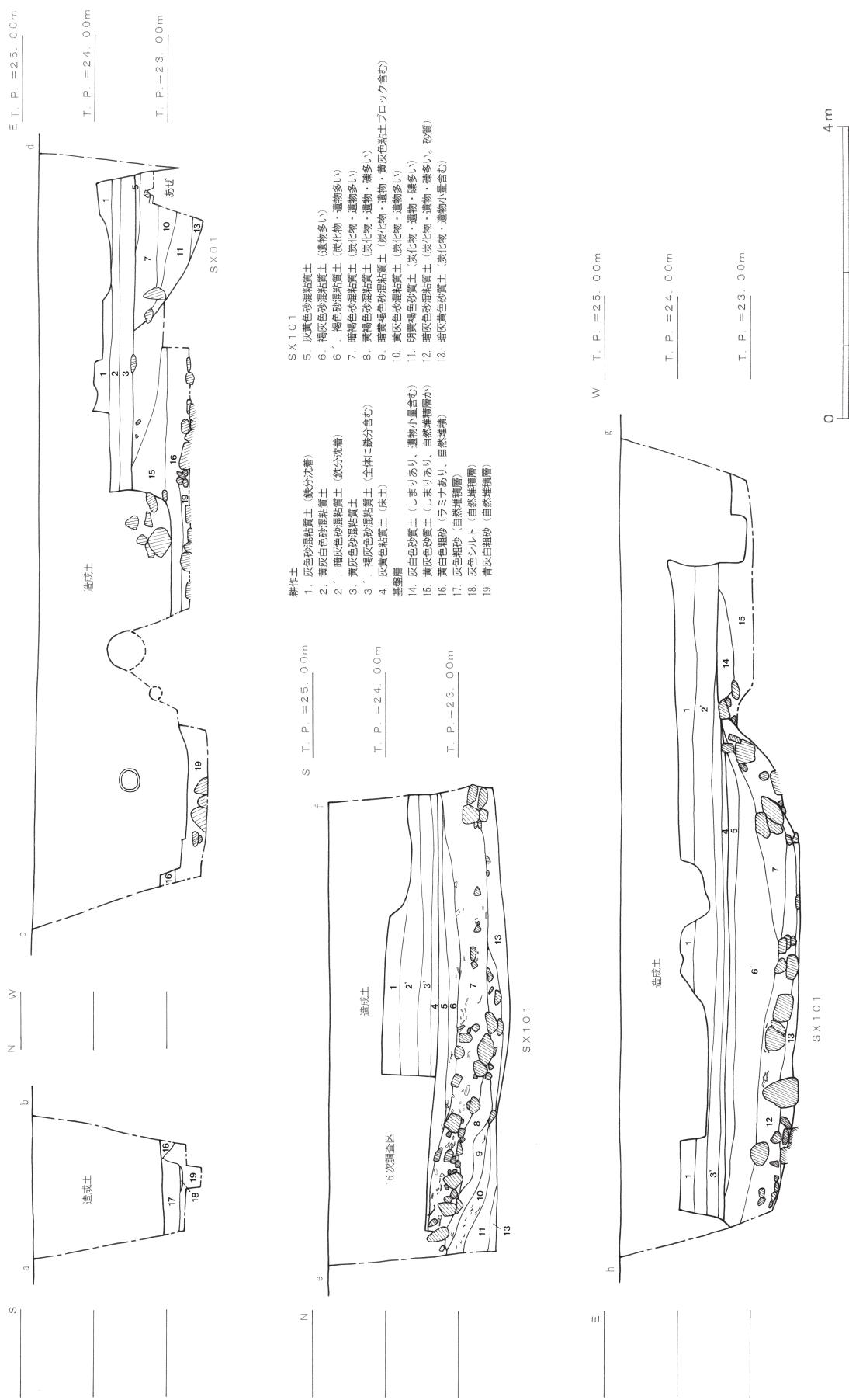


fig.61 2・3・拡張区土層断面図

多くの石は埋土中にあり、底面から浮いているが、傾斜面や東南部の底面に接地している大きな石もみられた。

埋土の堆積状況は、東西（c-d）で西から東へ、南北（e-f）で北から南へ傾斜する堆積状況が確認できる。南側の東西断面（g-h）では、西から東へ堆積する土層もあり（12層）、第18次調査8区南西端で検出されている落ち込みと合致するものと考える。5・6・6¹層では、破片となった遺物が多い。その下層の暗褐色砂混粘質土（7層）では、特に炭化物粒や遺物の出土が多く、完形品も多く含まれていた。9層の暗黄褐色砂混粘質土には黃灰色の粘土ブロックが含まれており、人為的な埋め戻しがあったことが想定される。最下層の暗灰黄色砂質土（13層）では、遺物や炭化物粒が少量含まれていた。基盤となる細砂と土質は類似している。

遺物には土師器皿、瓦器塊、須恵器片、白磁片などが含まれ、土師器皿や瓦器塊には完形品も多い。特に北側で出土量が多かった。遺物はおおむね12世紀代のものと考える。

3. まとめ

今回の調査では、2・3・拡張区で顕著な遺構を確認した。

SX101の性格について、第16次調査における遺物の出土状況や、今回の調査区での石の出土状況から、苑池などの池状遺構を想定することもできる。ただし、第5次調査で検出された池状遺構のように、石組みや貼石のようなものを確認することはできなかった。また、埋土の堆積状況からも、完形品の遺物が多く出土する7層の堆積以前に、9層などの人為的な埋め戻しが想定されることから、遺構の機能、性格についての判断は難しい。

遺構の年代は、出土遺物からおよそ12世紀代と考えられる。この時期は、祇園遺跡周辺において平家の屋敷地が営まれ、福原京遷都とも関連する時期である。今後、遺物の整理作業を進めながら詳細な時期を確認し、周辺調査地との関連も含めた考察を進める必要がある。

12. 雪御所遺跡 第4次調査

1. はじめに

雪御所遺跡は石井川と天王谷川が形成した複合扇状地扇頂部に立地する遺跡である。この複合扇状地は六甲山系の造山運動に伴って高燥・段丘化が進行し、現在の両河道は当該地周辺では扇状地を切り込んで流れている。したがって両河川に挟まれた雪御所遺跡はさながら中の島状の景観を呈している。

遺跡は明治39年に湊山小学校校地の工事の際に多量の土器や瓦が発見され、平氏関連の遺跡としての存在が確認された。昭和61年には同小学校校舎改築に伴って事前の発掘調査を実施し、3条の石垣・石列を検出した。遺物としては、少量の近世の陶磁器に混じって多量の平安時代末の遺物が出土している。平成24年7月には、昭和61年に検出した石垣の延長部分の確認調査を行い、この石垣が南に延びることを確認している。

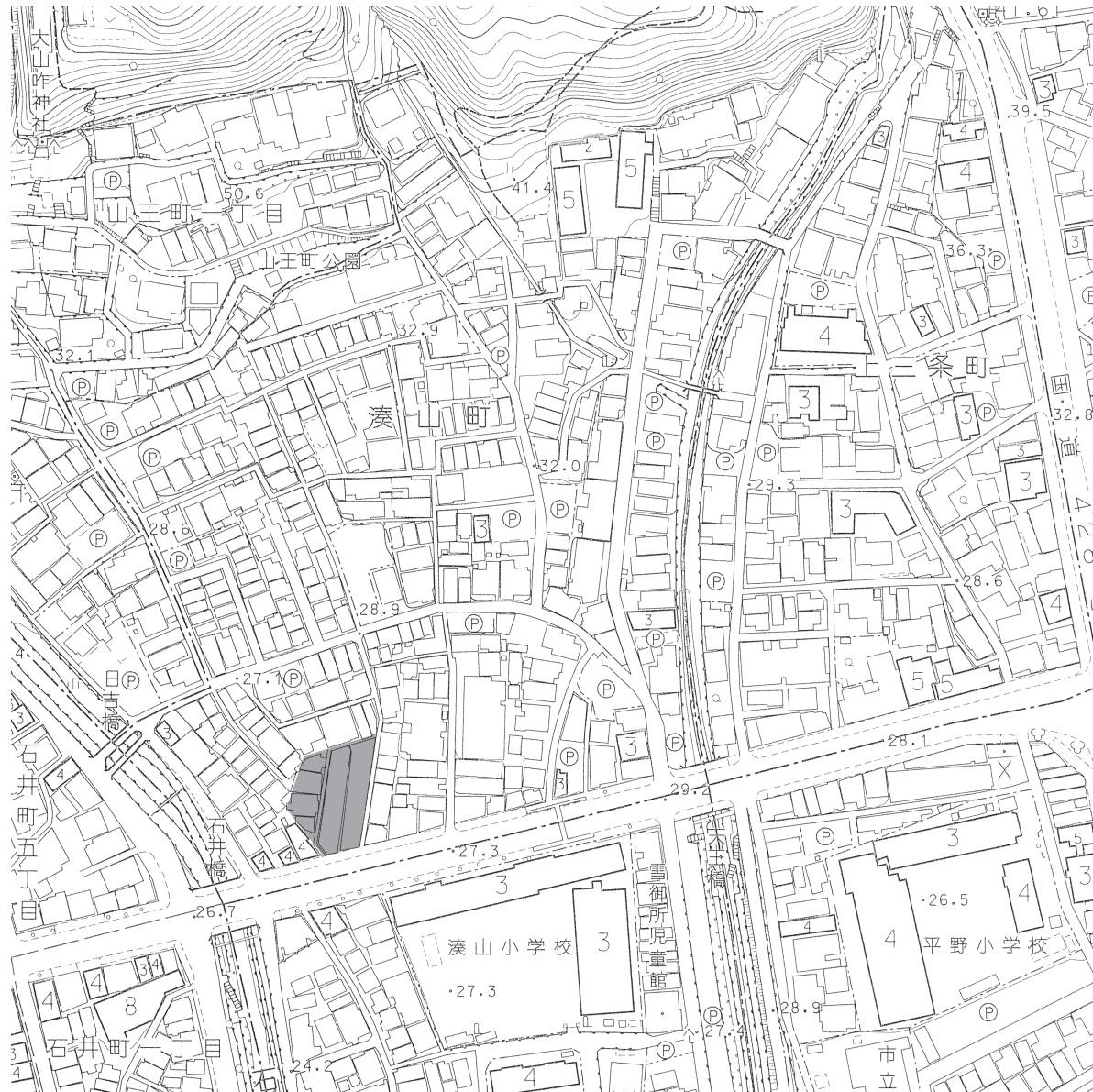


fig.62 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は店舗付共同住宅の新築に伴うもので、敷地は扇状に開く台形の形状をしている。

基本層序

基本層序は、近現代の搅乱が多く、遺物包含層が浅い深度で確認されるため、基本層序の残る部分は少なかったが、西壁北半での層序は上から順に、近現代整地土、近世頃の整地土、遺物包含層、地山と続く。旧耕作土は全く遺存しておらず、削平されたため消滅したと考えられる。近世頃の整地土は暗黄色砂で、敷地西側の一部分にのみ存在している。遺物包含層は黒茶色砂で、平安時代末頃と古墳時代初頭の遺物を含んでいた。近世頃の整地土があるために土層図上では敷地北側にのみ遺物包含層が分布しているように見えるが、実際はほぼ敷地全域に分布している。地山は上層が淡黄褐色砂～粗砂で、搅乱の底ではその下層の淡黄色微砂が見えている。この2層の砂層は比較的粒度が均一な扇状地堆積物である。

検出遺構は、竪穴建物7棟、溝2条、土坑3基の他、ピット10基である。



fig.63 第3・4次遺構平面図

SB01

調査区中央西半で検出した方形の竪穴建物である。一部が搅乱で破壊された部分があること、また地山が軟弱な砂層であることから遺存状況が悪い。規模は、東西4.9m、南北4.9m、深さ25cmを測る。床面に柱穴になる可能性のあるピットは確認できなかった。中央には東西約1.5m、南北1.6m、深さ約20cmの中央土坑がある。竪穴建物埋土からは、庄内式併行期でも比較的新しい時期の遺物が出土しており、古墳時代前期の遺構と考えられる。

SB02

調査区中央付近で検出した竪穴建物である。規模は、東西3.8m、南北4.2m、深さ25cmを測る。床面には柱穴になる可能性のあるピット2基を確認したが、本来は4本柱の建物であったと考えられる。中央には長径約1.3m、深さ約20cmの中央土坑がある。後述のSB03を切っており、調査した中で最も新しい竪穴建物である。時期としては出土遺物から古墳時代後期（MT15型式併行期）に相当する。

SB03

調査区中央付近で検出した竪穴建物である。規模は、東西6.7m、南北6.1m、深さ0.5mを測る。床面には柱穴になる可能性のあるピット6基を確認したが、建物に伴う柱穴は特定できていない。北東に竈がある。SB04・SB05・SB06を切っており、時期としては出土遺物から古墳時代中期（TK23型式～TK47型式併行期）に相当する。

SB04

調査区中央SB03の北で検出した竪穴建物である。規模は、東西6.2m、深さ20cmを測る。北にベッド状の段をもつ建物と当初考えられたが、最終的に2棟が切り合うものと判断した。下層建物をSB04a、上層をSB04bと呼称する。ほとんどがSB03に切られており、一部土坑を検出したにすぎない。竪穴建物埋土からは、庄内～布留式併行期の遺物が出土しており、SB04aは古墳時代前期初頭（庄内式古段階併行）、SB04bは古墳時代前期（庄内式新段階併行）に相当する遺構と考えられる。SB04aは、SB06に切られているが、SB04bについてはSB06との切り合い関係は確認できていない。

SB05

調査区中央SB03の南で検出した竪穴建物である。規模は、東西5.8m、深さ5cmを測る。ほとんどがSB03に切られており、一部を検出したにすぎない。竪穴建物埋土からは、庄内式併行期の遺物が出土しており、古墳時代前期（庄内式中段階併行）の建物と考えられる。また、建物の南東隅には、土坑SK14を検出しており、南西隅には貯蔵穴と思われる土坑SK07を伴う。

SB06

調査区中央東付近で検出した竪穴建物である。規模は、東西4.1m、南北4.0m、深さ40cmを測る。中央には長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約0.5mの中央土坑がある。北東隅と南西隅には貯蔵穴と思われる土坑を2基検出している。SB03・SB07に切られており、SB04aを切っている。時期としては出土遺物から古墳時代前期（庄内式中段階併行）に相当する。

SB07

調査区中央東端で検出した竪穴建物である。規模は、東西4.5m、南北5.0m、深さ44cmを測る。建物の東半は調査区外に延びており、一部SB06を切っている。床面には柱穴になる可能性のあるピット1基を確認したにすぎない。竪穴建物埋土からは、布留式併行期

の遺物が出土しており、古墳時代前期に相当する。

SK14

SB05内で検出した直径約0.55mの円形土坑である。最深部の深さは約30cmを測る。庄内併行期に相当する土器2個体が出土し、上位の甕の体部が下位の壺の口縁部を塞ぐように配されていた。甕は土圧によって上半部を欠き、陥没した体部破片が広口壺の口縁部内側に及んでいる。下甕の内部は遺構面ベース層に類似した褐灰黄色中砂～細砂で満たされ、一時的な堆積状況を示している。これらのことから、SB05に伴う土器埋設遺構と考えられる。

SP36

SB03下層で検出した直径約0.65mの深いピットである。検出面からの深さは約20cmで、ピットの底から庄内式併行期の小型鉢が立位で出土した。小型鉢の外面には線刻絵画が描かれている。SB05に伴う遺構と考えられるが、切り合い関係からは判断できない。

SK03

調査区北西隅で検出した土坑である。調査区西側外に向かって緩やかに傾斜しながら続くため全体の規模は不明だが、現状で南北4.1m以上、東西1.8m以上である。最深部の深さは約0.6mで、埋土は堆積状況から褐灰色系砂の上層と、灰黄褐色系砂の下層に大きく2分される。上層では北半部で拳大から径0.6m程度の風化花崗岩礫がまとまって出土した。礫は不規則ながらも南北方向に並んでいたようであるが、全体の配列は不明である。下層では同じく北半部に集中して13世紀前半の土師器が多量に出土し、それに伴い少量の須恵器と青磁も出土している。土師器はSK03の傾斜に沿って深度を増すにつれ重層的な堆積状況を示し、人為的に投棄されたものと考えられる。

上層と下層の両方で13世紀前半の土師器が出土していることから、短い期間のなかでSK03が改変されたことがうかがえる。苑池に関連する可能性も推測できるが、SK03が遺構の中心施設でない可能性も含め、詳しい性格は不明である。

3. まとめ

平氏関連遺跡として名高い雪御所遺跡ではあるが、発掘調査の事例は少なく、実態が良く判らない遺跡でもあった。しかも今回は市道山麓線を挟んで遺跡の北半での調査であり、開始前から平氏関連遺構の検出が予想されていた。また、隣接する3次調査では、古墳時代初頭の竪穴建物ならびに平安時代末の遺構を確認しており、今回の調査でも同様の遺構が確認されるものと考えられた。調査の結果、鎌倉時代初頭の遺構や遺物を確認したが、同時に当該地周辺が既にかなり削平されていることも明らかとなった。

今回の調査で確認した遺構の内、明確に鎌倉時代初頭のものは性格不明の落ち込みSK03のみである。苑池の一部である可能性もあるが、調査区外へ大きく伸びるため、見解は保留しておきたい。

古墳時代前期の遺構は1次調査ならびに3次調査でも確認していたが、今回の調査で、4棟の竪穴建物を確認した。古墳時代中期後半の建物3棟も含めて、それぞれが切り合い関係を持つように隣接して築かれている。建物の時期としては、東灘区の郡家遺跡と同様に、古墳時代前期前半までいったん集落は途絶え、中期後半に再びこの地域での居住を再開しているようである。今回の調査で鎌倉時代初頭の遺構ならびに庄内式併行期の竪穴建物を確認したが、庄内式併行期の竪穴建物群の広がりは今後の調査の進捗に期待したい。

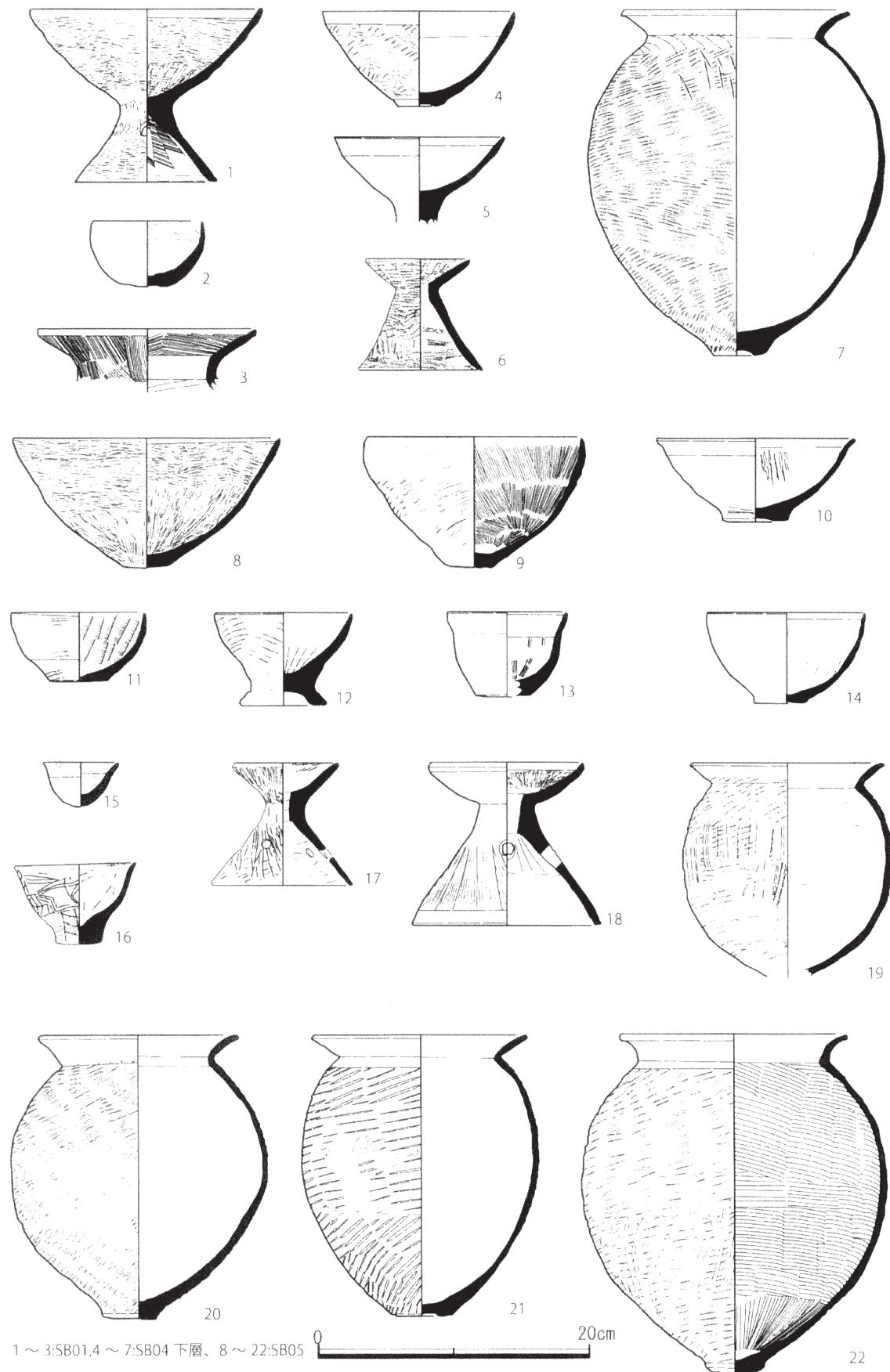


fig.64 出土遺物実測図（1）

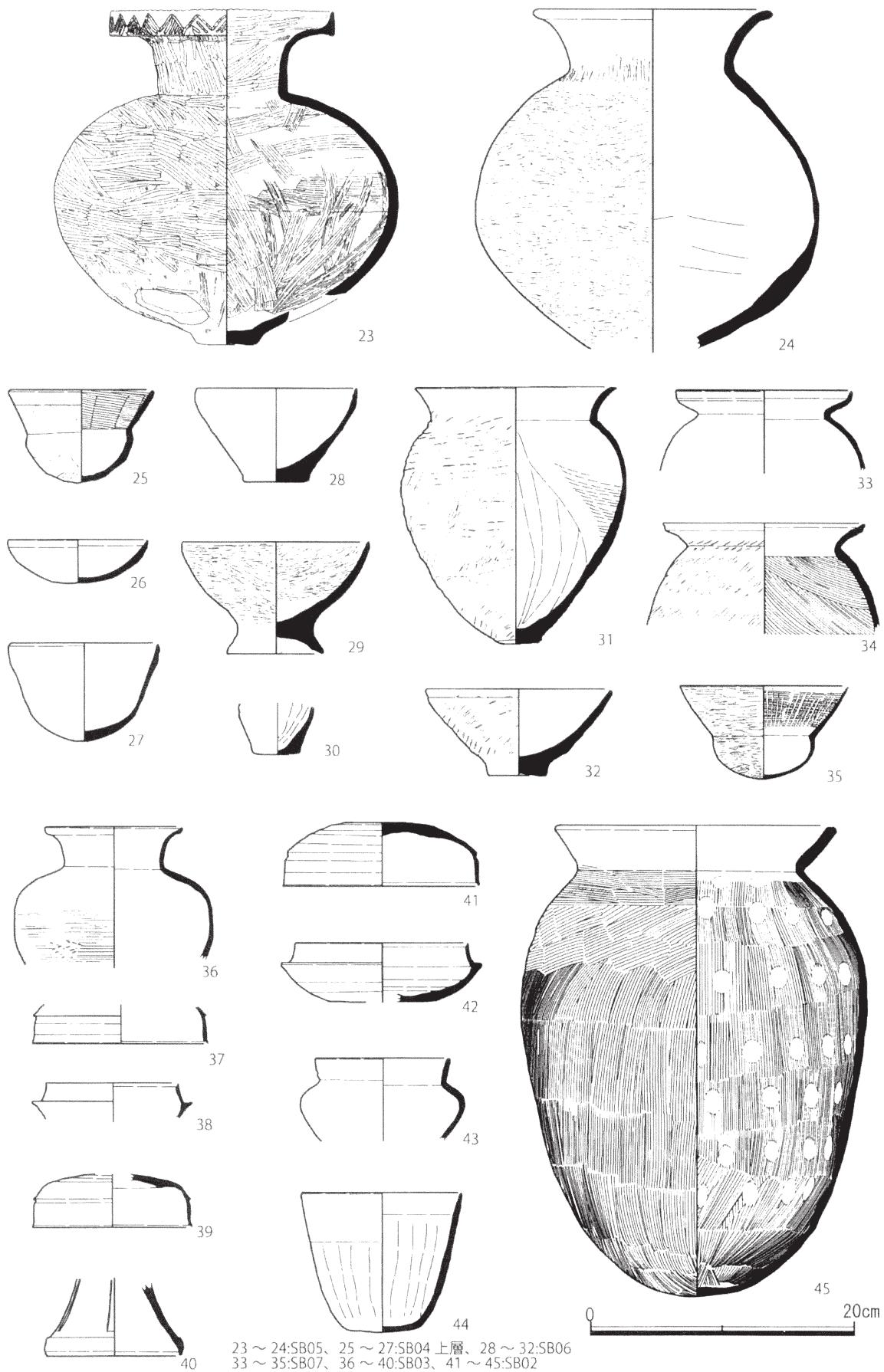


fig.65 出土遺物実測図 (2)

13. 楠・荒田町遺跡 第56次調査

1. はじめに

楠・荒田町遺跡が所在する中央区楠町と兵庫区荒田町の一帯は、北側に六甲山の山塊、東側は安養寺山から旧神戸海洋気象台のあった宇治野山、西側は会下山から滝山・菊水山と三方を囲まれた地形になり、北東から南西に延びる橢円形状の盆地地形となる。その地形は南にいくほど低くなるが、六甲山系から派生する石井川・天王谷川とその合流した湊川が中央を流れ、かつては宇治川も西流していたと思われる谷地形が残される起伏の多い地形である。

これまでの55次におよぶ調査から、弥生時代から中世に盛行した遺跡であることが判明している。特に、弥生時代前期における貯蔵穴、中期の竪穴建物・方形周溝墓等の遺構および出土遺物からは、この遺跡が弥生時代のこの地域の中心的な集落であったことを示している。

また、平安時代後期の福原京の存在はいまなお判然としないが、近年、同時期の壕や溝が並んで検出され、掘立柱建物等も確認されている。



fig.66 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、地盤改良を行うため、設計上3.8mまで影響が及ぶため、調査対象深度を GL-3.8mまでに設定して調査を行った。

基本層序

基本層序としては、盛土・旧耕土・床土となり、床土直下が第1遺構面となる。床土の下層が灰色シルト混細～中砂で、この層の下面の黒褐色細～中砂の上面が第2遺構面である。

第1遺構面

SD01

調査区南半で検出した SD01は、東西方向に走る、幅6.3m以上、推定で12m以上の大溝である。深さは2.5m以上あり、断面はやや緩いV字状を呈する。壁面は直線的な傾斜であり、断面には木質と考えられる痕跡を確認していることから、人工的に掘削され、壁面にシルトブロックを貼り付けて直線的な傾斜を整形した上に板材を壁面に貼っていた可能性がある。溝の最下層より脚をもつ瓦質火鉢の一部が出土しており、この大溝の時期は、15世紀以降と考えられる。

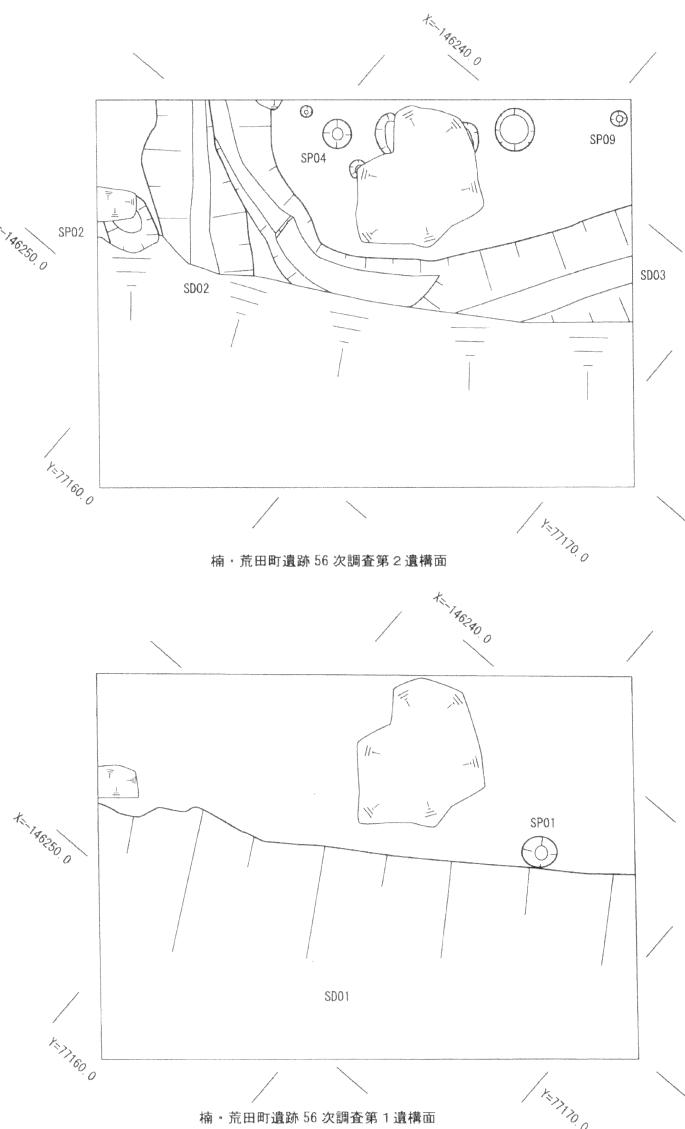


fig.67 第1・2遺構面平面図

第2遺構面

第2遺構面では方形周溝墓と土坑を検出した。

方形周溝墓

方形周溝墓の溝は、調査区西半で検出した南北方向の溝（SD02）がSD01に切られながら、L字状に東に折れている状態で検出した。

西の東西方向の溝は幅3.2mを測る。この南北方向の溝は、西と東の方形周溝墓の溝が重なった部分で、西の方形周溝墓の溝が東の方形周溝墓の溝を切っているのを断面で確認している。断面観察の結果からみて、東の方形周溝墓の溝が完全に埋まりきらない時期に西の方形周溝墓の溝を掘削しており、そのため最終堆積の段階では、双方の溝が同時に埋まるような堆積となっている。周溝内からは破片と共に甕など完形に近い弥生土器も出土している。これらの遺物は、溝の床面から浮いた状態で出土しており、溝の埋没開始後に、盛土上の供献土器が盛土の崩落と共に落下した遺物である可能性が高い。その出土遺物からみて、築造時期は弥生時代第Ⅲ様式新段階の時期と考えられる。

以上のように、今回の調査では方形周溝墓2基を検出することができた。しかし、調査区外へ拡がる部分が大きいため、主体部を確認することはできなかった。

その他の遺構としては、土坑やピットがあるが、いずれも出土した土器が小片であり、時期については不明である。ただ、検出面の上面の灰色シルト混細～中砂からは、中世～古墳時代までの遺物が含まれており、それらの時期の遺構と弥生時代の遺構をこの面では同時に検出していることが考えられよう。

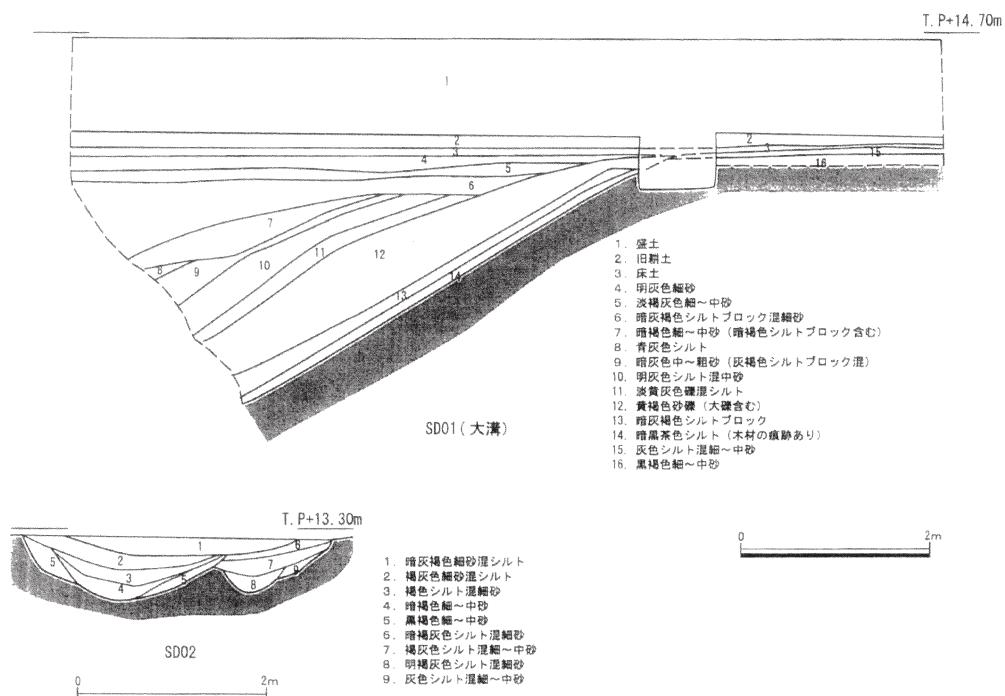


fig.68 SD01・SD02土層断面図

3. まとめ

今回検出したSD01（大溝）は、隣接する第10・11次調査で確認されている大溝に続くと考えられ、かなり大規模な構造物と考えられる。なお、第31次調査では、幅6mの溝が検出されており、11次調査で確認されている北側の溝に続くとされている。また、34次調査でも断面の状況から今回検出した大溝の一部が調査区南の壁にかかっていると考えられ、この大溝はかなり広域に広がる可能性がある。その機能や用途については、範囲や全体像が見えない段階では差し控えるべきではあるが、大倉山南面を防御する施設の一部である可能性が考えられる。

また、今回検出した方形周溝墓は、第1次・6次・11次・17次・20次・32次調査で計11基、確認しており、弥生時代中期古段階より、中期新段階まで造墓を継続する墓域と考えられる。ただし、中期古段階では、竪穴建物も確認されているため、墓域と居住域として利用されていた区域が、後に全体が墓域へ移っていったと考えられる。

今回は居住に関連する遺構は確認できなかったが、周辺の調査成果を統合することによって、弥生時代の居住域と墓域の変遷はある程度推測が可能な段階にきている。

それは、前期以降、中期古段階まで地形の高低のレベルに合わせて、北側が集落域、南が墓域となっていたと考えられる。今後の周辺の調査の進展によってその具体像はより明確になるであろう。

14. 兵庫津遺跡 第59次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。古くは「大輪田泊」と呼ばれ文献上にもたびたび登場する。とくに、平安時代後期に平清盛により経ヶ島が築造され日宋貿易の拠点とされたことは著名である。中世になり兵庫（島）と呼ばれるようになってからも、寺社勢力の庇護のもとに瀬戸内海運の主要港として栄え、室町時代前期には明との通商の窓口として整備される。戦乱の世になると、兵員や軍需物資の輸送などの兵站的な面からも戦国大名達によって着目されるようになり、有力な豪商が保護育成されていったが、天正8（1580）年に兵庫の町は織田信長方の軍勢による花熊城攻めの際に攻撃される。この後、織田・豊臣の勢力下のもとで、兵庫城が築かれて町の城郭化が進められていく。都賀堤や遺跡の北西の寺町はこの名残とされている。

近世の兵庫津は、当時の経済の中心地で大消費地でもあった大坂の外港としてだけでなく、西国との人の往来、物資の流通量の増加に伴って物資の集積地として、さらには西国街道の宿場町として発展を続け、慶応3（1868）年に兵庫（神戸）開港をむかえる。明治時代になると初代兵庫県庁が兵庫陣屋跡におかれるが、新川運河の開削によって北西の1/3ほどが削平され姿を消す。一方開港に伴って整備されていった遺跡東方に隣接する波止場や旧外国人居留地の建物などの歴史的景観は今なおミナト神戸のシンボルとなっている。

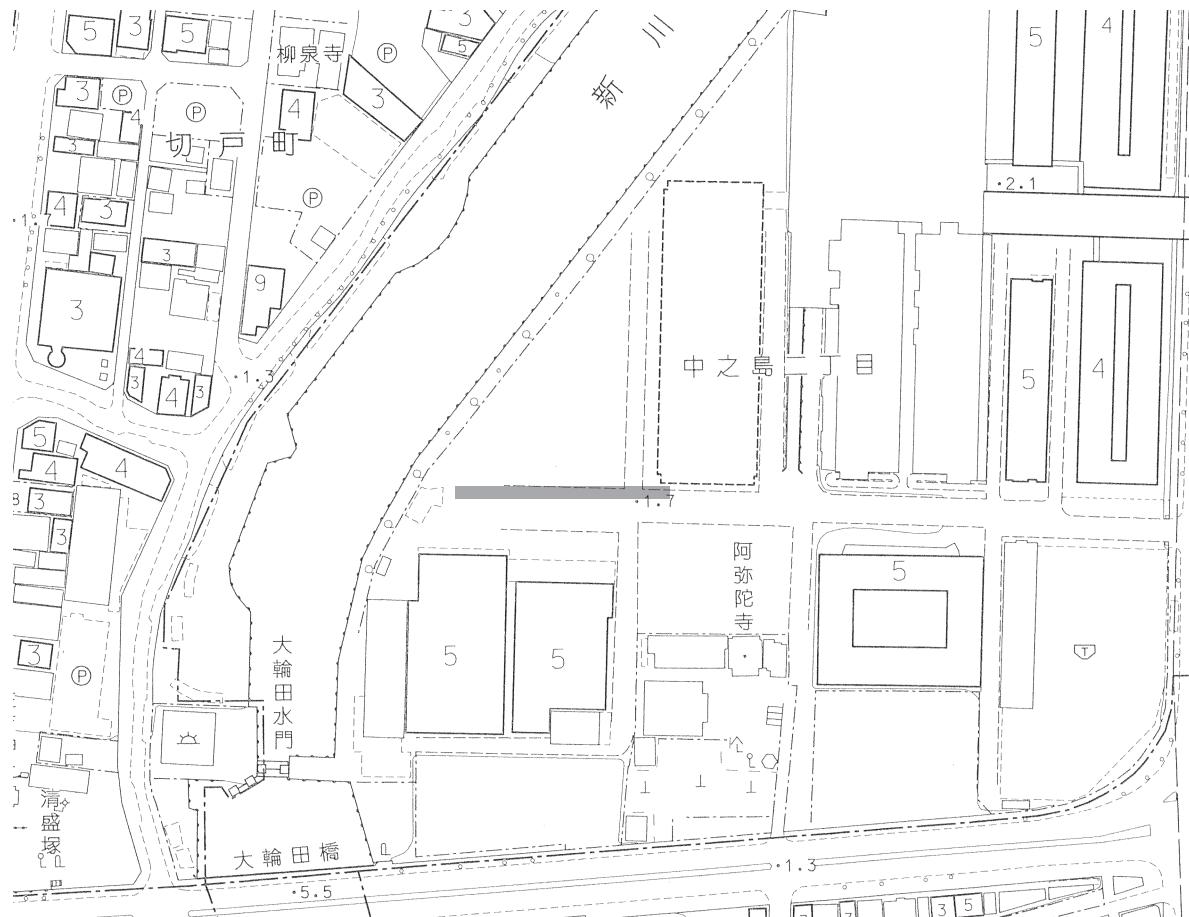


fig.69 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査区は、旧中央市場跡地で平成24年度に実施した第57次調査地の南に隣接する場所にある。同調査においては、兵庫城の石垣や堀をはじめ近世の町屋群などが確認されている。

今回の調査は、下水管の移設に伴うもので工事によって埋蔵文化財に影響のある約50m²を対象として実施した。

基本層序

調査地は、地表面（T.P.1.8m前後）より深い削平を受けており、基本層序は、近現代の整地の盛土が1.5mほどの直下に薄い近世の包含層（整地層）が残存している部分がみられるものの明褐黄色砂の遺構面となる。なお明褐黄色砂の検出面はT.P.0.2~0.0mである。

検出された遺構は井戸3基、ピット3基と落ち込み状の遺構である。

SE01

調査地の東部で検出した井戸である。上部を搅乱により削平され北側半分が調査区外となる。掘形は直径1.2mで深さ0.9m、直径約0.8mの縦板を使用した井戸枠をもつ。枠内から近世棧瓦片、伊万里片などが出土した。

SE02

調査区の西端で検出した井戸で、すぐ西に隣接するSE03と切り合い関係にあり先行して造られたと考えられる。掘形の直径は1.3m、深さ1.3m、直径0.7mほどの底板を抜いた木桶を2段重ねて井戸枠としている。出土遺物などから、近世後期の井戸と考えられるが詳細な時期は不明である。枠内から中世瓦質羽釜、東播系須恵器捏鉢、滑石製鍋底部片などと共に近世陶磁器、棧瓦片などが出土した。

SE03

前述のSE02の西側でSE02の掘形を切って造られた井戸である。南側の一部を工事用の土留めによって壊されている。また上部は搅乱によって大きく削平されている。掘形の直径は0.8m、深さ40cm、直径0.6mほどの底板を抜いた木桶を井戸枠としている。遺物には黒色土器塊片や13世紀末頃の土師器小皿片が出土したが、井戸の所属時期は確定できない。

土坑

調査区の東部において2基の土坑（SK01・02）を検出した。いずれも20×30~40cmほどの不整形の平面で深

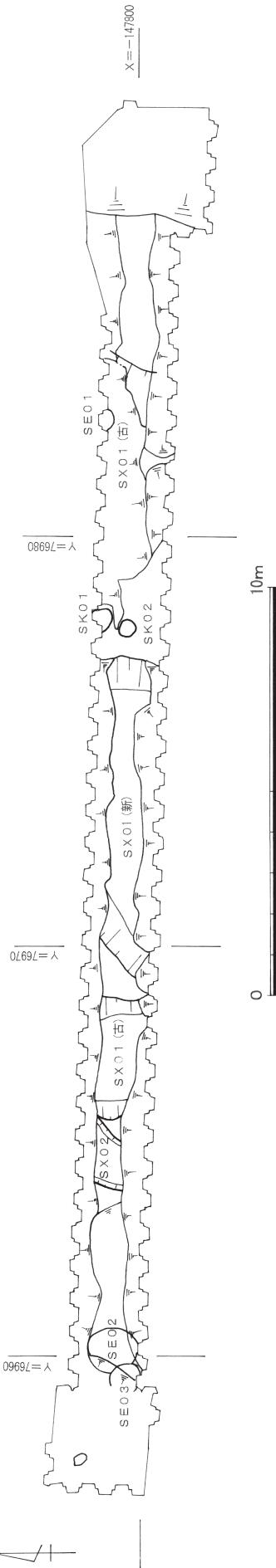


fig.70 遺構平面図

さ10~15cmと浅く、遺物も殆ど出土しなかった。

SX01（新）

調査区の中央～西部にかけて検出した東西幅8.0m、深さ0.5mの落ち込み状の遺構である。東側で底面に打ち込まれた木杭の痕跡が確認された。板材とみられる破片も出土している。遺物は16世紀前半の備前焼擂鉢、15世紀中頃の古瀬戸直縁大皿、東播系須恵器捏鉢、石硯、瓦片などが出土地した。なお、このSX01は、埋土の状況からさらに古い時期の落ち込みが東側に拡がることを確認した。

SX01（古）

調査区の東端より2m付近からはじまる東西幅22m、深さ約1.0mの落ち込みで、前述のSX01の古い段階の遺構と考えられる。埋土には、中世後期の遺物を比較的多く含む。東側の肩部には、搅乱による削平のため原位置を留めずに不明確であるが、石垣とこれに伴う裏込めとも考えられる石組みの痕跡がみられた。遺物として14世紀後半～16世紀前半までの備前焼擂鉢、15世紀中～後半の常滑甕、中国製白磁四耳壺片、同青花皿、同青・白磁、東播系須恵器捏鉢、13世紀代の瓦器塊、黒色土器A類塊、フイゴ羽口、14～15世紀を中心とする瓦などがあり、混入品としてごく少量の近世遺物を含む。

SX02

調査区の西部で検出した幅2.8m、深さ30cmの落ち込み状の遺構である。西側の肩部は、搅乱によって大きく削平されている。近世前期～後期の陶磁器や瓦類が出土した。

3. まとめ

今回の調査は限られた部分の調査であったものの、中世後期～近世にかけての遺物や遺構を確認することができた。特にSX01の古い段階の遺構については、時期や検出された標高などの点において、かなり広範囲を調査した隣接の第57次調査では確認されなかったものであり大変興味深い。時期は下るもの、元禄時代に作成された兵庫津絵図は精度の高いことで知られているが、調査区周辺には入り江が描かれており、石組みと思われる痕跡は護岸の石垣などである可能性も考えられる。

なお、SX01（古）として検出した遺構については、平成25～26年度に実施された第62次調査によって、さらに北東方向に拡がり木杭や石積み護岸施設であることが確認された。

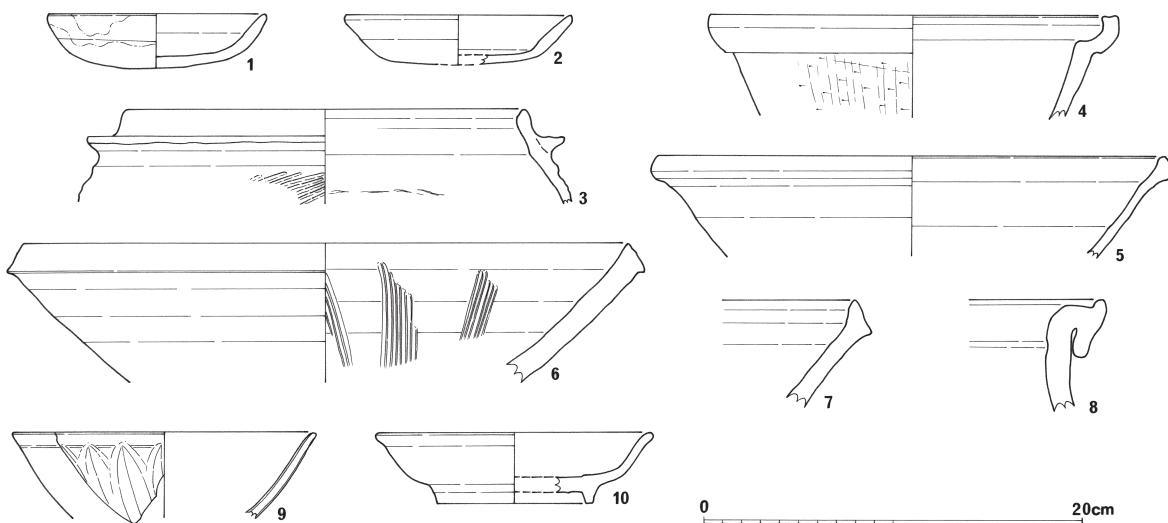


fig.71 SX01（古）出土遺物実測図（1）

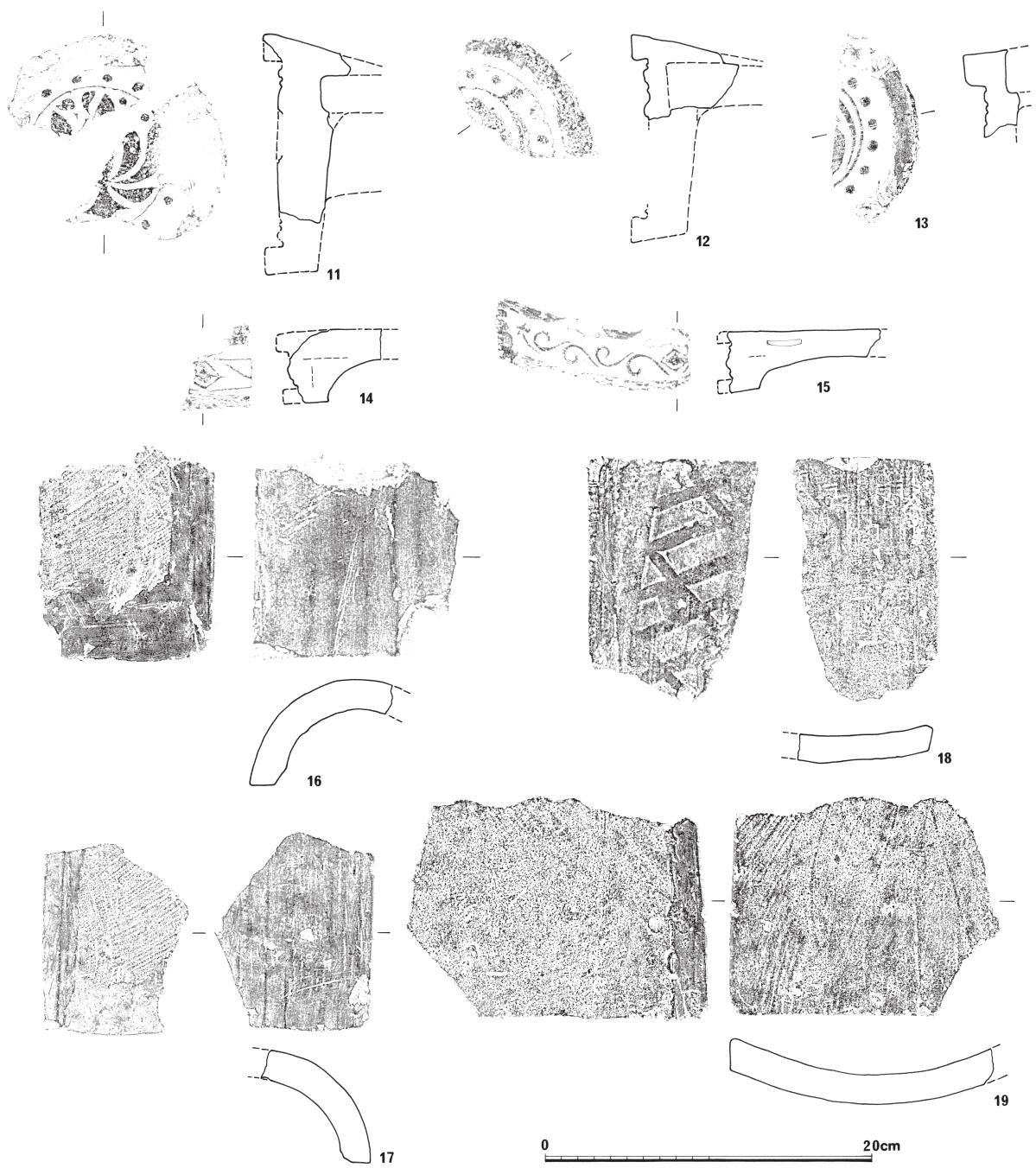


fig.72 SX01 (古) 出土遺物実測図 (2)

15. 兵庫津遺跡 第60次調査

1. はじめに

今回の兵庫津遺跡発掘調査対象地は、JR 兵庫駅の東、またはJR 神戸駅の南に約 1 km の地点で、調査を重ね今回の調査が第60次調査となる。北側に第14次調査地区が接し、東側に第53次調査地区が近接している。

2. 調査の概要

共同住宅建設に伴う発掘調査で、計画建物の基礎等により埋蔵文化財に影響がおよぶ範囲について発掘調査を実施した。2、4～6 tre は、基礎梁部分となり調査結果として、第2 遺構面までを検出調査した。1、3 tre は、基礎杭と基礎梁部分で第4 遺構面までを検出調査した。B.P. 3 は、基礎杭部分で調査可能な深さまで発掘調査した。1 tre と B.P. 3 の間は、基礎梁予定地となるが、この箇所には現代の井戸があり、遺跡が残存しないと判断し発掘調査は行わなかった (fig.74参照)。

調査は表土等を重機で掘削し、それ以下を人力によって発掘調査を行った。敷地内に仮置可能な土量を検討しながら、調査完了地区毎に埋戻しを行いつつ、次の調査地区的掘削を行い、作業効率を図って発掘調査を進めた。また各調査地区との整合性を保つため、基準点測量を実施した。出土遺物は、28 ℥ 入コンテナに28箱分出土した。





fig.74 調査区位置図

基本層序

基本層序は、舗装材、現代盛土、及び戦災盛土、近代盛土（5層）となり、5層までで地表面より1m弱である。この下層が、幕末から明治初期の遺構面となる。以下概ね20cmごとに遺構面を検出した。これは先述の第14次、第53次調査の層位と標高と遺構面がほぼ一致している。9、10層からは多くの遺物が出土した。また1treSK401の最深部は標高0m以下となるが、湧水はなかった。

断面図に示した切石の上面で2m前後の竜山石の延石を東西方向（5tre北辺方向）に検出した。これらの石列の方向は、ほぼ現在の町割りと一致する。

B.P. 3

計5面の遺構面を確認したが、調査範囲が狭小のため、遺構として把握できたものはない。第1遺構面に至るまでに、断面図に示したように切石の石列が南北方向に検出された。近代まで建物の基礎として利用されていたようである。この石列及び1tre東壁で検出された切石には矢穴（Cタイプ）が数ヶ所ずつ確認された。これら石列の石材はほとんどが花崗岩で構成される。

7層は石列の位置から平面的には建物内部にあたり、土間（三和土）状のものと考えられる（第1遺構面）。同様に第2遺構面の次に11層（第3遺構面）が土間状の層として考えられる。この面には焼土と炭化物が多く含まれ、火災があったことが想定される。以下12層、13層上面が遺構面と考えられるが、今回の調査結果と第14・53次調査結果を今後検討する必要がある。

第1遺構面

石列101～石列104・SK101～SK103

遺構は石列が4ヶ所、土坑3基、溝状遺構1条、落ち込み状遺構3基、ピット2ヶ所を検出した。石列101から石列104は、いずれも東西方向に検出された。東西棟の町屋が並んでいたと想定すれば、第14次調査で判明した町屋の方向とほぼ一致している。

SK101

SK101は一辺1.3m、深さ30cmの方形の土坑で、径30cm前後の石をコ字状に組み、石組の外側に平瓦と棟瓦を立てて並べている。瓦片のほかに染付磁器や陶器などが出土した。

SK102

SK102はSK101に切られる長辺1.8m、短辺1.3m、深さ0.5mの不整形の土坑で、中央部

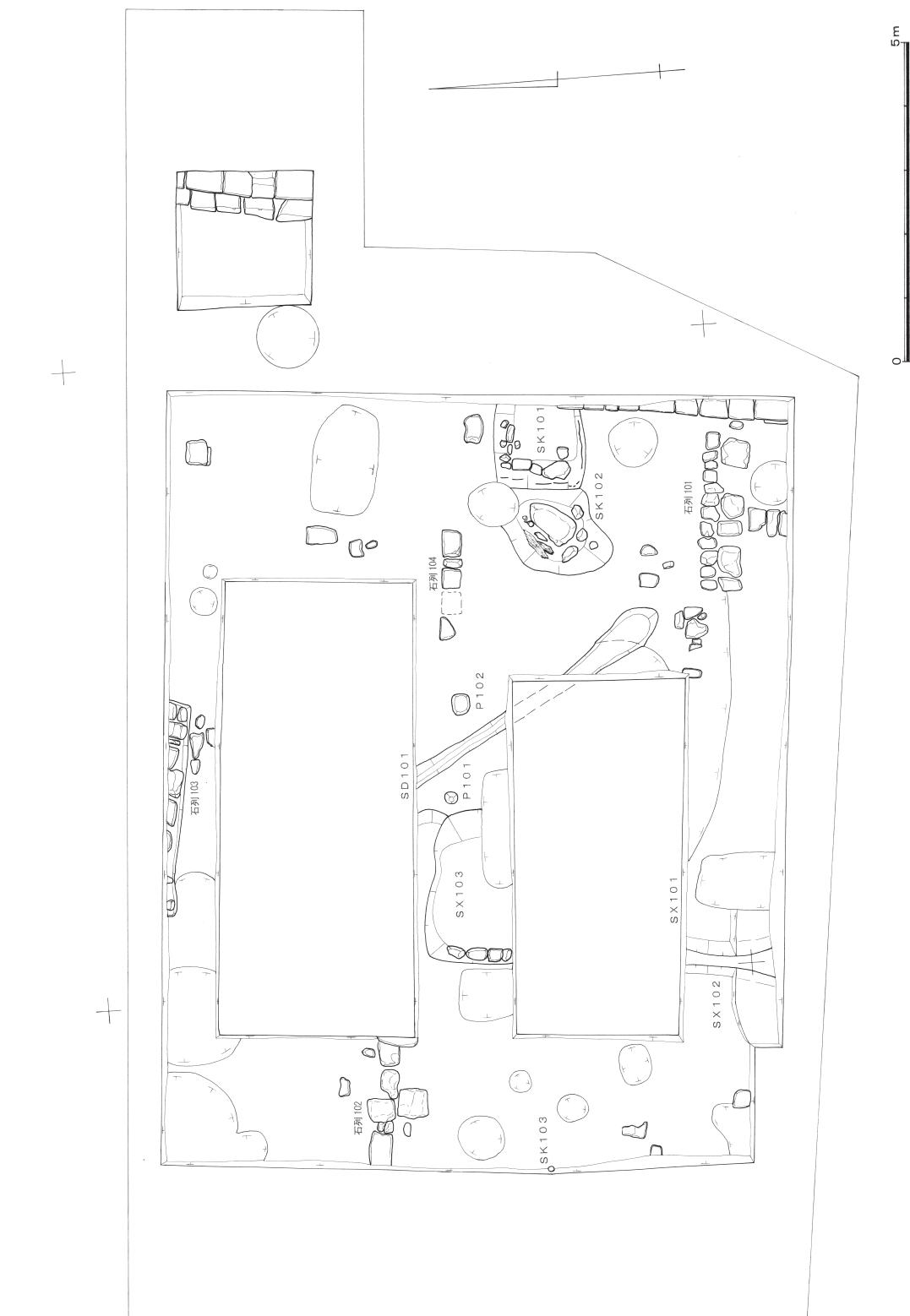


fig.75 第1遺構面平面図

から長辺0.8m、短辺0.4mの自然石、腐朽材、瓦片、染付磁器、陶器、貝（サザエ、アワビ）などが出土した。

SK103

3 tre SK103は、蛸壺を正置した遺構である。検出場所を建物の出入り口と仮定すれば、胞衣壺と考えられる。

SX101～SX103

SX101、102は5 treで検出した浅い落ち込み状遺構である。規模については不明である。瓦片、陶器が出土した。SX103は、4 treで検出した落ち込み状遺構である。東西2.4m、深さ30cmの規模で、西辺に南北方向に一部石組がある。埋土には、多くの焼土が含まれていた。瓦片、陶器が出土した。

第2遺構面

SK201～SK204

遺構は土坑7基、溝状遺構1条、落ち込み状遺構3基、ピット12ヶ所を検出した。SK201、SK202は深い土坑である。SK203は直径1.4m、深さ40cmの円形の土坑で、径0.8mの自然石を検出した。同様の自然石が西に接して検出された。この2石は、非花崗岩の火山岩で、既に第1遺構面で頭を出していた。建物の出入り口が西側で、東側が奥であれば、庭石に利用したものとも想像される。SK204は3 tre南部で検出した径1.4m以上、深さ10cmの深い土坑で、埋土には焼土、炭化物が多く含まれていた。瓦片、染付磁器、陶器、銭貨、土人形が出土した。

SK205・SK207・SX203

SX103の下層で検出した径2.3m、深さ0.5mの円形土坑である。径40cm前後の石を一段円弧状に組んでいる。瓦片、染付磁器、陶器が出土した。

他に4 tre SK207と5 tre SX203は、ともに高熱を受けた石が埋土から出土した。建物内部の平面的な位置を考慮すると煮炊き用の遺構かと考えられる。SX202は、幅1.8m、深さ30cmの溝状の落ち込み状遺構である。焼土、炭化物が多く含まれ、瓦片、染付磁器、陶器、銭貨、煙管等が出土した。

第3遺構面

SK301～SK304

1treと3 treでの遺構は石列が2ヶ所、土坑4基、落ち込み状遺構4基、ピット6ヶ所を検出した。SK301は直径1.0m、深さ0.6mの円形の土坑で、瓦片、染付磁器、陶器が出土した。SK302は深い土坑、SK303、SK304は円形の土坑で、SK303は直径1.4m、深さ0.5m、SK304は、深さ40cmである。ともに北半を搅乱に切られている。2基とも焼土と多量の瓦片が出土し、廃棄用土坑と考えられる。

SX301・SX302

石列301の北側で、花崗岩の割石を用いた石敷を東西2.0m、南北0.6mの範囲で検出した。SX301、SX302はともに平面的に明確に区別できなかったが、焼土、炭化物を多く含む深さ20cmほどの堆積層である。SX301の南辺で、弧状に焼土が拡がる部分を検出した。両遺構から瓦片、染付磁器、陶器等が出土した。

SX303

幅2.9m、深さ30cm、断面台形の溝状の落ち込みである。瓦片、染付磁器、陶器、土錘などが出土した。SX304は幅1.0m、深さ20cmの溝状の落ち込みである。瓦片、染付磁器、

陶器、碁石、水滴、銅線などが出土した。他に 3 tre 南部では、ピット 5ヶ所を検出した。

第4 遺構面

石列401・SX401

遺構は石列が 2ヶ所、土坑 7基、落ち込み状遺構 4基、ピット 1ヶ所を検出した。石列 401の北側の SX401は、土間状の遺構と考えられる。

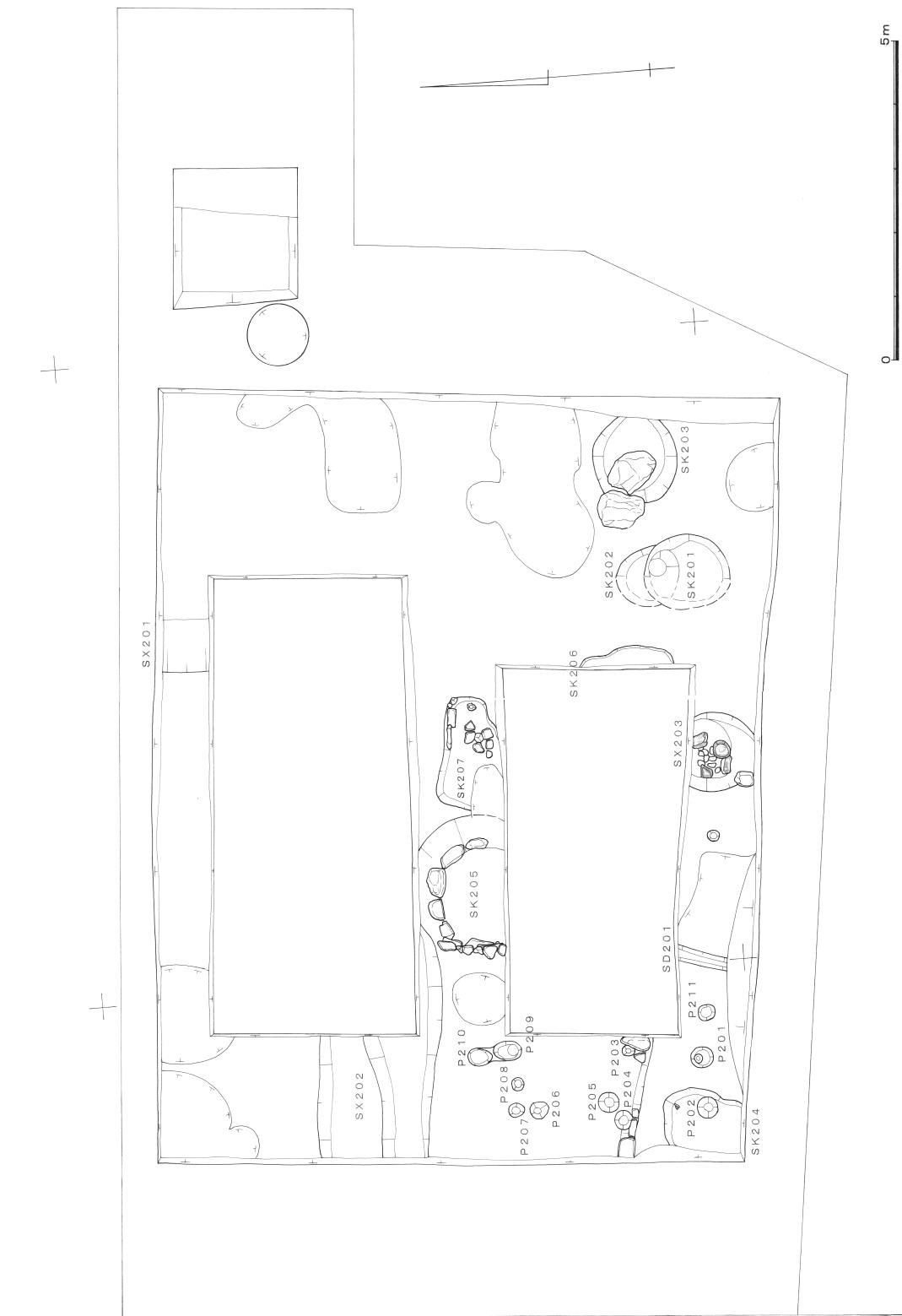


fig.76 第2遺構面平面図

SK401～SK406

1 tre 南半では、土坑を7基検出した。規模は SK401が直径1.3m、深さ1.8m、SK402が直径1.1m、深さ1.6m、SK403が直径0.9m、深さ0.6m、SK404が直径0.6m、深さ40cm、SK405が直径1.2m、深さ1.3m、SK406が直径1.2m、深さ0.9m以上、SK407が直径0.8m、深さ40cmである。

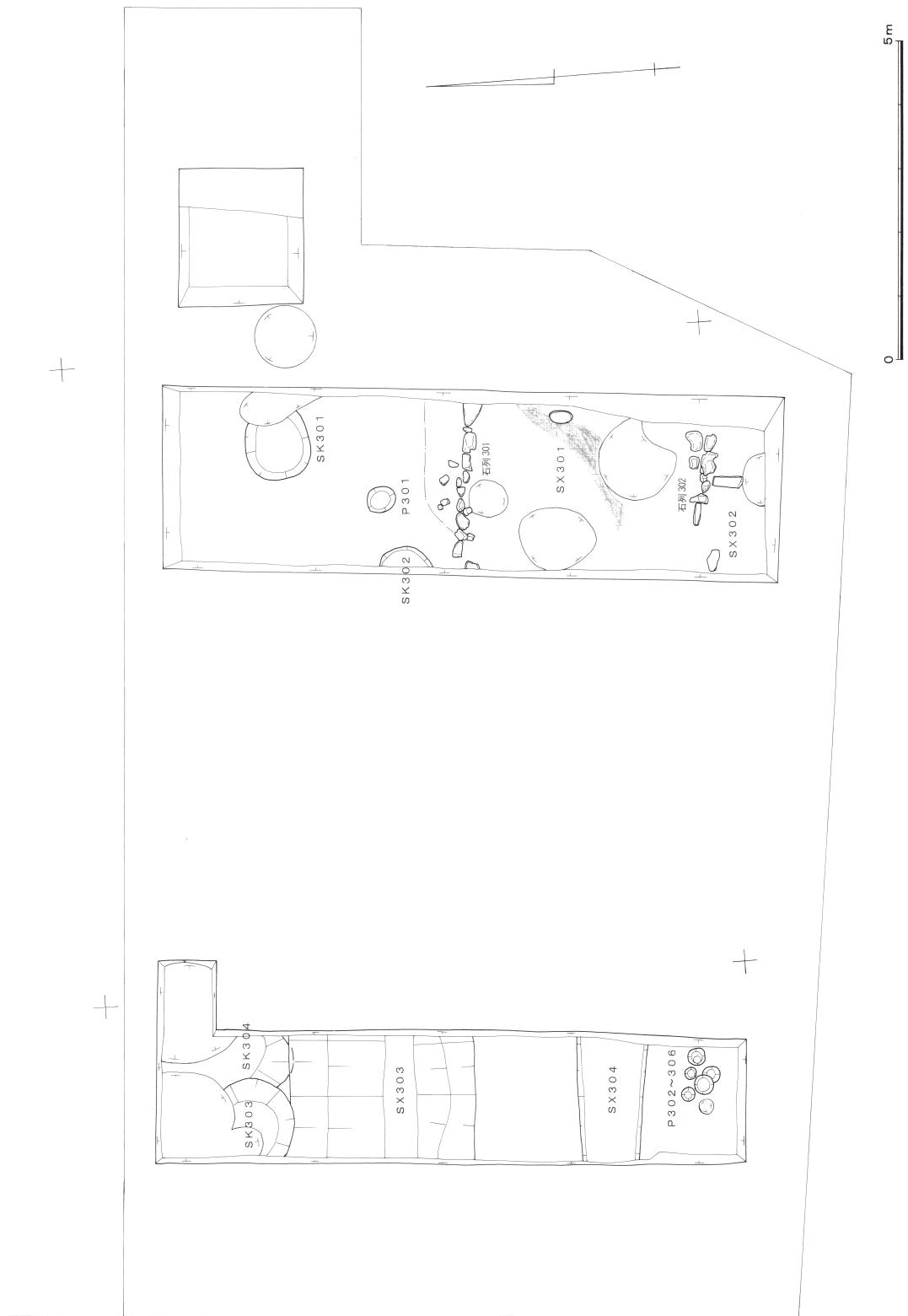


fig.77 第3遺構面平面図

規模から SK401、SK402、SK405、SK406は井戸と判断される。7基の遺構から瓦片、染付磁器、陶器等が出土した。また井戸とした遺構は、井戸枠の痕跡等がなく、素掘りの井戸と考えられる。

石列402・SX402～SX404

3 tre では、東西方向に検出された石列402を挟んで、北側に SX404（幅2.0m、深さ20cm）、

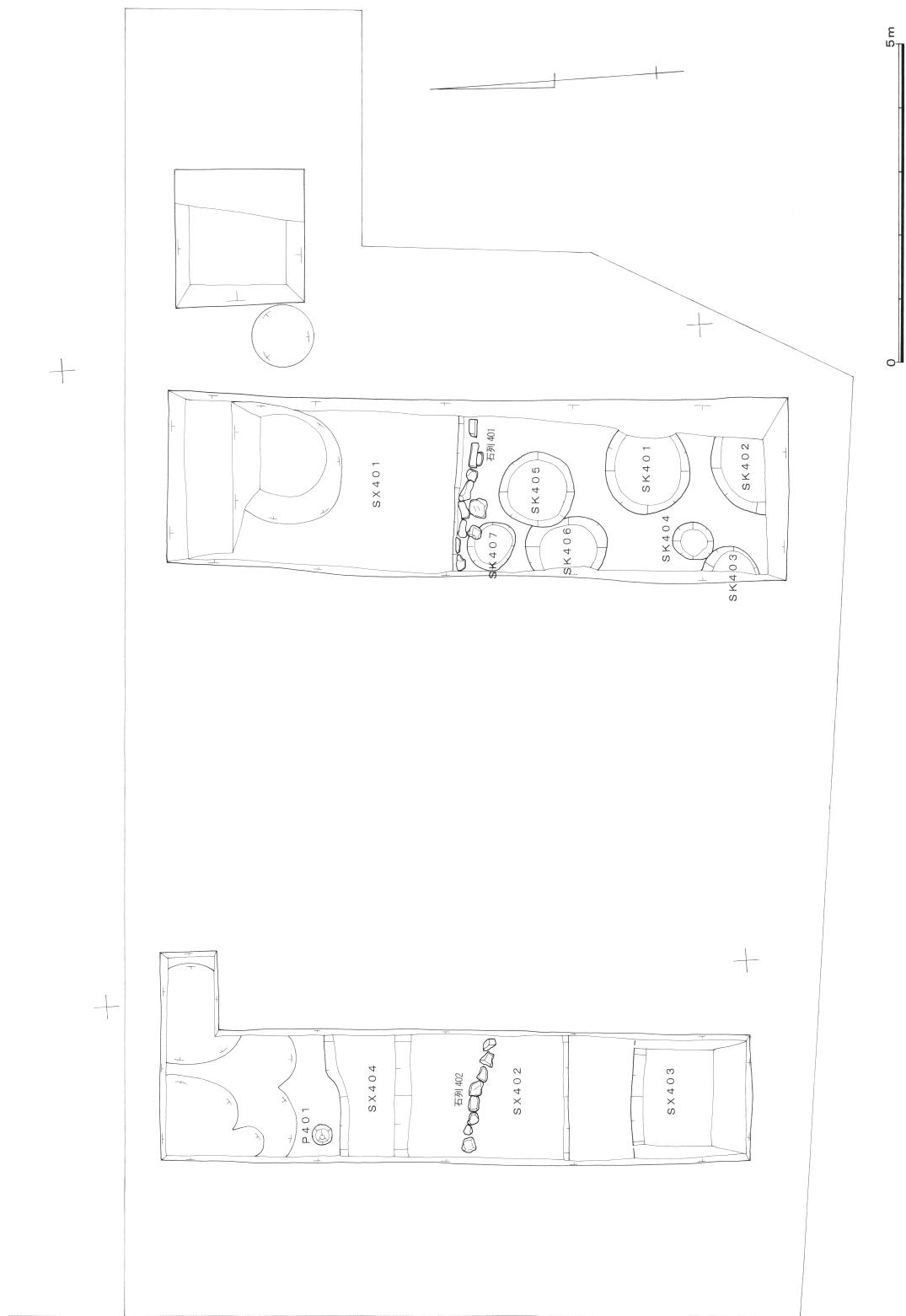


fig.78 第4 遺構面平面図

南側に SX402（幅1.2m、深さ20cm）、南端部で SX403（幅1.2m、深さ30cm）の南に下がる落ち込み状遺構を検出した。それぞれ瓦片、染付磁器、陶器、錢貨等が出土した。他に SX404からは煙管が出土している。瓦片の出土量は少なかった。遺構の性格については不明である。

3. まとめ

今回の調査地は、第14次と第53次調査地区に挟まれた調査地区である。第14次調査での天保九年の水帳絵図と発掘調査地点との合成図は、今回のようなトレンチ状の調査区では、大いに参考となり、既往の調査成果を踏まえて、調査をすすめることができた。これらの成果をかりれば、今回の調査結果は、江戸時代中期以降幕末までの遺構面を確認できたことになる。概ね今まで調査成果と、整合性のとれた調査内容となった。

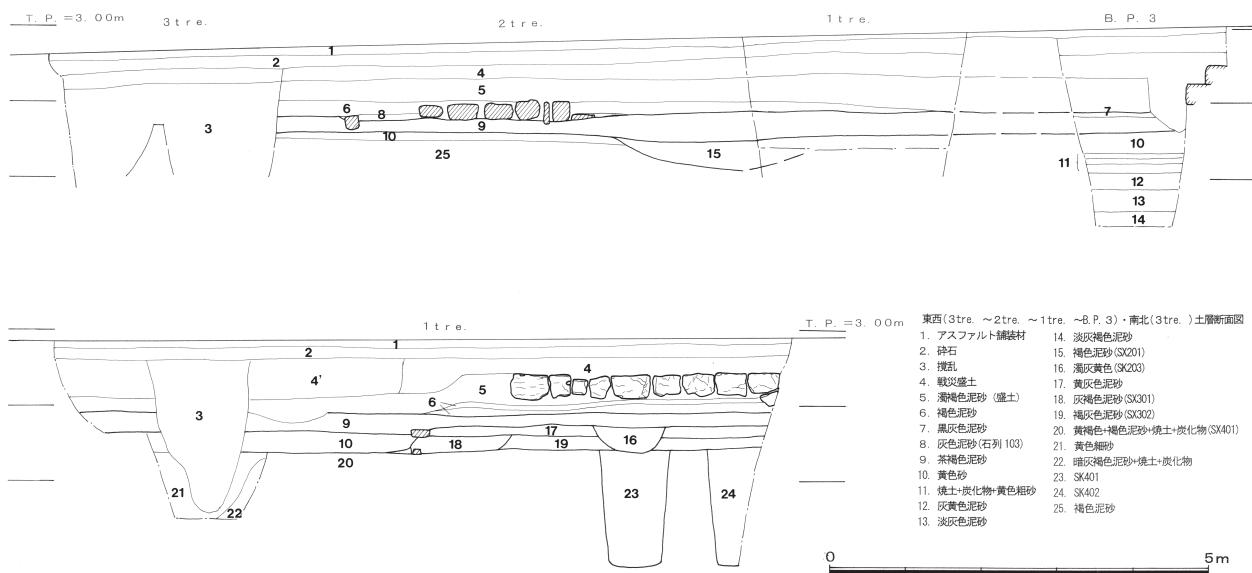


fig.79 土層断面図

16. 兵庫津遺跡 第61次調査

1. はじめに

近代神戸港の礎とされる兵庫津は、現在の兵庫区南部に所在し、港を中心とした町として古代より栄え、江戸時代後半には人口2万人以上を誇った。

近年の数十次にわたる発掘調査で、江戸時代の町場をはじめ、中世や奈良時代に遡る遺構の確認など、大きな成果が得られている。

今回の調査地は、兵庫津の町場にあたる箇所で、江戸時代に西国街道に設置されていた湊口惣門（兵庫津の東の玄関口）推定地や佐比江船入に近く、地子方（町方）内の岡方の一部にあたる。調査では、計5面の遺構面を確認し、中世～近世末期の遺構、弥生時代～近世末期の遺物を検出した。

2. 調査の概要

調査は残土置場の関係上、3分割で行った。東半部を1区、西半部を2区としたが、2区の第2遺構面以下については、さらに東西に2分割して行い、それぞれ、2区東、2区西とした。調査は、1区、2区の順で、2区の第2遺構面以下は、2区東、2区西の順で進めた。



fig.80 調査地位置図 1:2,500

基本層序

最上層は現代盛土および搅乱土で、その下層の一部に、整地層が遺存する。その下層上面が第1遺構面となる。以下の層位については、整地層もしくは沖積層が細かい層序で堆積し、それぞれの遺構面を形成している。

各遺構面の凡その標高は、第1遺構面が1.4~1.5m、第2遺構面が1.2~1.3m、第3遺構面が1.0~1.1m、第4遺構面が0.9~1.0m、第5遺構面が0.5~0.7mを測る。第5遺構面のベース層は、海岸浜堤を形成する砂層で、湧水が見られた。

第1遺構面

19世紀中頃の遺構面と考えられる。

石列を数条確認し、町屋建物の土間床境の可能性が考えられる。しかしながら、攬乱や削平を大幅に受けしており詳細は不明である。

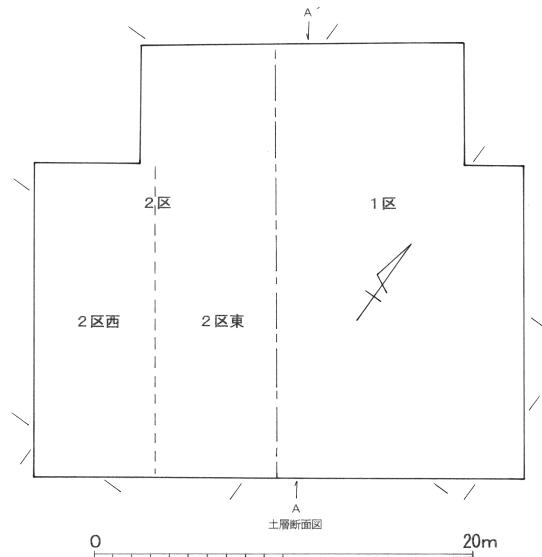


fig.81 調査区位置図

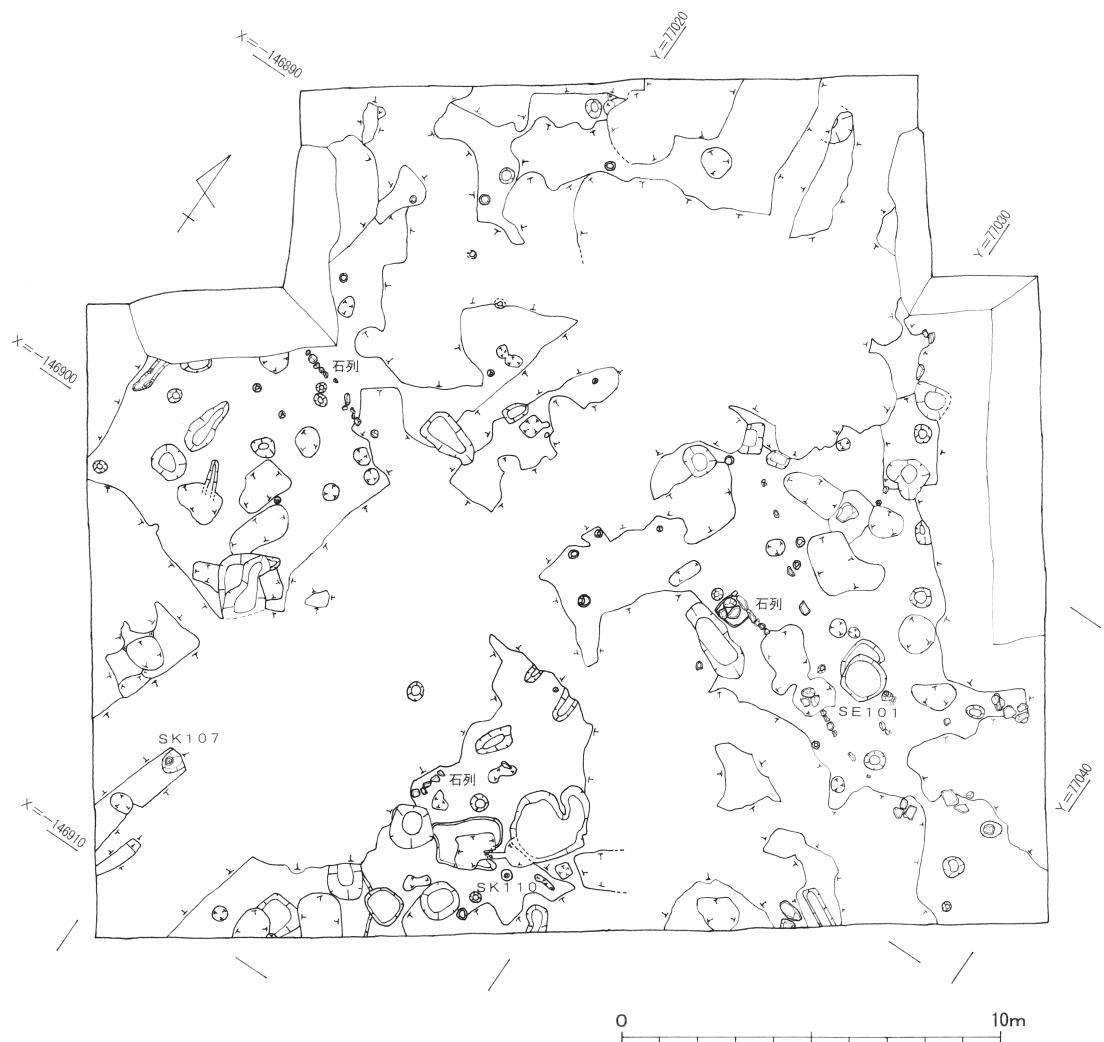


fig.82 第1遺構面平面図

土坑や井戸、落ち込み等、町屋建物に関連すると考えられる遺構も数カ所確認したが、その性格等は不明である。また、胞衣埋納遺構（胞衣壺、SK107・SK110）も2カ所確認した。

出土遺物はその多くが陶磁器の日常雑器類で、肥前系のものが目立つ。その他、瓦、灯明皿などを確認した。

第2遺構面

18世紀末～19世紀前半の遺構面と考えられる。町場に伴うと考えられる遺構を数カ所確認したが、やや大型で、細長い土坑状の遺構を多く検出した。性格は不明である。

また、1区の西側と2区東の北および南側において、大きな落ち込み状遺構を確認した。出土遺物も多くみられ、廃棄目的で掘削されたものと推察される。出土遺物は第1遺構面と同様に、陶磁器、陶器、瓦等が主流で、肥前系陶磁器の割合が高い。

第3遺構面

18世紀後半の遺構面と考えられる。上層遺構・搅乱等の影響で遺構面の遺存が悪いため、詳細は不明瞭であるが、小規模なピットや溝などを数カ所確認した。町場に関連するものと推察される。出土遺物は他の遺構面と比較して少ないが、陶磁器、陶器の日常雑器類が中心である。

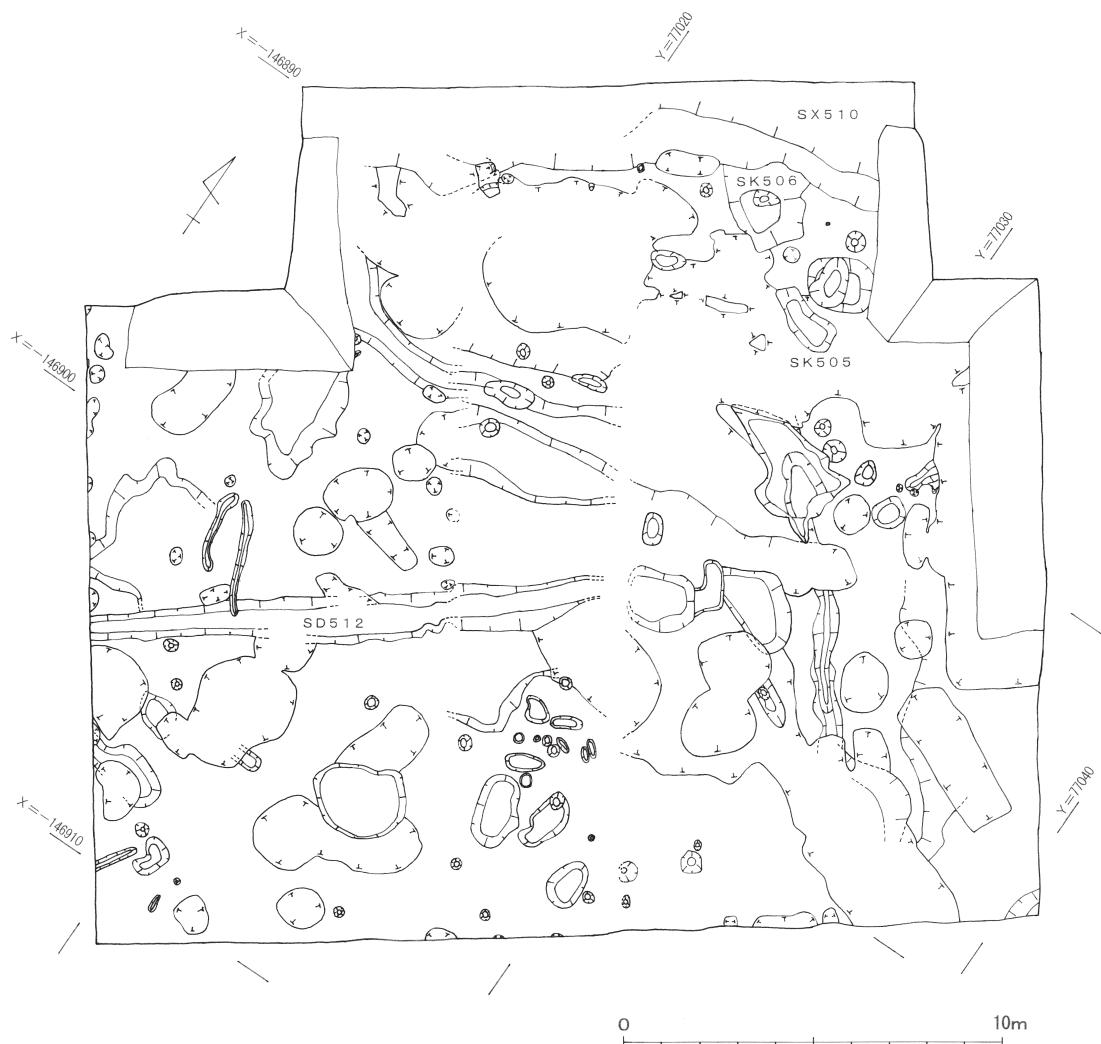


fig.83 第2遺構面平面図

第4 遺構面

17世紀末～18世紀中頃の遺構面と考えられる。

1区と2区とで様相が異なる。1区においては、幅約20cm程度の溝状遺構が密に存在する。形状、規模等から耕作痕の可能性がある。一方、2区ではこの耕作痕がほとんど存在せず、土坑や井戸状の落ち込みなどを検出した。

調査地が町方（地子方）の一部であることから、同時期においては町場としての土地利用であったと推測されるが、耕作痕が畠地利用に伴うものなのか、あるいは屋敷地内耕作の痕跡なのかは不明である。

同遺構面の出土遺物も、他の遺構面と比較して少ないものの陶磁器、陶器の日常雑器類が多い。

第5 遺構面

中世の遺構面と考えられ、13～15世紀代の遺構を確認した。層位の状況や標高から推測して、浜堤上にあたるものと考えられる。

1区の北西部から南東部にかけて、やや高まりがみられ、ここから南西部に向けてやや低くなる。また、調査区の北端部は、地形的に北側へ下がり傾向で、大きく落ち込む。土坑、溝状遺構、ピットなどが検出された。概ね13世紀後半～15世紀後半に属するが、13世紀後半～14世紀前半に該当する遺構（SK506ほか）が、数量的には多い。

出土遺物は、遺構内や遺構面を覆う層位より、弥生時代～中世（15世紀後半）に属するものを確認したが数量的には、12世紀後半以降のものが多く、13世紀後半～15世紀代では、土師器、須恵器の他、常滑焼の甕や奈良火鉢の破片もみられる。

一方、12世紀後半～13世紀前半のものについては、遺構内や遺構面を覆う層位、あるいは遺構面ベース層より数点確認した。いずれも破片ながら、土師器、須恵器の他、瓦器、輸入陶磁器（白磁・青磁）などを検出した。その他、古墳時代（5世紀末～6世紀初頭）の須恵器や弥生時代の土器片もみられる。

3. まとめ

今回の調査においては、中世～近世の遺構、弥生時代～近世の遺物を確認でき、500m²余りの調査地ながら、多くの成果が得られた。

過去の兵庫津遺跡の調査においても、さまざまな遺構、遺物を確認しているが、近世の町屋等、町場が数面（複数の遺構面）にわたって検出されるケースが多く、今回の調査の第1～4遺構面が該当する。

近世の兵庫津の町場形成は、天正8年（1580）の兵庫城築城や翌年の都賀之堤の構築以降に本格化するが、江戸時代を通じて町場の開発、拡大等が進められており、複数の遺構面の存在から、その実相を窺い知ることができる。

今回の調査においては、遺存がよくなかったものの、町屋をはじめとするさまざまな町場に関わる遺構を確認でき、その様相を垣間見ることができた。

また、中世の遺構も数多く確認できた。兵庫津はかつて大輪田泊と称され、平安時代後期には、平清盛によって日宋貿易の拠点として修築されたことはよく知られている。その後、瀬戸内海の主要港として発展するが、その実態は未だ不明瞭である。今回の調査成果は、その解明の糸口となる可能性が高いものと考えられる。

17. 大開遺跡 第14次調査

1. はじめに

大開遺跡は旧湊川西岸の沖積地の微高地上に位置する。

昭和63年以降断続的に発掘調査が実施されており、縄文時代晚期～近世の遺構・遺物が確認されている。特に第1次調査においては、弥生時代前期前半の環濠を伴う集落跡が確認され、初現期の環濠集落の良好な遺跡として、よく周知されている。

2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、敷地内の掘削工事を実施する箇所において、調査を行った。その結果、弥生時代前期末～中期初頭および中世の遺構、縄文時代晚期～中世の遺物が確認された。

調査は残土置場の関係上、南地区（A区。搅乱によって遺構面が寸断されているため、それをA-1～7に細分した）と北地区（B区）に区分して行い、A区、B区の順で調査を進めた。

調査においては、2面の遺構面を確認した。第1遺構面が中世（概ね12世紀後半～13世紀前半）、第2遺構面が弥生時代前期末～中期初頭の生活面と考えられる。



基本層序

現地表面より、1～1.1mの層厚で現代盛土および搅乱土が存在し、その下層に、灰褐色バイラン混り砂質土、濃茶灰色砂質土、灰茶色砂質土の順で続き、濃茶灰色砂質土の上面が第1遺構面となる。第1遺構面の標高は、約3.1～3.2mを測る。

第1遺構面のベース層は、濃茶灰色砂質土および灰茶色砂質土で、その下層上面が第2遺構面となる。第2遺構面のベース層は、濃茶灰色バイラン混り粘砂土である。また、第2遺構面の標高は、約3.0～3.1mを測る。

第1遺構面

落ち込み状遺構（SX110ほか）、小規模なピット、溝、土坑などを検出した。搅乱箇所が多いいため、詳細の把握はやや難しいが遺構密度はやや疎で、集落の中核部にはあたらないと考えられる。

遺構内からの出土遺物は数量的には少ないものの、土師器、須恵器の小片のほか、瓦器や輸入陶磁器（白磁、青磁など）の小片も出土している。また、すぐ下層に弥生時代の遺構面（第2遺構面）が存在することもあり、弥生時代に属する遺物の混入が多くみられる。

第2遺構面

弥生時代前期の遺構面で環濠1条、貯蔵穴1基の他、ピットを多数検出した。

SK208

A-3区で検出した貯蔵穴である。壁面にはオーバーハングが認められ、底面はほぼ平坦に仕上げられている。一部調査区外へ続いたため全体の規模・形状は不明だが長楕円形に近く、検出面で直径約0.95m、底部で径約1.1m、深さ約40cmを測る。出土遺物は少なく、弥生土器・サヌカイト剥片・炭化物が出土した。

SD210

B区北東部で検出した東西方向に延びる溝である。溝の方向、規模、出土遺物からみて第5次調査で確認された弥生時代前期の環濠SD301に接続するものと考えられる。断面は幅広の逆台形を呈すが、北側肩は調査区外のため未確認である。濠内埋土には黒色味を帯びた粘質土もみられ、堆積土は上層と下層に大きく2分される。最上部には洪水砂とみられる粗砂が堆積している。上層段階では現状で推定濠幅約4m、検出面からの深さ約0.9mを測る。一括性の高い弥生時代前期後半の土器が多量に出土した。器種は壺と甕が大半で、完形に近いものも少數みられる。石器では、サヌカイト製の石鏸・石錐・剥片のほか、磨製石斧・磨石・砥石等が出土した。また、獸骨・人骨・土器・木材がまとまって出土した個所があり、人為的な投棄が考えられる。

下層段階では現状で推定濠幅約5m、検出面からの深さ約1.2mを測る。弥生時代前期後半の土器、石鏸・剥片・砥石等の石器、容器型木製品、木材、炭化粋が出土した。濠底の堆積状況は第5次調査のSD301と類似する。下層以下は流路状の堆積である。弥生時代前期以前は自然流路のような地形であった可能性が考えられる。

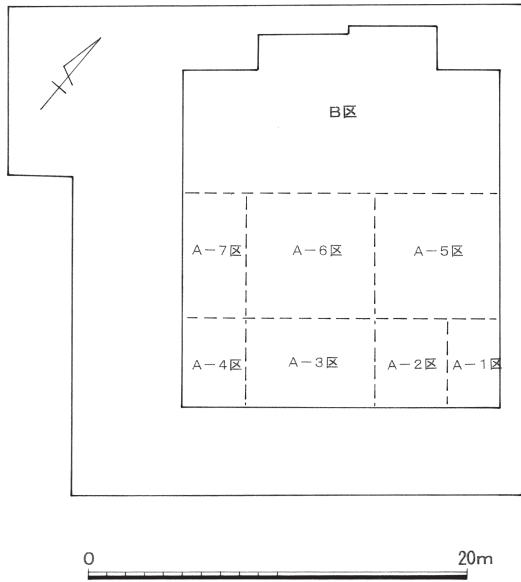


fig.85 調査区位置図

3. まとめ

今回の調査では、中世および弥生時代の2面の遺構面を検出した。

第1遺構面においては、概ね12世紀後半～13世紀前半に属する遺構を検出し、同時期の集落の一端を確認した。過去の大開遺跡の調査においては、当該時期の遺構、遺物を検出しているものの、集落の中核部を検出した事例がなく、その様相は不明瞭である。

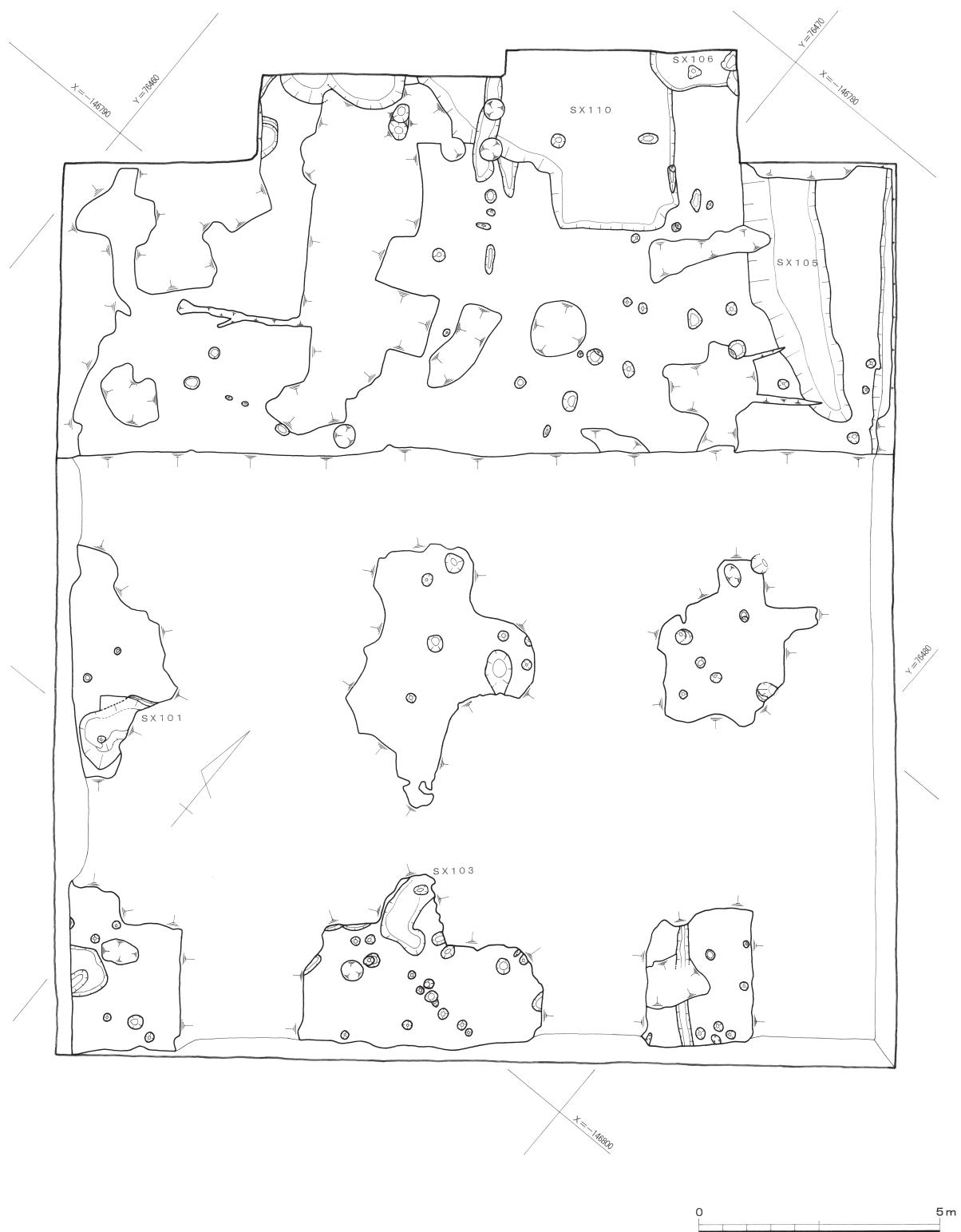


fig.86 第1遺構面平面図



fig.87 第2遺構面平面図

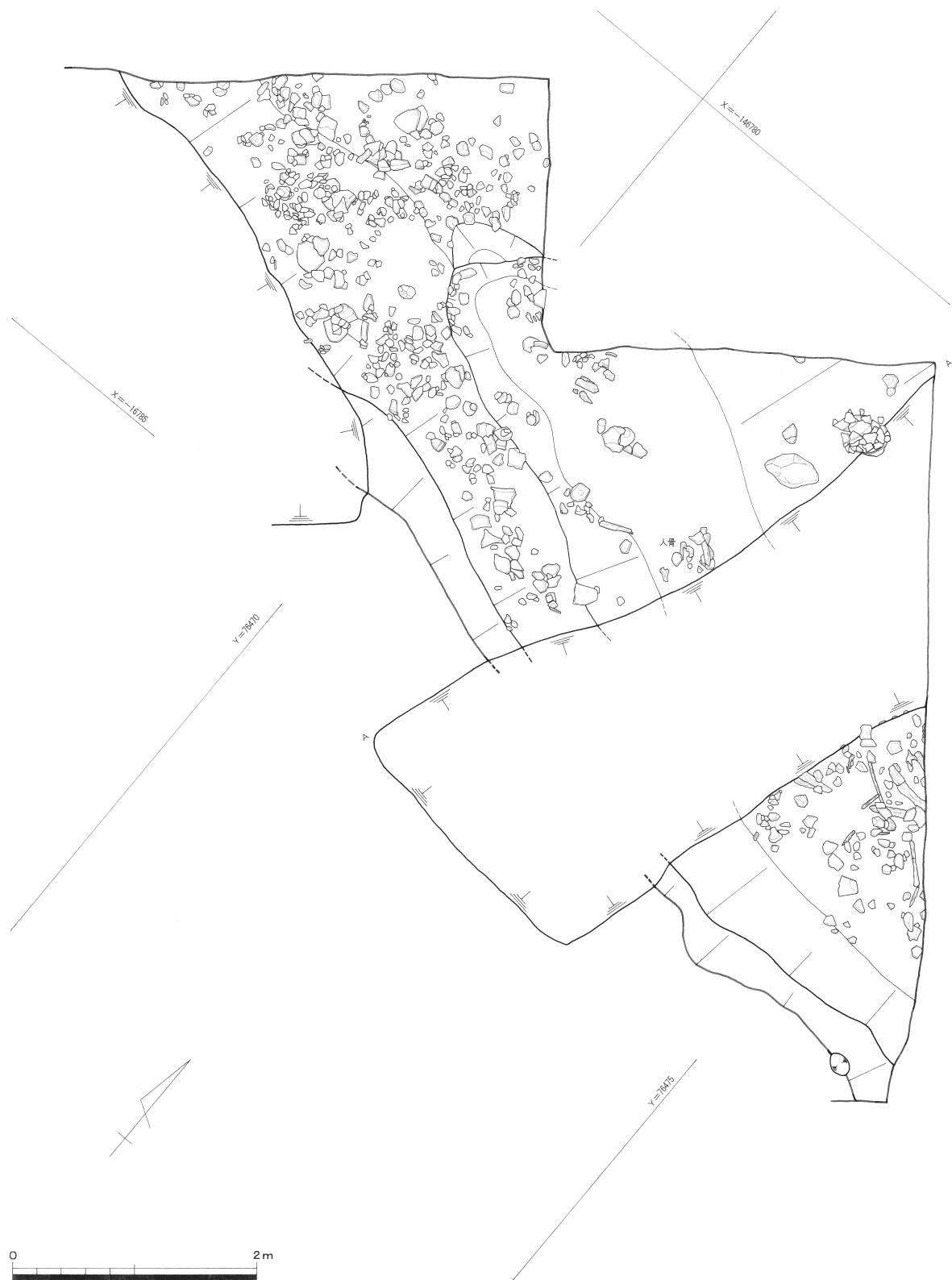


fig.88 SD201上層遺物出土状態図

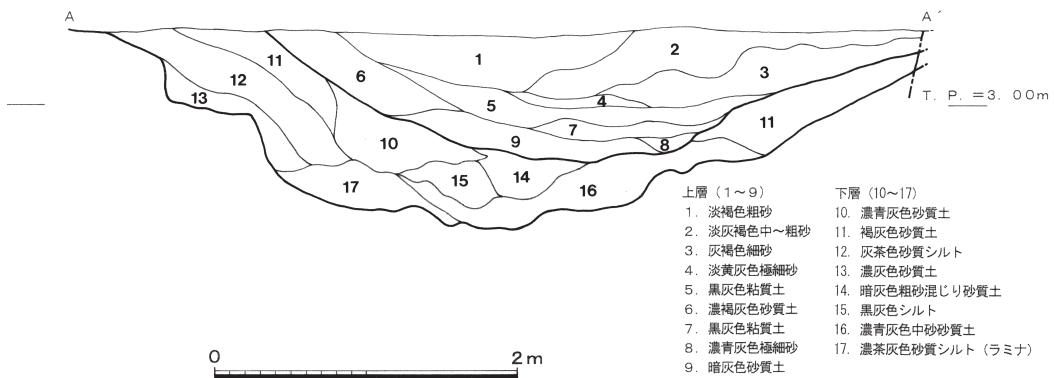


fig.89 SD201土層断面図

しかし、近接地に位置する福原京関連遺跡である楠・荒田町遺跡や祇園遺跡と同様に、輸入陶磁器や瓦器の出土頻度が高いことは、注目されるところである。

第2遺構面では、環濠と考えられる大規模な溝（SD210）の検出が大きな成果と言えよう。溝（環濠）内からは、土器類をはじめ、石器類、木製品類、人骨等の骨類など多量の遺物が出土した。大開遺跡は、第1次調査の成果から、弥生時代前期前半の環濠集落として周知されているが、その後の数次にわたる調査において、新たな環濠等も検出し、集落規模の拡大等の経年的変遷が確認できている。

今回の調査で検出した環濠は、概ね弥生時代前期末～中期初頭に属すると考えられ、過去の調査成果をも踏まえると、集落の最終段階にあたる時期と推測できる。今後、集落構造等の変遷を含めた検討が課題となる。

18. 唐崎城跡・尼崎学園古墳群 確認・第2次調査

1. はじめに

尼崎学園古墳群は、昭和48（1973）年頃には周知された遺跡である。この古墳群6基のうち1基（4号墳）の埋葬施設は、石棚付両袖式横穴式石室で、石棚付横穴式石室は市内唯一の例である。また中世の城跡としても周知されている。

古墳群は、有馬川が武庫川に合流する西側に所在し、北に伸びる丘陵の突端部標高157m前後に位置する。

平成24年度に尼崎学園園舎新築計画が尼崎市より提出され、旧園舎と古墳群の間のグラウンド及び遊具場に新園舎が建設されることになった。これを受け試掘調査を行った結果、計画予定地には埋蔵文化財が存在することが判明した。よって建設計画により影響を受ける部分についての発掘調査を第1次調査として実施した。第1次調査では、弥生時代の竪穴建物や古墳時代の竪穴建物、掘立柱建物、箱式石棺などを検出した。



fig.90 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回は、古墳群の5号墳の一部が損壊を受けていたため、損壊状況の確認と修復を目的とし、損壊部分を利用したトレンチ（1トレンチ）を設定し、調査を実施した。また併せて隣接する6号墳の範囲確認のためのトレンチを設定し調査を行った。

調査着手前に、小樹木の剪定、枝はらい、下草刈り、落葉の清掃および処分作業を行なった。その後古墳群全体の現況などを記録する写真撮影を実施した。

前述したように、5号墳の損壊部分を利用したトレンチ及び、6号墳の範囲確認のためのトレンチを合計7ヶ所設定し調査を実施した。調査区毎の平面・断面の実測や墳丘の断面図等作成を行ない、



fig.91 調査区位置図

調査完了後埋戻しを行なった。また1トレンチの損壊部分については、土嚢袋に真砂土を詰め土壌を補填するようにして埋戻しを行なった。また6トレンチで検出したSD01については、遺構内に真砂土を入れ遺構の保存をはかり、埋戻し作業を行なった。

1トレンチ

搅乱坑から、古墳時代の須恵器甕片1点が出土した。墳丘上層は大きく2層（5黄褐色泥砂、6暗黄茶褐色泥砂）あり、比較的やわらかい堆積層である。これを除去すると比較的固く締まった層（7黄茶褐色泥砂）がほぼ水平に検出された。古墳築造時、一旦基盤層となる面を形成した後、さらに墳丘の盛土を重ねていったものと推定される。

出土遺物は表土直下から、古墳時代の須恵器壺と考えられる小片が2点出土した。また墳丘土から古墳時代の須恵器壺片と甕片が出土した。いずれも古墳時代後期のものである。

2トレンチ

5号墳東裾にあたる部分の調査区である。特に周溝などの遺構は検出されなかった。表土直下から、古墳時代の須恵器壺と考えられる小片が1点出土した。

3トレンチ

表土直下から、中世の土師器壙片と古墳時代の須恵器壺や甕と考えられる破片が散乱し



fig.92 トレンチ配置図

ているような状況で出土した。これらの出土遺物の出土状況を写真撮影、実測を行ない、遺物を取り上げ遺構面の検出を行なったが、特に遺構は検出されなかった。

4 トレンチ

3 トレンチと同様に表土直下から、中世の土師器壙、瓦器塊片と古墳時代の須恵器壙や

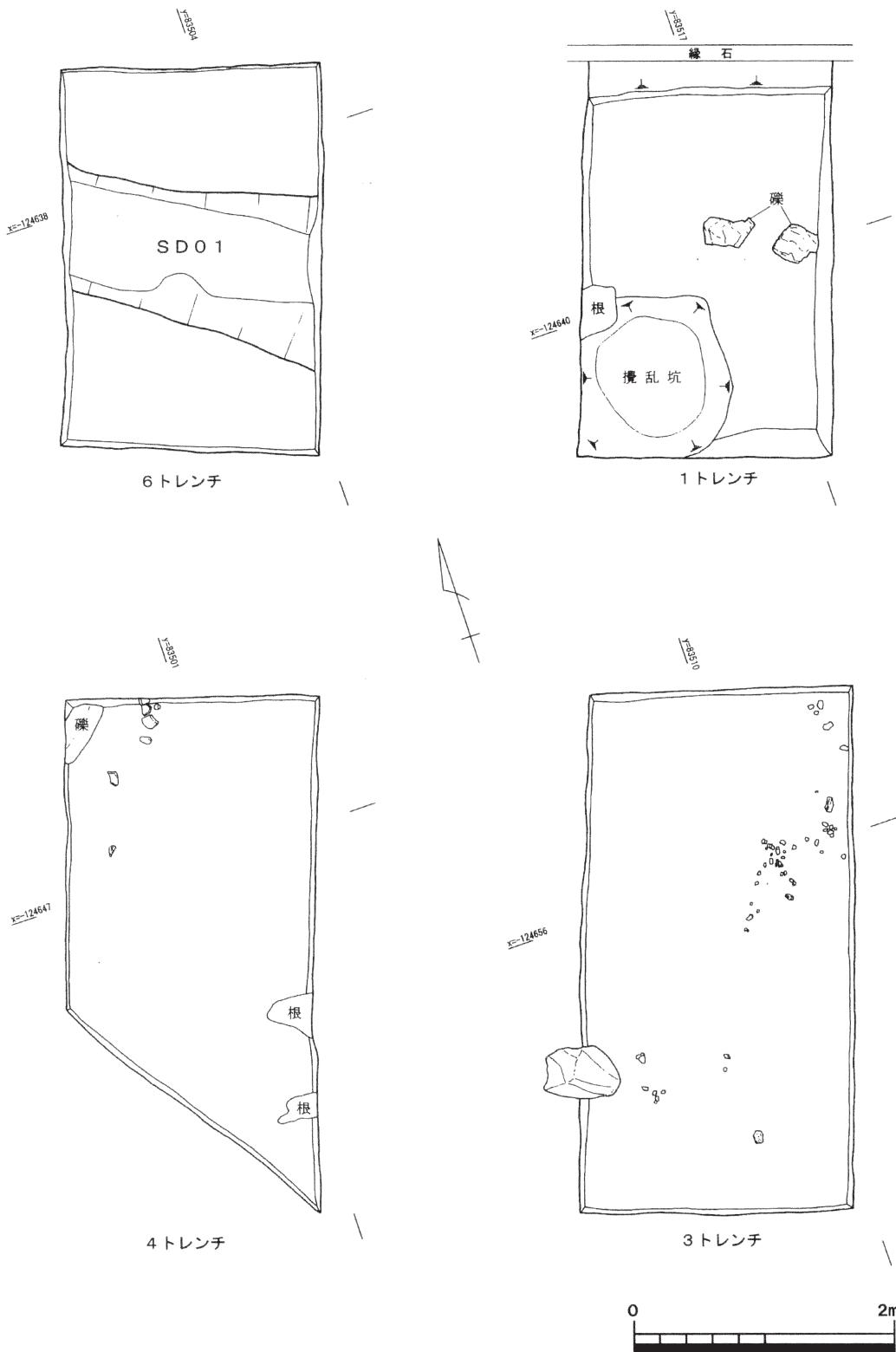
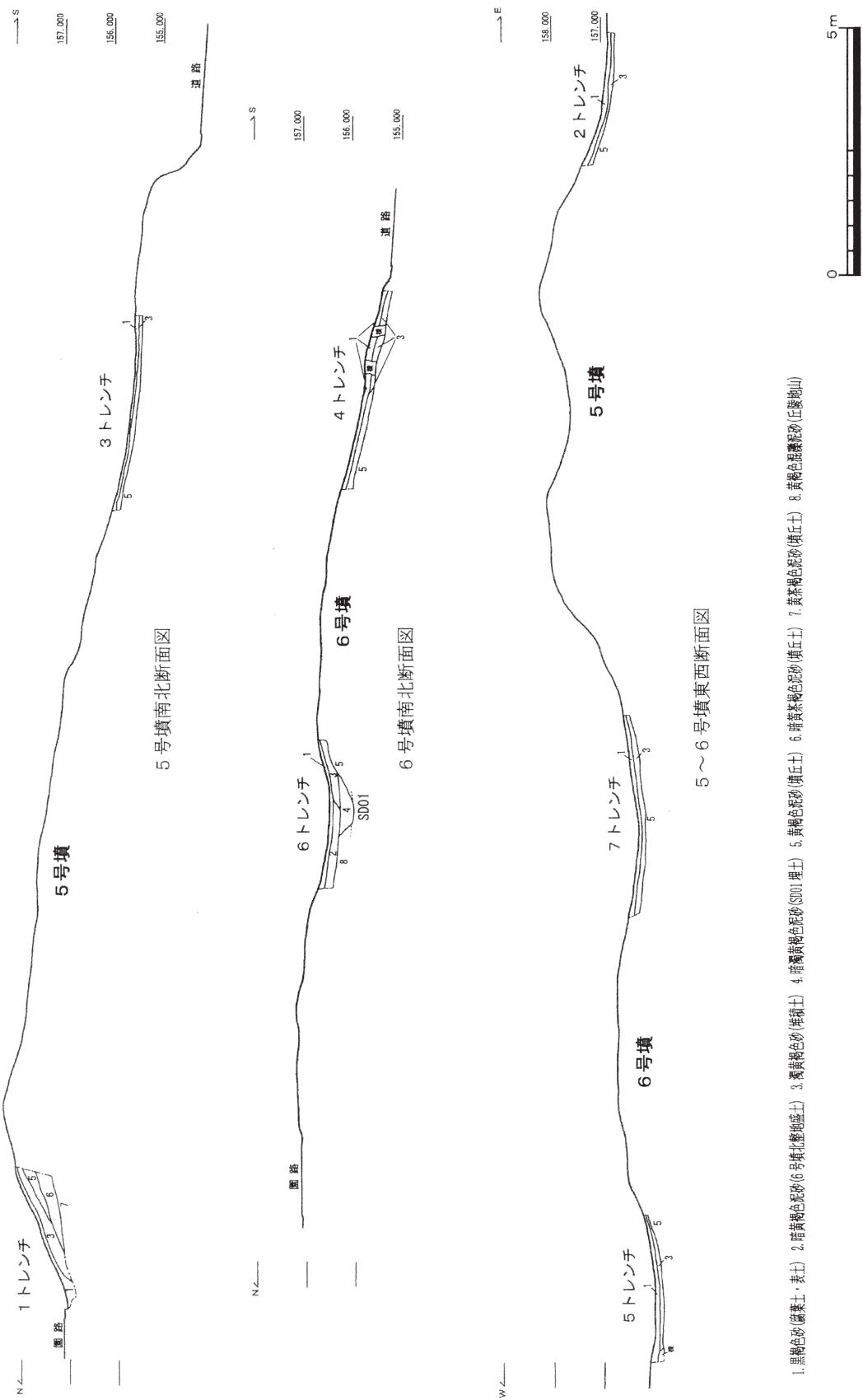


fig.93 調査区平面図



1. 黒褐色砂(礫葉土・表土) 2. 暗黄褐色光沢(6号墳北壁埴塗) 3. 淡黄褐色光沢(埴塗) 4. 強黃褐色光沢(埴塗) 5. 黄褐色泥砂(埴塗土) 6. 淡黄褐色泥砂(埴塗土) 7. 黄褐色泥砂(埴塗土) 8. 黄褐色泥砂(丘陵地山)

fig.94 調査区断面図

甕と考えられる破片が散乱したような状況で出土した。3トレンチと同様に写真撮影、実測後遺物を取り上げ、遺構面の検出を行ったが、特に遺構は検出されなかった。ただし遺構面は西側へ下がるように検出された。

5トレンチ

6号墳西裾にあたる部分の調査区である。墳丘盛土と基盤面との境界線は、不明瞭であるが検出できた。しかし周溝の有無を判断できる状況ではなかった。

6トレンチ

6号墳北裾にあたる部分の調査区で、調査区に直交するように溝状遺構（SD01、4暗濁黄褐色泥砂）を検出した。北側肩は地山面（8黄褐色混礫泥砂）を切り込み、南側肩は墳丘盛土裾端から地山面を切り込む幅1.0m、深さ30cmの溝状遺構である。遺構内から土師器1片が出土した。

7トレンチ

5号墳と6号墳の裾部分にあたる部分の調査区である。地形としての凹みは確認できたが、周溝などの遺構は検出されなかった。

3.まとめ

4号墳

4号墳は、天井石が2ヶ所落ち、封土もかなり流失している。今後の状況によっては石室の崩壊も予想される。1号墳は半壊しているが他の4基は、墳丘の残存状況は良好である。

5号墳

5号墳は、墳丘北側に損壊を受けていたが、埋葬施設まで影響するようなものではなく、盛土の一部が損なわれた状況であった。墳丘盛土からは、須恵器片が出土した。6基もの古墳が近接して築造されたことによって、いずれかの古墳からの混入した遺物と考えられる。

5号墳の墳頂は、南に向かって大きく逆U字状に陥没している。このことから埋葬主体は、横穴式石室であろうと推定される。陥没坑西側に石室の一部と考えられる石が1ヶ所みられる。

1～3、7トレンチから周溝などの遺構は検出されなかった。墳丘の直径は14.0m、墳丘高さは2.0mと推定される。

6号墳

6号墳の北側では、周溝と考えられるSD01が検出されたが、4、5、7トレンチでは、周溝などの遺構は検出されなかった。墳丘の直径は8.5m、高さは0.8mと推定される。他の5基と比べ非常に墳丘高が低い。これにより、埋葬主体は木棺直葬ではないかと推定される。

19. 大橋町東遺跡 第5次調査

1. はじめに

当遺跡は新長田駅南地区再開発事業に伴い新たに発見された遺跡で、平成20年度に第1次調査が実施された。現在までに弥生時代中期の土器片、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物・ピット、古墳時代中期（TK23～47）の竪穴建物・土坑、10世紀後半～11世紀初頭の溝、11世紀初頭～前半の井戸、11世紀後半～末頃のピットや平安時代以降の犁溝などが検出されている。

2. 調査の概要

今回の第5次調査では、弥生時代後期後半以降の土坑、平安時代の井戸、柱穴や平安時代の犁溝などが検出された。調査対象地は残存が良好な範囲では上下2層の包含層が見られ、2面の遺構面を認識することができたが、北及び東へ行くに従い包含層が薄くなり、両端部付近では、旧耕土・旧床土を除去すると遺構面となっていた。よって当該部分で検出した遺構の内、井戸（SK101）や犁溝に関しては、第1、第2遺構面のいずれに属するか検出面からの判断はできず、埋土内の出土遺物もごく少量かつ現時点で整理作業が未処理のため、以下推測を加えながら記述する。

調査地は残土置場などの都合により南半をI区、北半をII区とし、北半はさらに南北方向をII-1区、東西方向をII-2区とした（第3図）。

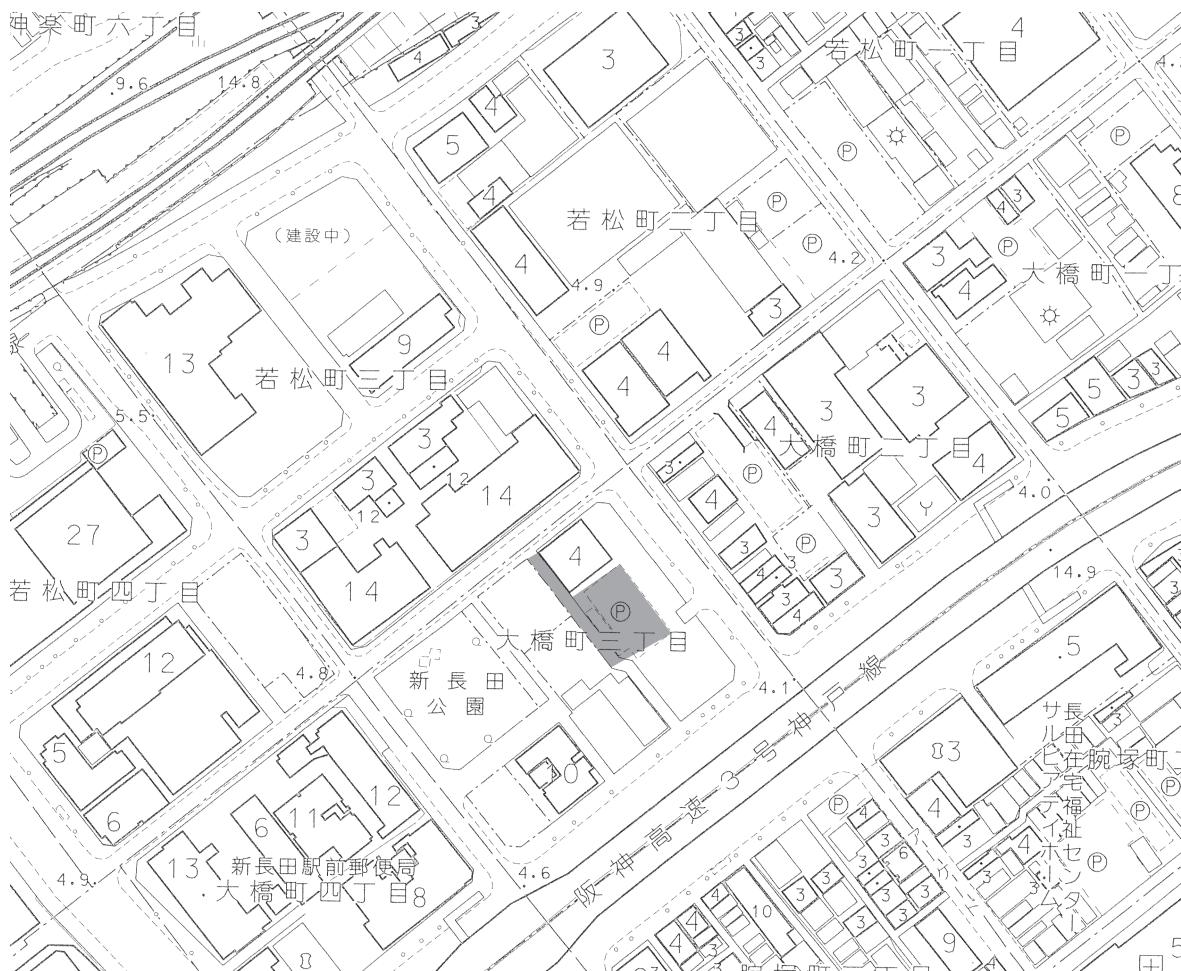


fig.95 調査地位置図 1:2,500

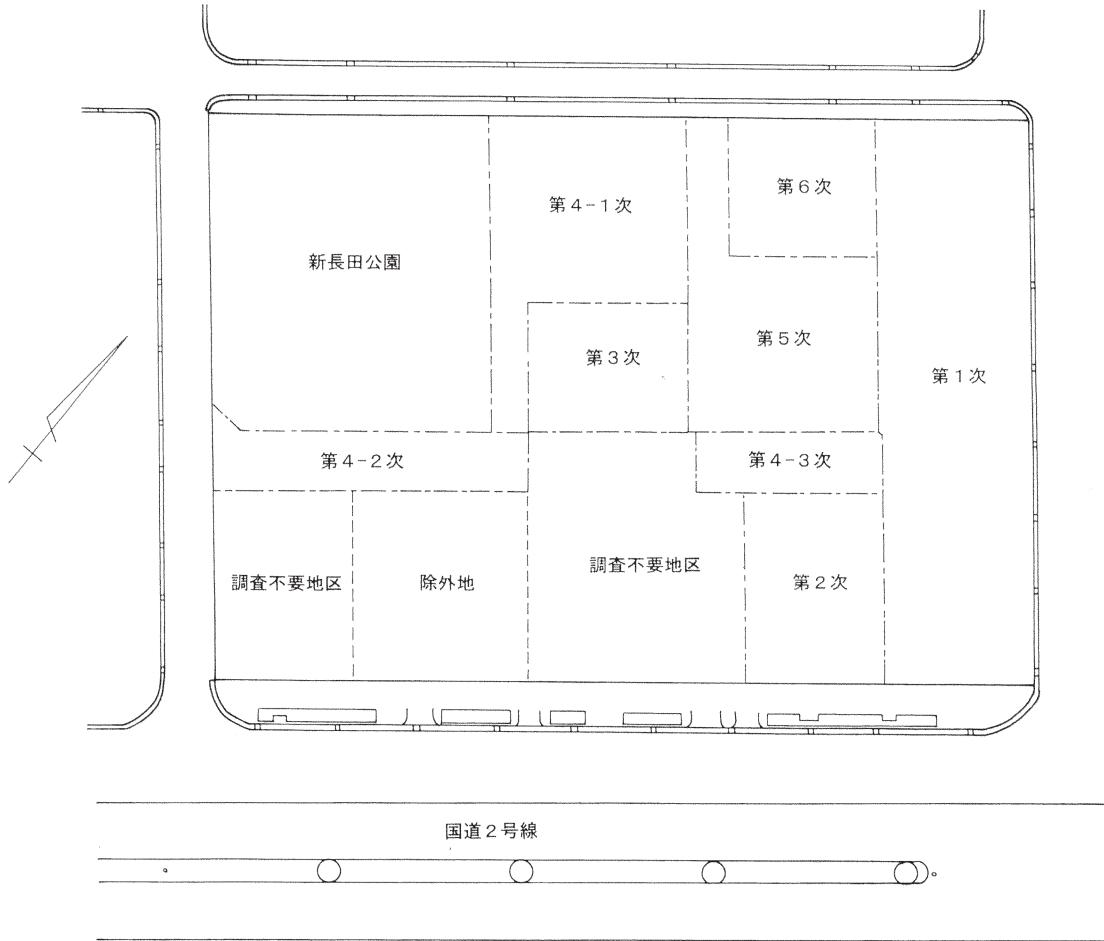


fig.95 調査地位置図 1:2,500

第1遺構面

第1遺構面は第1包含層除去後、T.P.約4.4～4.5mで検出した。調査地の西辺ラインに平行及び直交する犁溝、その溝を切る掘立柱建物、犁溝埋没後の井戸（SK102）やPit113などを検出した。東辺部の井戸（SK101）に関しては所属する遺構面を確定できないが、第1遺構面と仮定しておく。

犁溝

I区・II区の第1遺構面で検出した犁溝は、ほぼ1m間隔で南北に伸びるものと、これに直交し約4m～10mの間隔をあけ東西に伸びるもの2種がある。このうち東西方向の犁溝は、南北のそれを切るものと切られるものに分かれ、時期差が認められる。埋土からの遺物はごく少量かつ細片で時期を決定することは現時点では困難であるが、犁溝埋没後の井戸（SK102）や

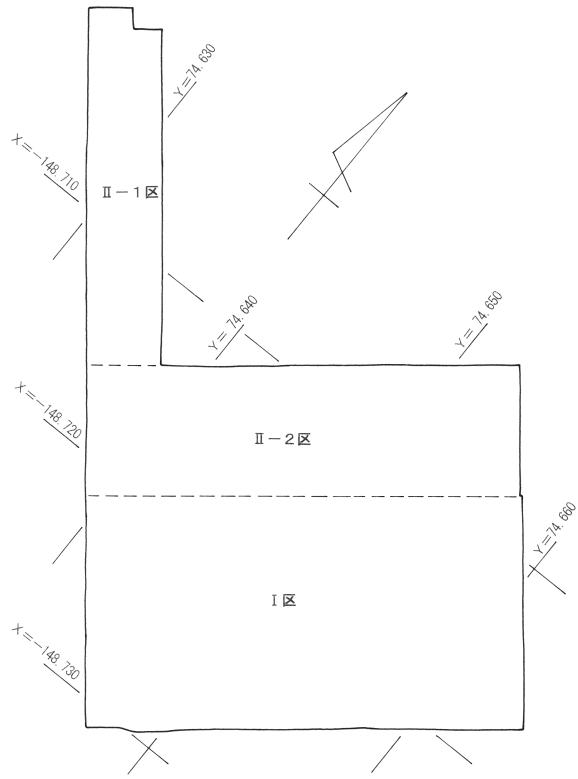


fig.97 調査区位置図

Pit103出土土器などから見て10世紀後半以前と考えられる。

SK101（井戸）

I区東辺部で検出した井戸で、上面での径は1.15×1.05mで僅かに橢円形を呈している。深さは検出面より約1.4mである。底部に曲物を設置し水溜としている。曲物は土圧により変形し長径0.5m、短径40cmを測る。埋土の状況から本来有機質の井戸枠が存在したものと考えられる。曲物内の埋土は自然堆積土であるが、それより上層は人為的に埋められた状況を示している。出土遺物はごく少量かつ細片で時期は現時点では確定できない。

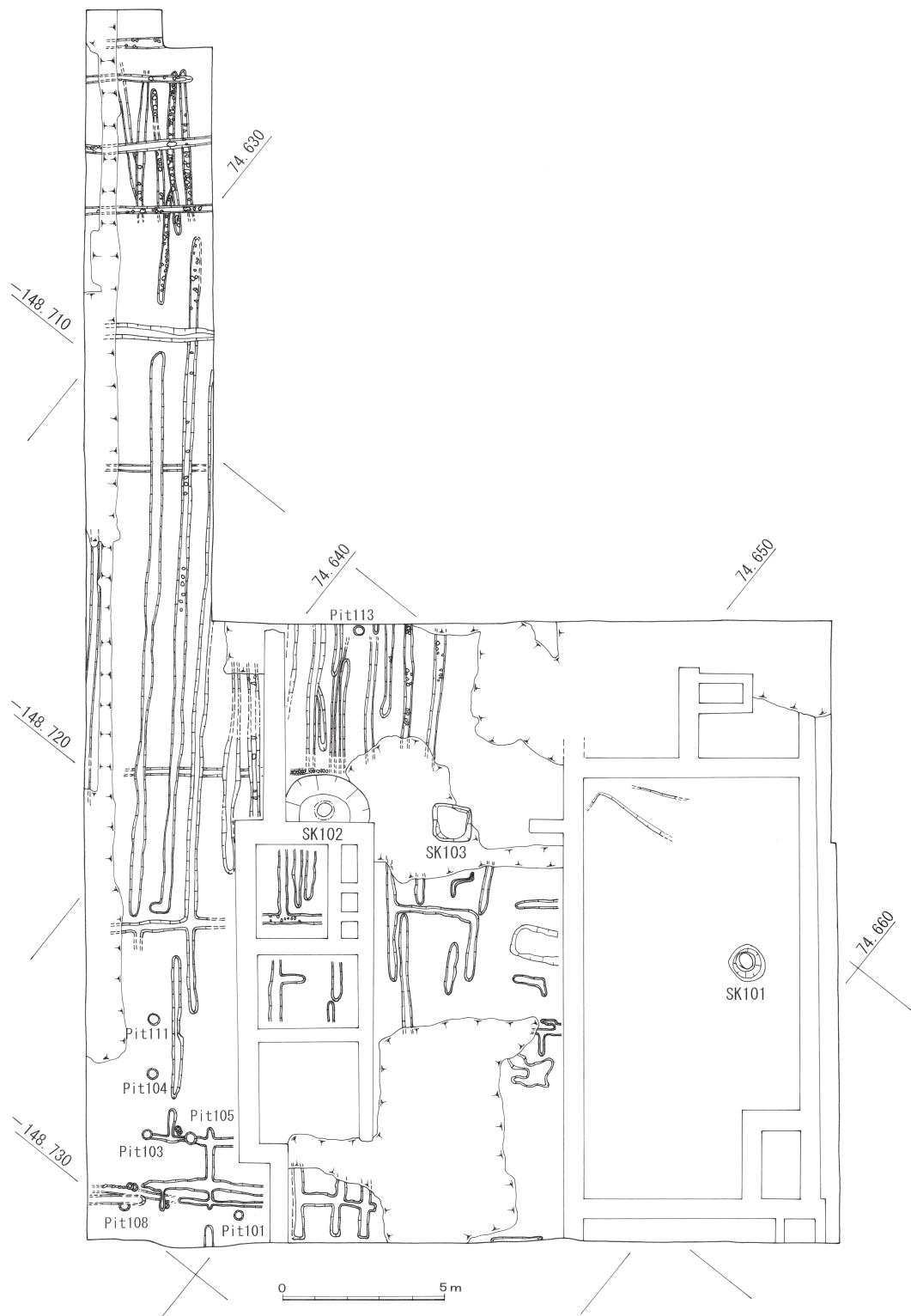


fig.98 第1遺構面平面図

SK102 (井戸)

II-2区中央部で検出した素掘りの井戸で、第1遺構面の犁溝が埋没した後に掘削されている。南辺は現代の建物の基礎下となり全形は不明であるが、直径約2.6mと推定される。底部は二段掘りとなっており最下面までの深さは約1.7mである。水溜の曲物は直径40~45cmを測る。埋土は最下部より約0.6mまでは自然堆積土で、これより上層は人為的

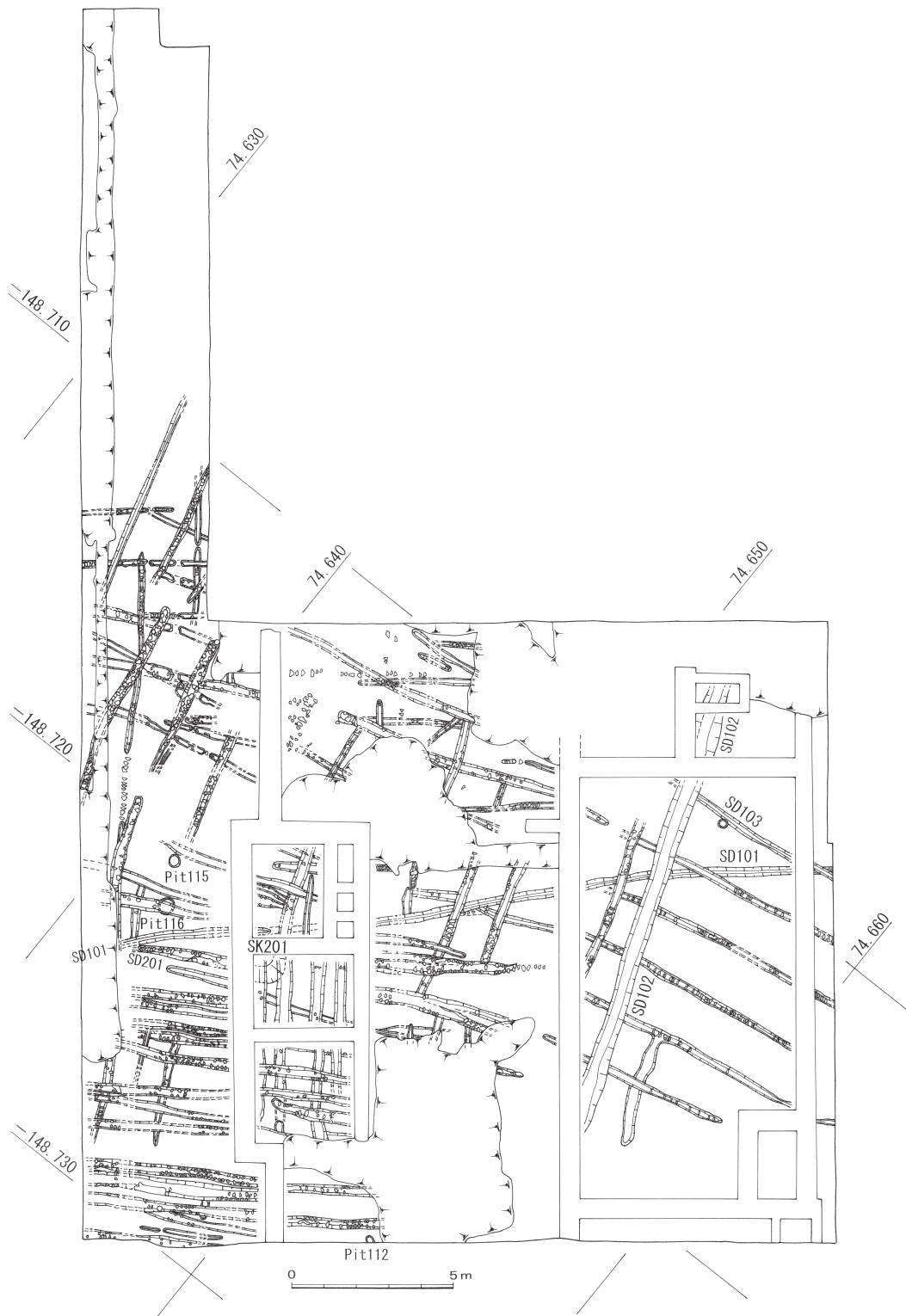


fig.99 第2遺構面平面図

に埋められた状況を示し、SK101と様相が一致している。

遺物は自然堆積土及びその上面近くから完形や完形に近い状態の瓦器塊・小皿が計10個体出土している。瓦器類の時期は12世紀前半と思われる。上層も瓦器、土師器の小片が出士しているが、時期的な検討は現在できていない。遺物の出土状況から井戸底部に土が堆積し井戸の機能が低下あるいは停止した段階で完形の瓦器類を使用する祭祀的行為が行われ、その後一気に埋め戻されたものと推測される。なお、出土した瓦器塊の外面に「C」字形の墨書きを持つものがある。

前述のSK101は周囲がすでに削平を受けた面で検出しており、出土遺物もごく少量であることから機能していた時期を確定することは困難であるが、埋没の状況はこのSK102と共に通しており、両者はほぼ同時期のものと推定することも可能であろう。

Pit113

II-2区北辺中央部で検出したPitであるが、出土遺物がなく時期は不明である。SK102同様第1遺構面の犁溝埋没後に掘削されており、SK102と同時期のものと推定される。

掘立柱建物（Pit103・104・105・111）

I区南西隅部で検出した柱穴の内、Pit103・104・105・111は掘立柱建物と考えられる。Pit111～104の柱間距離は1.6m、Pit104～103の柱間距離は1.95m、Pit103～105の柱間距離は1.35mである。Pit103及び105は第1遺構面の犁溝を切って作られている。Pit103の柱抜き取り痕から土師器小皿などが出土している。時期は10世紀後半頃である。

Pit103の南側で検出したPit108は第1遺構面の犁溝によって破壊されており、I区南西隅部検出の柱穴にも時期差が存在することが判る。

第2遺構面

第1遺構面は第2包含層除去後、T.P.約4.2～4.3mで検出した。調査地中央部ではほぼ

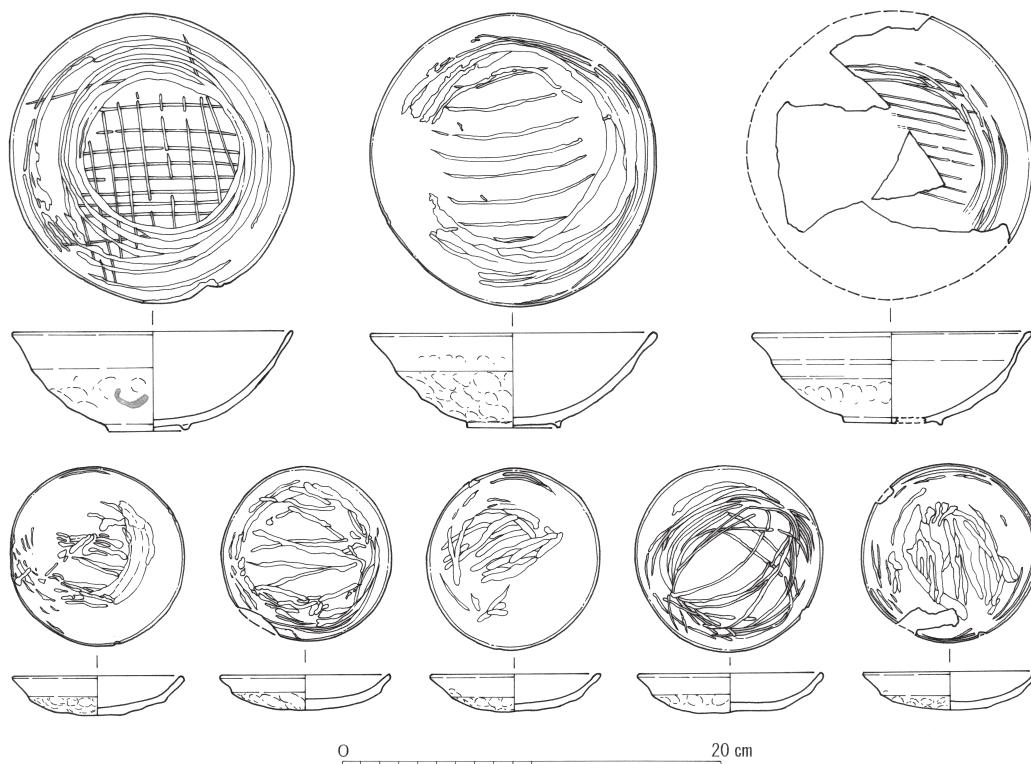


fig.100 SK102（井戸）出土瓦器類実測図

座標南北、東西方向に伸びる犁溝、南西部では調査地南辺に平行、直交する犁溝、西辺部ではこれら犁溝以前の柱穴 2 基、調査地南辺では平安時代の土錐埋納穴（Pit112）や、やや中央よりの地点では弥生時代後期後半以降の土坑（SK201）1 基などを検出した。

犁溝

I 区・II 区で検出した第 2 遺構面の犁溝は、座標南北方位に平行あるいは直交するもので、約 2 ~ 2.5m 間隔で掘削されている。ただし I 区南西隅付近のそれは間隔が狭く、調査区南辺に平行に伸びている。この調査区南辺に平行に伸びる犁溝は前者の溝を切るもののが見られ、時期的変遷をある程度推定できる。

また I 区北辺で検出した SD101 はこれらの犁溝以前に掘削されたもので、断面形も逆台形を呈し、底面に犁痕も見られないことから、犁溝とは性格を異にするものと考えられる。

これらの犁溝および SD101 からの遺物は、ごく少量かつ細片が多く、現時点では時期を確定することは困難である。

Pit112

調査区南辺中央部で検出した径約 20cm、深さ約 40cm の小穴で、埋土から土師質の棒状土錐が計 11 個体（完形 7、破片 4）出土した。

SK201

I 区西半区で検出した径約 1.6m、深さ約 0.6m の円形土坑である。一部、現代のコンクリート基礎下にあるため全形は不明である。埋土は 3 層に分かれるが、最下層から弥生時代後期後半以降の土器類が出土した。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半以降の土坑、10世紀後半以前と考えられる犁溝、10世紀後半頃の柱穴や12世紀前半に廃絶した素掘りの井戸等を検出した。特に完形の瓦器塊・同小皿が出土した井戸は廃絶時の祭祀的行為を知り得る資料として重要なものであった。

犁溝から復元される条里に関しては、まず座標南北方向に近いものがあり、第 1 遺構面検出の現街路と平行する条里遺構は Pit103 の 10 世紀後半以前、あるいは遅くとも SK101 埋没前の 11 世紀後半頃には施工されていたものと思われる。第 2 遺構面の犁溝はこれとは方位が全く異なるが出土遺物がごく少量で時期を決定することが現在できない。

20. 玉津田中遺跡 第40次調査

1. はじめに

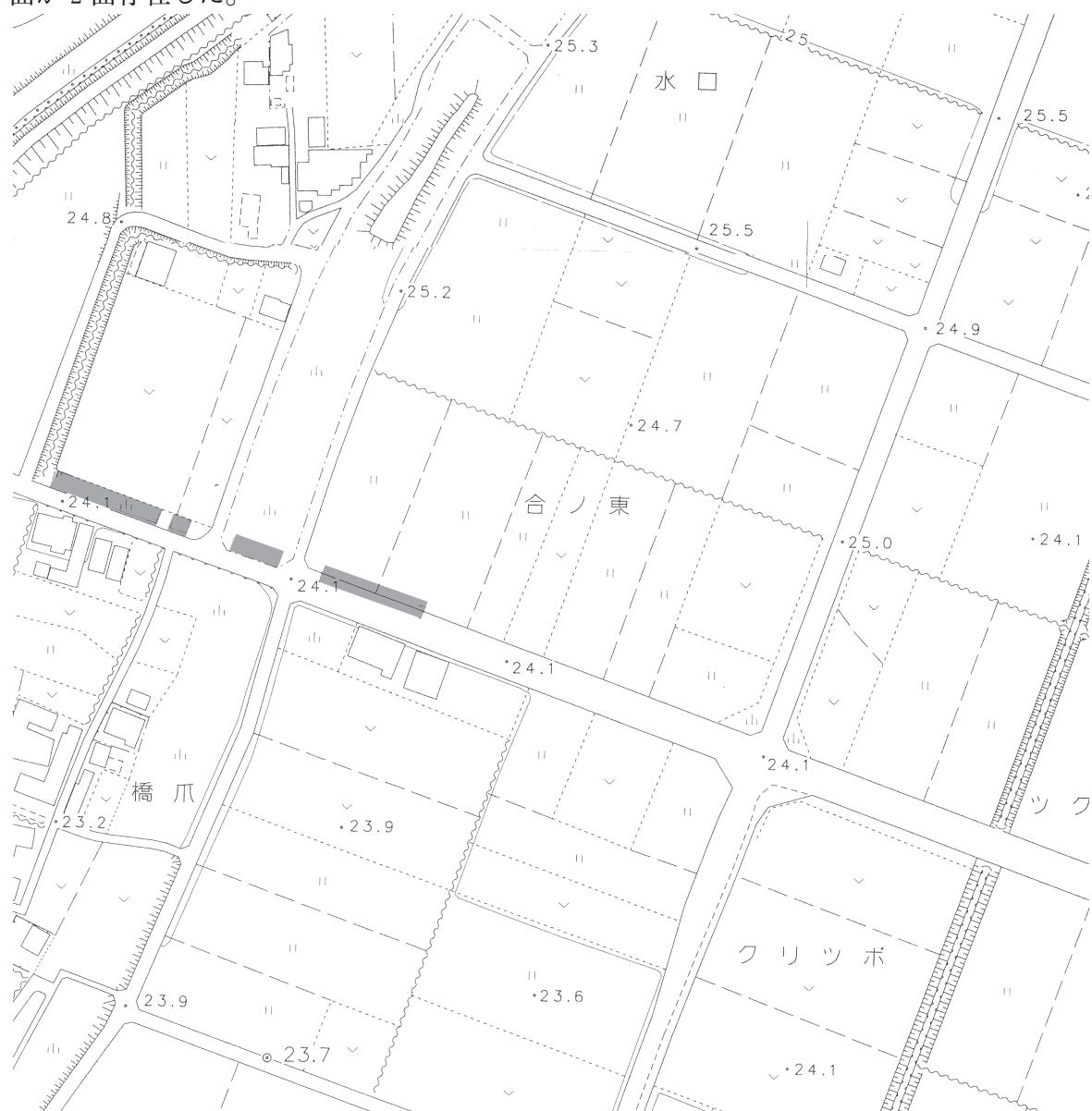
玉津田中遺跡は、西区平野町から玉津町に拡がる縄文時代晚期から中世にいたる東西0.8km、南北2.0kmにおよぶ大規模な遺跡である。遺跡は明石川中流域の、河岸段丘および沖積地上に存在し、標高は20~25m前後を測る。

遺跡発見の経緯は、遺跡南部では、昭和57年からの兵庫県教育委員会による区画整理事業に伴う試掘、北部では平成元年から神戸市教育委員会による圃場整備事業に伴う試掘によって、広大な範囲に拡がる遺跡であることが判明した。

2. 調査の概要

今回の調査は平野第5号線道路改良工事に伴う現道北側の発掘調査で、40回目の調査となる。

検出した遺構は、溝状遺構17条、落ち込み状遺構5ヶ所などである。遺構の時代は、弥生時代前期、古墳時代、中世、近世である。また3-1区~3-2区東端にかけては、遺構面が2面存在した。



遺跡の現況は、東西に走る神戸市道平野5号線北側道路拡張予定地である。現道の北際を発掘調査するため、シートパイルによる土留工を施工後、表土、盛土および現代耕土などを重機により掘削し、以下の層を人力により掘削し、調査を進めた。掘削残土は、一旦西バイパス建設予定地に仮置きし、調査完了後再び埋戻し作業を行なった。

集落内道路と平野5号線との連絡確保のため、調査区は4ヶ所に分かれることとなった。東から1区、2区、3-1区、3-2区と呼称した。調査範囲は、調査区配置図に示すとおりである。

基本層序

基本層序は、上から現代盛土、旧水田層（近世から中世）、遺構面となる。遺構面の土壤は各区で異なり、1区では褐灰色砂礫、2区では淡茶褐色から黄褐色泥砂、3区西部では淡茶褐色粘質土、中央では灰褐色砂礫、東部では茶褐色シルト質細砂である。

調査完了後それぞれの地区で、遺構面以下の状況を把握するため、断割り調査をおこなった。

1区

SD01～03、SX01

1区は調査の都合上、東半と西半とに分けて調査を行ない、調査は東から開始した。1区東半では、幅10m、深さ20cmほどの浅い溝状遺構SD01を検出した。1区西半では、長径0.9m、短径0.6m、深さ5cmの落ち込み状遺構SX01と幅4.2m、深さ20cmほどの浅い溝状遺構SD02を検出した。また西端部で幅2m以上、深さ10cmの浅い溝状遺構SD03を検出した。

それぞれの遺構内からの遺物は微量で、かつ遺構上面からの遺物もわずかで時期を判断できる材料に乏しい。

遺構面調査完了後に断割り作業を実施した。下層から微量の土師器片が出土した。

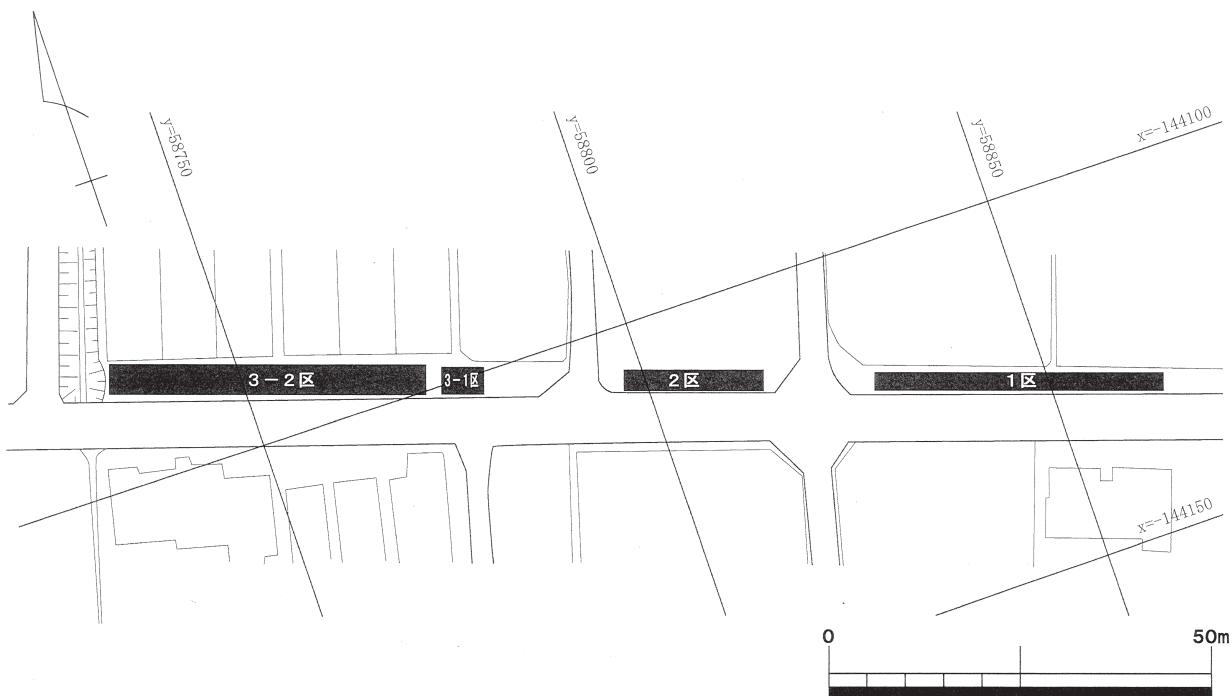


fig.102 調査区位置図

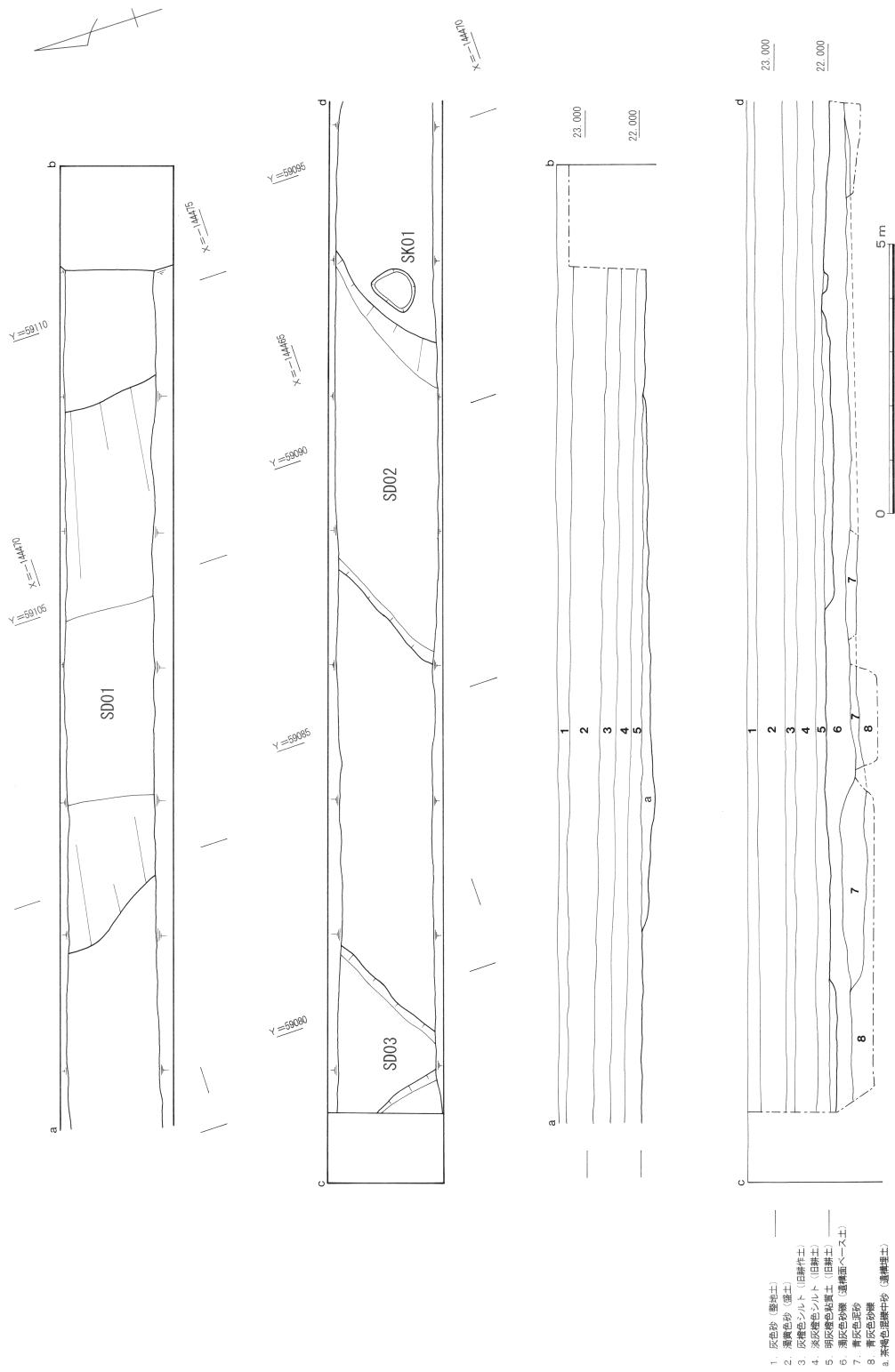


fig.103 1区平面・土層断面図

2区

SD04～06、SX01

2区では、東端部で幅2.2m以上、深さ30cm以上の溝状遺構 SD04を検出した。SD04に近接して、不整形な形状の深さ5cmの浅い落ち込み状遺構 SX01を検出した。須恵器小片が出土した。2区中央部では、幅6.2m、深さ20cmほどの浅い溝状遺構 SD05を検出した。

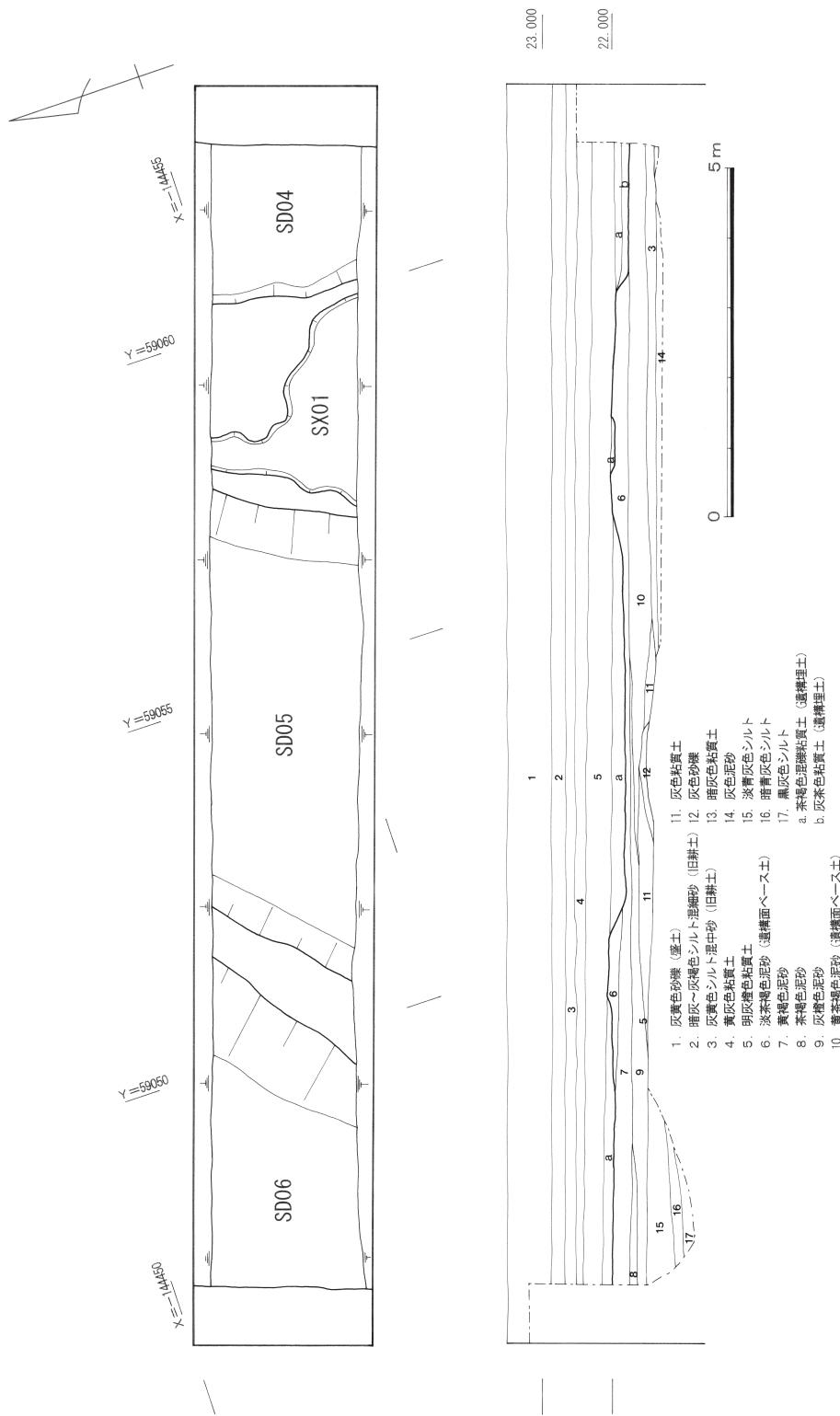


fig.104 2区平面・土層断面図

西端部では、幅3.2m以上、深さ10cm以上の溝状遺構SD06を検出した。SD04～06からは、微量の土師器片が出土した。しかし、いずれの遺構からも、また遺構上面からの遺物も1区と同様に時期を特定できる遺物は出土しなかった。下層の断割り調査では、微量の弥生土器が出土した。

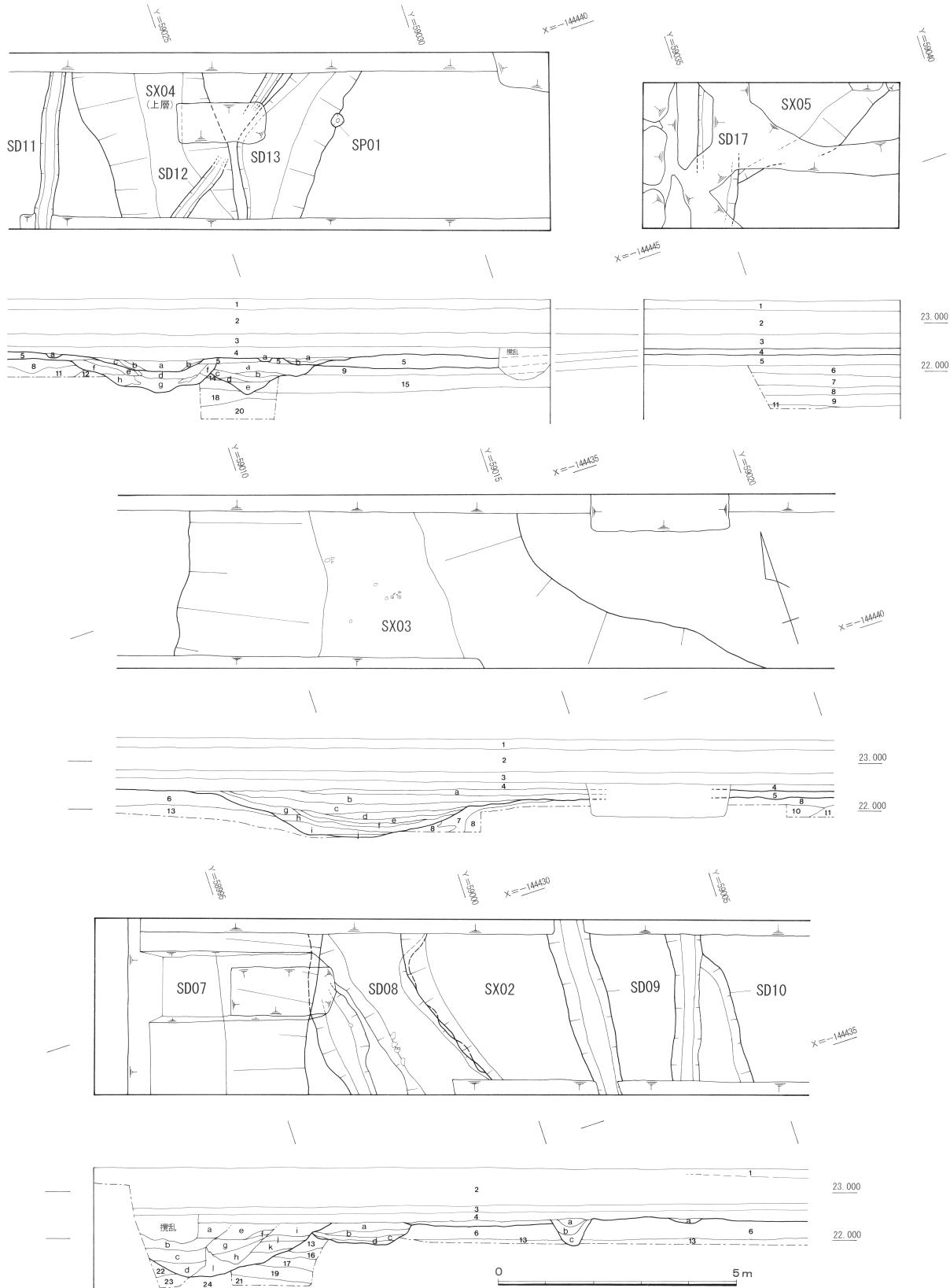


fig.105 3-1・2区第1遺構面平面・土層断面図

3 - 2 区

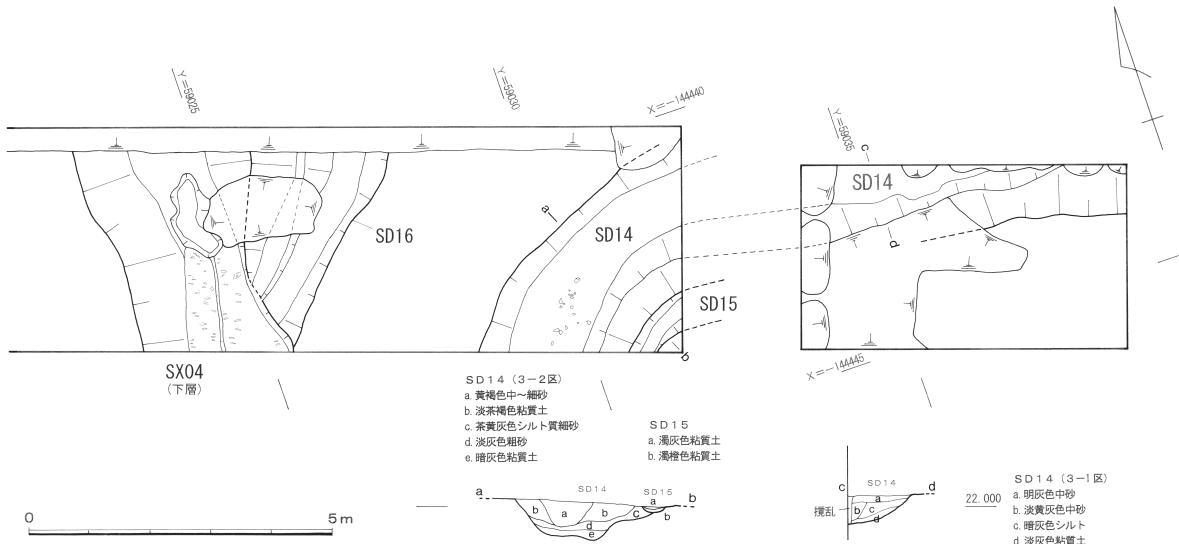
3区は、残土搬出の都合により西側から重機掘削、遺構検出作業をはじめた。したがって遺構番号も1区とは逆に西側から付すこととした。

SD07

3-2区西端部では、幅3.8m以上、深さ1.0mの溝状遺構SD07を検出した。遺構内から土師器片、須恵器片と近世陶磁器が出土した。神戸市発行1/2,500地形図「福中」昭和57年修正図より、圃場整備以前から存在した明石川から取水する農業用水路と重なる。

SD08

SD08は、SD07によって西側の肩が一部切られる、幅2.4m以上、深さ0.5mの溝状遺構である。土師器片、須恵器片が出土した。須恵器片から中世頃の遺構と考えられる。



- 3-1区基本層序
1. 灰白色パラス（整地層）
 2. 茶褐色～黒褐色砂（盛土）
 3. 灰褐色シルト（旧耕土）
 4. 灰褐色粘質土
 5. 福山美色粘質土（東半第1遺構面ベース土）
 6. 淡茶褐色粘質土（西半第1遺構面ベース土）
 7. 灰褐色粗砂
 8. 灰褐色砂礫（中央部第2遺構面ベース土）
 9. 茶褐色～灰褐色シルト質中～細砂（東端部第2遺構面ベース土）
 10. 黄灰褐色細砂
 11. 淡灰褐色細砂
 12. 灰褐色中～細砂
 13. 黄灰褐色粘質土
 14. 明灰色中砂
 15. 明灰褐色粘質土
 16. 淡灰色混様砂
 17. 淡灰色粗～中砂
 18. 明灰褐色シルト
 19. 橙色ミナ混様灰色粗～中砂
 20. 淡青灰色混様砂
 21. 橙色ミナ混様灰色粗～中砂
 22. 淡青灰色粘質土
 23. 青灰色粘質土
 24. 淡青灰色砂礫

fig.106 3-1・2区第2遺構面平面・土層断面図

SX02

SX02は、SD08の東肩をわずかに切り、東側はSD09に切られる。SD08とSD09の間で検出した深さ5cmの浅い落ち込み状遺構である。微量の土師器片が出土した。

SD09

SD09は、幅0.8m、深さ0.6mの断面V字形の溝状遺構である。微量の土師器片が出土した。

SD10

SD10は、幅0.6m、深さ10cmの断面蒲鉾形の溝状遺構である。微量の土師器片が出土した。

SX03

SX03は、3-2区のほぼ中央で検出した、幅7m以上、深さ1.0mの落ち込み状遺構である。弥生時代前期の土器が出土した。

SD11～SD13

SD11・SD12は、幅30cm、深さ10cmの断面蒲鉾形の溝状遺構である。

SD13は、SD12の東側で検出した幅1.4m、深さ20cmの溝状遺構である。微量の弥生土器、土師器片が出土した。

SX04

SX04上層は、SD11とSD13に挟まれ、SD12に切られて検出された幅1.8m、深さ20cmの落ち込み状遺構である。少量の弥生土器、土師器、須恵器片が出土した。この須恵器片は古墳時代のものである。

SD11～SD13とSX04上層の堆積土は、黄灰色泥砂である。同一時期の堆積土と推定される。また層序から中世頃の遺構であろうと考えられる。

SD13の東肩で、径20cm、深さ20cmのピット(SP01)を1ヶ所検出した。

SD11～SD13とSX04上層を完掘するとSX04下層とSD16が検出された。SX04下層は、SD16を切る。SX04下層は、東西幅2.4m前後、深さ40cmの落ち込み状遺構である。SX04下層の底面で、横15cm、縦3cm、深さ2cmほどの粗砂が入り込んだ三日月形の痕跡を、40ヶ所ほど検出した。鍬先痕跡と考えられる。少量の弥生土器片が出土した。

SD16

SD16は、幅1.4m、深さ0.5mの断面形台形の溝状遺構である。少量の弥生土器片が出土した。

SD14・15

3-2区東端部でSD14を検出した。検出当初は、SD14上層(幅0.9m、深さ40cm)とSD15(幅30cm、深さ10cm)の平行する2条の溝状遺構であると考えた。それぞれを完掘した後SD14上層の南側肩では水平な堆積層が観察された。この層を掘削するとほぼSD15の南側肩までおよぶ一体の幅2.4m、深さ0.7mの東西方向に走る、さらに大きな溝状遺構であることが判明した。遺構内からは、弥生前期土器、サヌカイト剥片、砥石が出土した。

ただしSD15は、当初SD14と平行して流れる溝状遺構と考えたが、3-1区には検出されず、上面での一定時間の堆積と考えるべきであろう。

下層の断割り調査では、微量の弥生土器と縄文土器が出土した。

3-1区**SD17、SX05**

3-1区～2区は、前述した1/2,500地形図にから、圃場整備以前の用水路があった箇所である。圃場整備により、排水路とパイプラインが敷設され、3-1区については、この

工事により遺構面が損なわれていた。

前述したように遺構面を2面検出した。上層では、SD17とSX05を検出した。両遺構とも後世の搅乱により損なわれた部分が多い。SD17は、南北方向に走る幅0.8m、深さ20cmの溝状遺構と考えられる。微量の弥生土器が出土した。SX05は、北西側へ落ちる深さ20cm以上の落ち込み状遺構である。少量の弥生土器、土師器片が出土した。

下層では、3-2区から続くSD14の南側肩を検出した。少量の弥生土器が出土した。

3. まとめ

遺構面は一部で2面検出した。出土遺物は28ℓコンテナ3箱である。

1区、2区の遺構の時期については、前述したように時期を決定できるような出土遺物はなかった。

3区については、SX03、SD14は弥生時代前期、SD08は中世、SD07は近世であることが判明した。

検出された遺構の多くは、南北方向に走る溝状遺構である。ただしSD14のみ東西方向に走る溝状遺構である。南北方向の勾配を切って掘削された遺構で、区画などを目的とした可能性が考えられる。

検出した遺構面を東西方向に繋ぐと1区(22.1m)から2区(22.0m)にかけてややさがり、3区(22.4m)でまた少し高くなる。これは、西バイパス建設予定地付近が旧明石川の流路によって低くなった結果とも考えられる。逆に現在の西浦集落は、旧明石川の堆積物による微高地の上に存在しているものと推定される。

現状で述べた遺構、遺物の詳細な時期については、今後の整理作業に期したい。

21. 栃木遺跡 第20次調査

1. はじめに

栃木遺跡は、明石川の支流櫛谷川中流域左岸の河岸段丘上にひろがる集落遺跡である。遺跡は、昭和60年度から平成5年度に実施された栃木・菅野・松本の各土地改良事業、西神南ニュータウン開発事業に伴う試掘調査や発掘調査において弥生時代中期後半～古墳時代後期、中世の遺構・遺物が出土したことにより周知されることになった。とくに平成6年4月から実施された県道小部・明石線築造工事に伴う発掘調査では、中近世・古墳時代・弥生時代の3面の遺構面に各時代の掘立柱建物・竪穴建物など、集落を構成するとみられる遺構が多数検出された。

2. 調査の概要

今回の調査は、平成6年度調査地の南東側に接する店舗建設予定地内で発掘調査を実施した。なお調査範囲は、当該地における試掘調査の結果から、遺跡に影響を及ぼすと考えられる切り土工事を行う道路からの進入路部分と防火水槽埋設部分について調査実施することとなった。



fig.107 調査地位置図 1:2,500

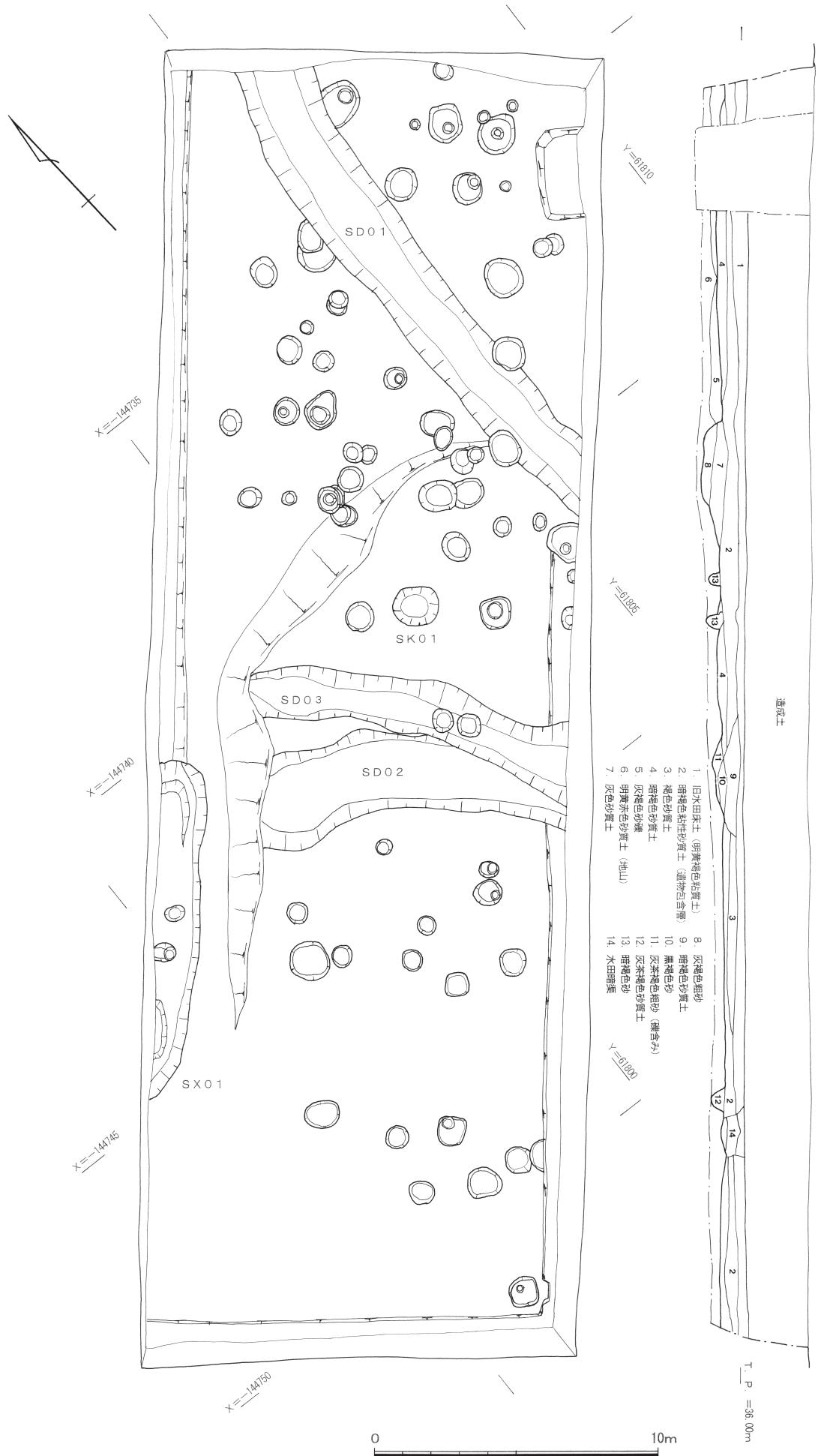


fig.108 遺構平面・土層断面図

調査地は、栃木遺跡の南東方の丘陵最頂部に展開する弥生時代中期～後期の高地集落遺跡、城ヶ谷遺跡から北西に派生する2筋の開析谷をつくる尾根と、河岸段丘の接点付近に位置している。調査は、試掘調査結果にもとづいて、重機械により水田耕土・造成盛土・旧水田床土を除去しつつ、下層の遺物包含層上面の精査を実施した。

基本層序

遺物包含層上面からの遺構は当該調査区では検出されなかった。遺物包含層を除去し、灰褐色砂礫と明黄赤褐色砂質土が互層に堆積する地山面で溝・柱穴・土坑・性格不明の落ち込みを検出した。遺構面は現況水田面から1.5mの深度で南から北に緩やかに傾斜している。

検出した遺構は、溝3条・性格不明の落ち込み1ヶ所、土坑1ヶ所、柱穴と考えられるピット80ヶ所である。

SD01

調査区東部を南北にほぼ直線的に掘られた素掘りの溝である。溝の幅は1.1m、深さ30cmを測り、断面形はU字形である。溝内の埋土は下層に細砂層2層が堆積し、上層に灰褐色砂礫土が堆積している。この灰褐色砂礫土内から土師器もしくは弥生土器の体部片が出土している。

SD02

遺物包含層上面から掘り込まれた調査区中央を北東から南西に流れる溝もしくは河道である。西側は旧水田の畦畔段によって削平されている。幅約1.5m、深さ約10cmで断面形は皿形をしている。埋土は下層に黒色砂、上層に暗褐色砂質土が堆積するが、埋土内からの出土遺物は須恵器坏身片と土師器片が出土し、坏身片の形態から6世紀前半に埋没した溝と考えられる。

SD03

SD02の東側で検出された調査区中央を北東から南西に流れる溝もしくは河道である。南側は上層部をSD02に切られている。幅1.0m、深さ15cmを測り、断面形は皿状をしている。埋土は灰褐色粗砂で、土師器片が出土している。

SK01

SD03の東側で検出した円形の土坑である。直径約0.8m、深さ約25cmで断面皿状をしている。埋土は下層に茶灰色砂、上層が焼土混じりの褐灰色粘性砂質土で、上層より土師器片が出土している。

SX01

調査区北辺沿い中央で検出した長楕円もしくは長方形の落ち込みである。落ち込みの北側は土地改良事業に伴う用水パイプライン敷設時に削平されている。東西長6.0m、南北0.9m以上、深さ15cmを測り底面はほぼ平坦である。埋土は上層部に黒灰色粘質土、下層部に褐色砂が堆積し、上層部より須恵器坏身片が出土し、坏身片の形態から6世紀後半に埋没した溝と考えられる。

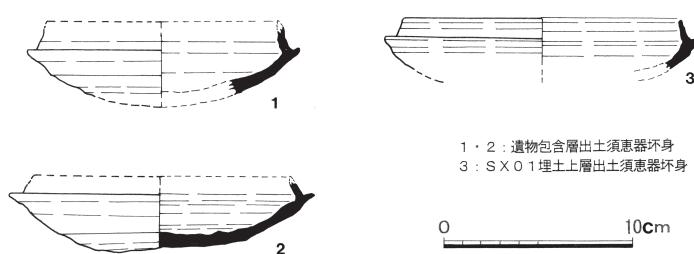


fig.109 出土遺物実測図

柱穴

80ヶ所の柱穴もしくはピットを検出した。柱穴の中には、一辺約0.6mの方形で、深さ40~30cmの深さの掘形を有するものがある。柱痕が明確な柱穴も検出したが、大部分は浅く、掘形を残す程度である。建物としてまとまるものはなかった。一部の掘形内から土師器片が出土している。

3. まとめ

今回の調査地は、平成6年度に道路建設に伴って調査を実施した範囲の南東側にあたり、朽木遺跡の南側への広がりを確認する上で注目すべき調査であった。その結果、削平を受けながらも、古墳時代後期（6世紀後半頃）のピットや溝・性格不明の落ち込みが検出された。その堆積状況の観察と検出状況から、圃場整備以前の水田の開鑿によって、削平を被っていることが明確になった。しかし、遺構は遺存しており、試掘坑T.P.3付近までは遺跡が残存していると考えられる。

平成6年度調査に関連する調査区北辺部の遺構は、基準点測量により整合を試みた結果、調査区北辺部は、道路部分調査後の土地改良事業のパイプライン敷設によって掘削されており、今回検出したSX01も平成6年度調査のSB201に直接は継続せず、別の遺構もしくは関連して付属する土坑状遺構の可能性がある。

22. 吉田南遺跡 第20次調査

1.はじめに

吉田南遺跡は、明石川右岸に位置し、明石川の右岸の緩やかな河岸段丘と明石川本流との間に生成された沖積地に展開する遺跡である。この沖積地には、北西側から南流する古い河川氾濫により、幾筋かの自然堤防が形成され、これらの高台部分に弥生時代後期以降鎌倉時代に至るまで、継続的に居住域が営まれたと推定される。

吉田南遺跡は、神戸市建設局玉津環境センター建設に伴う調査で発見され、これまで19次にわたって調査実施してきた。遺跡の北部玉津環境センターの調査では、弥生時代後期から古墳時代後期の集落や奈良時代後期～平安時代前期の掘立柱建物群が検出された。このうち奈良時代の整然とした掘立柱建物群は明石郡衙跡とされている。

今回の調査地は、平成2・3年度に兵庫県教育委員会が調査実施した看護大学校舎建設に伴う発掘調査（第10・12・13・16次）、地域ケア開発研究所建設事業に伴う発掘調査（第19次）の調査地の南側にあたる。これらの各既調査地では中世屋敷地や弥生時代後期～古墳時代の水田が検出されており、今回の調査地においても、中世集落および古墳時代以前の水田の検出が予想された。



fig.110 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成工事における下水道管敷設にともなう幅1.7m、路線長約50mの範囲で実施した。調査深度については、下水道管底掘削範囲について計測しながら限定して調査を実施した。

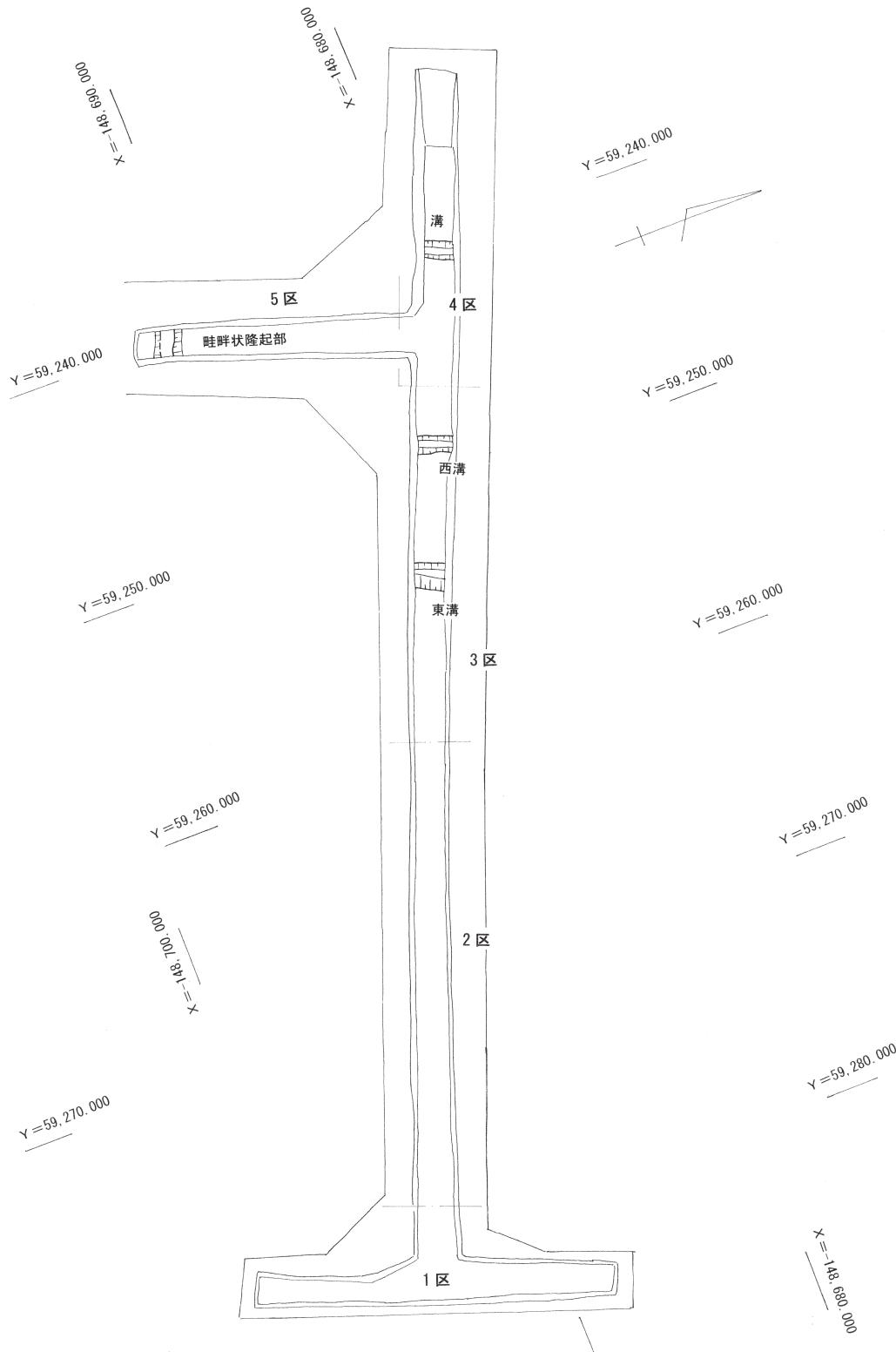


fig.111 遺構平面図

調査区域を東から5区に分け、東側の南北管路を第1区、中央東西管路を東から3分割して第2区・第3区・第4区、南から中央東西管路に結ぶ南北管路を第5区として調査実施した。

基本層序

調査地は全域に現代の耕土直上に20~50cm前後の造成土が盛られ、現代耕作土以下0.5mまで旧耕作土の堆積が見られる。これら旧耕作土のうち下層の黄灰褐色シルトに土師器・須恵器細片が含まれる。この黄灰褐色シルトの下に暗茶褐色粘質土が、調査区東側では厚さ約15cm、西側では約40cm堆積し、調査区西部の第4区では溝状遺構がこの上面から掘り込まれている。この暗茶褐色粘質土を掘り下げるに、調査区南部の第5区で畦畔状遺構と、調査区中央部の第3区で溝2条を検出した。

第1区

現代耕作土下約0.8mまでの工事影響範囲を調査した。現代耕作土下0.6mで暗茶褐色粘質土を検出し、上面で須恵器・土師器片が出土したが、遺構等は発見されなかった。この暗茶褐色粘質土を除去すると、青茶褐色粘性砂質土となるが遺構等は発見されなかった。

第2区

現代耕作土下約1.1mまでの工事影響範囲を調査した。現代耕作土下0.8mで暗茶褐色粘質土を検出したが、遺物の出土はなかった。

第3区

現代耕作土下約1.2mまでの工事影響範囲を調査した。現代耕作土下0.9mで暗茶褐色粘質土を検出したが遺物の出土はない。暗茶褐色粘質土直下の青茶褐色粘性砂質土上面で溝状遺構2条を検出した。

東溝

幅約0.8m、深さ約35cmの断面逆台形の素掘り溝である。埋土内から弥生土器片が出土している。

西溝

幅約0.6m、深さ約35cmの断面U字形の素掘り溝である。埋土内からの出土遺物はない。

第4区

現代耕作土下約1.2mまでの工事影響範囲を調査した。現代耕作土下0.7mで暗茶褐色粘質土を検出したが遺物の出土はない。調査区西端において暗茶褐色粘質土掘り込んで、溝1条を検出した。

溝

幅約1.3m、深さ約30cmの断面皿状の溝である。埋土内から丸瓦片が出土している。

第5区

現代耕作土下約1.3mまでの工事影響範囲を調査した。現代耕作土下0.8mで暗茶褐色粘質土を検出した。調査区南端部では褐灰色粘性砂質土の畦畔状の隆起部を検出し、隆起部の南側で土師器を多量に含む落ち込みを検出した。隆起部は断面が蒲鉾形で上端幅0.6m、下端幅1.0m前後、高さ30cmを計測する。この畦畔状隆起部の北側に堆積する暗茶褐色粘質土からは遺物の出土はなく、下面の青茶褐色粘性砂質土は平坦である。

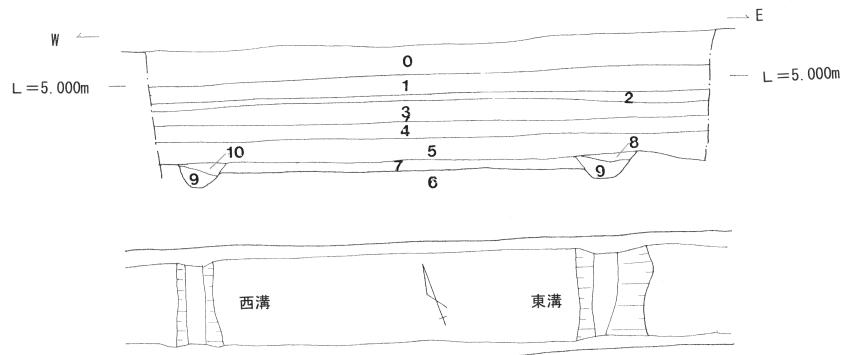
3.まとめ

今回の調査地は、中世屋敷地を検出した看護大学校舎建設に伴う発掘調査（第10・12・13・16次）、地域ケア開発研究所建設事業に伴う発掘調査（第19次）の調査地の南側にあ

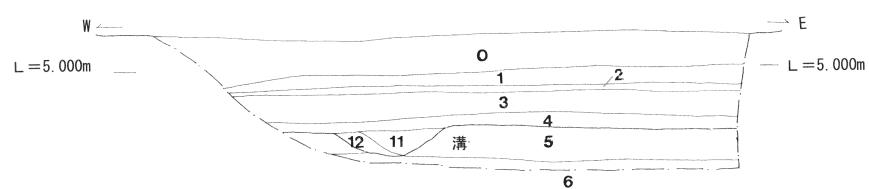
たる。また、時期不明の水田址を検出した玉津環境センター拡張工事に伴う発掘調査（第14次）地の南西側にあたる。

5区で畦畔状の隆起を検出した。出土土器から水田耕土とみなされる暗茶褐色粘質土が弥生時代の終わりから古墳時代前期を降らないものとみられる。水田の埋没は第4区溝出土の丸瓦から奈良時代を遡らないものとみられ、当地が古墳時代から歴史時代まで耕作地として長らく使用されていたことが明確になった。

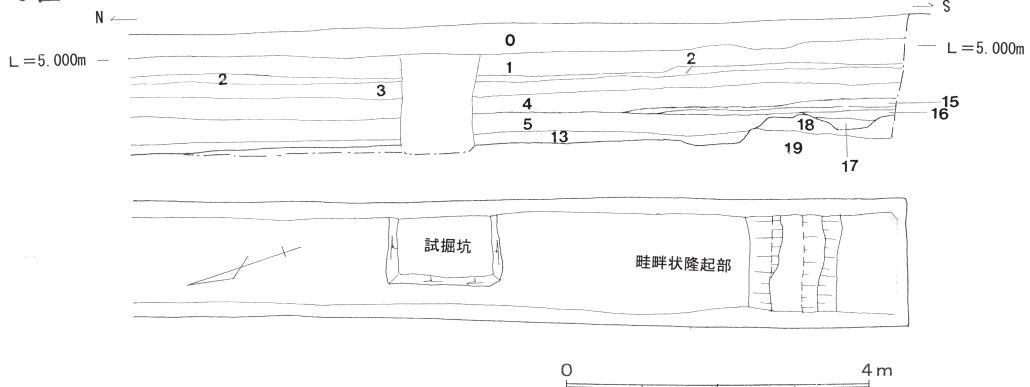
3区



4区



5区



- | | | |
|--------------|---------------|-----------------|
| 0. 造成土 | 7. 褐色砂質土 | 13. 灰黄色砂 |
| 1. 耕作土 | 8. 灰茶色シルト | 14. 灰黄褐色細シルト |
| 2. 床土 | 9. 灰緑色粘質土 | 15. 灰色粘質土 |
| 3. 旧耕作土 | 10. 淡褐灰色砂質土 | 16. 淡灰色粘性砂質土 |
| 4. 黄灰褐色シルト | 11. 暗灰褐色粘性砂質土 | 17. 灰茶褐色砂質土 |
| 5. 暗茶褐色粘質土 | 12. 灰褐色粘性シルト | 18. 褐灰色粘質土 |
| 6. 青灰褐色粘性砂質土 | | 19. 灰茶褐色シルト(堅い) |

fig.112 遺構平面・土層断面図

23. 今津遺跡 第24次調査

1. はじめに

今津遺跡は、明石川左岸に位置し、明石川の支流櫛谷川が形成する河岸段丘と明石川本流との間に生成された沖積地に展開する遺跡である。この沖積地には、北東側から南流する櫛谷川の河川氾濫により、幾筋かの自然堤防が形成され、これらの高台部分に弥生時代中期以降集落が営まれたと推定される。

今回の調査地は、平成19年度に調査が実施された第20次調査地の西隣にあたり、第20次調査の調査原因となった工場建物の西側への拡張工事に伴う調査である。この第20次調査では工場建物の杭基礎部分に調査範囲を限定した調査であったが、調査地北東部・南西部で円形の竪穴建物を検出し、弥生時代中期の土器・石器類が出土している。

2. 調査の概要

今回の調査は工場建物の杭基礎部分に調査範囲を限定して調査を実施した。調査坑は2.5×2.0m、2.0×1.5mの規模で12ヵ所設定し、盛土・旧耕土層までを重機械で除去し、それ以下を人力で精査した。

基本層序

調査地は全域に現代の耕土直上に約0.5mの造成土が盛られ、現代耕作土以下0.8~0.9mまで旧耕作土の堆積が見られる。これら旧耕作土下に弥生土器を含む第8層暗褐灰色粘性砂質土、第9層暗灰褐色砂質粘土が約40~50cm堆積し、ピット・溝等を検出した暗灰色粘質土（第10層）の上面に達する。この第10層は15~20cm以上の厚さがあり、遺物の出土がなく、その下層には非常にしまった褐灰色粘質土がみられる。

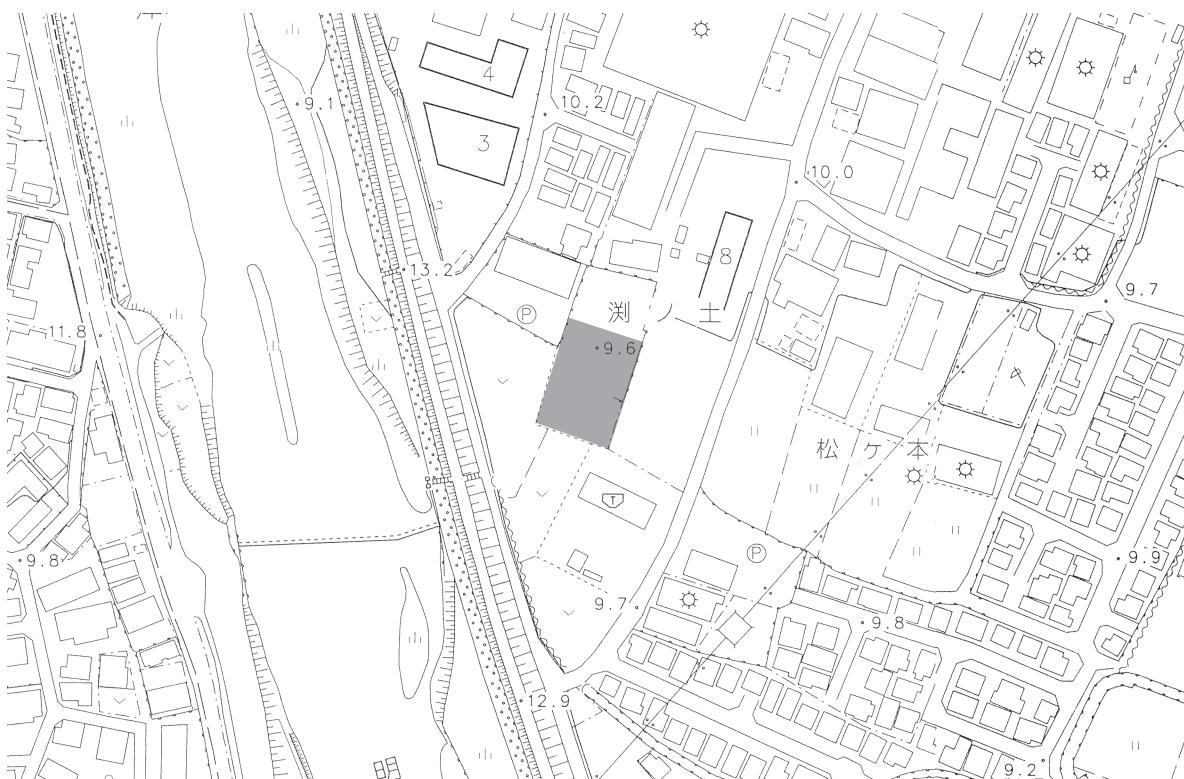


fig.113 調査地位置図 1:2,500

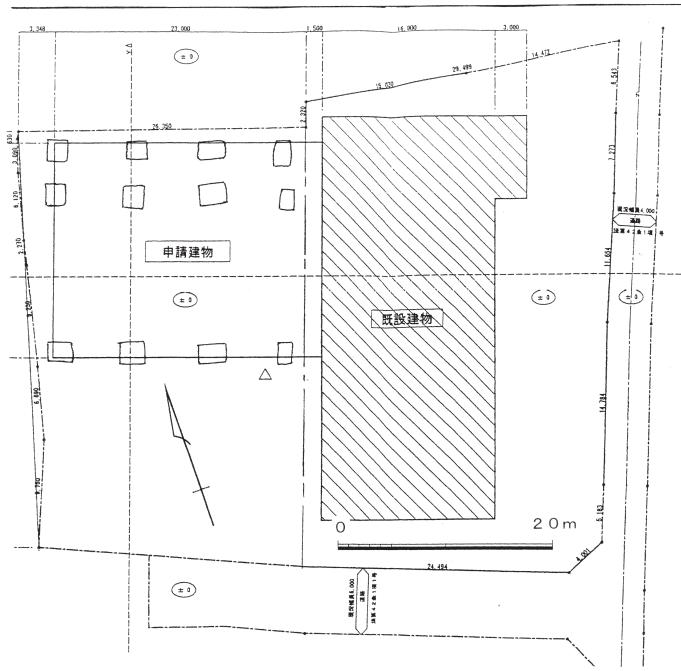


fig.114 調査区位置図

12ヶ所の調査坑を設定して調査を実施した。いずれの調査坑も現地表下約1.7~1.8mで遺構検出面である暗灰色粘質土（第10層）を検出し、遺構面は概ね水平面を保って存在すると考えられる。調査坑のうち4ヶ所で遺構およびまとまった遺物を検出した。

第2トレンチ

現地表面下1.7m前後で遺構面を検出した。調査坑東壁沿いに径約24cm、深さ約30cm、深さ約10cmの柱痕跡を残すピット1と、調査坑のほぼ中央で径15cm、深さ20cmの円形ピット2を確認した。いずれのピットからも遺物の出土はない。

第6トレンチ

現地表面下1.7mの遺構検出面から溝1条とピット1ヶ所を検出した。調査坑のほぼ中央で検出したピット3は径32cm、深さ24cmの円形ピットである。溝は調査坑西壁沿いに南北にやや弧を描くように掘られた素掘りの溝である。

幅45cm、深さ14cmを測り、暗灰色粘質土の埋土からは弥生時代の壺形土器片が出土した。

調査坑の北東部の包含層内からは、弥生土器が多量に出土している。

第9トレンチ

現地表面下1.75mで遺構面を検出した。調査区中央東側で炭化植物の集中がみられたが、ピット等の遺構は検出されなかった。調査坑の南側で同一個体とみられる壺形土器片2点が出土している。

第11トレンチ

現地表面下1.8mで遺構面を検出した。調査坑東南部でピット2ヶ所を検出した。東壁に接して検出したピット4は径約20cm、深さ約4cmの浅い落ち込みである。調査坑東南部で検出したピット5は径25cm、深さ40cmを測り、径約15cmの柱痕跡が観察できる。

3. まとめ

今回の調査地は、今津遺跡第20次調査の西隣地にあたり、弥生時代中期の竪穴建物で形成された集落が展開すると考えられた。

調査は新築建物の杭基礎部に限定され、調査範囲が狭小であるため、遺跡の全容は明ら

かにはできなかった。しかしながら、一部の調査坑では溝・柱穴状のピットを検出し、この遺構の集中する調査坑では弥生時代中期の土器等の遺物が多量に出土しており、周辺に竪穴建物等第20次調査につながる遺構群が存在すると考えられる。

また、今回調査地のうち西側にある4トレンチ・8トレンチ・12トレンチでは比較的出土遺物量が少なく、遺構も検出されなかった。集落遺跡のなかでも当該地が西端に位置している可能性も指摘できる。

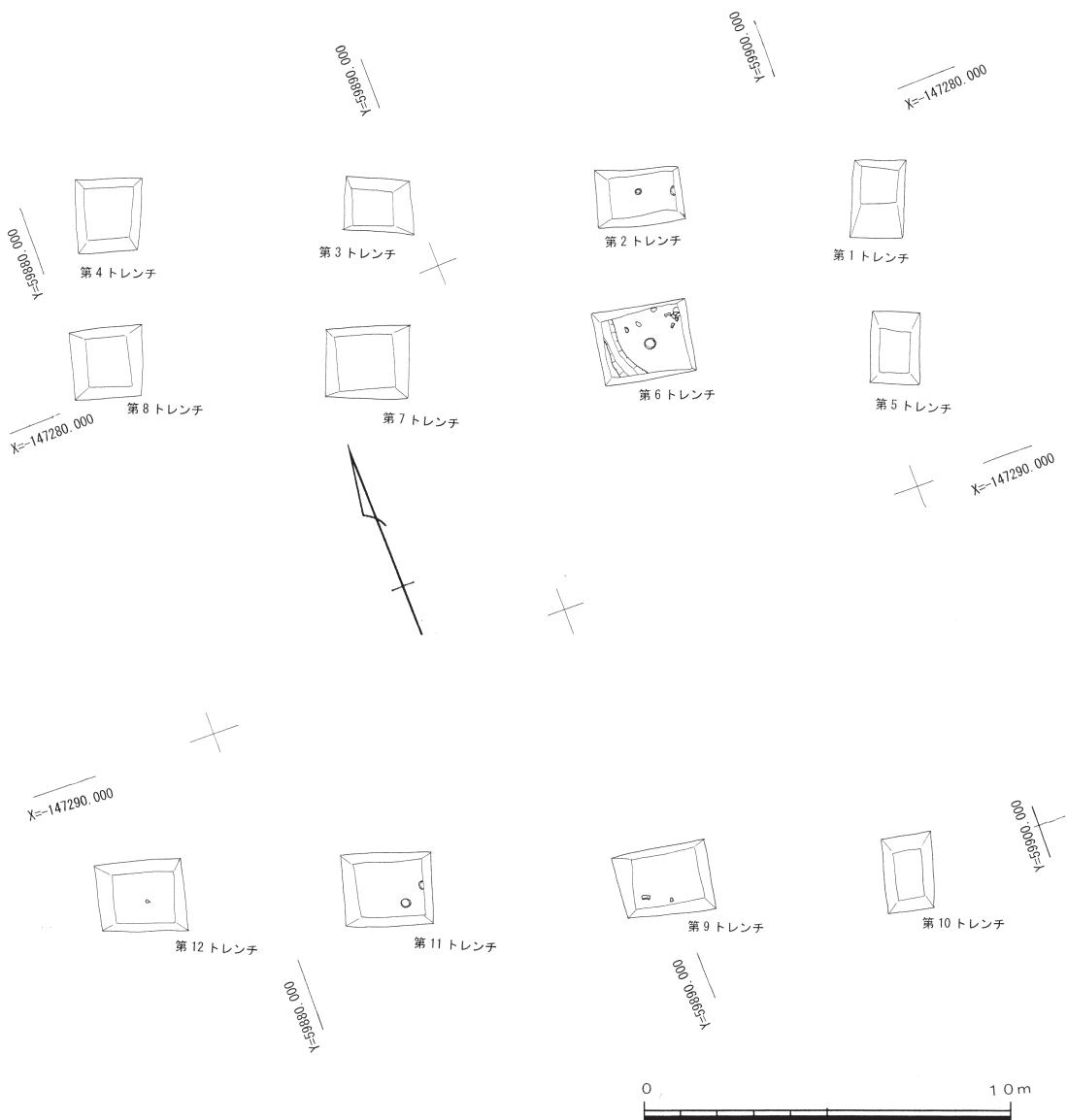


fig.115 遺構平面図

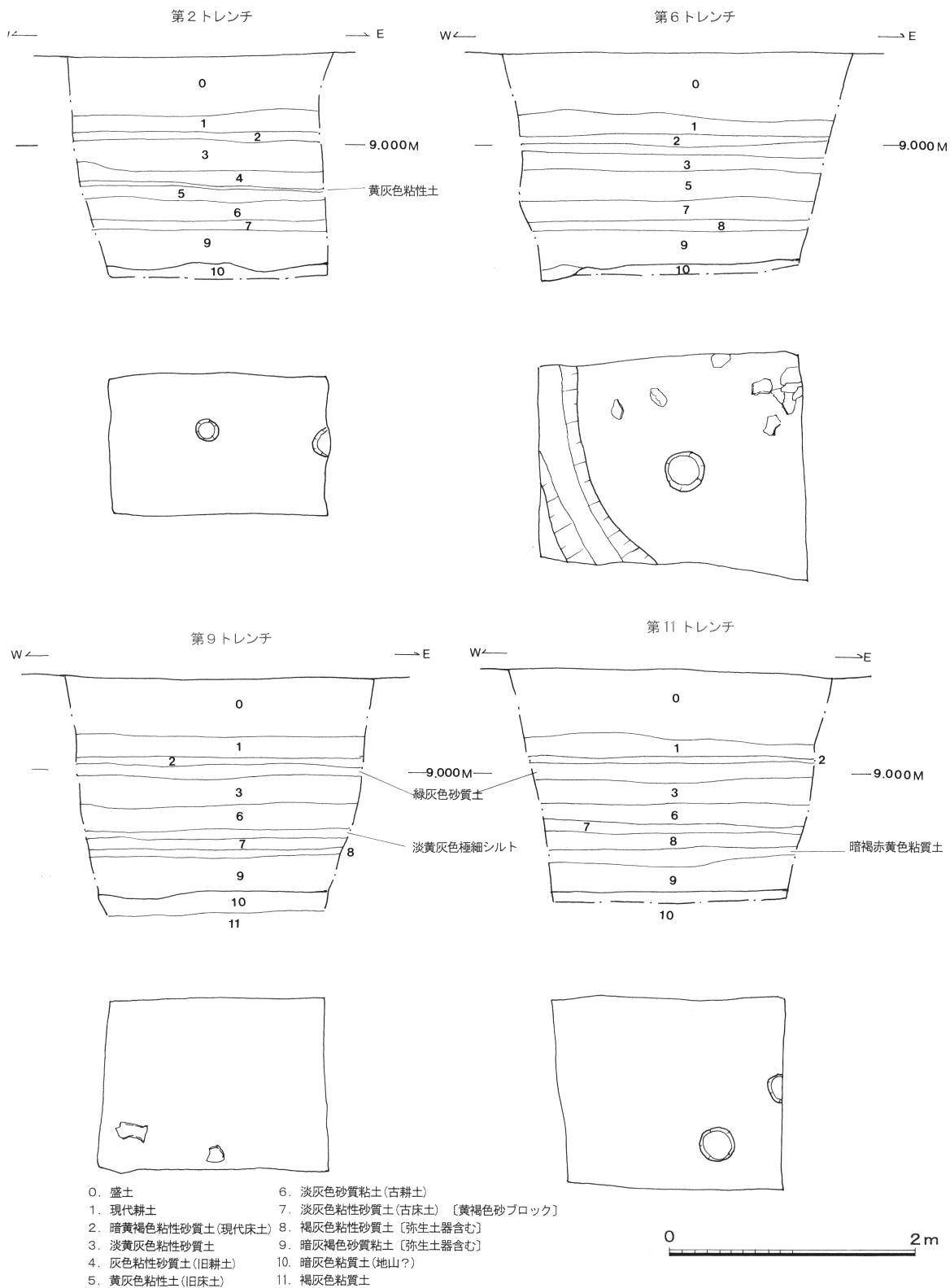


fig.116 主要調査区平面・土層断面図

24. 今津遺跡 第25次調査

1. はじめに

今津遺跡は明石川下流域東岸の沖積地に位置する。過去の調査において、弥生時代～室町時代の遺構、遺物が確認されていることから、古来より生活に適した地域で、集落が連続と営まれていたことを窺い知ることができる。

2. 調査の概要

今回の調査は宅地開発事業に伴うもので、汚水排水施設埋設箇所において実施した。調査においては、弥生時代中期～中世の遺構、遺物を検出した。調査は、便宜上A～D区の4カ所に区分して行った。

遺物包含層と考えられる暗褐色シルトの下層上面が遺構面となり、弥生時代中期に属すると考えられる落ち込み、土坑、ピットを検出した。遺構面の標高は、概ねT.P.8.3～8.4mである。

基本層序

上層より現代盛土、現代耕土、旧耕土層（上層より灰茶色砂質シルト、黄灰色シルト、淡黄灰色シルト、灰黄色シルト）、暗褐色シルト（遺物包含層）、黄茶褐色礫まじり砂質シルトおよび黄茶褐色礫まじり粘質シルト（遺構面ベース層）となり、暗褐色シルト（弥生時代中期の遺物包含層）の下層上面が遺構面となる。近隣の調査地においては、暗褐色シルトの上面が古墳時代後期頃の遺構面となっているが、今回の調査地では、当該時期の遺構は確認されなかった。しかし、上層の旧耕土層で少量の古墳時代～中世の遺物を確認した。

検出した遺構は、落ち込み4カ所（SX2501、SX2502ほか）、小規模な溝状遺構2カ所、ピット1カ所である。SX2501、SX2502より数点の土器片が出土している。

SX2501

SX2501はA区の西端部からB区の東端部で検出した不整形の落ち込みで、検出箇所での規模は、幅1.7～4.8m、深さ約30cmを測る。



SX2502

SX2502はC区の中央部からD区の東端部で検出した溝状の落ち込みで、検出箇所での規模は、幅3.8~4.5m、深さ約40cmを測る。

遺物はSX2501より弥生土器の甕や壺の口縁部などを確認したほか、SX2502および遺構面直上の暗褐色シルト（遺物包含層）から数点の土器片を確認している。時期はいずれも弥生時代中期中葉に属するものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、遺構の検出密度も疎で、遺物も少量であったが、集落の一部を確認できた。弥生時代中期における集落の中核部は、竪穴建物等が検出された西側近接地にあたる区域と考えられるが、今回の調査地は、その集落の東側の縁辺部に位置し、検出された落ち込み（SX2501、SX2502など）は、集落の内外を区分する施設とも想定でき、集落の拡がりやその様相がさらに明らかにできた。

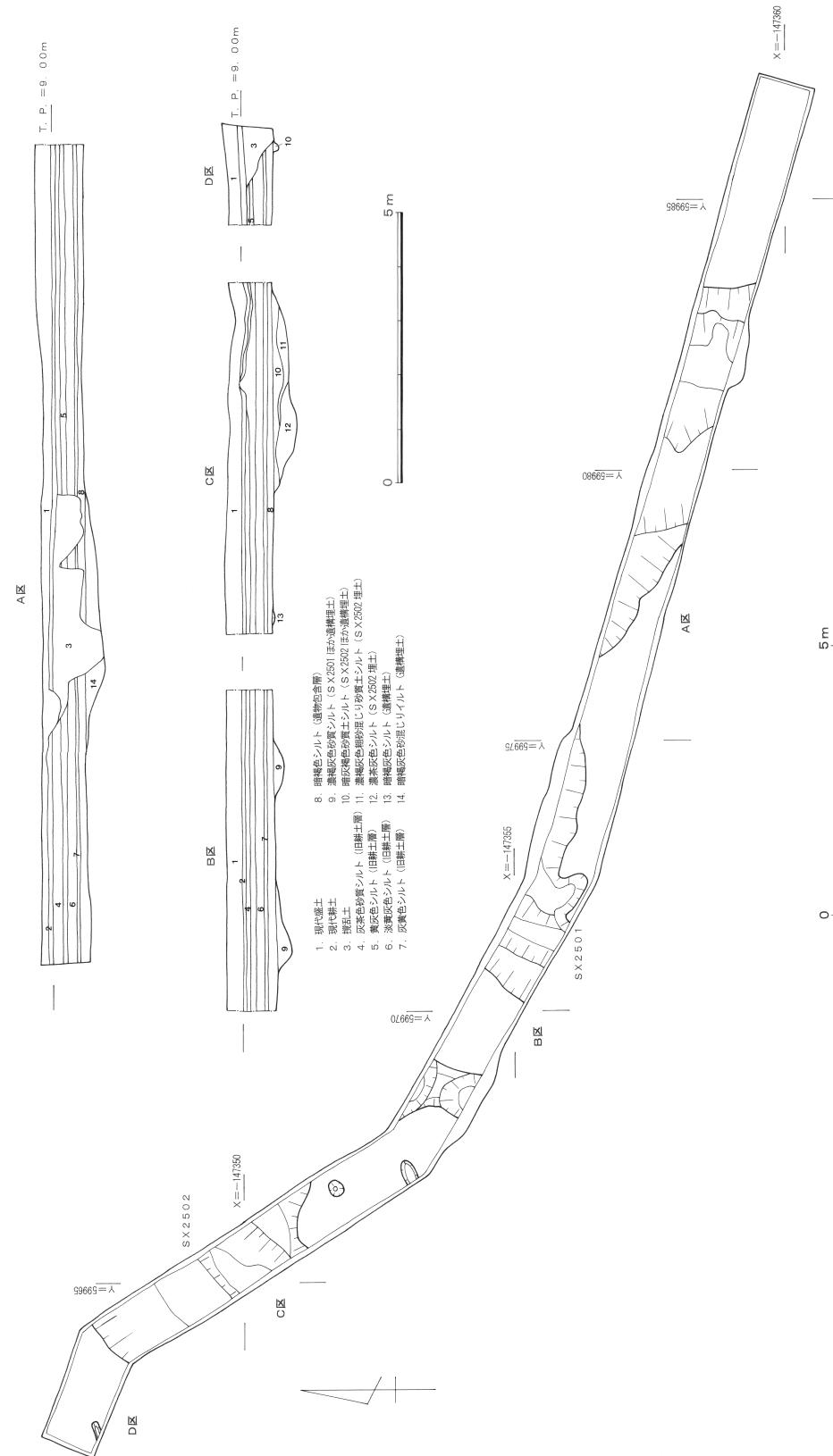


fig.118 調査区平面・土層断面図

25. 新方遺跡 第52次調査

1.はじめに

新方遺跡は、1970年の山陽新幹線建設に伴う発掘調査を皮切りに、これまで51次の調査が実施され、縄文時代晚期以降近世に至るまで継続する遺跡として周知されている。縄文時代晚期の遺構は検出されていないが、弥生時代前期から古墳時代全時期に至る明石川下流域の歴代拠点集落として知られるところである。

新方遺跡は、明石川左岸に位置し、明石川の支流天井川と明石川本流との間に形成された沖積地に立地する遺跡である。この沖積地には、北東側から南西流する古い河川氾濫により、幾筋かの自然堤防が形成され、これらの高台部分に弥生時代前期期以降鎌倉時代に至るまで、継続的に居住域もしくは墓域が営まれたと推定される。

2. 調査の概要

今回の調査地は個人住宅建設工事に先立って基礎工事の柱状土壤改良による影響範囲について実施した。調査に当たっては、北側より第1トレンチ～第4トレンチを設定して調査を実施した。

調査地は全域に現代の耕土直上に0.6mの造成土が盛られ、現代耕作土以下0.5mまで旧耕作土の堆積が見られる。これら旧耕作土の内第3層の灰色粘性砂質土に鎌倉時代の須恵器を含む土器細片が含まれる。この灰色粘性砂質土の下に灰色極細シルト、茶褐灰色粘性砂質土、明褐灰色粘性砂質土（奈良時代遺物包含層）が遺構検出面の上に被覆している。

遺構検出面では、比較的大型の柱穴と考えられる方形のピットや、小型の円形ピット、土坑、溝を検出した。この遺構群は北東から南西流する埋没河道の上面に約20～40cmの土砂で整地した後に掘り込まれている。



fig.119 調査地位置図 1:2,500

整地層及び埋没河道の堆積土内からは弥生時代中期から古墳時代、奈良時代までの土器・瓦が出土している。

第1 遺構面

第1 トレンチ

現地表下1.1mの明褐灰色粘性砂質土及び暗灰褐色砂質土を検出し、その上面から掘り込まれた円形ピット4ヶ所、東から西に流れる溝1条（SD1101）を検出した。

SD1101

幅約1.1m、深さ30cmの断面皿状の溝又は河道で埋土内から須恵器・土師器片が出土している。

第2 トレンチ

現地表下1mで明褐灰色粘性砂質土、暗灰色粘質土を検出し、その上面から掘り込まれた方形のピット5ヶ所と土坑1ヶ所（SK2101）、性格不明の落ち込み（SX2101）を検出した。

SK2101

南北1.6m、東西0.4m以上の長楕円形の土坑と推定される落ち込みである。断面は皿状で、深さ20cmを測る。埋土上層部から須恵器瓶口頸部片が出土した。

SX2101

南北0.4m以上、東西3.5m以上、西端はSK2101に切られ、深さは約20cmを測る。断面U字形を呈する溝状の性格不明遺構である。西側は調査区外となる。出土遺物はない。

P2102

調査区東端で検出した柱掘形である。2ヶ所の柱掘形が重複する。南側の掘形は一辺0.6m、

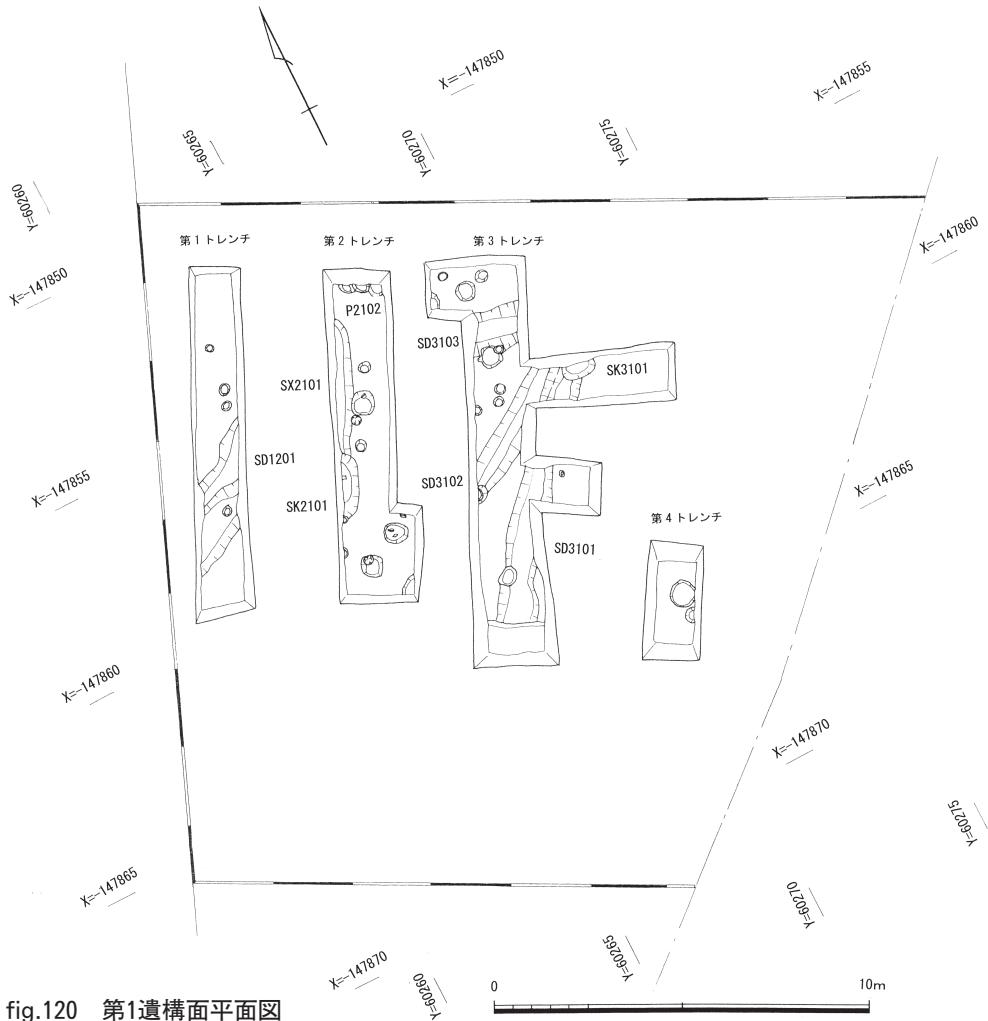


fig.120 第1遺構面平面図

深さ30cmを測る。径約25cmの柱痕が明瞭で、柱痕跡と掘形埋土から土師器坏片が出土した。

第3トレンチ

現地表下1.0mで明褐灰色粘性砂質土を検出し、その上面で方形ピット3ヶ所、円形ピット6ヶ所、溝2条（SD3101・3102）、南北溝1条（SD3103）、土坑1ヶ所（SK3101）を検出した。

SD3101

断面皿状の旧耕土直下から掘り込まれた素掘り溝である。調査区北壁の観察結果から幅2.0m、深さ約42cmを測る。埋土内から須恵器・土師器が出土している。

SD3102

SD3101の北側を同様に東西流する奈良時代整地層から掘り込まれた断面V字形の素掘り溝である。幅約0.8m、深さ約25cmを測る。埋土内から須恵器が出土している。

SD3103

溝もしくは浅い落ち込み遺構である。幅1.2m、深さ約10cmで、埋土から奈良時代の須恵器・土師器の坏・蓋の破片が出土している。

SK3101

SD3101によって上部を削られている。長径0.9m、短径40cm以上の橢円形を呈し、深さ約20cmが残存している。埋土から奈良～平安時代の須恵器・土師器がまとめて出土した。

第4トレンチ

現地表下1.3mで明褐灰色粘性砂質土を検出し上面で方形ピット1ヶ所、円形ピット1ヶ所を検出した。方形掘形は一辺0.6m、深さ20cmで埋土から土師器片が出土している。

第2遺構面

第1トレンチ

奈良時代整地層を除去した結果、調査区の南部と北西部の下層において東北から西南に流下する河道2条を検出した。南部で検出した河道は第2トレンチで検出した河道の継続部分と考えられる。

第2トレンチ

奈良時代の整地層を除去した結果、調査区の中央から南部の下層において東北から西南に流下する河道を検出し、河道の埋没後に掘り込まれた土坑（SK2201）および、調査区北東部において性格不明の落ち込み（SX2201）を検出した。

SK2201

調査区中央南寄りに検出した不定形の土坑である。南北1.8m、東西1.2m、深さ30cmで、断面形は逆台形である。埋土内から土師器もしくは弥生土器が出土している。

SX2201

調査区北東隅に検出した北側に落ち込む段状の遺構である。深さは25cmを測る。埋土内から土師器もしくは弥生土器が出土している。

河道

幅は検出面で約6mである。河道上層の埋土はシルト質の灰色粘性砂質土で、埋土内から奈良時代、古墳時代、弥生時代の土器が出土している。

第3トレンチ

SD3201

幅1.5m～2.1m、深さ約30cmの断面U字形の素掘り溝である。埋土内から弥生土器・須

恵器が出土している。

SX3201

不定形の落ち込み遺構である。東西1.2m、南北1.7m以上で、深さは約20cmで断面形は船底形である。埋土内からは弥生土器・須恵器が出土している。

SX3202

不定形の落ち込み遺構である。東西1.8m、南北0.8m以上で、深さは20~25cmで断面は船底形である。埋土内からは弥生土器・須恵器が出土している。

3. まとめ

今回の調査では奈良時代～平安時代前期に亘る遺物包含層と柱掘形と考えられる大型のピット、溝などを検出した。これらの古代の建物群は、北東から南西に流下した自然河道や低湿地をある程度埋め立て、造成して営まれていたことが今回調査の土層観察などから明らかになった。

なお調査区域が限定された今回の調査では、建物の状況は明確できなかったが、調査地点の南東部に当たる小部・明石線拡幅工事に伴う調査における奈良時代建物群の広がりの一部を確認できたと考えられる。

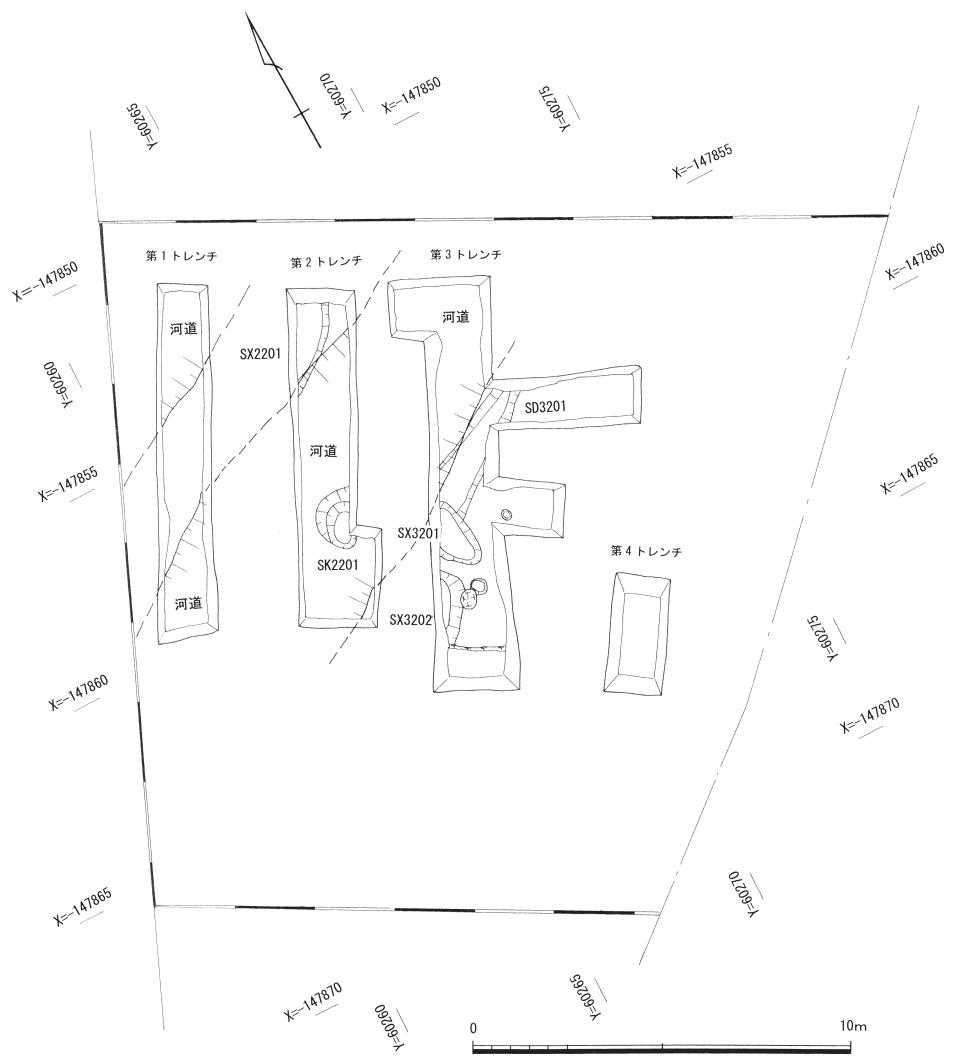


fig.121 第2遺構面平面図

26. 馬掛原遺跡 第3次調査

1. はじめに

馬掛原遺跡は、平成15年9月都市計画道路出合新方線建設工事に先立って実施された発掘調査で発見された。これまでの調査では、耕作土直下が遺構面となり遺物包含層がほとんど存在せず、遺物は遺構内からの出土に限られる。遺構も削平を受けている場合が多い。調査で検出された遺構は区画墓に伴う溝および掘立柱建物で、掘形の埋土から弥生時代～古墳時代の土器が出土していることから、馬掛原遺跡は弥生時代終末期から古墳時代初頭の集落もしくは墓域といった遺跡と考えられてきた。

また、平成22年度に実施した馬掛原遺跡第1次発掘調査地の東側の畠地における確認調査においても同様に耕作土直下の遺構面で浅いピット等を検出し、微少の弥生時代～古墳時代の土器片を検出している。

2. 調査の概要

今回の調査は、当該地の東方に予定される潤和山手土地区画整理事業地への工事用進入路構築工事に伴う削平工事予定地部分についての調査を実施した。

調査地は、都市計画道路出合新方線の北東側畠地で西側の開析谷に接している。道路部削平地と造成土の土採り部について楔形に調査区を設定して調査実施した。調査は、重機により表土および灰黄色粘性砂質土の流出土を除去し、黄灰褐色粘質土の地山を表出し、遺構検出作業等を進めた。調査区の土砂堆積状況の把握は、楔形調査区の中央を東西に観察用セクションを残して記録した。



fig.122 調査地位置図 1:2,500

調査地の層序は、南東から北西に緩やかに傾斜する畠地・山林に20cm～0.8m前後の表土・灰黄色粘性砂質土の流出土が堆積する。この表土・灰黄色粘性砂質土の下に黄灰褐色粘質土の地山面を検出し、竪穴建物1棟、不明ピット5ヶ所を検出した。

竪穴建物

隅円長方形の竪穴建物で東西8.3m、南北5.0mの規模を測る。壁体は高位の南東部で27cm、低位の北西部で12cmを残す。中央部は倒木痕により損壊している。支柱穴は3.4mの柱間距離をおいて中央に2ヶ所検出した。掘形は直径0.5mの円形で深さ40～50cmを測る。壁体周縁には幅約20cm、深さ約10cmの周壁溝がめぐる。南壁中央よりに灰層・焦土・土師器壺底部を埋土に含む一辺0.5m、深さ14cmの方形のピットを検出した。遺物は西側壁体に接する床面上と北側壁体中央付近で古墳時代前期と考えられる土師器甕体部片・小型壺片が出土した。埋土上層では土師器高环脚部が出土している。

溝

竪穴建物の北辺中央に直交して掘られた溝で、竪穴建物と土坑に切られる。竪穴床面で検出した溝の幅は約20cm、深さは約12cmで、竪穴建物の北壁から開析谷方向に延びる。溝の断面形はV字形で上端幅0.5m、底幅15cm、深さ40cmを測り、緩やかに谷方向に下降する。埋土内から古墳時代前期と考えられる土師器高环脚部が出土している。

3.まとめ

今回の調査では、調査区中央部で竪穴建物1棟を検出し、竪穴建物中央から設けられたとも考えられる溝を検出した。この溝が竪穴建物と同時か、それ以前かは不明であるが、出土遺物からは竪穴建物の排水施設の可能性が高い。

今回の調査では第1次・第2次調査の成果とは異なり、竪穴建物を検出した。今回の出土遺物と従前の調査

での出土遺物の検討
が必要であるが、今
回検出した竪穴建物
と第1・2次調査で
検出した区画墓が同
一時期のものか、前
後するかによって、
遺跡の性格や構成を
考える上で重要な手
がかりを得るものと
考えられる。



fig.123 遺構平面図

III. 平成25年度の保存科学調査・作業の概要

平成25年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

1. 小路大町遺跡第5次調査：脆弱遺物の取上げ

平成25年度、東灘区本山南町において実施された小路大町遺跡の第5次調査においては、弥生時代前期の堤間湿地の堆積土中より、植物遺体および木製品が出土した。木製品には鍬、低脚付きの盤などが認められるが、Ⅱ区で出土した狭鍬は柄が着装された状態であり、特筆される。

取上げにあたっては鍬身、柄ともに割れしており、材そのものの劣化も進行していること、また柄の着装状態を保持したまま取り上げることが望ましいことなどから、発泡ウレタンフォームで梱包し、取上げることとした。発泡ウレタンフォームは2液混合式のもの（日清紡エアライトフォーム）を用いた。特性としては、2種類の原液を混和し、発泡、硬化するため、複雑な形状の隅々まで追従し、保持することが可能である。

まずは取上げ範囲を残して周囲を掘り下げる。遺物単体では取り上げ時のストレスに耐えられないため、遺物の下部土壤もある程度の範囲を同時に取り上げる。その後、遺物に直接発泡ウレタンフォームが接触しないよう、紙製ワイパーおよびアルミホイルで養生した。さらにウレタンフォーム流し込みのために周囲にダンボールで型枠を設置し、発泡ウレタンフォームを流し込み、梱包後、取り上げた。

取り上げ後の木製品は埋蔵文化財センターに搬入し、開梱、洗浄し、現在仮保管中である。今後、実測、保存のための樹脂含浸処理等を行ない、恒久的な保管を図る予定である。



fig.124 木製品取り上げ作業



fig.125 開梱・洗浄作業

2. 西求女塚古墳：青銅鏡の保存科学的調査

西求女塚古墳は灘区都通に所在する3世紀後半築造の前方後方墳で、国史跡に指定されている。副葬品も古相の三角縁神獣鏡を中心とした舶載青銅鏡群をはじめ、多彩な鉄製武器工具ほか、豊富に出土しており、これらも国の重要文化財に指定されている。

平成25年、近隣の小学校児童が当地において過去に表探し、大切に保管していた青銅鏡破片の存在が同小学校から報告された（fig.126）。これを詳細に調査すると、昭和60年度の第1次調査時に出土した、西求女塚1号鏡（国指定重文）と同一の青銅鏡の破片であることが判明した。同一と判定した根拠として、文様構成や法量等も然る事ながら、素材そのものや劣化の状況について調査し、両破片の比較を行うこととした。

まずはX線ラジオグラフィ観察を行った（fig.127）。結果、画像のコントラストはほぼ同じであり、両者のX線吸収率が近似することがわかる。また表面観察では判別できない微細なクラックも明らかとなり、両者の共通性を補強する結果が得られた。これは素材の共通性、劣化のプロセスの類似性を示唆していると言える。

また素材について比較するため、蛍光X線分析を実施した。これは、非破壊で対象物の化学組成を分析することができるため、文化財という性格上、非常に有効な分析手法である。今回は（独）奈良文化財研究所保存修復科学的研究室のご協力を得、下記の条件で測定を実施した。

〔分析機器〕 EDAX EAGLE III

〔測定条件〕 管電圧：40KeV、電流： $30\mu\text{A}$ 、測定時間：300秒

測定は、1号鏡については鏡背および鏡面各1か所と破断面2か所の計4か所、採取鏡は鏡背2カ所および鏡面1カ所、破断面2カ所の計5か所について行った。結果、表11に示した所見が得られ、両者ともに銅（Cu）—スズ（Sn）—鉛（Pb）を基本材料として、微量のヒ素（As）および銀（Ag）を含む青銅を用いていたことが判明した。

以上の結果をまとめると、

- ・ヒ素と銀を微量に含む青銅を素材に使用している。
- ・X線吸収という側面から、素材の類似性が認められる。
- ・劣化の状態から、埋蔵環境の類似性が示唆される。

となり、互いの共通性を追認することができた。

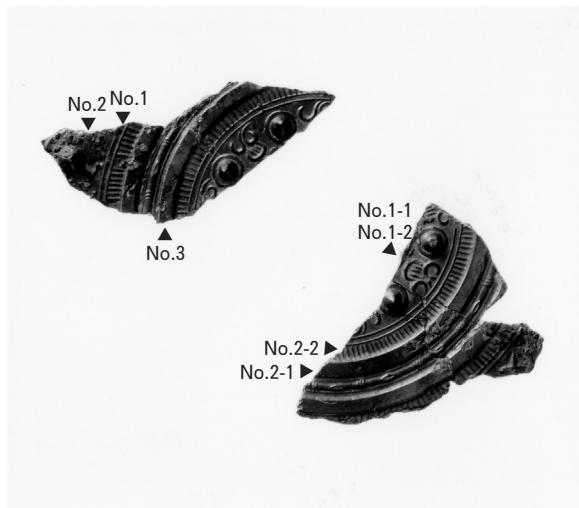


fig.126 西求女塚1号鏡（左）・表採鏡（右）



fig.127 同左X線ラジオグラフィ

表11 西求女塚1号鏡・表採鏡蛍光X線分析結果

	測定No.	部位	積分強度 (cps/mA)							分析所見	
			スズ L	鉄 K	銅 K	水銀 L	ヒ素 K	鉛 L	銀 K		
西求女塚 1号鏡	No. 1	破断面	74.90	10.84	1418.87	—	9.35	11.88	0.53	39.92	銅錫鉛の青銅。砒素・銀を僅かに検出。
	No. 2	破断面	73.18	15.72	1169.06	—	8.99	10.83	0.28	30.60	青銅。土砂付着のため、No.1に比べ、鉄がやや高い。砒素・銀を僅かに検出。
	No. 3	鏡背素文突帯	96.50	47.76	906.82	—	16.50	18.48	0.79	82.18	表面腐食層の脱銅化にともない、錫リッチ。
	No. 4	鏡面	118.53	15.18	445.79	—	40.91	46.83	0.78	75.95	表面腐食層の脱銅化にともない、錫リッチ。砒素・銀もやや高めに検出。
表採鏡	No.1-1	破断面	55.57	11.75	1555.86	—	18.97	22.39	0.49	27.57	1号鏡のNo. 1とほぼ同様の状況。
	No.1-2	破断面	52.36	8.82	1503.05	—	13.86	16.90	0.32	30.04	1号鏡のNo. 1とほぼ同様の状況。
	No.2-1	鏡背素文突帯	102.54	57.36	942.27	—	16.68	20.04	0.85	90.13	1号鏡のNo. 3とほぼ同様の状況。
	No.2-2	鏡背櫛歯文帯	101.00	114.68	514.44	3.63	36.27	42.61	0.99	98.18	櫛歯文帯の凹部赤色残存部分。水銀朱の使用が示唆される。
	No.3-1	鏡面	105.03	45.81	677.53	—	27.17	31.19	0.90	76.55	1号鏡のNo. 3とほぼ同様の状況。

青銅鏡は発見者のご厚意により、神戸市に寄贈された。これに際し、ご本人の手元に形として残して頂けるよう、当該鏡のレプリカを製作し、お渡しすることになった。レプリカ製作の手法としては、非接触による3Dイメージングデータを採取し、3Dプリンターで出力する方法をとった。

3Dイメージングは大手前大学史学研究所のご協力を得て実施した。イメージングには、コニカミノルタ社製のRANGE 7を使用した。採取したデータは、ノイズクリーニング等のデータ調整を経、Objec t社製3Dプリンター（Connex 500）にて造形出力を行った。素材にはアクリル系合成樹脂を使用しており、神戸市埋蔵文化財センターにおいて補彩を行い、完成後、ご本人にお渡しした。



fig.128 3Dイメージング作業



fig.130 完成状況（上）レプリカ（下）実物

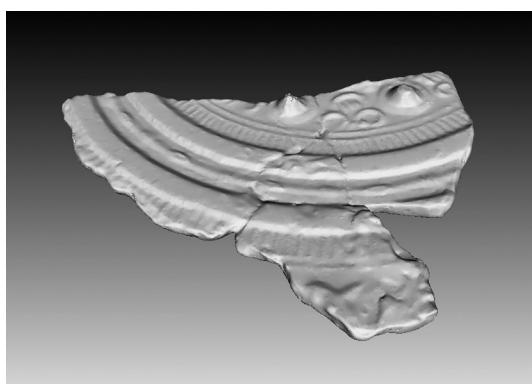


fig.129 イメージング画像

3. 楠・荒田町遺跡第53次調査：土壙墓副葬品の保存科学的調査

平成24年度に実施された楠・荒田町遺跡第53次調査では、中世の土壙墓（ST202）から副葬品として、和鏡、鉄刀子、青白磁合子などが出土した。和鏡（fig.131）は「草花双鳥鏡」で、直径10.0cm、ほぼ真円を呈する。また、鏡の鏡面側に折り重なるように接した状態で鉄刀子が出土した。両者の表面には布帛の付着が観察できたが、隙間には布帛は存在せず、副葬時に二つを一度に包んでいたと考えられる。布そのものはかなり脆弱化しており、鋸化したものが固定されている以外、辛うじて土砂と一緒に乗っているような状態であった。また鉄製刀子の茎には、把の木材が付着残存していた。

〔和鏡の調査〕和鏡について、X線ラジオグラフィでの構造調査と、蛍光エックス線分析による素材調査を実施した。

X線ラジオグラフィ調査では、表面がサビや有機質に覆われている状況下でも文様の観察が可能であった（fig.132）。また、外区上方、鈕左上にX線吸収の低い斑部分が観察できる。これは鋸造時の湯流れの斑によるものと考えられる。劣化は全体に進行が認められ、保存に向けた処置の方針決定に寄与するものであった。

蛍光エックス線分析調査は、西求女塚鏡同様、（独）奈良文化財研究所保存修復科学研究所のご協力を得、測定時間のみ100秒として行った。分析した部位は鏡縁頂部の黒色部（No.1、No.2）と灰色部（No.3）の3か所について定性分析を実施した。結果、表12に示した分析データが得られた。

分析結果からは、銅（Cu）—スズ（Sn）—鉛（Pb）を基本材料として、微量のヒ素（As）が含まれる青銅を用いていたことが判明した。少量の鉄（Fe）が検出されているが、付着土砂の影響と考えられる。



fig.131 草花双鳥文鏡

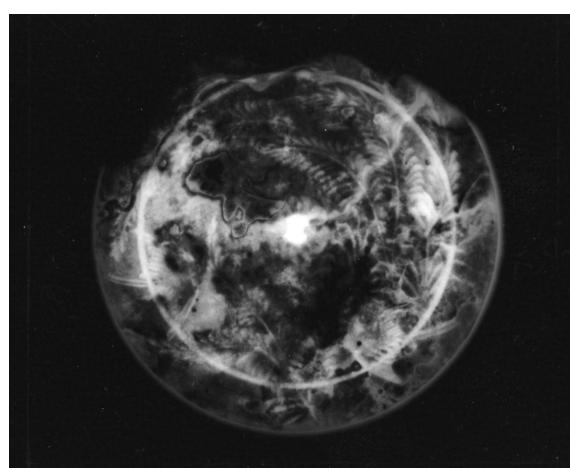


fig.132 同左X線ラジオグラフィ

表12 和鏡蛍光X線分析結果

測定 No.	表面 色調	積分強度 (cps/mA)						
		鉛 M	スズ L	鉄 K	銅 K	ヒ素 K	鉛 l	スズ K
No. 1	黒色部	8.15	1.62	7.21	322.23	267.1	299.25	8.28
No. 2	黒色部	11.35	0.39	14.36	384.08	236.34	270.88	9.58
No. 3	灰色部	6.27	29.56	25.98	599.87	174.57	198.09	10.74

〔有機物の調査〕先述したとおり、和鏡および鉄刀子には布帛が付着残存しており、鉄刀子には把装具の残欠が付着残存していた。以下、顕微鏡観察を中心とした調査の結果を記す。

和鏡と刀子全体を覆っていた布帛をルーペによって観察すると、織り目が密なものと、粗く透けたものが観察できる (fig.133・134)。糸の太さは密なもので約180~280 μm、粗いもので140~200 μm を測る。織り密度はいずれも経糸が33~43本/cm、緯糸が30~40本/cm程度であり、経緯比はどちらもほぼ1:1と言える。また、単糸は粗いものは2本、密なものも複数の单糸で構成され、撫りはほとんどかけていない。粗密両布帛の重なりについて、詳細は判然としなかった。二者が別物でなく同一の織物であり、部位によって糸の太さに差があるか、劣化の過程で糸が瘦せて筋目に見えているだけの可能性もある。今後さらに検討の必要がある。

さらに、採取した布帛資料をエポキシ系合成樹脂に包埋し、薄層プレパラート化して顕微鏡観察を行なった。fig.135では、横走する経糸を上下から挟む形で緯糸の横断面が観察できる。中央の緯糸断面は扁平な人眼形を呈する。少々わかりづらいが、絹に特徴的な三角形の单纖維断面が観察できた。現状で観察した限りでは、糸1本当たり250~300本の单纖維を集束させている。单纖維の長径は13~15 μm を測る。

fig.136は、経糸の横断面と緯糸の縦断面になる。写真上半が絹であり、下半は付着土壤であるが、腐食劣化のため、詳細な観察は困難である。直線的な緯糸の上下に交互に経糸の断面が観察できる。

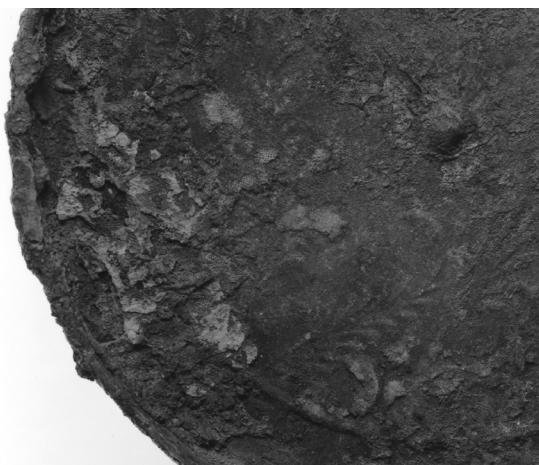


fig.133 和鏡鏡背平絹残存状況 (1.2倍)



fig.134 和鏡鏡背平絹残存状況 (4倍)

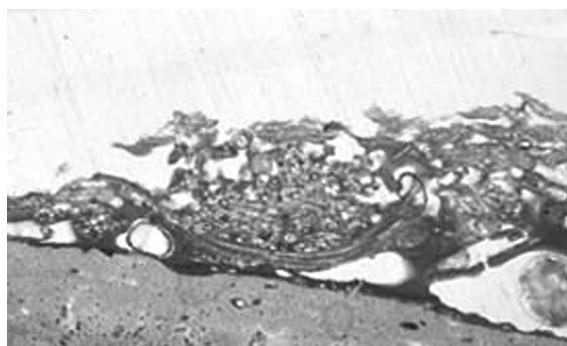


fig.135 平絹緯糸横断面 (透過光: 50倍)

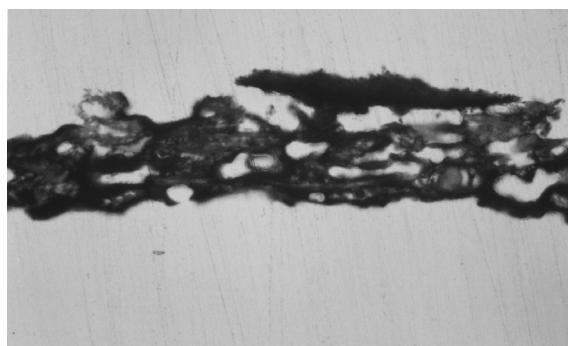


fig.136 平絹経糸横断面 (透過光: 50倍)

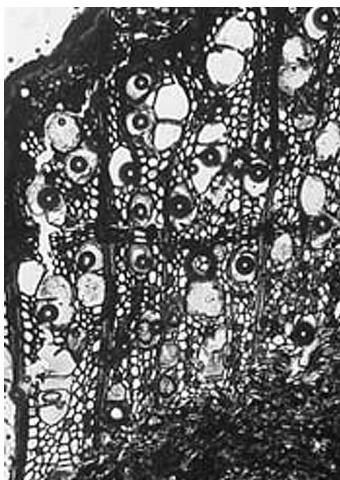
鉄刀子の把装具について、樹種同定調査を実施した。表面を実体顕微鏡によって観察した結果、広葉樹の散孔材であることが判明した。これをさらに少量サンプリングし、布帛同様、樹脂に包埋して薄層プレパラート化し、生物顕微鏡にて観察した。結果、ホオノキ（モクレン科）であることが判明した。以下に同定根拠を記す。

fig.137は木口断面である。中央付近に年輪界が存在するため、2年輪分になる。散孔材で、単独か、まれに2個の道管が均等に存在している。放射組織は1～2列で、多くは2列で均等に存在する。

fig.138は板目断面である。中央付近に縦走する道管が存在するが、その側壁に階段壁孔が並んでいることがわかる。木纖維は隔壁を有する。放射組織はほとんどが2列で、5～20細胞高を数える。

以上、下記のような結果が得られた。

- ・ST202に副葬されていた和鏡は微量のヒ素を含む青銅製である。
- ・和鏡と刀子は、絹織物に包まれた状態で置かれていた。包んでいた織物は平絹で、密な織りと簇目のもの2種類があった可能性もある。
- ・鉄刀子の把にはホオノキが使用されていた。ホオノキは均質で柔らかい、加工性の良好な材である。古墳時代の鉄剣装具などにも使用された実例がある。



(左) fig.137 鉄刀子把木質
木口断面 (透過光: 50倍)

(右) fig.138 鉄刀子把木質
板目断面 (透過光: 100倍)

遺跡名	次数	分析項目	資料数
深江北町	12	樹種(生材)	27点
		大型植物化石	1720点
楠荒田町	56	花粉分析	3ブロック
		珪藻分析	3ブロック
兵庫津	57	樹種(生材)	370点
		珪藻分析	52ブロック
		大型植物化石(同定)	85点
		昆虫遺存体	3点
大橋町東	5	花粉分析	3ブロック
		珪藻分析	3ブロック

表13
平成25年度 自然科学分析

付論. 吉田南遺跡出土の動物遺存体

—ウマ遺存体の分析を中心に—

丸山 真史（東海大学海洋学部）
覚張 隆史（北里大学医学部）

はじめに

吉田南遺跡は神戸市西区森友に位置し、下水道処理場建設（現神戸市西水環境センター）に先がけ、故田辺昭三氏を代表とする調査組織によって1976年から1981年にかけて発掘調査が実施された（図1）。その結果、弥生時代から室町時代の遺構・遺物が濃密に出土し、殊に播磨国明石郡衙と想定される掘立柱建物群がよく知られている。出土遺物や発掘調査の記録写真は、整理作業終了後、神戸市教育委員会に移管され、保管・展示されている。

かつて、当遺跡では弥生時代末～古墳時代初頭の動物遺存体が溝から出土し、殺牛・殺馬による豊饒儀礼が想定されていた〔土肥1983〕。この報告がなされた当時は、詳細が判明してなかったようで、その後、神戸市教育委員会の協力によって筆者らは、動物遺存体の出土遺構、その時期などを把握するに至り、動物利用の一端を紹介した〔丸山真2012〕。しかし、動物遺存体に関する基礎的情報は未報告のままであったため、今回、吉田南遺跡から出土した動物遺存体の概要と、ウマの移動や食性に関する安定同位体分析について報告することにした。また、ウマなどの哺乳類について年代測定を行った結果も、あわせて報告する。

1 遺跡・遺構の概要

吉田南遺跡の正報告書は未だ刊行されていないので、遺跡の概要を知るには、発掘調査中に開催された現地説明会の資料など〔奈良大学考古学研究室 1977 (a)・(b)・(c)、吉田・片山遺跡発掘調査団 1977・1978、吉田・片山遺跡発掘調査団・神戸市教育委員会1978、神戸市教育委員会・吉田・片山遺跡発掘調査団 1979・1980、吉田南遺跡を考える会 1977〕によるしかない。

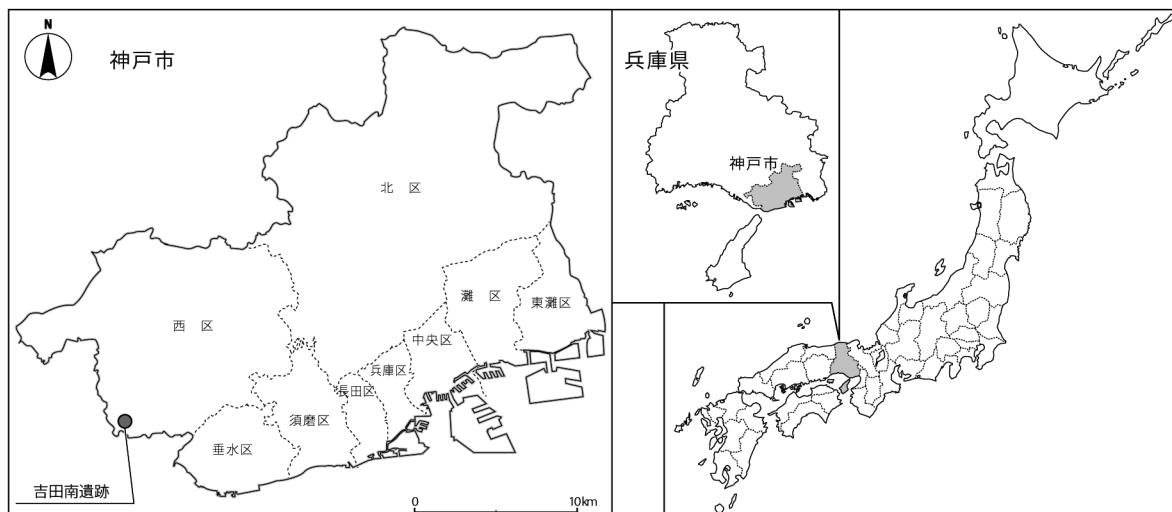


図1 吉田南遺跡位置図

動物遺存体は主として溝 SD11と河川から出土しており、いずれの遺構も出土遺物から長期間の開放状態が認められる。それらの概要を、先述の現地説明会資料などを基に、以下に記す。

溝 SD11は、現地説明会資料では「大溝」「溝11」などとも表現されている。この溝を境に、西に奈良時代掘立柱建物群が、東に古墳時代竪穴建物群が分布している（図2）。出土遺物から、5世紀後半に開鑿され、10世紀まで継続して使用されたと考えられている。その規模は、幅7m、深さ2.7mである。

溝内には、厚さ15cm、長さ30mにわたる貝層が形成されており、7世紀前半とされる土器が出土している。貝層を構成する貝種は90%がハマグリ、残り10%がサルボウ、アカニシ、ウミニナ、マガキ、サザエで、その他シカやイノシシなどの獸骨が含まれる、とされてきた。しかし、90%を占めるとされるハマグリは、筆者の実見ではバカガイであった。

河川は、郡衙推定範囲の北東部に位置し、北から南へ流れる。弥生時代中期末には存在し、その後川幅を変えながら（45~20m）平安時代まで存在した。河川中の堆積は、大きく4層に分離することが可能で、以下のように説明されている。

- ① 弥生時代中期～古墳時代前期の遺物を包含する。いずれの遺物も摩滅が著しい。
- ② 6～7世紀の遺物を包含する。この層位の出土遺物が最も多く、河川北側の集落より投棄されたと考えられる。
- ③ 奈良～平安時代前期の遺物を包含する。幅20m、深さ4mになり、土器類のほか、金属製品、木製品が出土している。明石郡内の地名である「葛江里」と墨書された木簡や、漆紙文書、



図2 吉田南遺跡古墳時代遺構配置概略図（「明石の古墳時代集落の消長」『明石の古墳II』に加筆）

木製車輪などがよく知られている。

④ 平安時代後期以降の遺物を包含する。

次に、これら溝 SD11と河川から出土した動物遺存体の概要を記述する。従来から注目されていたウマについては、その成長過程における移動と食性を明らかにするため、安定同位体分析を行った。また、動物遺存体について炭素14年代測定を行ったので、その結果は後述する。

2 動物遺存体の概要（表1、写真1～4）

古墳時代の溝 SD11

貝層を形成する貝種の主体は前述のようにバカガイである。その他にイタボガキ科がやや多く、カワニナ類、サザエ、アカニシ、ツメタガイ、シジミ類、サルボウ、オニアサリ、ベンケイガイ（？）が少数含まれる。

魚類は、サメ類の椎骨2点、コブダイの歯骨（右）とフグ科の前鰓蓋骨（左）が1点ずつ、計4点が出土している。サメ類の椎骨はいずれも椎体横径28mm程度を測り、大型のサメ類と推定される。コブダイは体長30cm以上の大型個体、フグ科は体長20～30cmと推定される。

爬虫類は、イシガメ科の下腹骨板（右）と内腹骨板（左右不明）が1点ずつ、スッポンの下腹骨板（右）が1点、計3点が出土している。イシガメ科は背甲板長20cm以上、スッポンはそれ以下の個体と推定される。

鳥類は、キジ科と思われる肩甲骨（右）が1点出土しているが、同定には至らない。

哺乳類は、ウシの上顎後臼歯が顎骨から遊離した状態で1点、ウマの肩甲骨（右）、大腿骨（左）、踵骨（右）、中足骨（右）が1点ずつ、ウシあるいはウマの下顎骨が1点、ニホンジカの頭蓋骨（右前頭骨）、顎骨から遊離した上顎後臼歯（左）、肩甲骨（右）、指骨（左右不明）が1点ずつ、計10点が出土している。

ウマの肩甲骨は関節部最大幅（GLP）が75.8mm、大腿骨は骨幹部最小幅（SD）が36.5mm、中足骨の最大長（GL）が263.6mmを測る。ニホンジカの肩甲骨は関節部最大幅（GLP）が43.4mmを測る。ニホンジカの頭蓋骨は鹿角が斧や鉈などの重量のある刃物を何度も叩きつけて切断している。

弥生時代～古代の河川

すべて哺乳類であり、ウシの下顎骨（左）、大腿骨（右）、中足骨（左）、ウマの中手骨（左）、大腿骨（右）、ニホンジカの下顎骨（左）、イノシシの椎骨（環椎）が1点ずつ、計7点が出土している。ウシの大脚骨の骨幹部最大幅（SD）が35.1mm、中足骨の近位端最小幅が46.2mmよりやや大きく、ウマの中手骨の最大長（GL）が210.6mm、大腿骨の遠位端最大幅（Bd）が90.0mmを測る。

出土地点不明

SD11、河川以外からの動物遺存体の出土はなく、これらもいずれかの遺構から出土したものである可能性が高い。

ウマの顎骨から遊離した状態の上顎後臼歯が2点、ウシの下顎骨（左1、右1）が2点、顎骨から遊離した状態の上顎臼歯が1点、イルカ類の椎骨1点、計6点が出土している。

3 年代測定の結果

出土したウマ、ウシ、シカの骨を用いて、炭素14年代測定を行った。測定に供した資料は、溝SD11から出土したウマ3点、シカ1点、河川から出土したウマ1点、ウシ2点、シカ1点、出土地点不明のウシ1点、計8点である。年代測定試料は神戸市埋蔵文化財センターにおいて覚張が採取した後、パレオ・ラボに測定を依頼した。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定され、得られ

表1 出土動物遺存体

番号	遺構	層位	大分類	小分類	部位	左右	備考
骨⑯	SD11, 3区	暗灰色砂	爬虫綱	イシガメ	腹甲板	右	
R⑧-2	SD11, 3区	暗灰色砂	哺乳綱	ニホンジカ	頭蓋骨	右	鹿角切断
骨⑦	SD11, 4区	灰褐色砂泥	哺乳綱	ウマ	踵骨	右	
骨⑯	SD11, 4区	暗灰色砂	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	-	椎体縦径28.13,横径27.67,厚15.71
骨⑯	SD11, 4区	暗灰色砂	軟骨魚綱	サメ類	椎骨	-	椎体縦径28.58,横径27.38,厚15.70
骨11	SD11, 4区	灰褐色砂泥	哺乳綱	ウマ	大腿骨	左	SD36.50
骨13	SD11, 4区	暗灰色砂	哺乳綱	ウマ	肩甲骨	右	GLP75.79,LG49.23,BG42.58,LSC51.48
骨10	SD11, 4区	暗灰色砂	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	右	GLP43.43,SLC26.27,BG31.31,LG32.45
骨15	SD11, 4区	暗青灰色砂泥	哺乳綱	ウマ	中足骨	右	GL263.55,Bp47.16,Bd48.64,SD28.42
	溝11,D区	灰褐色砂泥	哺乳綱	ウシ	遊離歯		
	溝11,D区	灰褐色砂泥	鳥綱	キジ科？	肩甲骨	右	
	溝11,C区	紫灰色混砂	爬虫綱	イシガメ	腹甲板	-	
	溝11,C区	紫灰色混砂	硬骨魚綱	コブダイ	歯骨	右	
	溝11,D区	暗灰色砂	哺乳綱	ニホンジカ	指骨	-	GL35.10
	溝11,D区	暗灰色砂	哺乳綱	ウシ/ウマ	下顎骨	-	
	溝11,D区	暗灰色砂	爬虫綱	スッポン	腹甲板	右	
	溝11,D区		硬骨魚綱	フグ科	前鰓蓋骨	左	20~30cm くらい
	溝11,D区	灰褐色砂泥	哺乳綱	ニホンジカ	遊離歯	左	M1/M2
R⑧-1	河川		哺乳綱	イノシシ	椎骨	-	GB97.83,GL51.49,BFcr59.59,55.08
骨16	河川	4層	哺乳綱	ウマ	大腿骨	右	SD37.01,Bd88.78
骨4	河川	5層	哺乳綱	ウシ	下顎骨	左	M3萌出中
骨6	河川-I,B区	5層	哺乳綱	ウシ	大腿骨	右	SD35.10、若齢？
骨14	河川	4層	哺乳綱	ニホンジカ	下顎骨	左	成獣
骨9	河川I	5層	哺乳綱	ウマ	中手骨	左	GL210.64,Bp46.36,Bd49.26以上,SD28.50
骨12	河川B区	5層	哺乳綱	ウシ	中足骨	左	Bp46.20以上,SD27.80
R⑧-3			哺乳綱	ウマ	遊離歯	左	歯冠高78.37以上
R骨③	ラベルなし		哺乳綱	ウシ	下顎骨	左	前臼歯列長55.96
骨R②-1	ラベルなし		哺乳綱	ウシ	下顎骨	右	前臼歯列長51.82(歯槽),後臼歯列長84.56(歯冠)
Rなし①		不明骨片					
Rなし③			哺乳綱	イルカ類	椎骨		
歯⑤			哺乳綱	ウマ	遊離歯		歯冠高75.39以上
			哺乳綱	ウシ	上顎	右	

た¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した（表2）。

測定結果は、溝 SD11、河川から出土した動物遺存体のうち、シカ1点を除いて6世紀中葉から7世紀前葉の古墳時代後期から終末期と推定される。河川から出土したシカ1点のみ、4世紀後葉から6世紀中葉の古墳時代中期から後期と推定される。

4 同位体分析の結果

出土したウマ、ウシ、シカの骨および歯を用いて、コラーゲンの炭素・窒素、歯エナメル質の炭素・酸素およびストロンチウム (Sr) 同位体分析を実施した（表3・4）。測定に供した資料は、溝 SD11から出土したウマ3点、シカ1点、河川から出土したウマ1点、ウシ2点、シカ1点、出土地点不明のウシ1点、計8点である。

コラーゲンの炭素安定同位体比測定の結果は、ウマで-18.7～-11.5（平均値±標準偏差：



写真1 出土したバカガイ・サザエ・マガキなど



写真2 出土したサメとカメ



写真3 出土したウマ・ウシ



写真4 出土したシカ頭蓋骨（刃物の痕跡が顕著）

$-14.0 \pm 2.4\%$ ）、ウシで $-17.8 \sim -12.8$ （平均値±標準偏差： $-16.0 \pm 2.3\%$ ）、シカで $-22.0 \sim -21.0$ （平均値±標準偏差： $-21.5 \pm 0.5\%$ ）を示した（図3）。また、コラーゲンの窒素安定同位体比測定の結果は、ウマで $4.1 \sim 5.3$ （平均値±標準偏差： $4.9 \pm 0.5\%$ ）、ウシで $5.3 \sim 5.8$ （平均値±標準偏差： $5.5 \pm 0.2\%$ ）、シカで $3.8 \sim 4.3$ （平均値±標準偏差： $4.0 \pm 0.3\%$ ）を示した（図3）。炭素安定同位体比が -18.0% 以上を示す場合、C4植物の摂取割合が高い傾向にあることが指摘できる（Richards et al. 2005）。吉田南遺跡出土のウマおよびウシは、 -18.0% 以上ないし近似値を示す個体が検出され、個体によってC3植物とC4植物の摂取割合が大きく異なる可能性を示唆する。歯エナメル質の炭素同位体比測定の結果は、ウマで $-11.0 \sim -9.1$ （平均値±標準偏差： $-10.3 \pm 0.8\%$ ）、ウシで $-11.8 \sim -6.9$ （平均値±標準偏差： $-9.1 \pm 1.8\%$ ）、シカで $-16.0 \sim -13.5$ （平均値±標準偏差： $-14.8 \pm 1.2\%$ ）を示した（図4）。歯エナメル質の酸素同位体比測定の結果は、ウマで $-5.9 \sim -3.1$ （平均値±標準偏差： $-5.0 \pm 1.1\%$ ）、ウシで $-5.5 \sim -3.5$ （平均値±標準偏差： $-4.8 \pm 1.2\%$ ）を示した（図5）。

表2 吉田南遺跡出土動物遺存体の ^{14}C 年代・暦年代測定結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		試料データ
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
PLD-26405 試料 No.Preparation # TG121103 遺物 No.bone #16	-13.01 ± 0.21	1454 ± 18	1455 ± 20	597AD (68.2%) 637AD	571AD (95.4%) 645AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：河川 試料 No.Preparation # TG121103 遺物 No.bone #16 その他：ウマ,大腿骨,3.55mg
PLD-26406 試料 No.Preparation # TG121104 遺物 No.bone #6	-12.29 ± 0.21	1476 ± 18	1475 ± 20	569AD (68.2%) 609AD	555AD (95.4%) 635AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：河川 試料 No.Preparation # TG121104 遺物 No.bone #6 その他：ウシ,大腿骨,4.22mg
PLD-26407 試料 No.Preparation # TG121105 遺物 No.bone #10	-20.33 ± 0.21	1480 ± 18	1480 ± 20	567AD (68.2%) 606AD	549AD (95.4%) 630AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：溝 試料 No.Preparation # TG121105 遺物 No.bone #10 その他：シカ,肩甲骨,4.17mg
PLD-26408 試料 No.Preparation # TG121106 遺物 No.bone #14	-21.27 ± 0.21	1624 ± 19	1625 ± 20	395AD (63.0%) 429AD 498AD (5.2%) 505AD	385AD (69.3%) 435AD 453AD (2.8%) 470AD 487AD (23.3%) 534AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：河川 試料 No.Preparation # TG121106 遺物 No.bone #14 その他：シカ,下顎骨,3.83mg
PLD-26409 試料 No.Preparation # TG121107 遺物 No.bone #4	-16.42 ± 0.21	1514 ± 18	1515 ± 20	541AD (68.2%) 582AD	435AD (3.1%) 451AD 471AD (4.1%) 487AD 534AD (88.2%) 604AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：河川 試料 No.Preparation # TG121107 遺物 No.bone #4 その他：ウシ,下顎骨,3.30mg
PLD-26410 試料 No.Preparation # TG121108 遺物 No.bone #—	-16.95 ± 0.20	1446 ± 18	1445 ± 20	603AD (68.2%) 639AD	580AD (95.4%) 648AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：— 試料 No.Preparation # TG121108 遺物 No.bone #— その他：ウシ,下顎骨,4.21mg
PLD-26411 試料 No.Preparation # TG135001 遺物 No.bone #16	-13.82 ± 0.22	1474 ± 18	1475 ± 20	570AD (68.2%) 610AD	556AD (95.4%) 637AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：河川 試料 No.Preparation # TG135001 遺物 No.bone #16 その他：ウマ,大腿骨,4.99mg
PLD-26412 試料 No.Preparation # TG135002 遺物 No.bone #11	-13.41 ± 0.21	1448 ± 18	1450 ± 20	601AD (68.2%) 639AD	579AD (95.4%) 647AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：溝 試料 No.Preparation # TG135002 遺物 No.bone #11 その他：ウマ,大腿骨,4.98mg
PLD-26413 試料 No.Preparation # TG135003 遺物 No.bone #13	-18.60 ± 0.22	1442 ± 19	1440 ± 20	606AD (68.2%) 640AD	580AD (95.4%) 650AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：溝 試料 No.Preparation # TG135003 遺物 No.bone #13 その他：ウマ,肩甲骨,3.98mg
PLD-26414 試料 No.Preparation # TG135004 遺物 No.bone #15	-10.87 ± 0.27	1461 ± 18	1460 ± 20	585AD (68.2%) 630AD	568AD (95.4%) 642AD	遺跡名：吉田南遺跡 遺構：溝 試料 No.Preparation # TG135004 遺物 No.bone #15 その他：ウマ,中足骨,5.27mg

差： $-4.2 \pm 0.8\text{‰}$ ）、シカで $-5.7 \sim -4.6$ （平均値±標準偏差： $-5.1 \pm 0.5\text{‰}$ ）を示した（図4）。遺跡出土馬および牛の炭素同位体比の平均値は、Cerling & Harris 1999に基づいて、C3植物食者（ $\delta^{13}\text{C} < -8\text{‰}$ ）、C3/C4中間食者（ $\delta^{13}\text{C} > -8\text{‰}, \delta^{13}\text{C} < -2\text{‰}$ ）、C4植物食者（ $\delta^{13}\text{C} > -2\text{‰}$ ）に分類すると、C3植物食者の範疇にはいる。同一個体から得られた複数地点の炭素同位体比の変動幅は、各個体が摂取した給餌内容の時系列変化を検証する上で重要である。Hoppe et al. 2004に基づいて、本分析で採取した歯エナメル質部位の鉱質化時期と炭素同位体比の値を比較した結果、ウシ①のみC3植物食者からC3/C4中間食者に変動し、他の個体はC3植物食者に収まり、変動幅が相対的に小さかった。

歯エナメル質のSr同位体比測定の結果は、ウマで0.70864～0.70877、ウシで0.70874～0.70879、シカで0.70906を示した。火山地質のSr同位体比は0.704～0.706を示す傾向にあるが、吉田南遺跡はこれらの特徴を示す個体は検出されなかった（図5・6）。

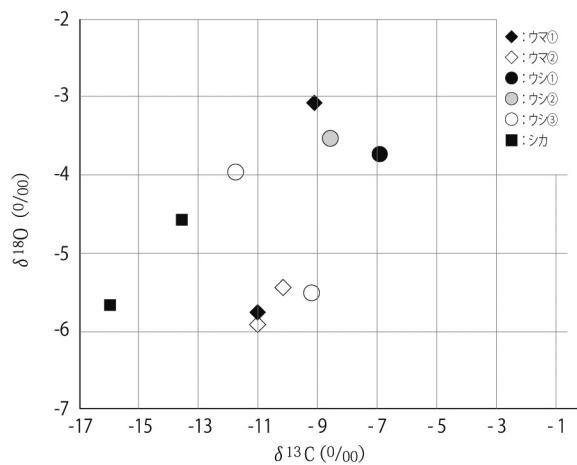


図3 歯エナメル質の炭素・酸素同位体比

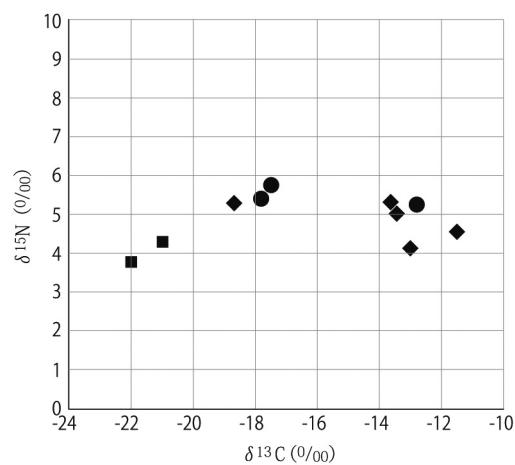


図4 骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比

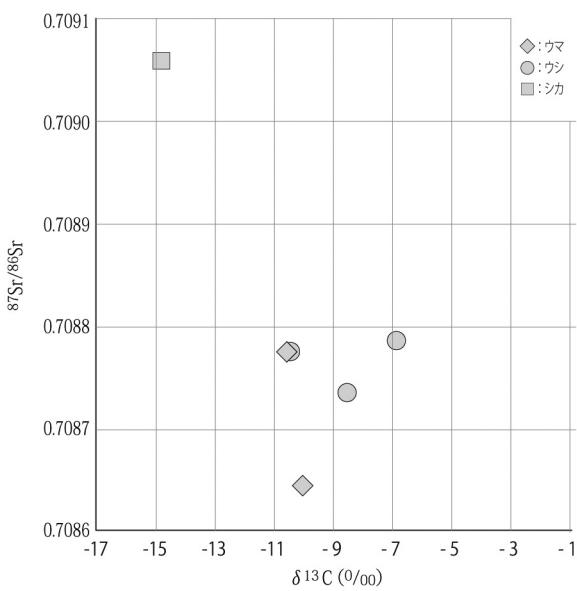


図5 歯エナメル質の炭素・Sr同位体比

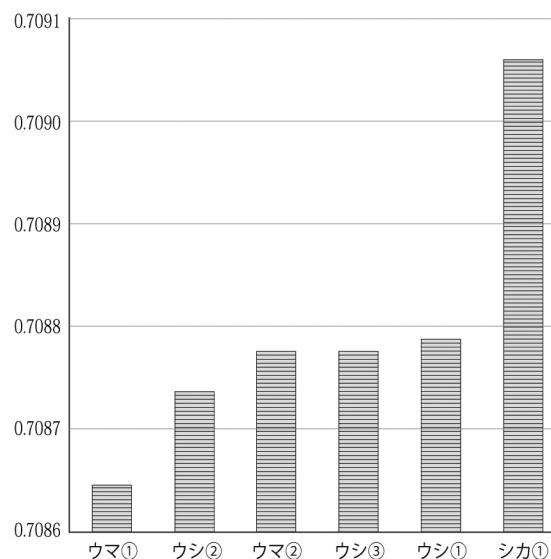


図6 各個体のSr同位体比 比較図

表3 馬骨の安定同位体比測定値

分析番号	測定番号	遺物番号	出土地点	生物種	部位	$\delta^{13}\text{CPDB}$	$\delta^{15}\text{NAIR}$	%C	%N	C/N (モル比)
TG121103_Yoshida	YL06784	8YM-1	河川 4層	ウマ	大腿骨	-13.4	5.0	43.9	16.0	3.2
TG121104_Yoshida	YL06785	8YM-1	河川- I B 区5層	ウシ	大腿骨	-12.8	5.3	45.3	16.4	3.2
TG121105_Yoshida	YL06786	D11-4	暗灰色砂	シカ	肩甲骨	-21.0	4.3	45.4	16.5	3.2
TG121106_Yoshida	YL06787	7YM-IV	河川 4層	シカ	下顎骨	-22.0	3.8	45.2	15.9	3.3
TG121107_Yoshida	YL06789	7YM-IV	河川 5層	ウシ	下顎骨	-17.5	5.8	45.1	16.1	3.3
TG121108_Yoshida	YL06790	不明	不明	ウシ	下顎骨	-17.8	5.4	45.9	16.6	3.2
Yoshida_H_10	YL06791	8YM-1	河川 4層	ウマ	大腿骨	-13.6	5.3	44.6	16.3	3.2
Yoshida_H_11	YL06792	D11-4	灰褐色砂泥層	ウマ	大腿骨	-13.0	4.1	43.2	16.2	3.1
Yoshida_H_13	YL06793	D11-4	暗灰色砂	ウマ	肩甲骨	-18.7	5.3	44.7	16.4	3.2
Yoshida_H_15	YL06794	D11-4	暗灰色砂	ウマ	中足骨	-11.5	4.6	43.4	16.0	3.2

表4 馬歯の安定同位体比測定値

分析番号	生物種	個体番号	部位	資料名	$\delta^{13}\text{CPDB}$	$\delta^{18}\text{OV-SMOW}$	$87\text{Sr}/86\text{Sr}$
TGK001	ウマ	ウマ①	上顎歯冠	R-⑧-3	-9.1	-3.1	0.70864
TGK002	ウマ		上顎歯根	R-⑧-3	-11.0	-5.8	-
TGK003	ウマ	ウマ②	上顎歯冠	⑤	-10.2	-5.4	0.70877
TGK004	ウマ		上顎歯根	⑤	-11.0	-5.9	-
TGK005	ウシ	ウシ①	歯冠	不明	-6.9	-3.7	0.70879
TGK006	ウシ	ウシ②	歯冠	溝11D	-8.6	-3.5	0.70874
TGK009	ウシ	ウシ③	M1歯冠	7YM-IV	-11.8	-4.0	0.70877
TGK010	ウシ		M3歯根	7YM-IV	-9.2	-5.5	-
TGK007	シカ	シカ①	歯根	7YM-IV	-13.5	-4.6	0.70906
TGK008	シカ		歯冠	7YM-IV	-16.0	-5.7	-

5 考察

溝SD11の貝層と動物遺存体について

貝層の堆積量は、幅の詳細が不明であるにしても、厚さ15cm、長さ30mにわたる貝層が形成されていることは日常の食料残滓以上と思われる。古墳時代から古代の貝層は日本各地に点在するが、吉田南遺跡から最も近いところで明石市上の丸貝塚がある。上の丸貝塚は吉田南遺跡から南東約2kmに位置しており、バカガイを主体として古墳時代後期(6世紀後半)に堆積したものと推定されている〔小江1951〕。当遺構に形成された貝層形成の年代は共伴する土器から7世紀前半と考えられており、上の丸貝塚よりやや新しいものと推定されるが、バカガイを主体とする点で共通しており、この時期の明石川の河口付近でバカガイが多く捕獲できたと考えられる。神戸市東灘区の北青木遺跡でも、8世紀の溝内で小規模なバカガイの集積が認められ〔丸山2014〕、西摂地域から東播地域沿岸が当該期にバカガイの多産地域であったことも推測される。

吉田南遺跡の貝層は大部分がバカガイで構成されており、その他の貝種は少ないとから、バカガイを選択的に採取していた可能性がある。また、任意に抽出したバカガイ172点の計測を行ったところ、殻長60~70mmの個体をピークとした正規分布を示し、50mm以下の個体は少数に留まることから、一定の大きさのものを利用したと考えられる。上述のように日常の食料残滓としては廃棄量が多く、選択的な利用を考慮すれば、バカガイの

剥き身を日干しするなどして保存加工したことも考えられる。また少量であるがアカガイ、ツメタガイ、マガキなどの貝類、魚類のサメ類、コブダイ属、フグ科、鳥類のキジ科?、哺乳類のシカが出土しており、食用になったと考えられる。また、ウマやウシも散乱状態で出土していることから、解体され、食用になった可能性が高い。

シカの頭蓋骨の角座直下の部分が叩き切られていることも注目される。古墳時代にはウマやウシが普及していくにもかかわらず、その骨を素材とした骨角製品の製作は低調であり、シカの枝角や中手骨、中足骨が前代から引き続き骨角製品の主要な素材である。当遺跡でもシカを捕らえ、肉や皮を取り、鹿角を加工していたことを示す。

当遺構から出土したウマとシカの遺存体は保存状態が大変良く、溝内に形成された貝層から出土したものではないかと思われる。それらの年代測定では6世紀中頃から7世紀中頃と推定されていることからも、共伴する土器の年代観と矛盾せず、ウマの年代は貝層形成期の7世紀前半と推測できる。また、弥生時代から古代の河川で出土したウマ、ウシも6世紀中頃～7世紀中頃の年代を示しており、当遺跡全体でこの頃に牛馬の飼育・利用が盛んであったと考えられる。

牛馬の飼育について

ウマやウシは大型家畜であり、古墳時代中期に朝鮮半島から渡來したと考えられている。ウマは5世紀代に、ウシは6世紀代に出土量が増加し、それぞれの時期に普及したと考えられるが、この時期に誰もが牛馬を保有できたとは言い難い。吉田南遺跡は、当該地域の首長の居住空間として推定される拠点的な集落であることが指摘されており〔丸山潔2012〕、当遺跡における牛馬の存在もこのことに関連していると思われる。

歯のエナメル質に含まれるストロンチウム同位体の測定結果では、ウマ、ウシともに野生のシカより低い値を示すが、現代の地質中のストロンチウムの値の範疇に収まり、遠隔地から持ち込まれたことを積極的に示すことはできない。但し、吉田南遺跡一帯と同様のストロンチウムの値を示す場所は遠隔地にもあり、遠隔地から連れて来られたことを否定する結果ではない。骨中に含まれる炭素安定同位体比の測定結果では、C4植物の摂取割合が高いウマやウシが存在することが判明した。また、歯のエナメル質に含まれる炭素同位体比では、ウシ1個体が成長過程において、C4植物の摂取割合が高くなっていることが明らかになった。C4植物はアワ・ヒエ・キビなどの雑穀が代表的であり、一遺跡においてC4植物の摂取の割合が多い個体とそうでない個体の両方が見られることから、人為的なC4植物の給餌があったことを想定したい。

『養老厩牧令』には、「細馬」・「中馬」・「駒馬」というウマの質に関する位置づけを行い、それらに与える餌についての規定では、「細馬」の飼料のなかに「粟一升」を与えることとしている。この記事によって、良馬には雑穀を与えるという規定があったことが窺える。この『養老厩牧令』に見られるウマの位置づけや給餌内容の区別が、古墳時代にまで遡るか明らかではない。しかし、今回の炭素安定同位体分析によって示唆されるC4植物の給餌があったとすれば、吉田南遺跡のウマの飼育には、給餌内容がウマによって異なっていた可能性を指摘できる。

エナメル質の炭素同位体比の測定で明らかになったウシ1個体が、成長過程においてC4植物の摂取割合が高くなるという変化にも注目したい。この変化は、歯が形成される生後

5年までの間に生じたものである。詳細は定かではないが、ある年齢段階において、自然放牧状態から厩舎での給餌が加わったことや、繁殖地から当地に移動した際に生じた採餌内容の変化などが想定される。

6 まとめ

吉田南遺跡から出土した動物遺存体について、従来は出土した動物種と、ウマの利用について若干の考察が加えられるに留まっていた。それに対して今回は、種や部位の同定、出土量などの提示にとどまらず、AMS炭素14年代測定により、溝11および河川から出土した動物遺存体の年代を明らかにし、ウマ・ウシの飼育、特に採餌活動に関する知見が得られたことは大きな成果である。今後、ウマ・ウシの採餌については、同時期の自然の植生や穀物栽培などを含めた議論も必要である。

謝辞

本稿は、神戸市教育委員会文化財課の千種浩・安田滋・中村大介・丸山潔各氏のご協力によるものであり、厚くお礼を申し上げる。また、動物遺存体の年代測定は（株）パレオ・ラボの研究助成を受け、実施した。末筆ではあるが、ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

- 小江慶雄 1951「兵庫県明石市上の丸貝塚」『貝塚』第36号 pp.173-174
土肥孝 1983「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』奈良文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編 同朋社出版 pp.383-400
神戸市教育委員会・吉田・片山遺跡発掘調査団 1979『吉田南遺跡現地説明会資料（V）』
神戸市教育委員会・吉田・片山遺跡発掘調査団 1980『吉田南遺跡現地説明会資料（VI）』
奈良大学考古学研究室 1977 (a)『吉田南遺跡 現地説明会パンフレット』
奈良大学考古学研究室 1977 (b)『吉田南遺跡 5YM・遺跡調査用資料』
奈良大学考古学研究室 1977 (c)『吉田南遺跡 現地説明会用パンフレット』
丸山潔 2012「明石の古墳時代集落の消長」『明石の古墳II』明石市立文化博物館展示図録 発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市 pp.9-14
丸山真史 2012「古墳時代の馬」「明石の古墳時代の食卓」『明石の古墳II』明石市立文化博物館展示図録 発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市 pp.83-92
丸山真史2014「北青木遺跡第7次調査で出土した動物遺存体」『北青木遺跡第7次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 pp.105-106
吉田・片山遺跡発掘調査団 1977『吉田南遺跡調査概要』
吉田・片山遺跡発掘調査団 1978『播磨吉田南遺跡 7次調査現地説明会』
吉田・片山遺跡発掘調査団・神戸市教育委員会 1978『播磨吉田南遺跡 8次調査現地説明会資料』
吉田南遺跡を考える会 1977『講演会パンフレット 吉田南遺跡を考える』
Cerling, T. E., Harris, J. M., (1999) Carbon isotope fractionation between diet and bioapatite in ungulate mammals and implications for ecological and paleoecological studies, *Oecologia*, 120, pp. 347-363
Hoppe, K. A., Stover, S. M., Pascoe, J. R., Amundson, R., (2004) Tooth enamel biomineralization in extant horses: implications for isotopic microsampling, *Palaeogeography Palaeoclimatology Palaeoecology*, 206, pp. 355-365
Richards, M. P., Jacobi, R., Cook, J., Pettitt, P. B., and Stringer, C. B., (2005) Isotope evidence for the intensive use of marine foods by Late Upper Palaeolithic humans. *Journal of Human Evolution*, 49, pp. 390-394

平成25年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成28年3月 印刷

平成28年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078（322）5799

印刷 株式会社 興文社

TEL 078（924）9800

神戸市広報印刷物登録 平成27年度 第528号 (広報印刷物規格 A-6類)

